

前田館跡他

発掘調査報告書

中田南遺跡第3次・中田北遺跡・南目城跡
大野田古墳群第10.11次・元袋遺跡第5次
鴻ノ巣遺跡第10次・北目城跡第4.5次
南小泉遺跡第44～47次・袋前遺跡第2次
富沢遺跡第135.136次・西上野原遺跡
洞ノ口遺跡第12次・燕沢遺跡第12次調査

2006年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第301集「前田館跡他発掘調査報告書」正誤表

頁	誤	正
1	27 第23図観察表 図中番号2 写真図版12-3	写真図版なし
2	27 第23図観察表 図中番号10 写真図版	写真図版 12-3
3	32 図版12 注記 3 D-1 第23図1	D-9 第23図10
4	32 図版12 注記 4 第23図4	第23図9
5	73 図版25 注記 1 第59図3	第59図2
6	85 第67図観察表 図中番号7 登録番号C-2	登録番号C-1
7	87 第67図観察表 図中番号3~9 写真図版36-	写真図版34-
8	93 図版34 注記 4~11 第68図	第69図
9	93 図版34 注記 4 第68図4	第69図9
10	93 図版34 注記 5 第68図8	第69図10
11	98 図版35 注記 3 C-1	C-4
12	129 第92図観察表 図中番号5 写真図版45-6	写真図版44-6
13	135 図版44 注記 3 第96図1	第96図2
14	152 第99図 スケール 10cm	5m
15	163 図版57 注記 5 I-1	I-2
16	163 図版57 注記 7 第102図2	第102図3
17	173 第115図観察表 図中番号3 写真図版59-3	写真図版59-4
18	173 第115図観察表 図中番号4 写真図版59-4	写真図版59-3

前田館跡他

発掘調査報告書

中田南遺跡第3次・中田北遺跡・南目城跡
大野田古墳群第10.11次・元袋遺跡第5次
鴻ノ巣遺跡第10次・北目城跡第4.5次
南小泉遺跡第44～47次・袋前遺跡第2次
富沢遺跡第135.136次・西上野原遺跡
洞ノ口遺跡第12次・燕沢遺跡第12次調査

2006年3月

仙台市教育委員会



1. 1区東壁土層断面（1～18層）



4. 3区東壁土層断面（1～12層）



2. 1区東壁土層断面（19～27層）



5. 3区東壁土層断面（13～17層）



3. 2区北壁土層断面



6. 3区東壁土層断面（18～26層）

富沢遺跡第135次調査の土層



富沢遺跡第136次調査の土層と畦畔

序 文

仙台市内には現在約800カ所の遺跡が確認されておりますが、このような埋蔵文化財はその時代ごとにその地に住んだ人々の生活を伝えるものであり、各種開発事業によって絶えず破壊・消滅の恐れにさらされております。当教育委員会としましては皆様のご理解とご協力を得て、貴重な文化財を保存し、後世に伝えるように努めているところであります。

本報告書には、開発に先立ち、平成17年度に発掘調査を実施した前田館跡の他、中田南遺跡、中田北遺跡、南日館跡、大野田古墳群、元袋遺跡、鴻ノ巣遺跡、北日城跡、袋前遺跡、富沢遺跡、西上野原遺跡、洞ノ口遺跡、及び平成16年度に発掘調査を実施した南小泉遺跡、燕沢遺跡の調査結果を収録しております。

前田館跡は中世の城館跡とされていますが、今回初めて調査が行われました。調査によって中世の溝跡などが確認され、これまで知られていなかった遺跡の実態を知る上で貴重な資料を得ることができました。富沢遺跡の調査では、遺跡の範囲が更に北に広がっていることが確認され、仙台市富沢遺跡保存館で公開されている旧石器時代後期の森林跡と同じ時期の層が確認されています。

本書に掲載した調査成果が、地域の歴史の解明と文化財保護思想の高揚のため、お役に立てば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書刊行まで多くの方々のご指導、ご協力をいたただきましたことに対しまして、心より感謝申し上げます。今後とも文化財保護行政についてご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成18年3月

仙台市教育委員会
教育長 奥山 恵美子

例　　言

1 本書は、仙台市教育委員会が実施した民間開発事業に伴う前田館跡、中田北遺跡、燕沢遺跡第12次、富沢遺跡第135・136次、南小泉遺跡第46次と、個人住宅建設に伴う南目城跡、大野田古墳群第10・11次、元袋遺跡、鴻ノ巣遺跡第10次、北目城跡第4・5次、南小泉遺跡第45・47次、洞ノ口遺跡第12次、中田南遺跡第3次、大野田古墳群第11次、袋前遺跡第2次及び仙台市関連施設建設に伴う南小泉遺跡第44次、西上野原遺跡の発掘調査報告書である。

民間開発事業に係わる発掘調査は事業者の負担において実施し、個人住宅建設及び仙台市関連施設建設に係わる調査は公費で実施した。

2 本書の執筆・編集は、仙台市教育委員会文化財課調査係の担当調査員の協議をもとに、工藤哲司・門馬有希・三塚博之・浅野克樹・赤岡光騎が分担して行なった。担当は次のとおりである。

工藤：南小泉遺跡第44・45・47次、中田北遺跡、北目城跡第4・5次、燕沢遺跡第12次、西上野原遺跡、袋前遺跡第2次、富沢遺跡第136次

門馬：大野田古墳群第11次

三塚：前田館跡、富沢遺跡第135次

浅野：元袋遺跡第5次、中田南遺跡第3次、洞ノ口遺跡第12次

赤岡：南小泉遺跡第46次、南目城跡、大野田古墳群第11次、鴻ノ巣遺跡第10次

3 本書に掲載された陶磁器の産地および年代については、仙台市博物館の佐藤洋氏に鑑定をお願いした。

4 本書に係わる遺物・写真・実測図面等の資料については、仙台市教育委員会が保管している。

凡　　例

1 本書で使用した土色は、「新版標準土色帖」(小山・竹原：1976)に準拠している。

2 断面図・平面図の標高値は、海拔高度を示している。

3 遺構は種別毎に次の略号を使用した。

SB：掘立柱建物跡 SD：溝跡 SE：井戸跡 SI：竪穴住居跡・竪穴造構

SK：土坑 P：ピット SX：その他の遺構

4 遺物の登録は、以下の分類と略号を使用している。

A：縄文土器 B：弥生土器 C：土師器（非クロコ） D：土師器（クロコ）

E：須恵器 F：丸瓦 G：平瓦 I：陶器 J：磁器

K：石器・石製品 L：木製品・杭材 N：金属製品 P：土製品

5 竪穴住居跡等における焼け面範囲は、網かけにより表現した。

6 土師器実測図における網は、黒色処理されていることを示している。

7 石器実測図においては、次のとおりに表現した。 磨り面の範囲 ■■■

8 遺物観察表の（ ）内の法量は残存値を示している。

9 本文中の「灰白色火山灰」(庄子・山田：1980)は、「十和田a (To-a)」と考えられ、十和田aの降下年代は現在、西暦915年初夏とされている。(町田：1981・1996)

10 本書における「擬似畦畔B」という用語は、水田畦畔直下の自然堆積層に認められる畦畔状の高まりをさす(斎野ほか1987:「富沢-富沢遺跡第15次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第98集)が、本書では自然堆積層の高まりだけでなく、畦畔直下の下層の水田耕作土層に認められる畦畔状の高まりにもこの用語を使用した。

本文目次

序文

例言

凡例

目次

I 前田館跡発掘調査報告書

1 調査要項	1
2 調査に至る経過と調査方法	1
3 遺跡の位置と環境	1
4 基本層序	3
5 発見造構と出土遺物	5
1) 溝跡	5
2) 土坑	7
6 まとめ	8

II 中田南遺跡第3次発掘調査報告書

1 調査要項	15
2 調査に至る経過と調査方法	15
3 遺跡の位置と環境	16
4 基本層序	16
5 発見造構と出土遺物	17
1) 穴住居跡	17
2) 溝跡	18
6 まとめ	19

III 中田北遺跡発掘調査報告書

1 調査要項	23
2 調査に至る経過と調査方法	23
3 遺跡の位置と環境	23
4 基本層序	25
5 発見造構と出土遺物	25
1) 溝跡	26
2) 穴住居跡	26
6 まとめ	29

IV 南目城跡発掘調査報告書	
1 調査要項.....	33
2 調査に至る経過と調査方法.....	33
3 遺跡の位置と環境.....	33
4 基本層序.....	35
5 発見遺構と出土遺物.....	35
1) 溝跡.....	35
2) 土坑.....	35
6 まとめ.....	36
V 大野田古墳群第10次発掘調査報告書	
1 調査要項.....	39
2 調査に至る経過と調査方法.....	39
3 遺跡の位置と環境.....	39
4 基本層序.....	41
5 発見遺構と出土遺物.....	41
1) IV層上面検出遺構.....	41
2) IV層上面検出遺構.....	41
6 まとめ.....	42
VI 大野田古墳群第11次発掘調査報告書	
1 調査要項.....	47
2 調査に至る経過と調査方法.....	47
3 遺跡の位置と環境.....	47
4 基本層序.....	47
5 発見遺構と出土遺物.....	48
1) 小溝状遺構群.....	48
3) ピット.....	50
2) 土坑.....	50
6 まとめ.....	50
VII 元袋遺跡第5次発掘調査報告書	
1 調査要項.....	53
2 調査に至る経過と調査方法.....	53
3 遺跡の位置と環境.....	54
4 基本層序.....	55
5 発見遺構と出土遺物.....	55
1) 溝跡.....	55
3) ピット.....	57
2) 土坑.....	55
6 まとめ.....	58

VIII 鴻ノ巣遺跡第10次発掘調査報告書

1 調査要項	63
2 調査に至る経過と調査方法	63
3 遺跡の位置と環境	64
4 基本層序	65
5 発見遺構と出土遺物	65
1) 溝跡	65
2) 土坑	66
6 まとめ	66

IX 北目城跡第4次発掘調査報告書

1 調査要項	69
2 調査に至る経過と調査方法	69
3 遺跡の位置と環境	69
4 基本層序	69
5 発見遺構と出土遺物	70
1) 土坑	71
6 まとめ	73

X 北目城跡第5次発掘調査報告書

1 調査要項	75
2 調査に至る経過と調査方法	75
3 遺跡の位置と環境	75
4 基本層序	75
5 発見遺構と出土遺物	76
1) 井戸跡	76
2) ピット	77
6 まとめ	77

XI 南小泉遺跡第44次発掘調査報告書

1 調査要項	81
2 調査に至る経過と調査方法	81
3 遺跡の位置と環境	82
4 基本層序	83
5 発見遺構と出土遺物	83
1) SB 1 掘立柱建物跡	83
2) 墓穴住居跡	83
3) 土坑	88
4) ピット	88
6 まとめ	88

XII 南小泉遺跡第45次発掘調査報告書

1 調査要項	95
2 調査に至る経過と調査方法	95
3 遺跡の位置と環境	95
4 基本層序	95
5 発見遺構と出土遺物	95
1) 溝跡	95
2) 土坑	98
6 まとめ	98

XIII 南小泉遺跡第46次発掘調査報告書

1 調査要項	101
2 調査に至る経過と調査方法	101
3 遺跡の位置と環境	101
4 基本層序	101
5 発見遺構と出土遺物	102
1) 溝跡	102
6 まとめ	105

XIV 南小泉遺跡第47次発掘調査報告書

1 調査要項	109
2 調査に至る経過と調査方法	109
3 遺跡の位置と環境	109
4 基本層序	109
5 発見遺構と出土遺物	109
1) 掘立柱建物跡	109
2) 土坑	111
6 まとめ	111

XV 袋前遺跡第2次発掘調査報告書

1 調査要項	115
2 調査に至る経過と調査方法	115
3 遺跡の位置と環境	115
4 基本層序	116
5 発見遺構と出土遺物	117
1) 溝跡	117
2) 小溝状遺構	117
6 まとめ	117

XVI 富沢遺跡第135次発掘調査報告書

1 調査要項	119
2 調査に至る経過と調査方法	119
3 遺跡の位置と環境	119
4 基本層序	122
1) 1区	122
2) 2区	124
5 発見造構と出土遺物	127
1) 1区	127
2) 2区	128
6 まとめ	133
7 富沢遺跡第135次発掘調査におけるプランツ・オパール分析（株式会社 古環境研究所）	141

XVII 富沢遺跡第136次発掘調査報告書

1 調査要項	149
2 調査に至る経過と調査方法	149
3 遺跡の位置と環境	149
4 基本層序	149
5 発見造構と出土遺物	151
1) II層水田跡の遺構と遺物	151
2) III層水田跡の遺構と遺物	151
3) IV層水田跡の遺構と遺物	151
4) V層水田跡の遺構と遺物	152
5) VI層水田跡の遺構と遺物	153
6) VII層水田跡の遺構と遺物	154
6 まとめ	154

XVIII 西上野原遺跡発掘調査報告書

1 調査要項	165
2 調査に至る経過と調査方法	165
3 遺跡の位置と環境	165
4 基本層序	166
5 発見造構と出土遺物	167
1) 土坑	167
2) 出土遺物	167
6 まとめ	167

XIX 洞ノ口遺跡第12次発掘調査報告書

1	調査要項	169
2	調査に至る経過と調査方法	169
3	遺跡の位置と環境	170
4	基本層序	170
5	Ⅲ層発見遺構と出土遺物	170
1)	溝跡	170
2)	土坑	172
3)	ピット	173
6	Ⅳ層発見遺構と出土遺物	173
1)	溝跡	173
7	まとめ	174

XX 燕沢遺跡第12次発掘調査報告書

1	調査要項	177
2	調査に至る経過と調査方法	177
3	遺跡の位置と環境	178
4	基本層序	180
5	発見遺構と出土遺物	180
1)	溝跡	180
2)	ピット	181
3)	その他の出土遺物	181
6	まとめ	181

図 目 次

I 前田館跡発掘調査報告書

第 1 図 遺跡の位置と周辺の遺跡	2
第 2 図 調査地点の位置	2
第 3 図 開発範囲と調査区配置図	3
第 4 図 遺構配置図	4
第 5 図 南東壁断面図	4

第 6 図 SD 1 溝跡断面図	5
第 7 図 SD 1 溝跡出土遺物 1	6
第 8 図 SD 1 溝跡出土遺物 2	7
第 9 図 土坑実測図	8
第 10 図 SK 1 土坑出土遺物	8

II 中田南遺跡第3次発掘調査報告書

第 11 図 遺跡の位置と周辺の遺跡	15
第 12 図 調査地点の位置	16
第 13 図 調査区配置図	16
第 14 図 遺構実測図	17

第 15 図 北壁土層断面図	17
第 16 図 遺構断面図	18
第 17 図 出土遺物	19

III 中田北遺跡発掘調査報告書

第 18 図 遺跡の位置と周辺の遺跡	24
第 19 図 調査地点の位置	24
第 20 図 調査区・遺構配置図	25
第 21 図 SI 1 壓穴住居跡	25

第 22 図 土坑・溝跡	26
第 23 図 SI 1 壓穴住居跡出土土器 1	27
第 24 国 SI 1 壓穴住居跡出土土器 2	28
第 25 国 SI 1 壓穴住居跡出土石製品	29

IV 南目城跡発掘調査報告書

第 26 図 遺跡の位置と周辺の遺跡	34
第 27 図 調査地点の位置	34
第 28 図 調査区配置図	35

第 29 国 遺構実測図	35
第 30 国 遺構断面図	36

V 大野田古墳群第10次発掘調査報告書

第 31 国 遺跡の位置と周辺の遺跡	40
第 32 国 調査地点の位置	40
第 33 国 調査区配置図	41

第 34 国 基本層断面略図	41
第 35 国 IV 層検出遺構	41
第 36 国 VII 層検出遺構実測図	42

VI 大野田古墳群第11次発掘調査報告書

第 37 国 調査区配置図	47
第 38 国 北壁土層断面図	48
第 39 国 遺構配置図	49

第 40 国 小溝状遺構群断面図	49
第 41 国 SK 1・SK 2 土坑平面・断面図	50

VII 元袋遺跡第5次発掘調査報告書

第 42 図 遺跡の位置と周辺の遺跡	53
第 43 図 調査地点の位置	54
第 44 図 調査区配置図	55
第 45 図 III層遺構実測図	56

第 46 図 IV層遺構実測図	56
第 47 図 西壁土層断面図	57
第 48 図 遺構断面図	57
第 49 図 出土遺物	58

VIII 鴻ノ巣遺跡第10次発掘調査報告書

第 50 図 遺跡の位置と周辺の遺跡	63
第 51 図 調査地点の位置	63
第 52 図 調査区配置図	64

第 53 図 遺構実測図	64
第 54 図 遺構断面図	65

IX 北目城跡第4次発掘調査報告書

第 55 図 遺跡の位置と周辺の遺跡	70
第 56 図 調査地点の位置	71
第 57 図 調査区配置図	71

第 58 図 遺構実測図	72
第 59 図 出土遺物実測図	72

X 北目城跡第5次発掘調査報告書

第 60 図 調査区配置図	75
第 61 図 遺構平面図	76

第 62 図 調査区・遺構断面図	76
------------------	----

XI 南小泉遺跡第44次発掘調査報告書

第 63 図 遺跡の位置と周辺の遺跡	81
第 64 図 第 44・45・46・47次調査区の位置	82
第 65 図 調査区配置図	83
第 66 図 遺構実測図	84

第 67 図 弥生土器・土師器 1	85
第 68 図 出土土師器 2・須恵器	86
第 69 図 石製模造品・石器	87

XII 南小泉遺跡第45次発掘調査報告書

第 70 図 調査区と遺構配置	95
第 71 図 遺構実測図	96

第 72 図 出土遺物	97
-------------	----

XIII 南小泉遺跡第46次発掘調査報告書

第 73 図 調査区配置図	101
第 74 図 遺構平面図	102
第 75 図 SD 1溝跡出土遺物実測図	102

第 76 図 SD 2溝跡出土遺物実測図	103
第 77 図 遺構断面図	104

XIV 南小泉遺跡第47次発掘調査報告書

第 78 図 調査区配置図	109
第 79 図 遺構配置図	110

第 80 図 遺構断面図	110
--------------	-----

XV 袋前遺跡第2次発掘調査報告書

第81図 調査区の位置と周辺の遺跡	116
第82図 調査区配置図	116

XVI 富沢遺跡第135次発掘調査報告書

第85図 遺跡の位置と周辺の遺跡	120
第86図 調査地点の位置	121
第87図 調査区配置図	121
第88図 調査区実測図	122
第89図 1区東壁断面図	123
第90図 2区北壁断面図	125

第83図 遺構平面図	116
第84図 調査・遺構断面図	117

XVII 富沢遺跡第136次発掘調査報告書

第97図 調査区位置図	149
第98図 調査区断面図	150
第99図 II・IV・V層水田跡畦畔痕跡	152
第100図 II層SK 1土坑	152

第101図 VII層・Xa層・Xc層水田跡畦畔痕跡	152
第102図 出土遺物	153
第103図 富沢遺跡北東部の桥形開式期の水出跡	155

XVIII 西上野原遺跡発掘調査報告書

第104図 遺跡の位置と周辺の遺跡	165
第105図 調査地点の位置	166

第106図 調査区と遺構配置	166
第107図 SK 1土坑実測図	166

XIX 洞ノ口遺跡第12次発掘調査報告書

第108図 遺跡の位置と周辺の遺跡	169
第109図 調査地点の位置	170
第110図 調査区配置図	170
第111図 III層遺構配置図	171

第112図 IV層遺構配置図	171
第113図 北・南壁土層断面図	171
第114図 遺構断面図	172
第115図 出土遺物	173

XX 燕沢遺跡第12次発掘調査報告書

第116図 遺跡の位置と周辺の遺跡	177
第117図 調査地点の位置	178

第118図 遺構実測図	178
第119図 燕沢遺跡東部遺構配置図	179

写 真 目 次

I 前田館跡発掘調査報告書

図版1 前田館跡全景	9
図版2 調査区南東壁断面	10
図版3 溝跡 (SD 1・2)	11
図版4 土坑 (SK 1・2)	12
図版5 前田館跡出土遺物 1	13
図版6 前田館跡出土遺物 2	14

II 中田南遺跡第3次発掘調査報告書

図版7 中田南遺跡第3次調査出土遺物	19
図版8 遺構検出状況・SI 1 竪穴住居跡	20
図版9 遺物出土状況・調査状況	21

III 中田北遺跡発掘調査報告書

図版10 中田北遺跡の調査状況 1	30
図版11 中田北遺跡の調査状況 2	31
図版12 中田北遺跡出土遺物	32

IV 南目城跡発掘調査報告書

図版13 調査区全景	37
図版14 溝跡・その他の遺構	38

V 大野田古墳群第10次発掘調査報告書

図版15 遺構検出状況	43
図版16 小溝状遺構	44
図版17 遺構調査・完掘状況	45

VI 大野田古墳群第11次発掘調査報告書

図版18 第11次調査区の状況	51
-----------------	----

VII 元袋遺跡第5次発掘調査報告書

図版19 遺構検出状況・土坑	59
図版20 土坑・溝跡	60
図版21 溝跡・完掘全景・土層断面	61
図版22 元袋遺跡第5次調査出土遺物	62

VIII 鴻ノ巣遺跡第10次発掘調査報告書

図版23 遺構検出・調査状況	67
図版24 土層断面・遺構完掘状況	68

IX 北目城跡第4次発掘調査報告書

図版25 北目城跡第4次調査出土遺物	73
図版26 北目城跡第4次調査	74

X 北目城跡第5次発掘調査報告書

図版27 北目城跡第5次調査出土遺物	77
図版28 遺構検出状況と基本層序	78
図版29 完掘状況と井戸跡	79

XI 南小泉遺跡第44次発掘調査報告書

図版30 遺構検出状況・掘立柱建物跡・土坑他	89
図版31 SI 1 竪穴住居跡 1	90
図版32 SI 1 竪穴住居跡 2・完掘全景	91

XII 南小泉遺跡第45次発掘調査報告書

図版35 南小泉遺跡第45次調査出土上遺物	98
-----------------------	----

図版33 南小泉遺跡第44次調査出土遺物 1 92

図版34 南小泉遺跡第44次調査出土遺物 2 93

XIII 南小泉遺跡第46次発掘調査報告書

図版37 調査状況 1	106
図版38 調査状況 2	107

図版36 南小泉遺跡第45次調査の状況 99

XIV 南小泉遺跡第47次発掘調査報告書

図版40 遺構検出状況	112
図版41 SB 1 - 3 掘立柱建物跡	113

図版39 南小泉遺跡第46次調査出土遺物 108

XV 袋前遺跡第2次発掘調査報告書

図版43 袋前遺跡の調査状況	118
----------------	-----

図版42 SB 2 掘立柱建物跡・土坑・全景 114

XVI 富沢遺跡第135次発掘調査報告書

図版44 富沢遺跡第135次調査出土遺物 1	135
図版45 富沢遺跡第135次調査出土遺物 2	136
図版46 1区全景	137

図版47 1区作業風景・2区全景 138

図版48 3区全景 139

図版49 3区検出遺構 140

XVII 富沢遺跡第136次発掘調査報告書

図版50 基本層と2~4層の状況	156
図版51 3~6層の状況	157
図版52 7~8層上部調査状況	158
図版53 8層水田跡調査状況	159

図版54 8~10層水田跡調査状況 160

図版55 10層水田跡の調査状況 161

図版56 10層水田と土層断面 163

図版57 富沢遺跡第136次調査出土遺物 163

XVIII 西上野原遺跡発掘調査報告書

図版58 西上野原遺跡調査状況	168
-----------------	-----

図版54 8~10層水田跡調査状況 160

図版55 10層水田跡の調査状況 161

図版56 10層水田と土層断面 163

図版57 富沢遺跡第136次調査出土遺物 163

XIX 洞ノ口遺跡第12次発掘調査報告書

図版59 洞ノ口遺跡第12次調査出土上遺物	174
図版60 遺構検出状況・ピット群・Ⅲ層全景	175

図版61 検出遺構・北壁断面 176

XX 燕沢遺跡第12次発掘調査報告書

図版62 燕沢遺跡の調査状況	182
----------------	-----

I 前田館跡発掘調査報告書

1. 調査要項

遺跡名	前田館跡（宮城県遺跡登録番号01121）
所在地	仙台市太白区中田6丁目55の一部
調査原因	宅地造成に伴う道路建設
調査対象面積	2,100m ² （街路敷設部分9,231m ² ）
調査面積	50m ²
調査期間	平成17年5月24日～6月6日
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課
担当職員	主査 工藤哲司 文化財教諭 赤岡光騎 三塚博之 浅野克樹

2. 調査に至る経緯と調査方法

平成17年2月18日付けで、柿沼一夫氏より上記地内における宅地造成工事に伴う発掘届が提出された。これを受けて平成17年4月20日・21日に、道路予定地内に12ヶ所のトレーニングを設定して確認調査を行った。その結果、第1～10トレーニングの大部分は重機による深掘りが行なわれ、遺構・遺物は発見されなかつたが、第11トレーニングで溝跡と見られる遺構を確認したため、5月24日からこの部分の本調査を実施することになった。

東西約5m、南北約10mの調査区を設定し、重機により耕作土及び盛土層を除去した。現地表下約1.3mの1層上面で人力による遺構検出作業と遺構の掘り込みを行つた。なお、耕作土及び盛土が崩れやすくなる安全を確保するため、調査区を各壁から50cmずつ縮小している。

また、5月24日に確認調査の第6トレーニングの南側に第13トレーニング、北側に第14トレーニングを設定し、堀跡の有無を確定するため追加の確認調査を実施したが、遺構を検出することはできなかつた。

測量は、平面図は1/50平板測量、個別遺構は1/20実測、断面図は1/20実測とした。

写真記録は35mmカメラでモノクロームとカラースライドの撮影を行ない、実測を隨時行った。

3. 遺跡の位置と環境

前田館跡は仙台市の最南端部に位置し、仙台市太白区中田に所在する。JR東北本線「南仙台駅」の南方0.6km、名取川下流域右岸（南岸）、標高8mほどの自然堤防上に立地する。遺跡範囲の南側には「埴腰遺跡」のとの境界となる小河川の清水川（清水堀）が東流している。

当該地の周辺はかつて豊かな田園地帯が広がり、米・蔬菜類を栽培する近郊農業地帯として発展してきたが、近年では仙台市街のベッドタウンとして急激に都市化が進行している地域である。

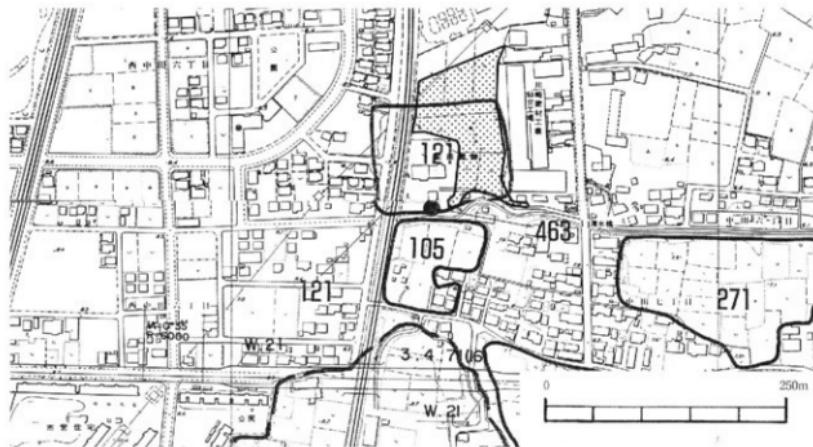
本遺跡は14世紀に佐々木勘解由が居城したと言われる城館跡である。紫桃正隆氏の『史料 仙台領内古城・館第四卷』によれば、二重水濠と土塁に囲まれた270m四方に及ぶ平城形式の屋敷で、周囲は湿原地帯が広がり、大小の溝沼や清水堀の流路などが複雑に入り組んで要害を呈していたとされる。

平成15年（2003）に南に隣接する埴腰遺跡の調査が実施されており、前田館跡の南側を画すると考えられる堀跡を検出している。

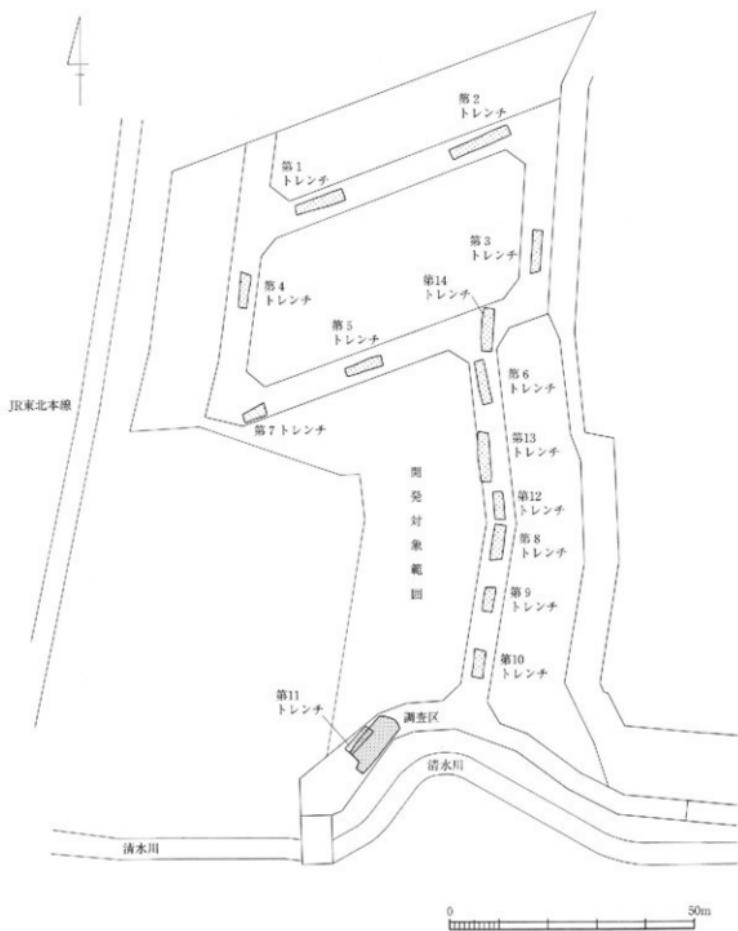


No.	遺跡名	種別	立地	年代	No.	遺跡名	種別	立地	年代
1	御山遺跡	城跡	自然堤防	中世	10	安久云遺跡	集落跡・方墻則溝墓	自然堤防	弥生、古墳、古代、中世
2	鶴生古墳遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代	11	笠原遺跡	集落跡	自然堤防	弥生、古墳、古代
3	松木遺跡	島遺跡	自然堤防	古代、中世、近世	12	堀吹遺跡	散布地	自然堤防	古代
4	吉丸遺跡	散布地	自然堤防	古代	13	北若遺跡	散布地	自然堤防	古代
5	御乳遺跡	散布地	自然堤防	古代	14	中田南遺跡	集落跡・短敷地	自然堤防	古墳、集落、古墳、古代、中世
6	鷺場遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代	15	篠川遺跡	水田跡	自然堤防	弥生、古代、中世、近世
7	谷地遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代	16	前沖北遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代
8	中田社呂遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代	17	前沖北遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代
9	安久遺跡	島遺跡	自然堤防	縄文、弥生、古代、中世	18	約手遺跡	散布地	自然堤防	古代

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/25000)



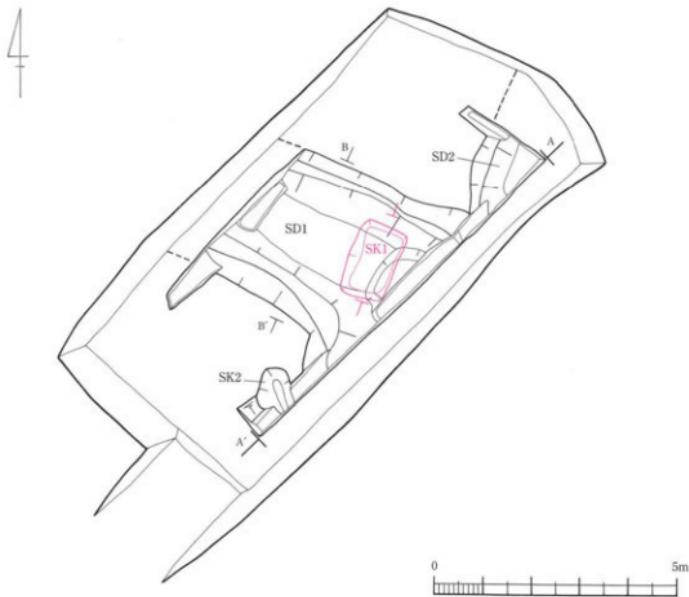
第2図 調査地点の位置 (1/5000)



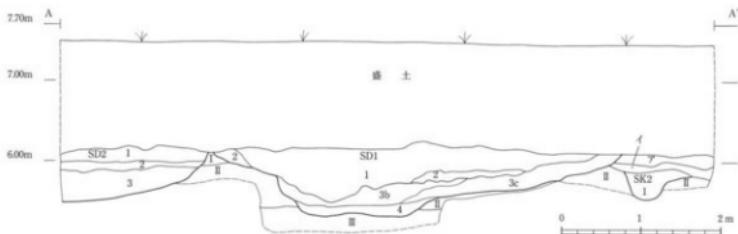
第3図 開発範囲と調査区配置

4. 基本層序

畑耕作土及び盛土が約1.3mあり、その下に旧表土（I層）がある。調査区で確認した基本層は大別3層に分けられる。調査区の中央で確認したSD1溝跡の北側と南側ではI・II層の厚さに違いが見られる。なお、調査区のはほぼ全域にわたって、酸化鉄が集積している。



第4図 遺構配置図



遺構名	層位	土 色	土 質	備 考
基 本 層 序	I層	10YR6/3 にぶい黄褐色	粘土	全体に酸化鉄を含む。
	10YR4/2 黒褐色	粘土の互層		層厚45cmの北では90cm以上、南では10cm以上。
	10YR2/1 黒色	粘土		
II層	10YR5/3 にぶい黄褐色	砂	SD1の南では10YR6/4にぶい黄褐色の砂と互層。	全体に酸化鉄を含む。
	10YR6/4 にぶい黄褐色	粘土	上面は全体に酸化鉄を含む。	
III層	5Y3/1 オリーブ黒色	粘土の互層	上面はグライ化。	
			下面はグライト。	

遺構名	層位	土 色	土 質	備 考
SD2	1層	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	炭化鉄粒を含む。
	2層	10YR4/1 黑灰褐色	粘土質シルト	全体に酸化鉄を含む。
	3層	5YR3/1 オリーブ黒色	粘土	上面に酸化鉄を含む。
SK2	1層	2.5Y3/1 オリーブ黒色	粘土	下面にII層の砂を含む。
	ア	5Y5/2 灰オリーブ色	砂	酸化鉄の層を含む。イの層を巻き込んでいる。
	イ	5Y3/1 オリーブ黒色	粘土	全体に酸化鉄を含む。

第5図 南東壁断面図

- I層 にぶい黄橙色粘土、灰黃褐色粘土、黒色粘土の互層。層厚はSD1溝跡の北側で約60cm、南側で約10cm。全体に酸化鉄粒を含む。
- II層 にぶい黄褐色砂。層厚はSD1溝跡の北側で約25cm、南側で約55cm。全体に酸化鉄粒を含む。
- III層 にぶい黄橙色粘土、オリーブ黒色粘土の互層。層厚は30cm以上。上面は全面に酸化鉄粒を含み、下面是グライ化している。

5. 発見遺構と出土遺物

1) 溝跡

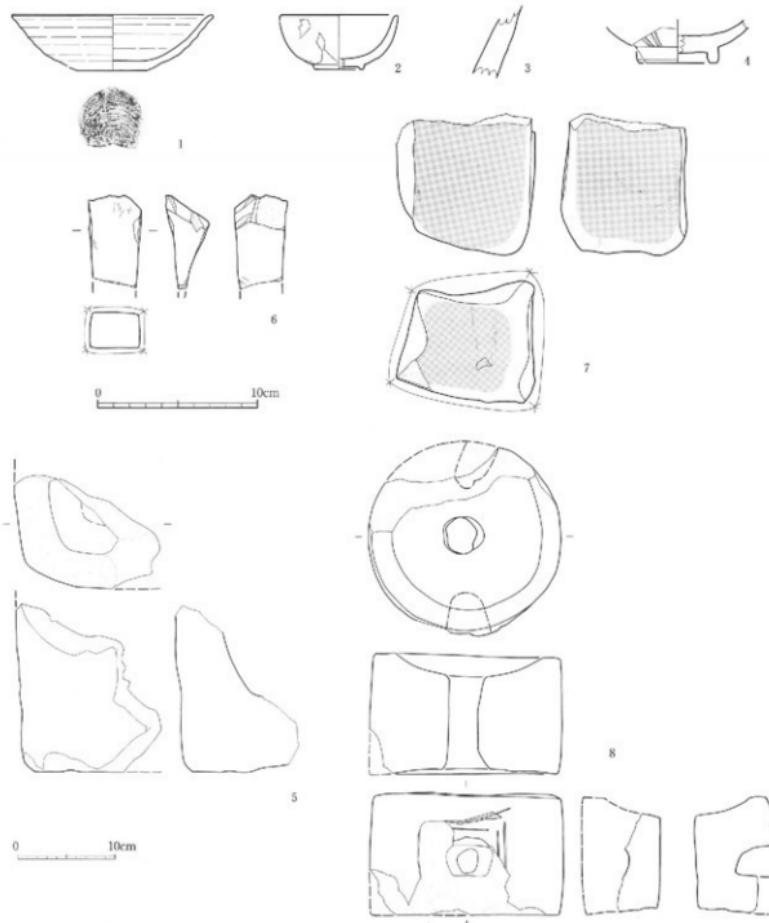
SD1溝跡 【位置・重複】 調査区中央部で検出した。SK1七坑に切られている。【方向・幅】 全体の方向はほぼ東西方向である。検出された溝の全長は約4.2m、幅は検出面で3.2m前後、底面で1.2m前後である。調査区南東端で南方に広がっているが、清水川（清水堀）がすぐ東を流れおり、調査区を拡張することができなかった。このためSD1溝跡が広がっているのか、南に向かって曲がっているのかを確定することはできなかった。【深さ・断面形】 検出面からの深さは90cm程度である。断面形はゆるやかなU字形を呈する。【堆積土・出土遺物】 堆積土は大別3層・細別6層に分けられる。1層はにぶい黄褐色シルト質粘土、2層は黒褐色粘土、3a層は黒褐色粘土、3b層はオリーブ黒色粘土、3c層はオリーブ黒色粘土、4層は灰色砂とオリーブ黒色粘土の互層である。1層は人為的に埋め戻された上である。3a～3c層・4層は水成堆積層で、3a層はベルト付近の南側、4層は調査区南東端の溝の落ち込み部分でのみ確認した。1・2層の中層には酸化鉄の集積した層があり、しまりが強い。ある時点で地下水位を示している可能性が考えられる。出土した遺物については第1表の通りである。この内、図化できたものは底部に回転糸切り痕の見られる赤焼土器D-1（第7図1）、美濃焼の小型灰釉碗I-1（第7図2）、龍泉窯系の青磁の碗J-1（第7図4）、石鉢K-1（第7図5）、砥石K-2（第7図6）、磨面のある硃K-3（第7図7）、木片L-1（第7図9）、漆器の椀L-2（第7図10）、板状の木製品2点L-3・4（第7図11・12）、刀子N-1（第7図13）、釘と見られる金属製品N-2（第7図14）である。また、4月20・21日に実施した確認調査では11トレンチでSD1溝跡を確認しており、遺物は1層からロクロ使用の土器類の甕の破片4点、3層から茶臼1点・陶器片1点が出土している。確認調査の1層は本調査の1層に、3層は3b層に対応している。この内、図化できたものは在地産と見られる無釉の陶器の鉢I-2（第7図3）、茶臼の上白K-4（第7図8）である。



第6図 SD1溝跡断面図 (1/60)

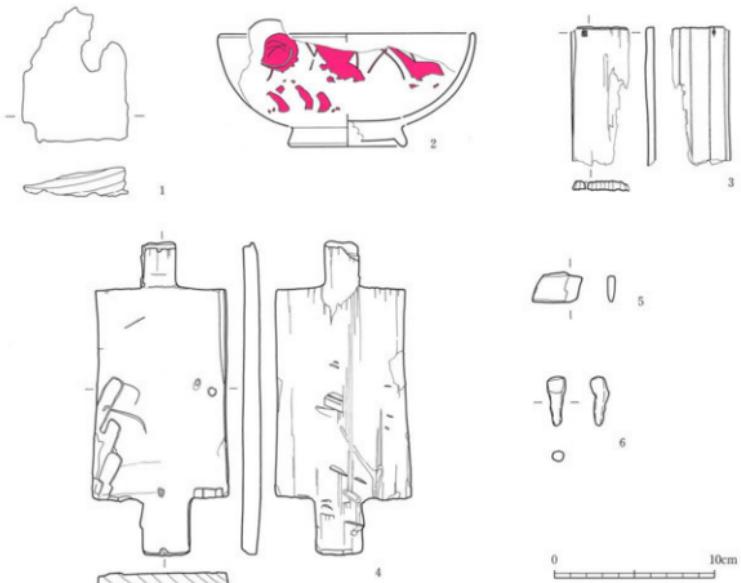
	土被部	頂部部	半強土部	細部	間隙	鉄製品	磚	石製品	木製品	骨	貝	目
1層	52	10	3				1	4	4	1	1	66
2層	32	4						1	0	4	6	67
3b層	9	2		1			1	4	5	2	5	23
計	93	16	3	1						6	6	136

第1表 SD1溝跡出土遺物一覧



図中 登録 番号	出土地点	分類	法 基	特徴・備考		写真 図版
				（調整・素材・底地・母形・分類）		
1 D-1	SD-1 1号	11 赤燒土器	平	33 (12.5)	42 外面、内面クロロ調壁 底部斜削み切り	5-1
2 I-1	SD-1 2號	10 陶器	壺	34 (7.4)	(3.1) 灰釉、内外面目盛あり 先端18C	5-2
3 I-2	SD-1 3號	29 陶器	鉢		無動、在庫？ 13-14C	5-3
4 J-1	SD-1 3b號	30 陶器	壺	(2.7)	52 青釉、外系、茎状根？ 高台内側面、内面：見込、無動、中国唐宋世系14C	5-4
5 K-1	SD-1 1號	18 石製品	石斧	(17.2)	(14.9) (11.7) 2200	5-5
6 K-2	SD-1 2號	10 石製品	砾石	(5.0)	3.3 2.2 45 黒雲5版	5-2
7 K-3	SD-1 2號	17 釋石器	磨石のある壺	(8.8)	8.6 7.7 910 自然石利用	5-8
8 K-4	SD-1 3號	石製品	器口上口	12.5	19.8 3450 孔径10cm、2つ孔が穿たれている	6-9

第7図 SD1溝跡出土遺物1



開拓中 段階	出土地点 番号	出土種類 番号	遺物名 遺物番号	取上№	分 類		法 量			特徴・備考 (調整・素材・底地・時間・分類)	写真 図版
					種別	属性	器高・長	口径・幅	当面径・厚		
1	L-1	SD-1	2層	10	木製品	板材	(8.4)	(6.5)	(1.6)		5~9
2	L-2	SD-1	3d層	19	木製品	漆器瓶				7.0	外腹: 黒漆のち朱漆模様 内面: 漆塗り 無げ肌あり 変形につき法量不明
3	L-3	SD-1	3d層	19	木製品	板材	(8.5)	(3.6)	0.5		5~11
4	L-4	SD-1	3d層	19	木製品	板材	19.4	8.4	1.0	無げ肌あり	6~1
5	N-1	SD-1	2層	10	金属製品	刀子	(3.2)	(1.1)	0.5		6~3
6	N-2	SD-1	2層	10	金属製品	針?	(3.1)	(0.7)	(0.6)		6~4

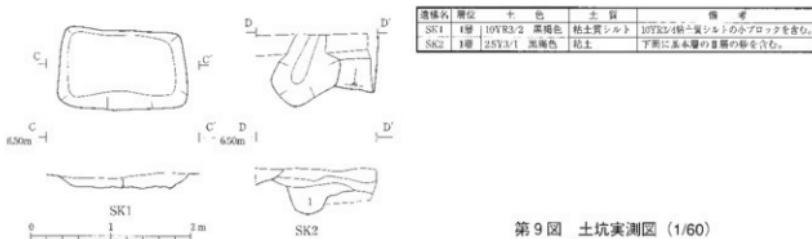
第8図 SD1溝跡出土遺物 2

SD 2溝跡 【位置・重複】 調査区の東隅で溝跡の一部を検出した。【方向・幅】 方向はほぼ南北方向である。検出部の全長は約2.0m、幅は検出面で13m以上、底面で0.5m以上である。【深さ・断面形】 検出面からの深さは65cm以上である。断面形はゆるやかなU字形と推定される。【堆積土・出土遺物】 堆積土は3層に分けられる。1層は黒褐色粘土質シルト、2層は褐灰色粘土質シルト、3層はオリーブ黒色粘土である。遺物は3層から土師器片が4点出土しており、ロクロを使用し内面黑色処理されたものが含まれている。

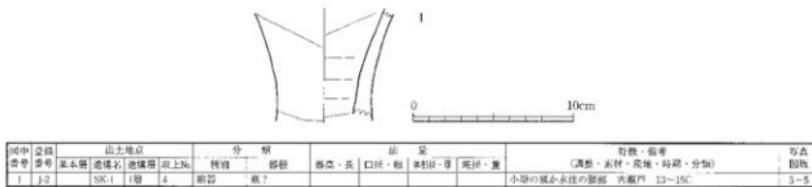
2) 土坑

SK 1土坑 【位置・重複】 調査区中央東側で検出した。SD 1溝跡を切っている。【平面形・大きさ】 平面形は長方形で長軸160cm、短軸100cmを測る。【深さ・断面形】 深さは18cmで、断面形は逆台形である。【堆積土・出土遺物】 堆積土は黒褐色土の粘土質シルトである。遺物は土師器片3点、須恵器片3点、土師質土器片1点、陶器片1点、磁器片1点が出土地している。この内、図化することができたのは古瀬戸の小型の瓶（または水注）の破片J-2（第9図1）である。

SK2土坑 【位置・重複】調査区中央東端で検出した。他の遺構との重複はないが、調査区断面の観察からSD1溝跡より古い遺構と考えられる。【平面形・大きさ】平面形は長方形で長軸100cm以上、短軸70cm以上である。【深さ・断面形】深さは18cmで、断面形はU字形である。【堆積土・出土遺物】堆積土は黒褐色土の粘土である。遺物は土師器片2点、須恵器片1点、使用痕のある縁1点が出土している。



第9図 土坑実測図 (1/60)



第10図 SK1土坑出土遺物

3) 出土遺物

調査区上面の sondage中に土師器片・須恵器片が出土している。摩滅が著しく調整痕跡の観察できないものが多いが、内面黒色処理されているものや、ロクロ調整の確認できる土師器片も見られる。

6.まとめ

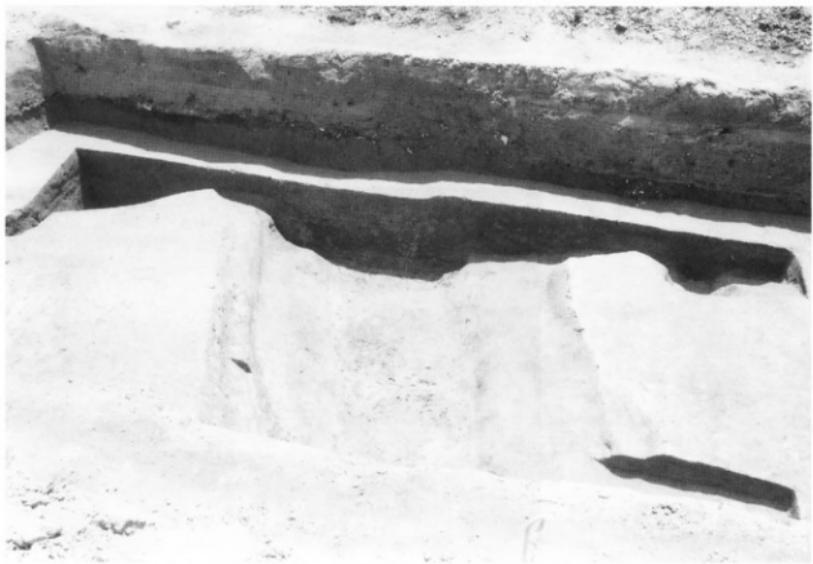
- ① 今回の調査は遺跡の南端部で実施した。
- ② 調査を実施した深さ約24mまでの地層は大別3層に分けられた。
- ③ 今回の調査では溝跡2条、土坑2基を確認した。
- ④ SD1溝跡は14世紀以降のものと見られ、遺跡の南側を画する堀跡と考えられる。約60m南には壇腰跡で確認された堀跡があり、跡を囲んでいた二重水濠を形成する可能性がある。堀跡は少なくとも18世紀までは機能しており、その後人為的に埋め戻されたものと考えられる。
- ⑤ SD2溝跡は、出土遺物から古代以降の溝跡と考えられるが、詳細については不明である。
- ⑥ 土坑は、SK1土坑はSD1溝跡を切っていることから比較的新しい時期、SK2土坑は平安時代以降の遺構と考えられる。

<参考・引用文献>

- 渡部弘美（2004）：「壇腰跡 発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第277集 仙台市教育委員会
柴桃正隆（1974）：『史料 仙台領内古城・館』第四巻 宝文堂



1 調査区全景（西より）



2 調査区全景（北西より）

図版1 前田館跡全景



1 南東壁断面①（北西より）



2 南東壁断面②（北西より）



3 南東壁断面③（北西より）

図版2 調査区南東壁断面



1 SD1遺構断面（北西より）

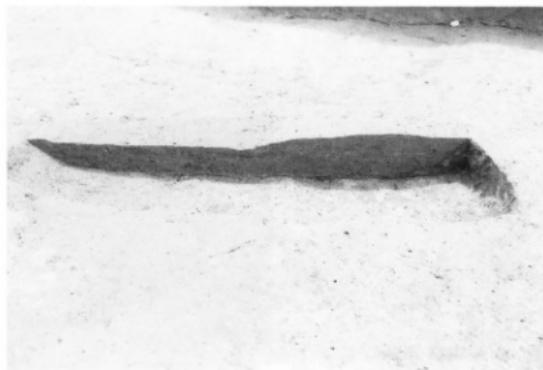


2 SD1溝跡（北西より）

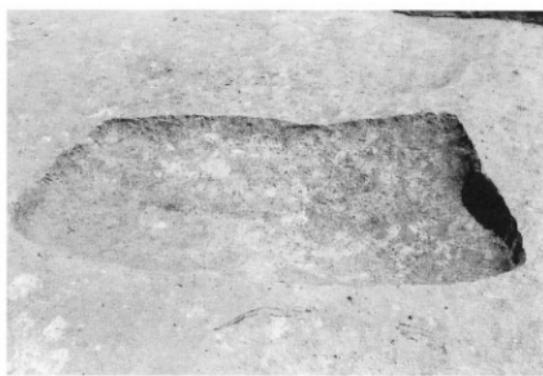


3 SD1、2溝跡（南西より）

図版3 溝跡（SD1・2）



1 SK1土坑断面（北西より）

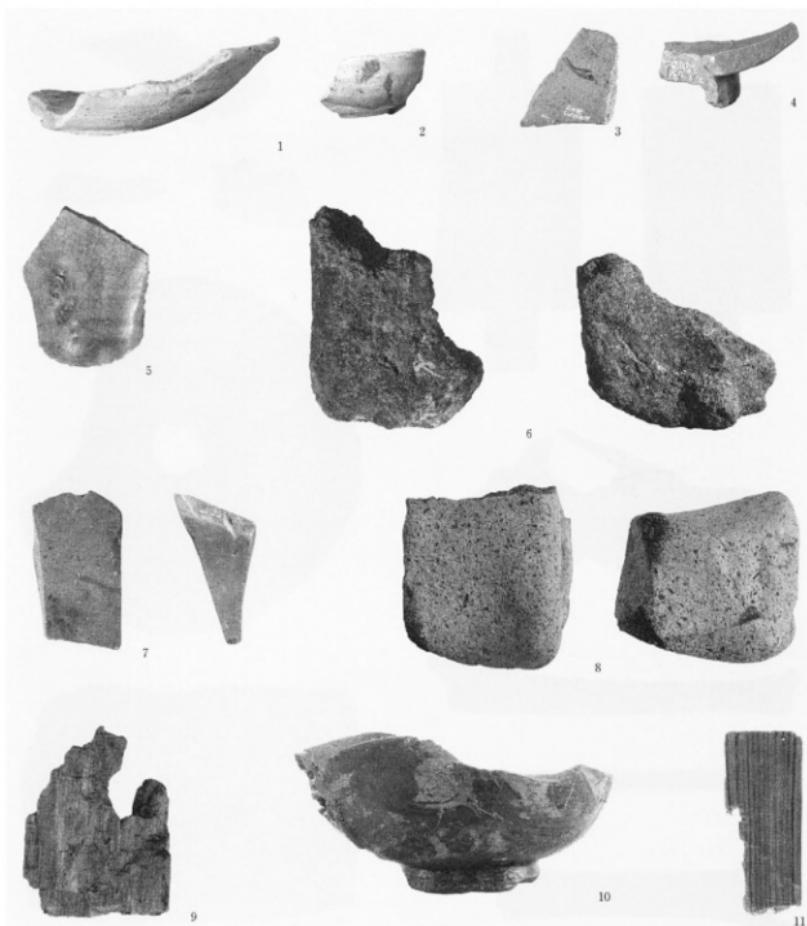


2 SK1土坑（北西より）



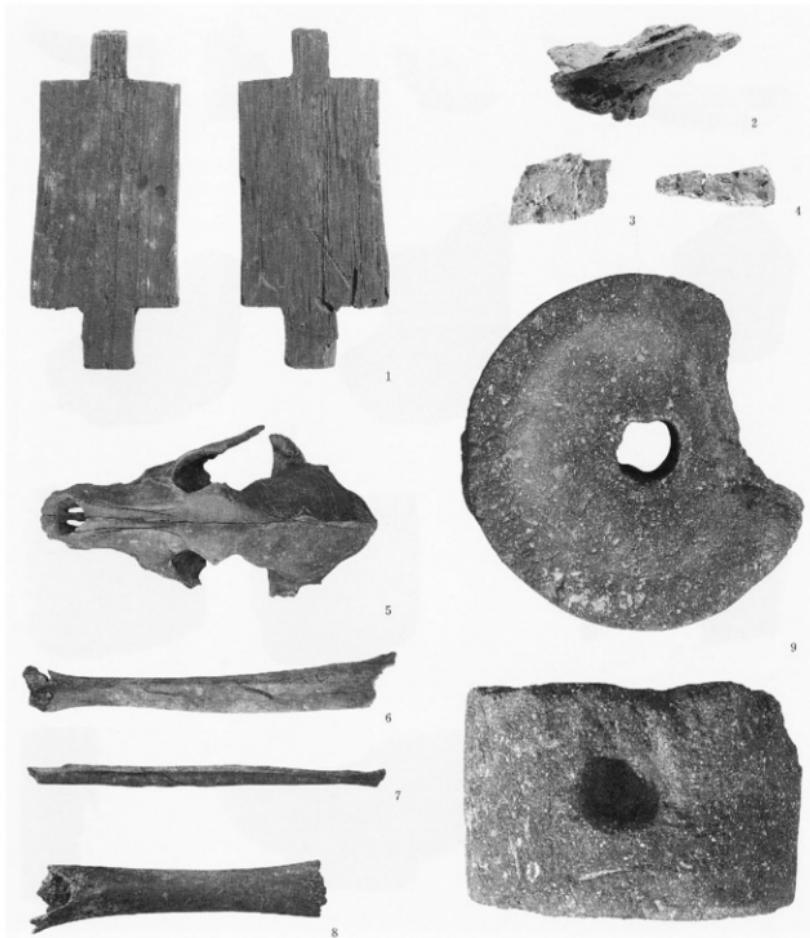
3 SK2土坑（南西より）

図版4 土坑（SK1・2）



1	赤燒土器 环	D-1	(SD 1 第7図1)	7	石製品 砥石	K-2	(SD 1 第7図6)
2	陶器 圈	I-1	(SD 1 第7図2)	8	石製品 磨	K-3	(SD 1 第7図7)
3	陶器 鮢	I-2	(SD 1 第7図3)	9	木製品 板材	L-1	(SD 1 第8図1)
4	磁器 瓶	J-1	(SD 1 第7図4)	10	木製品 漆器輪	L-2	(SD 1 第8図2)
5	磁器 豆か水注	J-2	(SK 1 第10図1)	11	木製品 材	L-3	(SD 1 第8図3)
6	石製品 石鉢	K-1	(SD 1 第7図5)				

図版5 前田館跡出土遺物 1



1 木製品 材 L-4 (SD1 第8図12)
 2 木製品 漆器柄 L-5
 3 金属製品 刀子 N-1 (SD1 第8図5)
 4 金属製品 銛? N-2 (SD1 第8図6)
 5 骨骨 Q-1 (SD1)

6 骨 Q-2 (SD1)
 7 骨 Q-3 (SD1)
 8 骨 Q-4 (SD1)
 9 石製品 石臼 K-4 (SD1 第7図8)

図版6 前田館跡出土遺物2

II 中田南遺跡第3次発掘調査報告書

1. 調査要項

遺跡名	中田南遺跡（宮城県遺跡番号01272）
調査地点	仙台市太白区中田7丁目226-17、225-10、230-6・7
調査期間	平成17年6月22日～6月30日
調査対象面積	63m ²
調査面積	21m ²
調査原因	個人住宅建築
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担当職員	文化財教諭 浅野克樹 三塚博之

2. 調査に至る経過と調査方法

本調査は、平成17年6月7日付けで石井浩秋氏より軽量鉄骨2階建て個人住宅の建築に伴う発掘届が提出されたことに基づいて調査を行った。当該区は中田南遺跡の南東部に位置し、平成4年度に行われた第1次調査のIV区拡張部分にあたり、IV層の上面で中世の堀跡と見られる遺構を確認していた場所である。この調査結果に基づき建物予定地に東西7m・南北3mの調査区を設定し、重機により盛土部分からII層までを掘り下げ、III層上面（標高約6.5m）で手掘りによる遺構検出作業を行った。



No.	遺跡名	種別	立地	年代	No.	遺跡名	種別	立地	年代
1	中田西遺跡	集落・聚落跡	自然地形	奥古・生長・古墳・奈良・平安・中世	10	安久山遺跡	集落・聚落	自然地形	奈良・古墳・奈良・平安・近世
2	松久遺跡	集落跡	自然地形	奈良・平安・中世・近世	11	前田遺跡	城跡	自然地形	奈良・平安
3	雪室跡	貯水池	自然地形	平安	12	地盤走跡	敷石地	自然地形	奈良・平安
4	興道遺跡	貯水池	自然地形	奈良・奈良・平安	13	中田北遺跡	敷石地	自然地形	奈良・平安
5	南東門跡	貯水池	自然地形	平安	14	奥河口遺跡	官署関係・水田跡	自然地形	奈良・平安・中世・近世
6	谷地田遺跡	貯水池	自然地形	古墳・奈良・平安	15	舟沖山遺跡	敷石地	自然地形	山城・奈良・平安
7	草道跡	集落跡	自然地形	弥生・古墳・奈良・平安	16	舟津北遺跡	敷石地	自然地形	山城・奈良・平安
8	安久遺跡	集落跡	自然地形	奈良・平安	17	内手遺跡	敷石地	自然地形	奈良・平安
9	中正神社裏遺跡	空き地	自然地形	古墳・平安					

第11図 遺跡の位置と周辺の遺跡

3. 遺跡の位置と環境

中田南遺跡は、仙台市の南東部、JR南仙台駅の南0.8kmに位置し、遺跡の南側には名取市が接する。名取川やその支流によって形成された標高7～8m前後の自然堤防上に立地している。遺跡の広がりは東西500m、南北200mである。周辺の遺跡には前田館跡、壇腰遺跡、中田北遺跡、上余田遺跡などがある。この他にも名取川下流域南岸部には多くの遺跡があり、古くより人類の生活が営まれてきた地域である。

発掘調査は、平成4年から行われており、古墳時代から中世にかけての遺構が多数確認されている。堅穴住居跡は古墳時代後期3軒・古墳時代末から奈良時代30軒前後、平安時代2軒、掘立柱建物跡は、古墳時代末から奈良時代2棟以上、平安時代4棟以上などが確認されている。他にも平安時代の鍛冶遺構、中世の井戸跡、屋敷を囲む堀跡、火葬墓などが発見されている。遺物では縄文時代晩期までさかのぼる土器も出土している。奈良時代の遺構からは、銅の鋳造用の土器などが出土しており、東日本において8世紀に銅鋳造が行われたことを示す貴重な発見がされている。また、中世の屋敷跡や堀跡、溝跡からは土師質土器皿や陶磁器なども出土している。



第12図 調査地点の位置

4. 基本層序

I層：オリーブ黒色シルト

第1次調査の埋め戻しの土である。

II層：暗褐色シルト

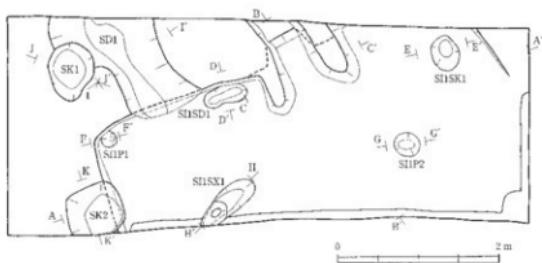
褐色土の小プロックを含む。下面に乱れがみられる。第1次調査のⅢb層に相当するとと思われる。

III層：褐色砂質シルト

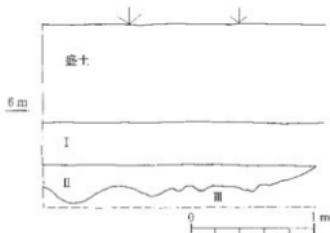
自然堆積層。第1次調査のⅣ層に相当すると思われる。



第13図 調査区配置図



第14図 遺構実測図



層位	土色	土質	備考
I	5Y3/2 オリーブ褐色	シルト	第1次調査の時の(し)の土
II	10Y2/3/3 黄褐色	シルト	褐色土の小ブロックを含む。下面に瓦れがみられる 第1次調査の基盤に相当するとと思われる
III	10Y2/4/6 緑色	砂質シルト	自然地盤 第1次調査の基盤に相当するとと思われる

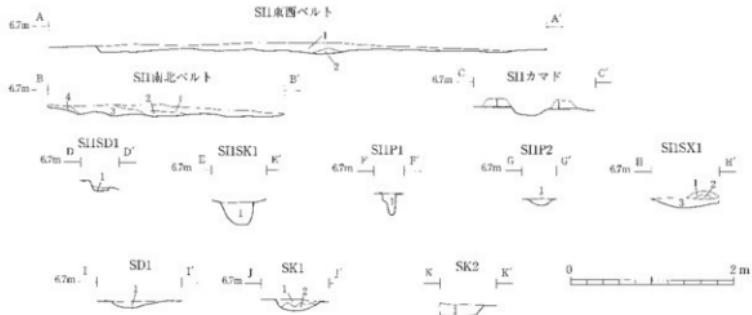
第15図 北壁土層断面図

5. 発見遺構と遺物

Ⅲ層上面で遺構の検出作業を行い、竪穴住居跡1軒・溝跡1条・土坑2基を検出した。

1) 竪穴住居跡

SI1 竪穴住居跡 調査区中央で北半を確認した。南半は調査区の外に延びている。北壁の東半が削平を受けているが東壁がかすかに検出されたため、平面形は方形もしくは長方形を呈するものと推察される。住居の北辺は約5m、南北軸長は検出部分で約2.7mである。第1次調査のIV区拡張区で検出した竪穴住居と同一である。全体的に削平が著しく、検出面から床面までの深さは0~10cmである。住居廃絶後の残存する堆積層は1層である。住居の中央部分に堅くしまった貼り床が見られたが湧水により精査中に消失し、範囲を記録することはできなかった。遺物としては、土師器片13点、須恵器片2点が出土している。カマドは北壁に造られている。中央よりやや東によって位置し、調査区外に延びているため確認できないが、幅約35cmの煙道が住居の外に延びている。煙道の方向は磁北とほぼ一致している。カマド本体は、両袖の下端部分が幅約10cm残っており、北壁からカマド袖部の先端まで約60cm、両袖の外側で約120cm・内側で30cmを測る。カマド内からは支脚に使用したと思われる長さ11.4cm、幅4.9cm、厚さ4.5cmの石が見つかっている。また、カマド西側の北壁で周溝の一部と見られる溝と住居の北東隅で土坑を1基検出している。溝の幅は、約20cmで、床面からの深さは約5cmである。平面形は南北軸約45cm、東西軸約30cmの楕円形を呈する。土坑の深さは約30cmで、断面形はU字形を呈する。柱跡は確認できなかった。ピットは住居の北西隅でP1、北東部でP2を、住居の西部調査区壁際では溝状の落ち込みに粘土が盛り上がったSX1を検出している。遺物はP2から、非ロクロ土師器壺片(C-1)を含む土師器片11点、須恵器片2点、SX1からは土師器片1点が出土している。



SI1セクション

層No.	土色	土質	備考
1	10YR5/2 黒褐色	シルト	基盤上 岩褐色砂質シルトの小ブロックを含む
2	10YR3/1 砂褐色	砂質シルト	にぶい岩褐色砂質シルトの小ブロックを含む
3	5Y4/1 黑褐色	シルト	塊土を多く含む
4	5Y4/2 黒オリーブ色	シルト	塊土を少含む

SI1 カマド

層No.	土色	土質	備考
1	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂	全体に岩褐色砂質シルトのブロックを含む 内側に礫土のブロックを少量含む

SI1 SD1

層No.	土色	土質	備考
1	10YR3/2 黒褐色	シルト粘土	にぶい岩褐色砂質シルトのブロックを含む

SI1 SK1

層No.	土色	土質	備考
1	10YR5/3 黒褐色	シルト	にぶい岩褐色砂質シルトの小ブロックを含む

SI1 SX1

層No.	土色	土質	備考
1	10YR4/2 黑褐色	シルト	下層に灰土のブロックを含む
2	10YR3/1 黒褐色	シルト	上層に岩褐色土を少量含む
3	10YR3/3 黑褐色	シルト	しまりが強く、硬い

SI1P1

層No.	土色	土質	備考
1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	にぶい岩褐色砂質シルトのブロックを含む

SI1P2

層No.	土色	土質	備考
1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	部分的に灰土を含む

SD1

層No.	土色	土質	備考
1	10YR3/2 黒褐色	シルト	褐色砂質シルトの小ブロックを多量含む

SK1

層No.	土色	土質	備考
1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	褐色土のブロックをわずかに含む
2	10YR4/4 暗色	シルト質砂	暗褐色土のブロックをわずかに含む

SK2

層No.	土色	土質	備考
1	10YR3/2 黒褐色	シルト質砂	褐色土の小ブロックを多量に含む 炭化物を少量含む

第16図 遺構断面図

2) 溝跡

SD1溝跡 調査区の北西部で溝跡の一部を検出した。検出された溝の全長は約1.5mで幅は上面で70~80cm・下面で20~70cmである。深さは8~20cmで、断面形は不定形である。堆積土は1層である。SI1竪穴住居跡・SK1土坑に切られている。遺物は壺、甕、壺と思われる土師器片10点と須恵器片1点が出土している。

3) 土坑

SK1土坑 調査区の北西部で検出した。SD1溝跡を切っている。平面形は楕円形で長さ75cm、幅55cmを測る。深さは約15cmで、断面形はゆるやかなU字形を呈する。堆積土は2層である。遺物は甕、壺と思われる土師器片3点、壺と思われる須恵器片2点が出土している。

SK2土坑 調査区の南西部で検出した。遺構の南端は調査区外に延びているため全体の形状は不明であるが、平面形は方形を呈するものと思われる。規模は長さ70cm、幅65cmである。深さは約15cmで、断面形はゆるやかなU字形を呈する。堆積土は1層である。遺物は出土していない。



出土遺物		分類	性質	特徴・備考（測定・基材・産地・時期・分類）	写真 図版
出土遺物番号 基材 遺物名 測定値 上段No	種別 器種 基材 測定値 下段No	形高・底 口径・幅 作器種・切 底径・重	(4.0) (9.6)	外面：ヘラケグリ　裏面剥離　内面：ヘラナデ	7-1

第17図 出土遺物

6.まとめ

- ① 本調査区は、平成4年度調査のVI区拡張部分にあたり、以前確認していた堅穴住居跡・溝跡1条・土坑2基と思われる遺構を調査した。
- ② SI1堅穴住居跡出土器は、第1次調査の第III群上器に相当すると考えられるので古墳時代末から奈良時代前半に位置づけられる。
- ③ SD1溝跡とSK1・2土坑はSI1堅穴住居跡を切っていることから古墳時代末から奈良時代前半以降の遺構と考えられる。

<参考・引用文献>

- 太田昭夫・熊谷裕行・佐藤淳（1994）「中田南遺跡第1次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第182集
太田昭夫・三塚清（1995）「中田南遺跡第2次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第206集



1 非クロ土師器 瓦 C-1 SI1P2 (第17図1)

2 支脚 K-1 SI1カマF

図版7 中田南遺跡第3次調査出土遺物



1 遺構検出状況（東より）



2 SI1床面完掘状況（南より）



3 SI1カマド完掘状況（南より）

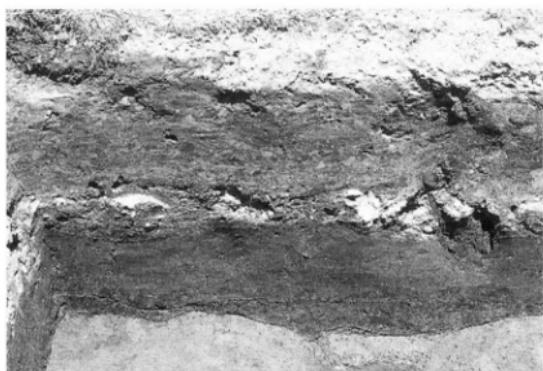
図版8 遺構検出状況・SI1 竪穴住居跡



1 SI1P2出土遺物（南より）



2 調査区完掘全景（南より）



3 調査区北壁土層断面（南より）

図版9 遺物出土状況・調査状況

III 中田北遺跡発掘調査報告書

1 調査要項

遺跡名	中田北遺跡（宮城県遺跡番号01271）
調査地点	仙台市太白区中田7丁目20
調査期間	平成17年4月11日～4月13日
調査対象面積	320m ²
調査面積	102m ²
調査原因	共同住宅建築（2棟）
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育生涯学習部文化財課調査係
担当職員	主査 工藤哲司 文化財教諭 三塚博之 浅野克樹 赤岡光騎

2 調査に至る経過と調査方法

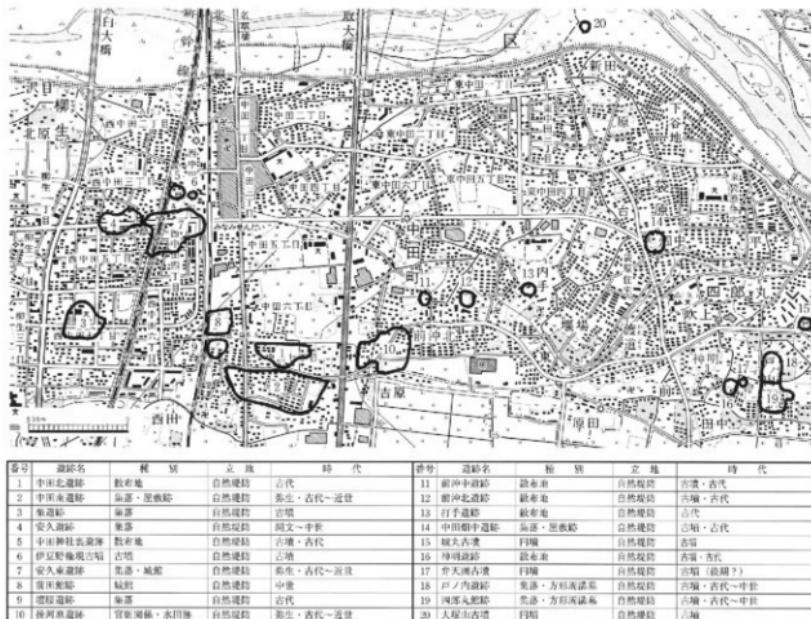
本調査は、平成17年4月4日付けで、安達一七夫・安達のぶえ氏より、共同住宅の建築に伴う埋蔵文化財発掘の届出が提出されたので、確認調査を実施し、そのうえで必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。確認調査は、平成17年4月11日に着手した。2棟の建物にそれぞれ幅3m・長さ15mのトレンチを設定して調査を行なった。最初に東側の建物（東トレンチ）を調査したところ、土坑1基とピットが3個検出されただけであった。西側建物にかかるトレンチ（西トレンチ）も、細い溝跡1条と土坑1基・ピット1個だけが検出されただけであったが、西区北部の西壁面で焼土と土師器の甕が伏せて立った状態で検出されたため、この部分の西側を幅2mで拡張したところ、竪穴住居跡が1軒発見された。検出された遺構について本調査を実施した。

3 遺跡の位置と環境

中田北遺跡は仙台市の南端、名取市との境に近く、JR南仙台駅の南東約1kmに位置する。付近一帯は名取川が形成した自然堤防と後背湿地・旧河道が複雑に入り組んだ地形となっており、遺跡の中心となる標高6m前後の自然堤防の北側には旧河道が存在し、南側には後背湿地が広がっている。遺跡の一部は後背湿地に及んでいる。

遺跡の北側を流れる名取川対岸の富沢地区は、自然堤防の形成が早く、縄文時代中期頃から集落が形成されているが、中田地区周辺の沖積地に遺跡が形成されるようになるのは、弥生時代になってからで、後河原遺跡や戸ノ内遺跡・安久東遺跡・中田南遺跡などで弥生土器が出土している。古墳時代になると戸ノ内遺跡と四郎丸館跡にかけての地域や安久東遺跡などに集落と方形周溝墓がつくられ、生活の様子が明らかになってくる。以後、古墳時代・奈良時代・平安時代を通して次第に多くの遺跡が形成され、遺跡の分散・拡大が認められる。また、後河原遺跡では4面に廻をもつ掘立柱建物跡を中心に数棟の建物群も検出され、農村とは異なる性格の集落も認められる。中世には安久東遺跡・中田南遺跡・四郎丸館跡に屋敷ないし城館が形成されている。

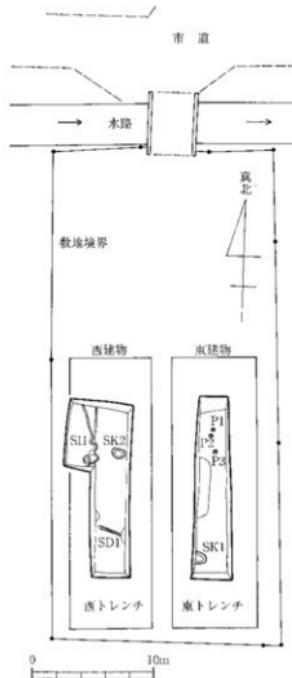
中田北遺跡はこれまでに数度の確認調査が行なわれているが、遺構・遺物は発見されていなかった。ただ、南東に接する、中田南遺跡では、弥生土器・古墳時代中期の土器が出土し、古墳時代後期からは竪穴住居跡による集落が形成される。以後古墳時代末から奈良・平安時代前半にかけて多数の竪穴住居跡が作られている。中世には大小の溝で囲まれた複数の区画があり、その区画の中で掘立柱建物跡や井戸跡・土坑が発見されている。区画溝には重複もみられ、13世紀から16世紀にかけて3時期の変遷を考えられている。



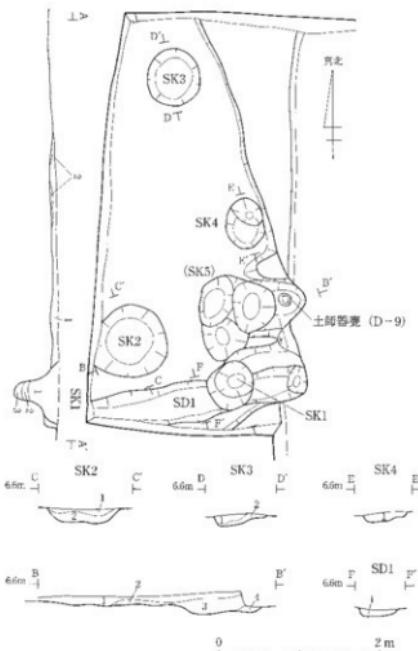
第18図 遺跡の位置と周辺の遺跡



第19図 調査地区の位置



第20図 調査区・遺構配置図



SI1			
層No	上色	土性	備考
S1 1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	黄褐色土粒・炭化物粒を多く含む
2	10YR4/4 棕褐色	粘土質シルト	黄褐色土のブロックを多く含む
3	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	粘土・炭化物・灰・土器片を大量に含む
4	10YR4/6 棕褐色	シルト	砂+ブロック・黄褐色土のブロックを含む
SK1 1	10YR2/3 黑褐色	粘土質シルト	黄褐色土粒をわずかに含む
2	10YR2/4 暗褐色	シルト質粘土	土器片を含む
3	10YR4/2 灰褐色	粘土	黄褐色土粒をわずかに含む

SI1			
層No	上色	土性	備考
SK2 1	10YR3/3 深褐色	粘土質シルト	黄褐色土粒を少しある
2	10YR4/4 黄色	シルト質粘土	黄褐色土粒を含む。炭化物粒を少しある
SK3 1	10YR3/3 黑褐色	シルト質粘土	炭化物粒のブロックを含む
2	10YR4/4 黄色	シルト	炭化物粒を量的に含む
SK4 1	10YR2/3 黑褐色	粘土質シルト	黄褐色土のブロックを含む
SD1 1	10YR2/3 黑褐色	粘土質シルト	「くろい」黒褐色土粒を含む。炭化物粒を少しある

4 基本層序

- 盛 土 層厚25cm前後。残土等による盛土。
- I a 層 10YR3/4暗褐色のシルト層。層厚約15cm。近年の畑の耕作土。
- I b 層 10YR3/3暗褐色の粘土質シルト層。層厚約25cm。近年の畑の耕作土上部。
- II 層 10YR3/2黒褐色の粘土質シルト層。黄褐色土をわずかに含む。層厚約15cm。
旧表土？ 燃土・炭化物・褐色土粒をわずかに含む。
- III a 層 10YR4/6褐色のシルト層。層厚15cm。地山上部。南部では褐色の砂層となる。
- III b 層 10YR5/6黄褐色のシルト質粘土層。地山下部。

5 発見遺構と出土遺物

東西両トレンチ合わせて、III a 層上面で、溝跡1条・堅穴住居跡1軒・土坑2基・ピット4個が検出された。

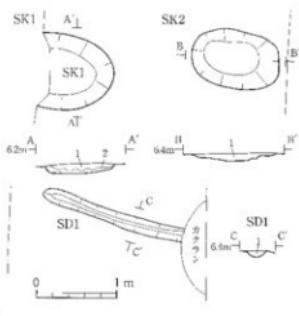
1) 溝跡

SD 1 溝跡 西トレンチの南部で検出された。西端は西壁際で立ち上がり、東側は搅乱に切られ、検出部の長さは約180cmである。幅は上面で22cm・深さは9cmで、断面形は舟底形である。堆積土は暗褐色のシルト質粘土で、明黄褐色シルトのブロックを含む。出土遺物はない。

2) 穫穴住居跡

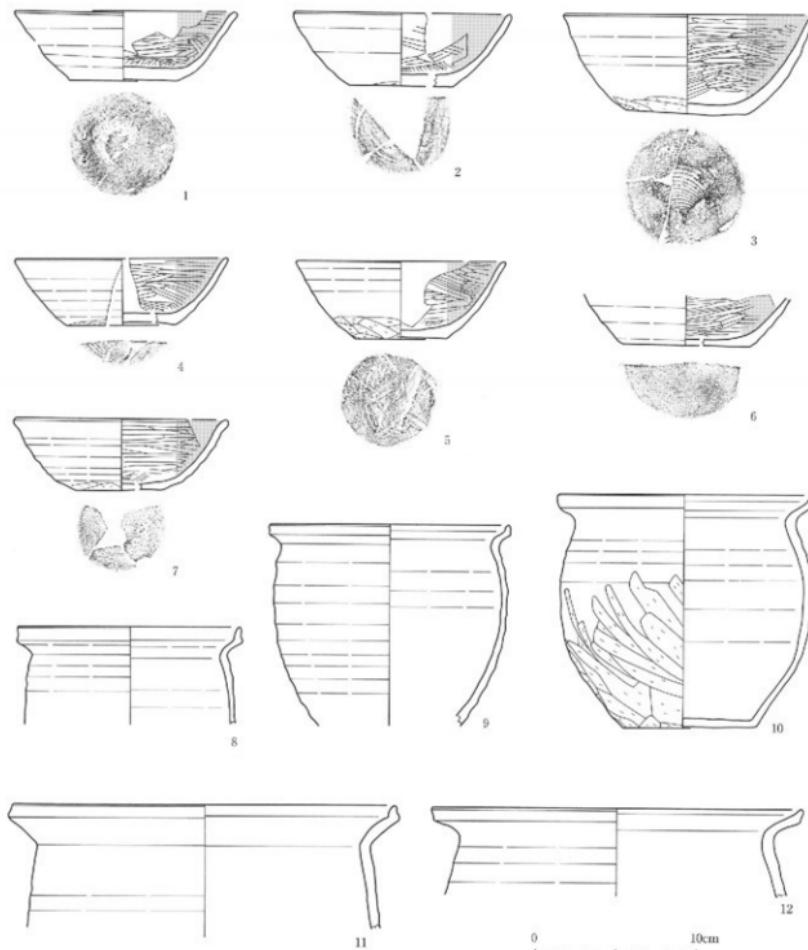
SI 1 穫穴住居跡 【位置・重複】西トレンチ北部で検出された。南辺・北辺・西辺は調査区の外にのびる。Ⅱ層上面で検出したが、堆積土がⅡ層に類似しているので、掘り込み面はⅡ層の可能性がある。【平面形・規模・方向】平面形は検出部の状況から方形ないし長方形を呈すると考えられる。大きさは、検出部で南北約510cm・東西約265cmを測る。方向は、東壁で真北から16°西に傾いている。【堆積土】堆積土は、4層に分けられた。遺構の深さは、検出面から床面までの残りの良いところで12cmである。

1層は暗褐色の粘土シルトで、黄褐色土粒や炭片・土器片を含む。住居跡全面に分布している。2層は、褐色の粘土質シルトで黄褐色土のブロックを多く含む。3層は黒褐色のシルト質粘土層でカマド燃焼部の落ち込みに分布する。4層は焼土・黄褐色土を多量に含む褐色のシルトで、3層同様に燃焼部底面の焼土層である。【床面・壁面】床面はほぼ平坦である。壁面は、検出部分はほぼ直線的にのびる。立ち上がりは直角に近い。【柱穴・カマド・施設】柱穴は、床面では検出されなかった。カマドは東壁の南寄りに築かれている。南袖（右袖）と南壁との間は、50~70cmである。カマド本体は、幅は袖の外側で測って125cm・内側で50cm前後である。袖の長さは、右側が60cm・左側が45cmまで残る。幅は、左右とも基底部で30cmである。カマドの燃焼部から前庭部にかけて20~25cmの深さの穴が掘られており、穴の堆積土中から多量の上部器片が出土している。残存するカマドの奥部からは、倒立の状態で置かれた小型の甕が出土している。煙道は、住居の上面が削平を受けているためか検出されていない。その他の施設としては、土坑が4基検出されている。SK 1 土坑は、住居跡の東南部の堆積土（1層）上面から掘り込まれている。平面形は円形で、直径60cm前後、深さは55cmある。断面形は漏斗状で堆積土は3層に分けられる。SK 2 土坑は、カマドの前面に位置する。南北90cm・東西約90cmの円形で、深さは14cmを測り、断面形は舟底形を呈する。堆積土は2層に分けられる。SK 3 土坑は住居の東壁際の北壁よりに位置する。平面形は円形を呈し、南北72cm・東西65cmを測る。深さは14cmで、断面形は不整な舟底形を呈する。堆積土は2層に分けられる。SK 4 土坑はカマドの左袖の外側に位置する。平面形は楕円形を呈し、南北長軸63cm・東西短軸46cmを測る。深さは10cm前後で、北側が一段低くなっている。断面形は舟底形を呈する。黒褐色土1層である。【遺物出土状況】床面からの遺物は、少ないが、先に記したようにカマド内の堆積土（2・3層）から土器片が多量に出土している。ここから出土した土器片は、甕の破片が多い。【出土遺物】土器片の甕7点（第23図1~7）、甕8点（第23図8~12・第24図1~3）と、須恵器の壺3点（第24図4~6）、高台付壺片1点（第24図7）、甕の体部破片1点（第24図8）がある。土器片の壺は、何れもロクロを使用して作られており、全て内面は黒色処理されている。底部は回転ヘラ切りのち手持ちヘラ削りされるもの（D-2）、回転糸切りのち手持ちヘラ削りされるもの（D-1・3）、切り離し技法不明で手持ちヘラ削りされるもの（D-4）である。



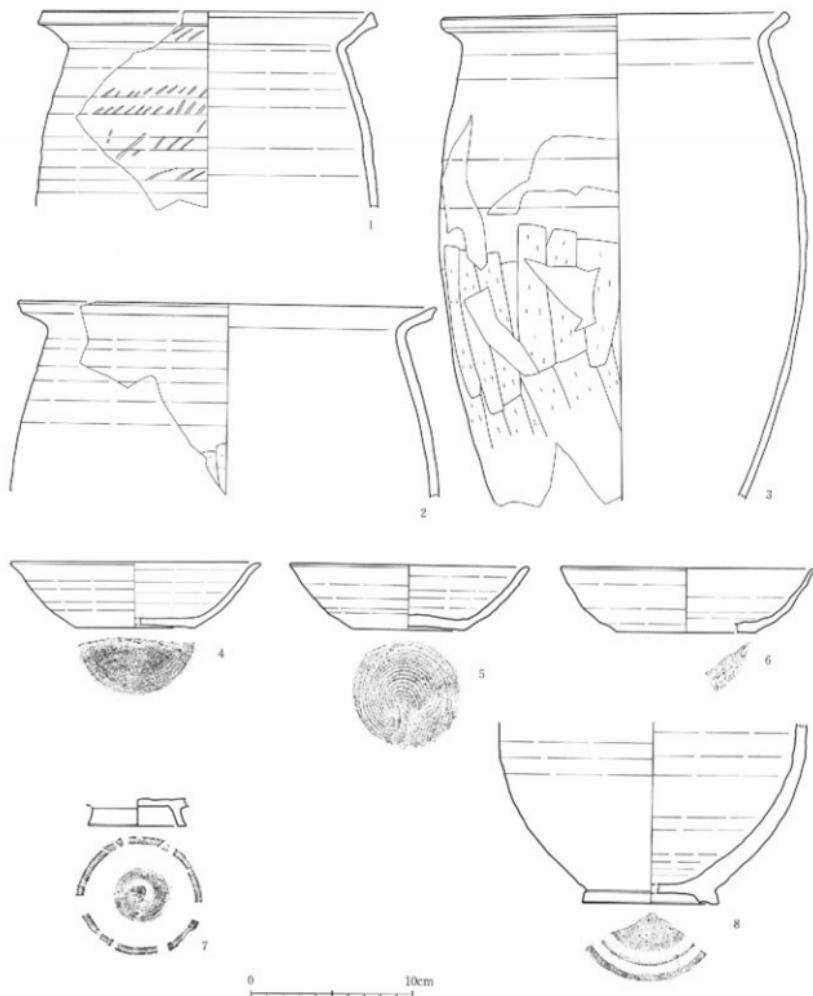
SD 1		
番号	土 色	土 性
1	120YR3/3 褐褐色	粘土シルト 明黄褐色土のブロックを含む。酸化度を含む。
SK 1	土 色	土 性
1	10YR3/2 黑褐色	シルト 酸化度を少度含む
2	10YR4/4 におい青褐色	シルト 酸化度を多度含む
SK 2		
番号	土 色	土 性
1	10YR3/3 褐褐色	シルト質粘土 10YR3/4暗褐色土のブロックを含む

第22図 土坑・溝跡



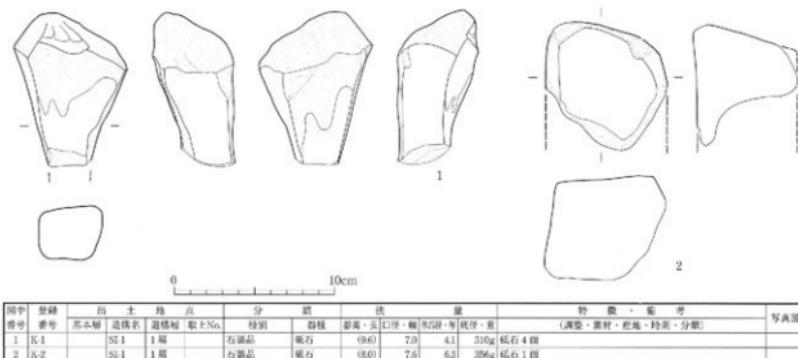
団中 番号	登録 番号	出 土 地 点	分 類	法 則	基 準	特 徴	参考	写真取 扱
		墓主名	遺物名	取上No.	機種	器高・直径	内面・底面・口部	
1 D-2	SI-1	麻庵	ロクロ土加筋 环	43	(13.4)	6.5	内面: リフタ型、直線側面へ突き出た舟形へテラコ。内面: ハリドマ。底面: 裸底	12-1
2 D-1	SI-1	麻庵	ロクロ土加筋 环	45	(13.2)	6.2	内面: リフタ型、直線側面へ突き出た舟形へテラコ。内面: ハリドマ。底面: 裸底	12-3
3 D-3	SI-1	麻庵	ロクロ土加筋 环	62	(52)	7.1	内面: リフタ型、ハリドマ。底面: ハリドマ。内面: ハリドマ。底面: 裸底	12-2
4 D-7	SI-1	1号	ロクロ土加筋 环	41	(12.8)	6.4	内面: リフタ型、ハリドマ。底面: ハリドマ。内面: ハリドマ。底面: 裸底	
5 D-4	SI-1		ロクロ土加筋 环	48	(12.8)	5.6	内面: リフタ型、ハリドマ。底面: ハリドマ。内面: ハリドマ。底面: 裸底	
6 D-5	SI-1	サマド	ロクロ土加筋 环	(30)	(7.8)		内面: リフタ型、直線側面へテラコ。内面: ハリドマ。底面: 裸底	
7 D-6	SI-1	SK-1	ロクロ土加筋 环	45	(12.0)	(5.2)	内面: リフタ型、直線側面へテラコ。内面: ハリドマ。底面: 裸底	
8 D-13	SI-1	SK-1	ロクロ土加筋 环	61	(15.0)		外面: ロクロ調査 内面: ロクロ調査	
9 D-8	SI-1		ロクロ土加筋 环	125	(14.7)		外面: ロクロ調査 内面: ロクロ調査	12-4
10 D-9	SI-4	サマド	ロクロ土加筋 环	146	(15.8)	8.2	外面: ロクロ調査、ハリドマ。底面: ハリドマ。内面: ロクロ調査	
11 D-15	SI-4	1号	ロクロ土加筋 环	(83)	23.5		外面: ロクロ調査、ハリドマ。底面: ロクロ調査	
12 D-14	SI-4	サマド	ロクロ土加筋 环	(5.0)	22.8		外面: ロクロ調査 内面: ロクロ調査	

第23図 SI1堅穴住居跡出土土器



図中 件号	登録 件号	出 土 地 点	分 類	法 基 星	等 級 ・ 備 考	(調査、査定、発見、時期、分類)		写真図版	
						基木器	追加名		
1	D-11	SI-1	SK-5	ロクロ土器	甕	(10.2)	250	外面：ロクロ調査、ハケメのちロクロ調整 内面：ロクロ調査	
2	D-12	SI-1	ロクロ土器	甕	(11.0)	(25.5)	外面：ロクロ調査、ヘラケズリ 内面：ロクロ調査		
3	D-10	SI-1	カマF	ロクロ土器	甕	(30.3)	(21.0)	外面：ロクロ調査、ヘラケズリ 内面：ロクロ調査、ナデ	
4	E-1	SI-1	1解	直筒甕	环	4.1	(15.2) (7.1)	外面：ロクロ調査、底面削除後ヘラケズリのち洗浄ヘラケズリ 向面：ロクロ調査	
5	E-2	SI-1	カマF	直筒甕	环	4.0	14.5	6.8	外面：ロクロ調査、外底部目剥糸切り 内面：ロクロ調査
6	E-3	SI-1	SK-2	直筒甕	环	4.0	15.5	8.5	外面：ロクロ調査、底部目剥糸切り 内面：ロクロ調査
7	E-5	SI-1	1解	直筒甕	环	(17.2)	5.9	外面：ロクロ調査、内面：ロクロ調査、高台付	
8	E-4	SI-1	1解	直筒甕	甕	(11.3)	8.4	外面：ロクロ調査 内面：ロクロ調査、高台付	

第24図 SI1竪穴住居跡出土土器 2



第25図 SI1堅穴住居跡出土石製品

もの(D-4・5・6)、回転糸切り無調整のもの(D-7)が混在している。甕は小型のもの(第23図8~10)と大型のものがある。何れもロクロによる調整が行われている。須恵器の环は、底部が回転ヘラ切りのち回転ヘラ削りされるもの(E-1)、回転糸切り無調整もの(E-2・3)、がある。土器以外には、砂岩製の砥石片が2点出土している。

3) 土坑

SK1 土坑 東トレーナーの南部で検出され、西部は検査区の外にのびる。平面形は、検出部の状況から東西に長い楕円形を呈すると推定される。検出部の東西長軸91cm・南北短軸96cmを測る。深さは12cmで断面形は舟底形である。堆積土は2層に分けられ、上部が黒褐色のシルト、下部がにぶい黄褐色の砂層である。

SK2 土坑 西トレーナー北部で検出された。平面形は楕円形を呈し、東西長軸110cm・南北短軸70cmを測る。検出面からの深さは10cmほどで断面形は不整な舟底形である。堆積土は暗褐色のシルト質粘土である。

4) ピット

ピットは4個検出された。いずれも掘り方の平面形は円形で、直径30cm以下の比較的小規模のもので、柱痕跡が検出されたものはない。堆積土は黄褐色土のブロックを含む褐色土ないし暗褐色土である。

6まとめ

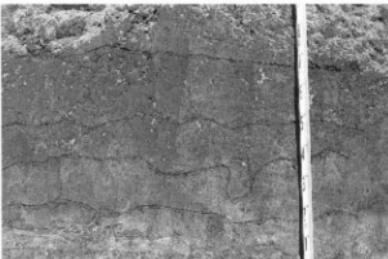
- ① IIIa層上面で、溝跡1条・堅穴住居跡1軒・土坑2基・ピット4個が検出された。
- ② 堅穴住居跡は、出土した土師器や須恵器の特徴が、多賀城跡の土器編年におけるD群土器に類似することから、9世紀後半ころの年代に相当するものと考えられる。
- ③ 溝跡・土坑・ピットについては、遺物が出土していないので、時期を特定できない。
- ④ 中田北遺跡での堅穴住居跡の発見は初めてであり、平安時代に集落が形成されていたことが明らかになった。

<参考文献>

- 仙台市教育委員会(1994)：「仙台市中田南遺跡」仙台市文化財調査報告書第182集
 仙台市教育委員会(1995)：「仙台市中田南遺跡 第2次調査報告書」仙台市文化財調査報告書第206集
 白鳥良一(1980)：「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』宮城県多賀城跡調査研究所
 白鳥良一(1982)：「(2)土器」「多賀城跡 政府跡 本文編」宮城県多賀城跡調査研究所



1 東トレンチ全景（北から）



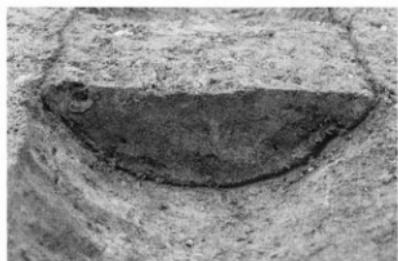
2 基本層序（東トレンチ東壁）



3 東トレンチ SK1（東より）



4 西トレンチ造構検出状況（北から）



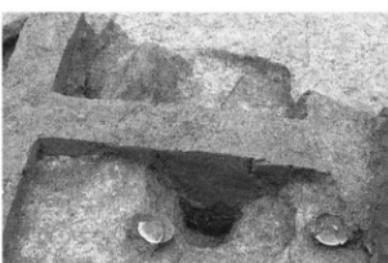
5 西トレンチSD1溝断面（西から）



6 SD1溝跡全景（北から）



7 西トレンチSI1豊穴住居跡断面（南から）



8 SI1豊穴内SK1土坑（西より）

図版10 中田北遺跡の調査状況1



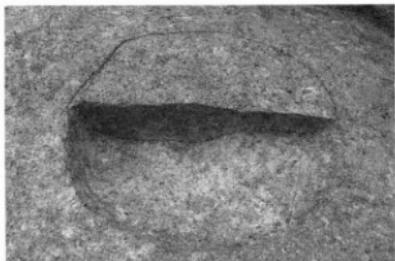
1 西トレンチSI1竪穴住居跡（南から）



2 SI1竪穴内SD1溝断面（西より）



3 SI1竪穴内SK2土坑（北から）



4 SI1竪穴内SK3土坑（北から）



5 SI1竪穴住居跡カマド（西から）



6 SI1竪穴住居跡窓跡完掘状況（南から）

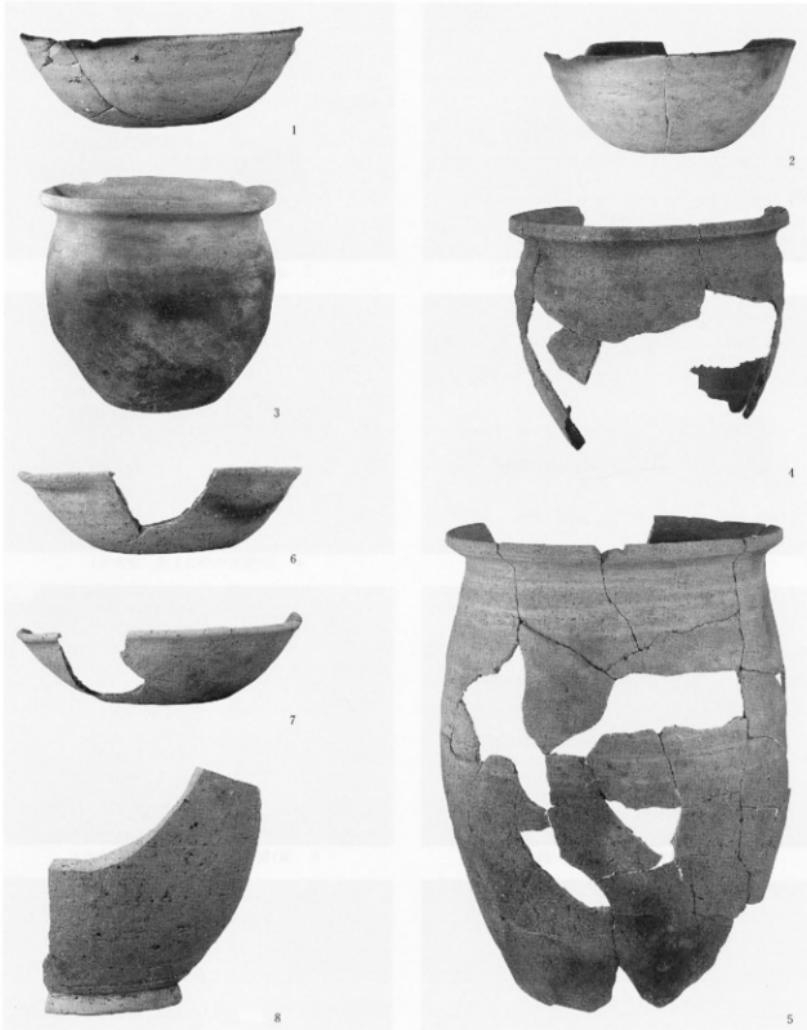


7 西トレンチSK1土坑（南から）



8 西トレンチ完掘状況（北から）

図版11 中田北遺跡の調査状況2



1 土師器 环 D-2 (SI1床 第23図1)
 2 土師器 环 D-3 (SI1床 第23図3)
 3 土師器 壺 D-1 (SI1カマド 第23図1)
 4 土師器 壺 D-8 (SI1 第23図4)

5 土師器 壺 D-10 (SI1床 第24図3)
 6 亂忠器 环 E-1 (SI1 第24図4)
 7 亂忠器 环 E-2 (SI1 カマド 第24図5)
 8 亂忠器 壺 E-4 (SI1 1層 第24図8)

图版12 中田北遺跡出土遺物

IV 南目城跡発掘調査報告書

1. 調査要項

遺跡名	南目城跡（宮城県遺跡番号01226）
調査地点	仙台市宮城野区銀杏町508-2
調査期間	平成17年4月25日
調査対象面積	88m ²
調査面積	21m ²
調査原因	個人住宅建築
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育生涯学習部文化財課調査係
担当職員	主査 工藤哲司 文化財教諭 赤岡光騎

2. 調査に至る経過と調査方法

本調査は、平成17年3月11日付で、地権者熊谷浩幸氏より、基礎掘削GL-1500mmの鉄筋コンクリート造2階建で個人住宅建築に伴う発掘届が提出されたため行われた。

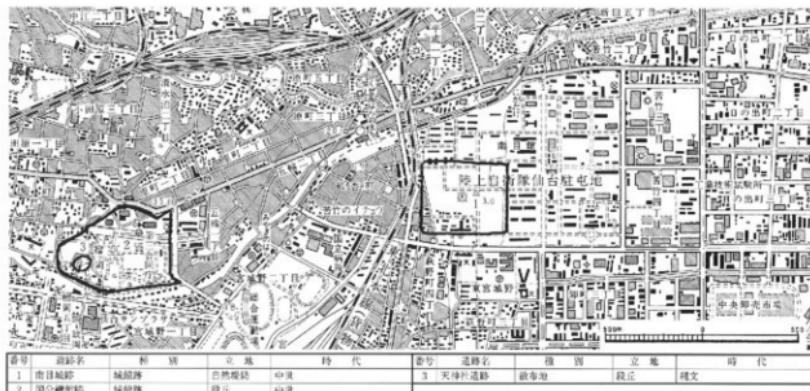
調査は、建物予定部分に東西5m×南北4mのトレーナーを設定し、盛土（30cm）および表土Ⅰ層（30cm）を重機で振り下げ、Ⅱ層上面で人力による遺構確認作業を行った。調査区東側のⅡ層で、調査区中央から調査区東壁外に延びる溝跡が検出された。溝の幅を確認するため調査区を北壁に沿って東側に約1m拡張した。

3. 遺跡の位置と環境

南目城跡は、仙台市北東部、JR陸前原ノ町駅の南東約0.5kmの地点に、東西約500m×南北約450mの方形で、名取川水系広瀬川流域に形成された自然堤防上の微高地に位置している。遺跡の西側は下町段丘と海岸平野最奥部との境で、地質学上の長町-利府構造線上にあたる。標高は約13mである。

鎌倉時代には長町-利府構造線に沿う形で、奥大道と呼ばれる関東方面と陸奥の国を結ぶ交通路があったと考えられている。中世の仙台市付近には、この道に沿って、南から、大野田、郡山、南小泉といった集落跡が展開していた。南目城跡は、南小泉から陸奥国分寺を経て岩切へ抜ける道の途上にある。周囲には城館跡が多く、南目城跡の南西約4kmの地点には茂ヶ崎城、南へ約4kmの周辺には北日城、沖野城、今泉城、北東へ約2kmの地点には小鶴城などがある。

17世紀後半の延宝年間に作成された『仙台領古城書上』によると、南目城（南目館）の規模は、東西100間南北70間といわれ、伊達氏以前にこの地域を支配していた領主国分氏が千代本城（後の仙台城）を本拠としていた頃の支城の一つで、国分氏の一族である喜多日紀伊とその子孫が居住していたと伝えられている。南目城が歴史的舞台に登場するのは南北朝期で、観応の擾乱に関連して、足利直義方にいた奥州探題吉良貞家と、尊氏派の奥州探題畠山國氏との争いによって、吉良氏側についた国分氏の守る南目城も戦いの場となり、正平7年（1352）に一度落城したという記録が残っている。のち再び国分氏が城を奪回し、以後約250年間、慶長元年（1596）、十八代盛重が政宗に討たれるまで、当時の宮城郡を領有する国分氏の居城となつた。「宮城郡誌」によると、十一代盛行、十六代盛顕、十八代盛重がそれぞれ一時本城に住んだとされている。国分氏の没落とともに、この館も廃墟となつたものと思われる。



第26図 遺跡の位置と周辺の遺跡

遺跡の周辺は、昭和17年（1942）陸軍造兵廠の建設に伴う造成が行われるまでは水田で、微高地にある館跡が水田の中に浮かんだように見えていたという。第二次世界大戦後は米軍の駐留地となっていた。昭和28年には、館にかかる土壠と思われるところから、後に板碑であることが確認された大石が出土している。その後、陸上自衛隊の駐屯地となり、館跡の中心部にあたる板碑周辺は自衛隊の手により公園化されている。周辺では過去12回にわたって建物建て替え工事等に関わる確認調査が実施されたが、遺構・遺物等は発見されていない。本調査区は遺跡の南西、自衛隊敷地外の住宅地にある。



第27図 調査地点の位置

4. 基本層序

約30cmの山砂盛土層の下に3層を確認した。I層は層厚約30cmの暗褐色のシルト層で、砂及び小礫を多量に含んでいる。その下のII層は層厚約120cmの黄褐色のシルト質砂層で、上部は褐色を呈している。造構は全てこのII層上面で検出した。III層は黄褐色の砂礫層で、礫は径1~10cm程度、一部に砂層及び風化礫層を含んでいる。この地域の基盤となる自然堆積層と考えられる。

5. 発見遺構と出土遺物

溝跡1条、土坑1基、ピット1個を検出した。

1) 溝跡

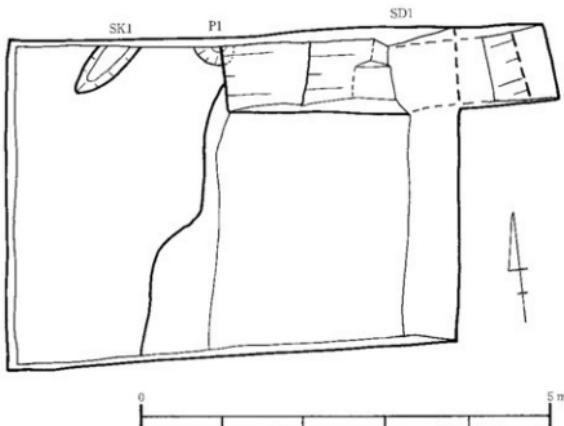
SD1溝跡 調査区東寄りで、調査区を南北に縱断して検出された。幅は上端で約3mである。検出面からの深さ約200cmまで掘り下げたが、底面には至らなかった。断面形は逆台形ないしV字状を呈していると考えられる。堆積土は8層に分けられ、上部の2、3層は人為的な堆積土である。遺物は出土していない。

2) 土坑

SK1土坑 調査区北壁の西側で検出された。検出部分の平面形は、東西長軸約40cm、南北短軸約30cmの橢円形であり、調査区外を北側にのびている。断面形は不整な舟底形で、検出面からの深さは約30cmである。堆積土は2層に分けられ、人為的な堆積土と考えられる。遺物は出土していない。



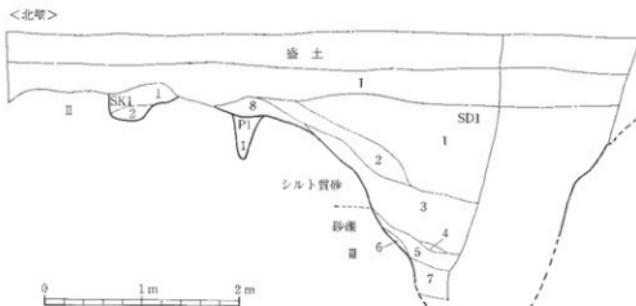
第28図 調査区配置図



第29図 遺構実測図

3) ピット

調査区北壁、中央付近で1個確認された。直径約30cmの円形であり、深さは約50cmである。柱痕跡は検出されていない。堆積土は1層で褐色の砂を霜降り状に含んでいる。植物の根との関連が考えられる。遺物は出土していない。



第30図 遺構断面図

基本層

	土色	土質	備考
Ⅰ層	10YR5/3 褐褐色	シルト	砂を含び小粒を多量に含む。
Ⅱ層	10YR5/5 黄褐色	シルト質砂	上部は褐色を呈す。
Ⅲ層	10YR5/6 貝褐色	砂疊 (地山)	一部砂礫及び風化鱗片を含む

SD1

土期	土色	土質	備考
1	10YR5/3 暗褐色	粘質シルト	厚1~10cmの層を多量に含む。しまり弱い。
2	10YR6/6 黄色	シルト質粘土	綿および所々貝褐色土のブロックを多量に含む。
3	10YR5/4 暗褐色	シルト質粘土	綿部に貝褐色土のブロックを構造に含む。
4	10YR5/2 暗褐色	粘土	綿は含まない。
5	10YR4/4 暗褐色	シルト質粘土	沙汰層を多量に含む。綿部に貝褐色土を多量に含む。
6	10YR5/3 暗褐色	シルト質粘土	貝褐色土を霜降り状に含む。
7	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質砂	綿を多量に含む。Ⅲ層の巣糞土。
8	10YR5/3 貝褐色	シルト	小粒をわずかに含む。

SK1

土期	土色	土質	備考
1	10YR5/2 暗褐色	シルト	...
2	10YR5/3 黄褐色	粘質シルト	貝褐色土層及び貝褐色土のブロックを含む。

P1

土期	土色	土質	備考
1	10YR5/3 暗褐色	粘質シルト	褐色の砂を霜降り状に含む。頭?

6.まとめ

- ① 本調査区は、南目城跡の南西部に位置する。
- ② 現地表下約80cmの基本層Ⅱ層上面から溝跡1条、土坑1基、ピット1個が発見された。
- ③ 溝跡は方向と規模から南目城跡に関係する堀跡の可能性が考えられる。遺物が発見されていないため、年代を特定することはできない。今後、追跡調査を要する。

<参考文献>

仙台市 「9 分裂と競合の時代」『仙台の歴史』

仙台市 「第5章 留守氏と国分氏」『仙台市史 通史編2 古代中世』

波部弘美ほか (2003) 「国分寺東遺跡II 発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第266集

紫桃正彦 「みやぎの戦国時代 合戦と群雄」宝文堂



1 SD1溝跡検出状況（北西より）



2 調査区全景（東より）



3 SD1溝跡土層断面（南西より）

図版13 調査区全景



4 SK1土坑完掘状況（南より）



5 P1完掘状況（南より）



6 調査区拡張部
SD1溝跡土層断面（南より）

図版14 溝跡・その他の遺構

V 大野田古墳群第10次発掘調査報告書

1. 調査要項

遺跡名	大野田古墳群（宮城県遺跡番号01361）
調査地点	仙台市太白区大野田字宮13番、14番の各一部
調査期間	平成17年4月27日～4月28日
調査対象面積	198.6m ²
調査面積	21m ²
調査原因	個人住宅建築
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担当職員	主査 工藤哲司 文化財教諭 赤岡光騎

2. 調査に至る経過と調査方法

本調査は、平成17年4月12日付けで、地権者小林秀夫氏より、深さ3mの杭打ちを伴う木造2階建て個人住宅建築に伴う発掘届が提出されたため行われた。

調査は、建物予定部分に東西8m×南北4mのトレンチを設定し、重機により盛土約75cmと旧水田耕作土であるI層を約10cmを掘り下げた。II、III層がほとんど残存しなかったため、東西7m×南北3mの範囲で標高約10.7mにあたるIV層上面で人力による遺構検出作業を行った。

IV層の調査後、さらに調査区の北東部を深掘りして下層遺構の有無を確認したところ、IV層で小溝の断面が検出されたので、V層上面の検出作業を行い、発見遺構を調査した。

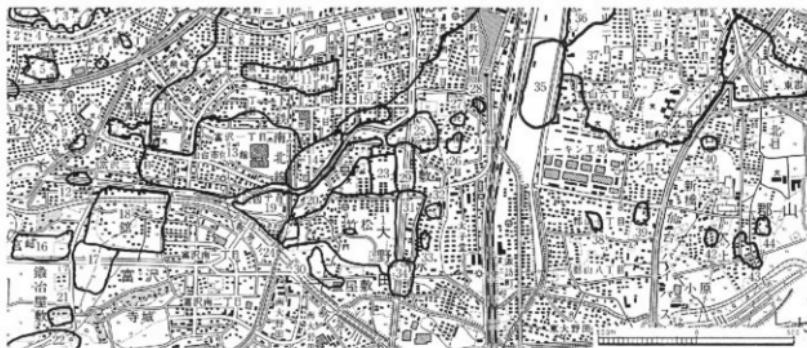
3. 遺跡の位置と環境

大野田古墳群は、仙台市の南東部、太白区大野田に所在する遺跡で、範囲は東西600m、南北430mに及んでいる。遺跡は、北西側を青葉山丘陵に、北東側を広瀬川に、南側を名取川に囲まれた「郡山低地」と呼ばれる沖積地に立地している。付近一帯は名取川の支流の一つである笊川等の小河川が形成した自然堤防や旧河道・後背湿地などの沖積地特有の微地形が複雑に発達している。大野田古墳群は標高10m前後の後背湿地ないし自然堤防上に広がっている。近年、遺跡のほぼ全域で土地区画整理が実施されている。

大野田古墳群を含む郡山低地は、遺跡が数多く分布する地域である。宮沢遺跡では約二万年前の後期旧石器時代の遺構が発見されている。その後縄文時代から中世・近世に至るまで多くの遺跡が形成されている。特に笊川が名取川と合流する地点にかけての約2.5kmの河川北岸には、宮沢遺跡、山口遺跡、六反田遺跡、ドノ内遺跡、下ノ内浦遺跡、伊古田遺跡、土ノ壇遺跡、皿屋敷遺跡などの遺跡が連続して分布している。

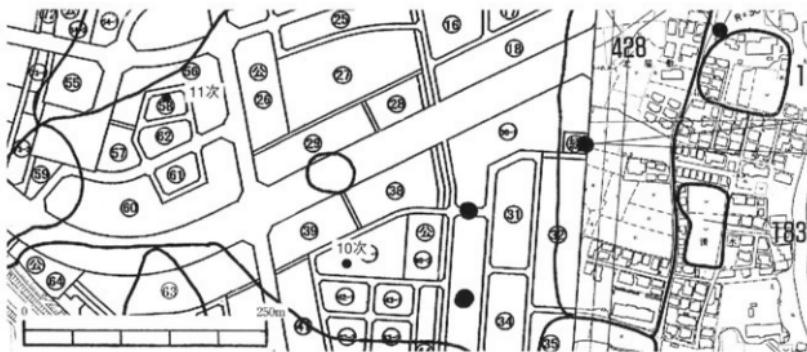
過去、大野田古墳群では多くの調査が連続して行われており、30基を超える古墳が確認・調査されている。そのほとんどは遺跡の東側に立地し、西および南側の検出例は少ない。古墳以外の遺構としては、古墳時代前期の堅穴住居跡、古墳時代の木棺墓、古墳時代中期以降から奈良時代以前の畑耕作にかかる小溝状遺構群、平安時代の小溝状遺構群、中世の道路跡・掘立柱建物跡・堀跡・溝跡など、古墳時代以降の各時代の遺構が発見されている。

今回の調査地点は、遺跡の中心よりやや南に位置している。周辺地域の宅地造成に際する道路建設に伴う発掘調査によって、調査区南側に隣接する道路部分の調査が行われ、小溝状遺構が検出されている。



No.	道路名	種別	立地	時代	No.	道路名	種別	立地	時代
1	大野ノ古墳群	古墳群	丘陵地	古墳	23	發前道路	集落路	自然複縫	魂文, 古代
2	三神山古墳群	古墳群	丘陵	古墳	24	伊古田道路	集落路	自然複縫	魂文, 古墳, 古代
3	三神山古墳群	古墳群	丘陵	魂文, 平安	25	元放道路	集落路, 河原路	自然複縫	魂文, 古墳, 平成, 中世, 近世
4	御浜道路	自然複縫	丘陵低窪	古墳	26	新田道路	穀布地	自然複縫	古代
5	原道跡	自然複縫	丘陵低窪	古墳	27	興海道路	穀布地	自然複縫	古代
6	原東道路	自然複縫	丘陵地	古墳, 古代	28	新田六丁目道路	穀布地	自然複縫	古代
7	裏川道路	自然複縫	丘陵地	平安	29	大野田道路	稻荷地, 菓薺地	自然複縫	魂文, 斎生, 古墳, 古代
8	富沢道路	今今動	水田跡	丘陵地, 集落, 古墳, 古代~近世	30	伊古田東道路	設市地	自然複縫	古墳, 古代
9	宮沢上・下古墳群	古墳群	丘陵地	魂文, 古代	31	五ノ塚道路	鬼浦澤, 稲荷地	自然複縫	魂文, 斎生, 古墳, 中世
10	宮沢東水道跡	自然複縫	丘陵地	自然複縫	32	北岸飯造跡	穀布地	自然複縫	古代
11	東崎御舟跡	車馬跡, 水田跡, 草原	丘陵地	魂文, 鎌生, 古墳, 古代, 近世	33	有明傳木造跡	穀布地	自然複縫	古墳
12	駒ノ内道路	自然複縫	丘陵	古墳, 古代	34	原町御舟跡	鬼浦澤, 五ヶ野跡	自然複縫	古代, 中世
13	山口古跡	集落跡, 水田跡	地形的, 地理	魂文, 鎌生, 古墳, 古代, 中世	35	吉野沢東道路	鬼浦澤	自然複縫	魂文, 駒ノ内, 奈良, 古代
14	下ノ内古跡	鬼浦澤	丘陵地	魂文, 駒ノ内, 古墳, 古代, 中世	36	西谷御舟跡	鬼浦澤, 佐倉地	自然複縫	魂文, 駒ノ内, 志摩, 古代, 中世
15	奈東御舟跡	自然複縫	丘陵地	自然複縫	37	御山道路	吉浦澤, 遠御跡	自然複縫	魂文, 駒ノ内, 古墳, 古代
16	鷹蛇原跡A道跡	丘陵地	自然複縫	魂文, 古代	38	羽場道路	穀布地	自然複縫	古墳, 古代
17	鷹蛇原跡B道跡	丘陵地	自然複縫	魂文, 古代	39	義ノ坂道路	穀布地	自然複縫	古墳, 古代
18	新沢道路	丘陵地	中世	40	余糸道路	穀布地	自然複縫	古墳, 古代	
19	下ノ内古跡	鬼浦澤	丘陵地	魂文, 駒ノ内, 古墳, 古代, 中世	41	北ノ塚跡	穀浦跡, 鬼浦澤, 水田跡	自然複縫	魂文, 駒ノ内, 古代, 中世, 近世
20	六反ノ内古跡	自然複縫	丘陵地	魂文, 駒ノ内, 古墳, 古代, 中世	42	久ノ上・I道跡	水田跡	後背地	古墳, 古代, 中世
21	鷹蛇原跡B道跡	自然複縫	魂文, 古代	43	久ノ上・II道跡	穀布地	自然複縫	古墳, 古代	
22	六本林道路	自然複縫	丘陵地	古墳	44	久ノ上・III道跡	穀布地	自然複縫	古墳, 古代

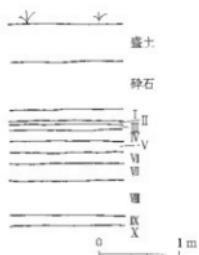
第31図 道跡の位置と周辺の遺跡



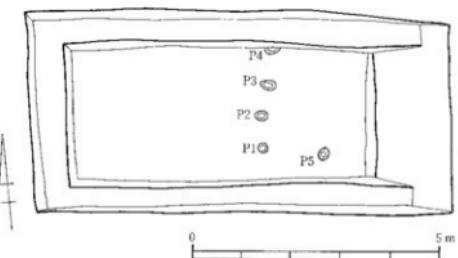
第32図 調査地点の位置

4. 基本層序

約35cmの山砂の下に約45cmの碎石層があり、その下に近年の水田耕作土である灰オリーブ色の粘土層（I層）がある。II層は層厚約10cmである。III層は層厚約3cmの黒褐色の粘土層である。IV層は層厚約5cmのびい黄褐色の粘土層である。V層は層厚約10cmのびい黄褐色の粘土層で、マンガン粒を含んでいる。VI層は層厚約10~15cmの暗褐色の粘土層である。VII層は層厚約15cmの暗褐色の粘土層で、上面で小溝状遺構・ピットが検出されている。VIII層は層厚約30cmの褐色の粘土層で、しまりはない。IX層は層厚約10cmの褐色のシルト質粘土層である。X層は層厚15cm以上のびい黄褐色の粘土層で砂を含んでいる。



第34図 基本層断面図



第35図 IV層検出遺構

層	土 色	土 質	備 考
I	2.5Y5/2 灰オリーブ	粘土	田水耕作土
II	10YR4/2 黒褐色	砂土	
III	10YR4/3 びい黄褐色	粘土	
IV	10YR4/3 びい黄褐色	粘土	灰白色火山灰をまばらに含む
V	10YR4/4 灰白色	粘土	マンガン粒を含む
VI	10YR4/3 暗褐色	粘土	
VII	10YR4/4 暗褐色	粘土	
VIII	10YR4/6 暗褐色	粘土	しまりなし
IX	10YR4/4 褐色	シルト質粘土	

層	土 色	土 質	備 考
P1	10YR4/3 びい黄褐色	シルト質粘土	褐色十粒を斑入り状に含む
P2	10YR4/3 びい黄褐色	シルト質粘土	褐色十粒を斑入り状に含む
P3	10YR4/3 びい黄褐色	シルト質粘土	褐色十粒を斑入り状に含む
P4	10YR4/3 びい黄褐色	シルト質粘土	褐色十粒を斑入り状に含む
P5	10YR4/3 びい黄褐色	シルト質粘土	褐色十粒を斑入り状に含む

5. 発見遺構と出土遺物

1) IV層上面検出遺構

ピット

計5個を検出した。平面形は円形を基調とし、大きさは直径20~30cm、検出面からの深さは4~8cmほどである。断面形は皿状で、壁は緩やかに立ち上がる。柱痕跡を検出できたものはない。P1~P4の4個はおよそ50cmの間隔で南北方向に列状に検出された。今回の調査においては組み合わせ等により建物などを復元するには至らなかった。遺物は出土していない。

2) VII層上面検出遺構

溝跡（小溝状遺構）8条、ピット4個を検出した。

①小溝状遺構群

VII層上面で検出された小溝状遺構群は、調査区壁面での断面観察から、そのほとんどがVII層からの掘り込みであることが確認できた。方向と切りあいから、南北方向のものを1群、東西方向のものを2群とした。1群が2群を切っている。

小溝状遺構1群 6条

調査区を南北方向に横切る形で、およそ105cm間隔で検出された。検出面での幅は約30cmである。堆積土はいずれも褐色のシルト質粘土で、暗褐色土のブロックを含む。溝下部10cm前後に黄褐色土のブロックが含まれる。SD1～3は南壁から中央部へ約105cmまで伸びていることを確認した。

小溝状遺構2群 2条

調査区を東西方向に横切る形で、およそ105cm間隔で検出された。幅は約30cmである。堆積土はいずれも褐色のシルト質粘土で、暗褐色土のブロックを含む。1群よりも黄褐色土が含まれる割合が多い。1群に切られていることから、1群より古いことがわかる。

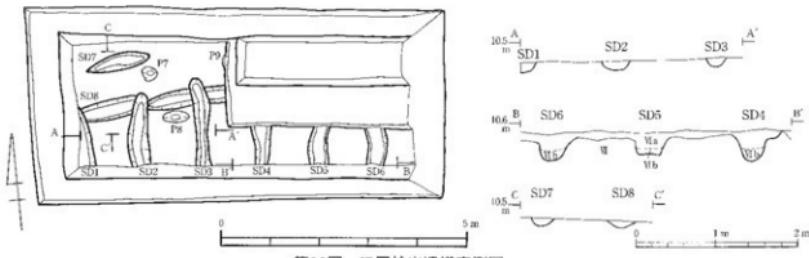
1群及び2群からの出土遺物はない。

②ピット

計4個を検出した。平面形は円形ないし稍円形を基調とし、大きさは直径20～30cm、検出面からの深さは14～60cmほどである。柱痕跡を検出できたものはない。遺物は出土していない。

6.まとめ

- ① 本調査区は、大野田古墳群の南西部に位置する。
- ② 基本層IV層上面からピット5個、VII層上面から小溝状遺構8条、ピット4個が発見された。
- ③ 小溝状遺構については、周辺での調査成果から、VII層の小溝状遺構の年代は古墳時代中期以降、奈良時代以前の埋蔵に関連するものであると推定される。



第36図 VII層検出遺構実測図

P 6

上部%	土 色	土 質	備 考
1	10YR3/3 暗褐色	粘土	-

P 7

上部%	上 色	上 質	備 考
1	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	腐殖化物をわずかに含む

SD 1～6（南北方向）

上部%	土 色	土 質	備 考
1	10YR4/4 黄褐色	シルト質粘土	暗褐色七、黄褐色土のブロックを含む

SD 7～8（東西方向）

上部%	土 色	土 質	備 考
1	10YR4/4 黄褐色	シルト質粘土	暗褐色七、黄褐色土のブロックを含む

P 8

上部%	土 色	土 質	備 考
1	10YR3/4 暗褐色	粘土	炭化物を多量に含む

P 9

上部%	上 色	上 質	備 考
1	10YR4/3 に近い黄褐色	粘土	粘性強くしまりなし

貯蔵及び小倉上部には黄褐色土のブロックは見られないが、溝下部10cm前後に黄褐色土のブロックが含まれる。

北側よりも黄褐色土が含まれる割合が多い。

＜参考文献＞

渡邊誠ほか（2000）『大野田古墳群・王ノ塙遺跡・六反田遺跡』仙台市文化財調査報告書第243集

工藤哲司ほか（2002）「XIII 大野田古墳群 第6次発掘調査報告書」「国分寺東遺跡他」仙台市文化財調査報告書第266集

佐藤淳（2005）『大野田古墳群 第8次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第290集

佐藤淳（2005）『大野田古墳群 第9次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第291集



1 IV層ピット完掘状況（東より）



2 VII層遺構検出状況（東より）

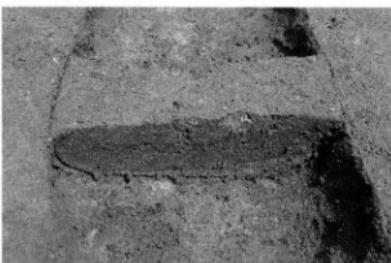


3 南壁東部土層断面

図版15 遺構検出状況



4 SD1 断面（南より）



5 SD2 断面（南より）



6 SD3 断面（南より）



7 SD4 断面（北より）



8 SD5 断面（北より）



9 SD6 断面（北より）

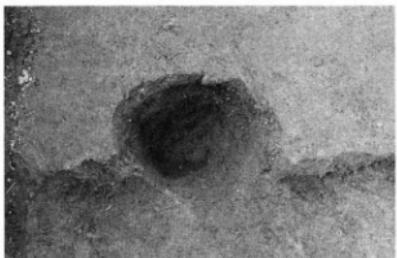


10 SD7 断面（西より）

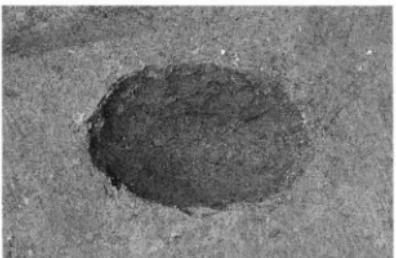


11 SD8 断面（西より）

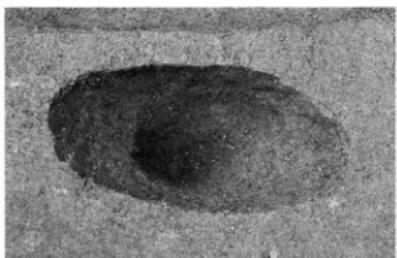
図版16 小溝状造構



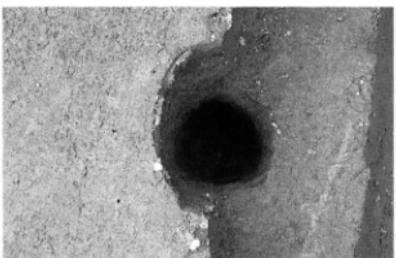
12 P6 完掘状況（南より）



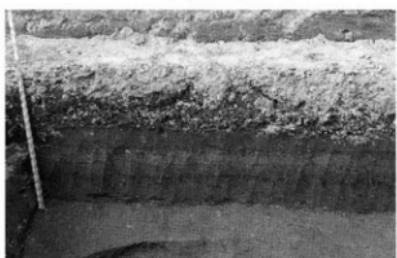
13 P7 完掘状況（南より）



14 P8 完掘状況（南より）



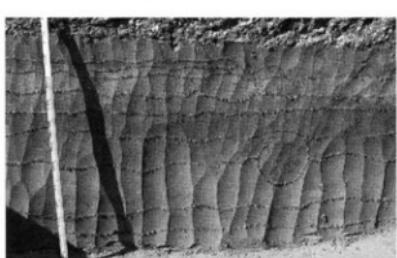
15 P9 完掘状況（南より）



16 北壁断面 西半



18 VII層遺構完掘状況（東より）



17 東壁断面 東半

図版17 遺構調査・完掘状況

VI 大野田古墳群第11次発掘調査報告書

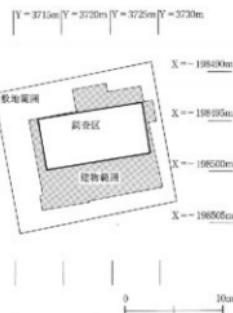
1. 調査要項

遺跡名	大野田古墳群（宮城県遺跡番号01361）
調査地点	仙台市太白区大野田字千刈田8-4、8-5、8-6
調査期間	平成17年6月1日～6月23日
調査対象面積	110.82m ²
調査面積	47.5m ²
調査原因	個人住宅建築
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担当職員	文化財教諭 門馬有希 今野秀治 主任 荒井格

2. 調査に至る経過と調査方法

本調査は、平成17年2月24日付けで、地権者加賀美泰一郎氏より、深さ3mの杭打ちを伴う木造2階建て個人住宅建築の発掘届が提出されたため行われた。

調査は、建物予定部分に10m×5mの調査区を設定し、重機によりI層～IV層の除去を行い、標高約11.2mにあたるV層上面で人力による遺構検出作業と遺構の掘り込みを行った。



第37図 調査区配置図

3. 遺跡の位置と環境

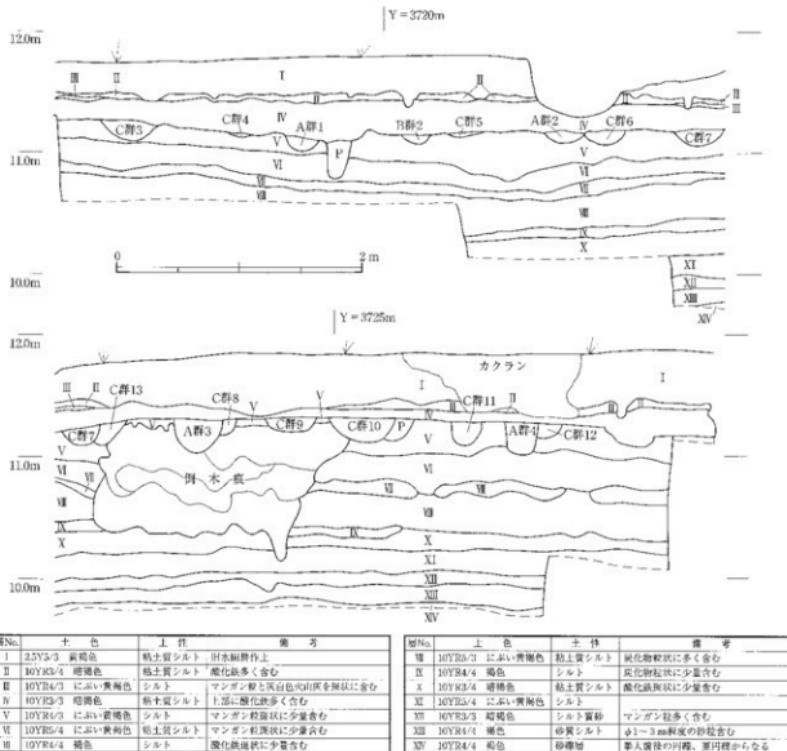
大野田古墳群の地形・地質及び歴史的環境については、第10次発掘調査報告書を参照されたい。今回の調査地点は、仙台市営地下鉄宮沢駅の東約150mの地点にあたり、標高は約11.9mである。

4. 基本層序

基本層は14層を確認した。

- I 層：黄褐色粘土質シルト。旧水田耕作土で層厚は約30cmである。
- II 層：暗褐色粘土質シルト。酸化鉄を多く含み、層厚は約5cmである。
- III 層：にぶい黄褐色シルト。マンガン粒と灰白色火山灰を斑状に含み、層厚は約5cmである。
- IV 層：暗褐色粘土質シルト。上部に酸化鉄を多く含み、層厚は約20cmである。
- V 層：にぶい黄褐色シルト。マンガン粒を斑状に少量含み、層厚は約20cmである。遺構検出面である。
- VI 層：にぶい黄褐色粘土質シルト。マンガン粒を斑状に少量含み、層厚は約15～20cmである。
- VII 層：褐色シルト。酸化鉄を斑状に少量含み、層厚は約10cmである。
- VIII 層：にぶい黄褐色粘土質シルト。炭化物を粒状に多く含み、層厚は約30cmである。
- IX 層：褐色シルト。炭化物を粒状に少量含み、層厚は約10cmである。
- X 層：暗褐色粘土質シルト。酸化鉄を斑状に少量含み、層厚は約20cmである。

- X I層：にぶい黄褐色シルト。層厚は約20cmである。
- X II層：暗褐色シルト質砂。マンガン粒を多く含み、層厚は約10cmである。
- X III層：褐色砂質シルト。 ϕ 1~3mm程度の砂粒を含み、層厚は約10~15cmである。
- X IV層：褐色砂礫層。拳大前後の円礫、亜円礫からなり、層厚は約5cm以上である。



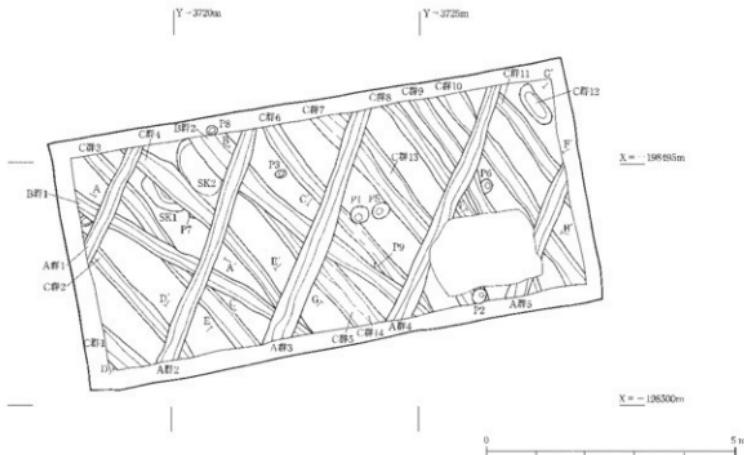
第38図 北壁土層断面図

5. 発見遺構と出土遺物

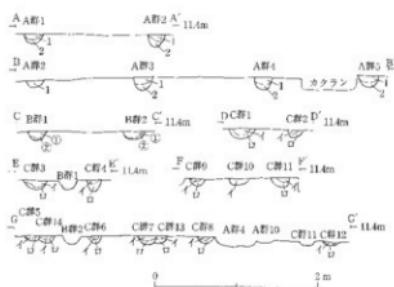
V層上面から、小溝状遺構群3群、土坑2基、ビット9個が検出されている。

1) 小溝状遺構群

小溝状遺構群A群 調査区全域にわたって北東から南西に伸びる小溝跡である。心々距離およそ2.1m前後で平行して5条検出された。A群はB群、C群を切っており小溝状遺構群中で最も新しい。小溝跡の規模は、検出長2.5~5.2m、上端幅32~40cm、下端幅28~36cm、深さ8~22cmで、中軸方向はN~21°~E前後を示す。堆積土は2層に分けられ、上層が褐色シルト質粘土を粒状に含む灰黃褐色シルト質粘土、下層が褐色シルト質粘土をブロック状に含む灰黃褐色シルト質粘土である。堆積土から出土した遺物は時期不明の土師器片2点である。



第39図 違構配置図



小溝状造構群A群			
No.	上色	土性	備考
1	30YR4/2 灰黃褐色	シルト質粘土	褐色シルト質粘土を粒状に含む
2	30YR4/2 灰黃褐色	シルト質粘土	褐色シルト質粘土をブロック状に含む

小溝状造構群B群			
No.	上色	土性	備考
①	10YR2/2 黑褐色	粘土質シルト	灰黃褐色粘土質シルトを粒状に含む
②	10YR2/2 黑褐色	粘土質シルト	灰黃褐色粘土質シルトをブロック状に含む

小溝状造構群C群			
No.	上色	土性	備考
③	10YR4/2 灰黃褐色	粘土質シルト	褐色シルト質粘土を粒状に含む
④	10YR4/4 黑褐色	シルト質粘土	灰黃褐色シルト質粘土をブロック状に含む

第40図 小溝状造構群断面図

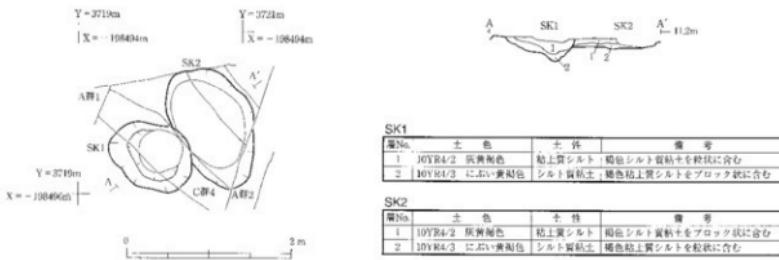
小溝状造構群B群 調査区全域にわたって西北西から東南東に伸びる小溝跡である。心々距離およそ1.9m前後で平行して2条検出された。B群はA群に切られ、C群を切っている。小溝跡の規模は、検出長5.4~5.7m、上端幅36~42cm、下端幅30cm前後、深さ11~15cmで、中軸方向はN-59°-W前後を示す。堆積土は2層に分けられ、上層が灰黃褐色粘土質シルトを粒状に含む黒褐色粘土質シルト、下層が灰黃褐色粘土質シルトをブロック状に含む黒褐色粘土質シルトである。堆積土から出土した遺物は時期不明の土師器片1点である。

小溝状造構群C群 調査区全域にわたって北西から南東に傾く小溝跡である。心々距離およそ1.1m前後で平行して14条検出された。A群・B群に切られている。またC群5とC群14、C群7とC群13、C群8とC群9については、重複もしくは近接した位置にあり、小時期変遷の可能性がある。小溝跡の規模は、検出長0.9~5.1m、上端幅32~61cm、下端幅23~55cm、深さ4~18cmで、中軸方向はN-34°-W前後を示す。堆積土は2層に分けられ、上層が褐色シルト質粘土を粒状に含む灰黃褐色粘土質シルト、下層が灰黃褐色シルト質粘土をブロック状に含む褐色シルト質粘土である。堆積土から出土した遺物は時期不明の土師器片3点である。

2) 土坑

SK1 土坑 調査区の北西部に位置する。SK2 土坑を切り、小溝状遺構群C群に切られる。平面形は不整梢円形を呈し、規模は、長径105cm、短径85cm、深さ32cmである。堆積土は2層に分けられ、上層が褐色シルト質粘土を粒状に含む灰黄褐色粘土質シルト、下層が褐色粘土質シルトをブロック状に含むにぶい黄褐色シルト質粘土である。遺物は出土していない。

SK2 土坑 調査区の北西部に位置する。SK1 土坑及び小溝状遺構群A群・B群・C群に切られる。平面形は不整梢円形を呈し、規模は、長径155cm、短径88cm、深さ11cmである。堆積土は2層に分けられ、上層が褐色シルト質粘土をブロック状に含む灰黄褐色粘土質シルト、下層が褐色粘土質シルトを粒状に含むにぶい黄褐色シルト質粘土である。遺物は出土していない。



第41図 SI1・SK2土坑平面、断面図

3) ピット

ピットは9個検出した。平面形は円形ないし梢円形を基調とする。規模は、長径20~50cm、短径16~41cm、深さ13~34cmである。堆積土は、灰黄褐色もしくは黒褐色のシルト系の土を主体とする単層で、柱痕跡は確認されなかった。遺物は出土していない。

6.まとめ

- ① 本調査区は、大野田古墳群の北西部に位置する。
- ② V層上面では、小溝状遺構群3群、土坑2基、ピット9個が検出された。
- ③ 土坑2基は、小溝状遺構群3群より古いものである。
- ④ 小溝状遺構群の新旧は、重複関係により、A群が最も新しく、次いでB群、C群となる。若干の土器片が出土しているものの時期決定資料は得られていないが、これまでの周辺での調査結果から古墳時代中期以降、奈良時代以前の時期と考えられる。
- ⑤ 遺物は、小溝状遺構群から時期不明の土器片が数点出土しているが、図示できるような資料はなかった。

<参考・引用文献>

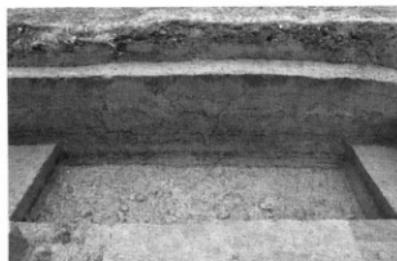
仙台市教育委員会（2000）『大野田古墳群・王ノ墳遺跡・六反田遺跡』仙台市文化財調査報告書第243集

仙台市教育委員会（2005）『山田本町遺跡他』仙台市文化財調査報告書第287集

仙台市教育委員会（2005）『大野田古墳群 第8次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第290集



1 完掘全景（東より）



2 北壁断面（南より）



4 SK1、SK2土坑（南東より）



4 小溝B群2断面（南東より）



5 小溝C群7、C群13断面（南東より）

図版18 第11次調査区の状況

VII 元袋遺跡第5次発掘調査報告書

1. 調査要項

遺跡名 元袋遺跡（宮城県遺跡番号01179）

調査地点 仙台市太白区大野田字元袋19

調査期間 平成17年4月18日～4月28日

調査対象面積 131.71m²

調査面積 32m²

調査原因 住宅造成

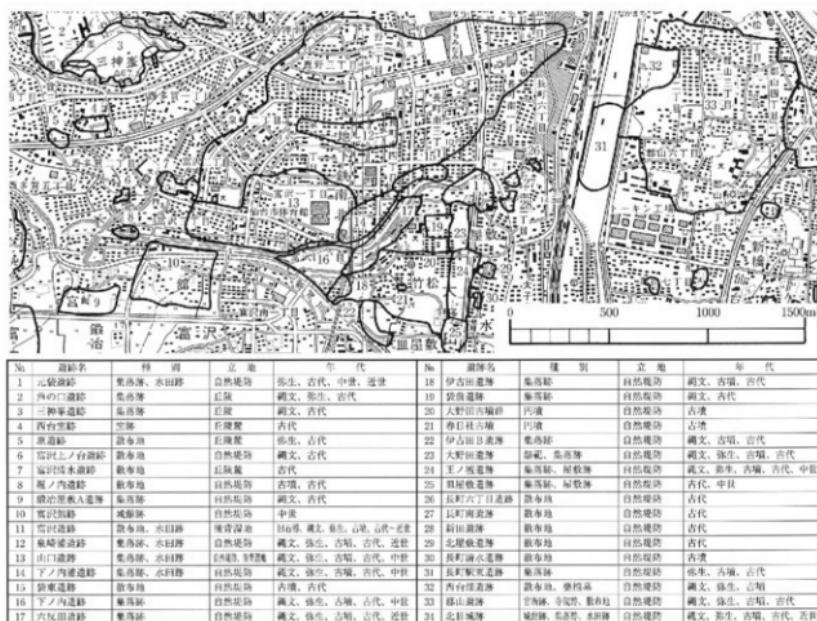
調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係

担当職員 文化財教諭 浅野克樹 三塚博之

2. 調査に至る経過と調査方法

本調査は、平成17年4月4日付けで岩佐和則氏より仙台市太白区大野田字元袋19における木造2階建て店舗付個別住宅の建設に伴う発掘届が提出されたことに基づく。仙台市教育委員会では申請者と協議のうえ発掘調査を行う



第42図 遺跡の位置と周辺の遺跡

こととした。当該地は、過去の近隣の調査結果より、奈良・平安・中世の遺構や江戸時代初め頃の屋敷跡に伴う縄文の延長部が検出される可能性があることから、調査は建設予定地に東西4m×南北8m(32m²)の調査区を設定した。重機により盛土・表土部分を掘り下げ、現地表下約1mで遺構を検出し、調査を行った。



第43図 調査地点の位置

3. 遺跡の位置と環境

元袋遺跡はJR東北本線長町駅より東西へ約1km、地下鉄長町駅から南へ約600mの地点、仙台市太白区大野田字元袋、袋東地内に所在する。周辺は宮城野海岸平野に含まれ、河川に沿った自然堤防とその後背湿地からなっている。この自然堤防を形成した河川の一つが西の青葉山丘陵に源を持つ名取川の支流の笊川である。大野田地区は水く水田または畑として利用されてきたが、昭和30年代後半から市街地化が進み、周辺一帯の景観は変貌してきている。当遺跡は笊川が南に大きく流れを変える地点の南岸の自然堤防上に位置している。

元袋遺跡が所在する大野田・富沢周辺は仙台市内でも数多くの遺跡が分布する地域である。旧石器時代の遺跡としては笊川の北岸に位置する富沢遺跡が知られており、焚き火跡と考えられる炭化物の集中箇所、石器、樹木・種子をはじめとする植物遺体やシカの糞などが発見されている。縄文時代中期以降になると笊川流域の自然堤防上には数多くの遺跡が見られるようになる。笊川南岸では縄文時代中期、後期の堅穴住居跡が、また北岸では後期の配石遺構が発見されている。弥生時代以降、笊川北岸の後背湿地では水田が經營されるようになる。富沢遺跡では弥生時代中期から後期にかけての水田跡が重層的に発見されている。また下ノ内浦遺跡では石庭丁、太型蛤刃石斧を副葬した弥生時代の土塚墓が発見されている。古墳時代の中前期から後期にかけて大野田地区には古墳群が形成される。これまで前方後円墳と円墳が発見されており、円筒埴輪、朝顔形埴輪などが出土している。また、前期から中期の堅穴住居跡も発見されており、集落があったことが判明している。奈良・平安時代になると遺跡の分布は全般的に拡大し、その数も増加する傾向にある。この時期のものとしては水田跡や集落跡が発見されている。中世から近世にかけては、屋敷跡や水田跡などが確認されている。

4. 基本層序

I層：灰色粘土質シルト

下層に酸化鉄を含む。旧水田耕作土と考えられる。

II層：にぶい黄褐色砂質シルト

褐色シルトのブロックを含む。

III層：褐色シルト

植物遺体を少量含む。旧畑作耕作土と考えられる。

IV層：暗褐色シルト

全体に炭化物を含む。旧畑作耕作土の可能性がある。

V層：褐色シルト質粘土

調査区の北半でのみ確認している。

VI層：褐色シルト質粘土

調査区の南半でのみ確認している。炭化物を全面に含む。



第44図 調査区配置図

5. 発見遺構と出土遺物

1) 溝跡

SD 1溝跡 調査区全体が東西にのびるSD 1溝跡の中に位置する。平成7年に当該地の西で元袋遺跡第3次調査が実施されているが、その際に確認された中世から近世初めの屋敷跡に伴う堀跡（SD 3）の延長部である可能性が高い。溝跡は2時期確認されており、元袋遺跡第3次調査の結果を参考に北側の新しい方をSD 1a溝、南側の古い方をSD 1b溝とした。溝の方向は、SD 1a溝はE-18° -S、SD 1b溝は、E-23° -Sである。深さはSD 1a溝で120cmで堆積土は5層に分かれる。1層は灰色の粘土質シルト、2層は褐灰色の粘土、3層は灰褐色の粘土、4層は灰色のシルト、5層は暗黃褐色の砂質シルトである。全体に酸化鉄が含まれ下層はグライ化している。2、3層は人為的に埋め戻された土と考えられる。SD 1b溝の深さは140cmで堆積土は5層に分かれている。1層はにぶい黄褐色の粘土、2層は灰褐色の粘土、3層はにぶい黄褐色の粘土、4層はにぶい黄褐色の粘土、5層はオリーブ黒色のシルトである。5層には植物遺体が多く含まれている。遺物は土師器・石臼・砥石などが出土している。

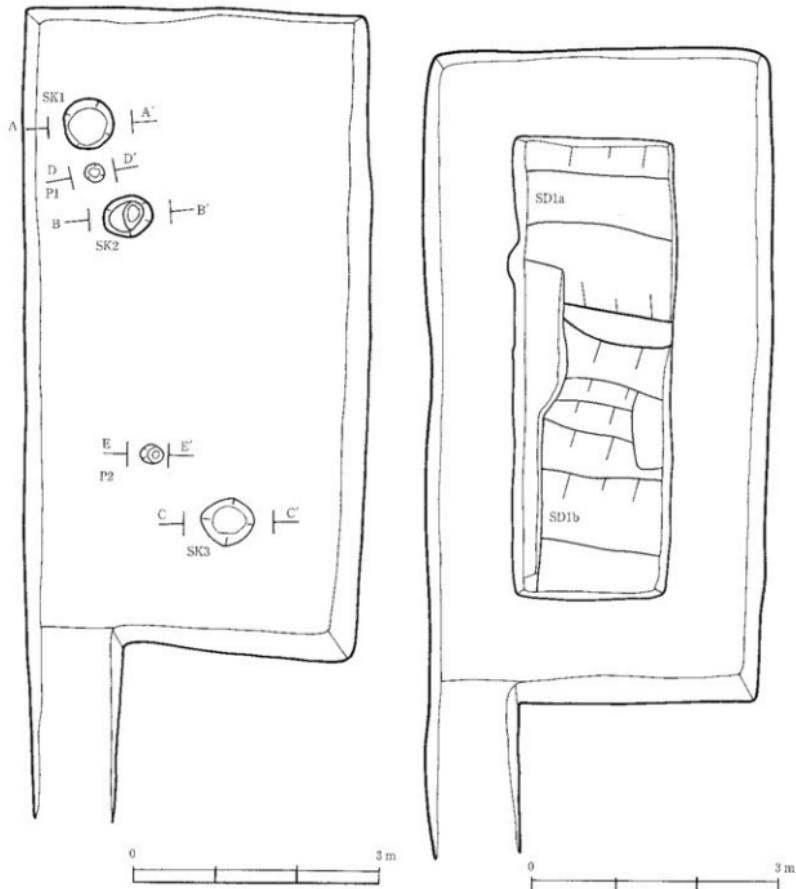
2) 土坑

SD 1溝跡の上面で土坑を3基検出している。

SK 1土坑 平面形は円形で直径約70cm、深さは30cmで断面形はゆるやかなU字形を呈する。堆積土は褐色シルト質粘土で黄褐色粘土のブロック、酸化鉄粒を全体に含んでいる。出土遺物はない。

SK 2土坑 平面形は梢円形で南北短軸50cm、東西長軸60cmを測る。断面形は東部の一部が深くなる不整なU字形をしており最深部で30cmを測る。堆積土は3層に分かれ1層が褐色シルト質粘土、2層が黄褐色粘土、3層が黄灰色粘土となっている。出土遺物はない。

SK 3土坑 平面形は円形で直径70cmほどである。断面形はゆるやかなU字形を呈し深さは20cmを測る。堆積土は1層で、褐色シルト質粘土で、黄褐色粘土のブロックを含んでおり炭化物も少量含んでいる。出土遺物は縄文土器片が1点出土している。

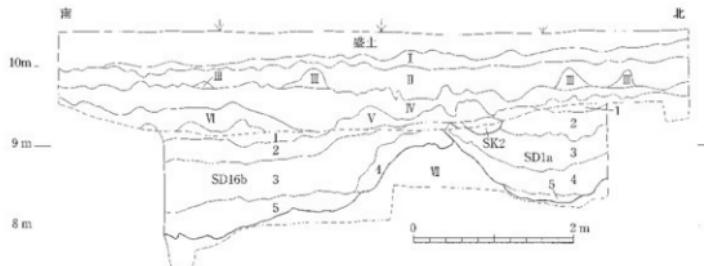


第45図 遺構実測図（溝跡堆積土上面）

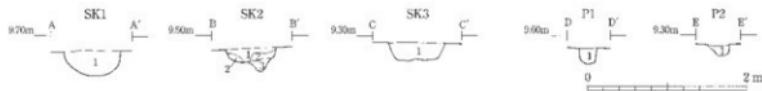
第46図 遺構実測図（SD 1）

3) ピット

SD1溝跡の上面でピット2個を検出した。出土遺物はピット2から18世紀ぐらいと思われる瀬戸美濃の陶器片が出土している。



第47図 西壁断面図



基本層序

層段	土色	土質	備考
I	5V4/1 黄色	粘土質シルト	下層に酸化鉄を含む 近水田耕作上
II	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	黒色シントのブロックを含む 沿塀付着土
III	10YR4/4 黄色	シルト	植物遺体を少産む
IV	10YR3/4 黄褐色	シルト	全体に灰化物を含む 形成堆積土?
V	10YR4/4 黄色	シルト質粘土	溝渠区段でみる所
VI	10YR4/4 黄色	シルト質粘土	縦小区分のみ確認 泥炭化物を全層に含む
VII	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	縦小区分、にぶい黄褐色土を含む
VIII	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	赤褐色地帯質シルトを小ブロック状に含む

SK1

層No.	土色	土質	備考
1	10YR4/4 棕色	シルト質粘土	黄褐色粘土のブロックを含む 酸化物粘土を全面に含む

SK2

層No.	土色	土質	備考
1	10YR4/4 棕色	シルト質粘土	黄褐色粘土上のブロックを含む 酸化物粘土を全面に含む
2	20YR5/6 黄褐色	粘土	1層の小ブロックを含む 酸化物粘土を含む
3	23Y4/1 黄褐色	粘土	酸化物粘土を全面に含む

SD1a

層No.	土色	土質	備考
1	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	褐褐色粘土上のブロックを含む
2	10YR5/4 黄褐色	粘土	人為的に埋められた上 黄褐色粘土の小ブロックを含む 全層に酸化物を含む
3	10YR4/4 黄褐色	粘土	人為的に埋められた上 細粒状粘土の大ブロックを多く含む 全層に酸化物を含む
4	5Y5/1 黄色	シルト	全層に酸化物を含む
5	23Y5/2 鮎青黄色	砂質シルト	全層に酸化物を含む

SK3

層No.	土色	土質	備考
1	10YR4/4 棕色	シルト質粘土	黄褐色粘土上のブロックを含む 酸化物を少産む

P1

層No.	土色	土質	備考
1	10YR4/4 棕色	シルト質粘土	酸化物粘土を少産む

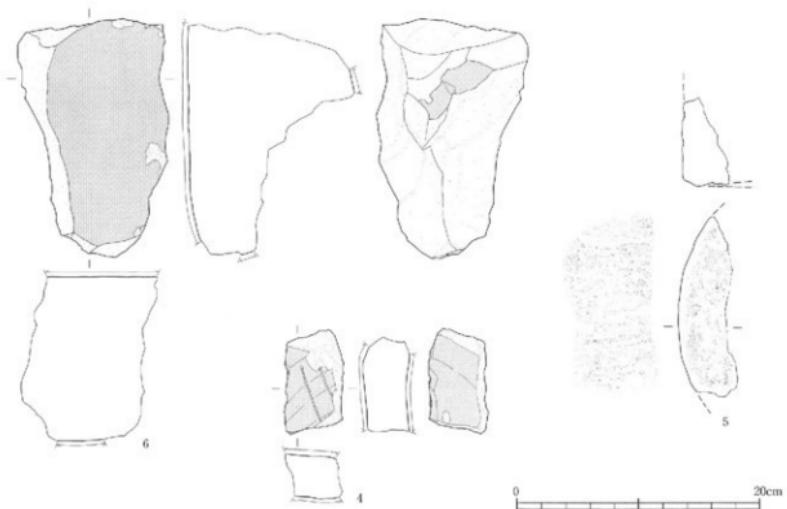
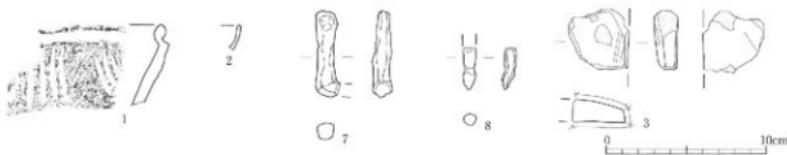
SD1b

層No.	土色	土質	備考
1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	酸化物を微細に含む
2	10YR5/2 黄褐色	粘土	全層に酸化物を含む
3	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	全層に酸化物を含む
4	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	にぶい黄褐色を含む V層に埋する は黒褐色に変色 全層に酸化物を含む
5	5Y5/2 オリーブ黒色	シルト	植物遺体を多量に含む 特に下層に多 い 鮎を量に含む 全層グリーン化

P2

層No.	土色	土質	備考
1	10YR4/4 棕色	シルト質粘土	黄褐色粘土ブロックを含む 酸化物、酸化物粘土を全面に含む

第48図 構造断面図



図中 登録 番号	登録 番号	出土地點 基本調査番号	遺跡番 号	分類		特徴			特徴・備考 (記載・基材・実地・時期・分類)	写真 回数
				施 設	器 持	器高・長 さ	口径・幅	厚 径・重		
1 A-1	SK3	1号		焼成土器 鉢		(3.0)			沈堆文・網文地刷 底盤が付・瓶戸長邊18cm	22-1
2 I-1	P2	1号		陶器 壺		(1.5)				22-2
3 K-1	SD1b			石器		(3.7)	(3.7)	1.5 25	石頭1面	22-3
4 K-2	SD1b			焼成土器 鉢		(3.7)	4.8	(3.6) 230		22-4
5 K-3	SD1b	3号		石器		(2.2)			先端に鋸のノ1枚	22-5
6 K-4	SD1b	3号		焼成土器 鉢		(3.6)	(12.0)	1.6 3090	3面に寸引面あり	22-6
7 N-1				金銀製品 不明		(3.0)	1.1	1.2	上部に穴あり? L字状	22-7
8 N-2				金銀製品 不明		(2.6)	(0.8)	(0.7)		22-8

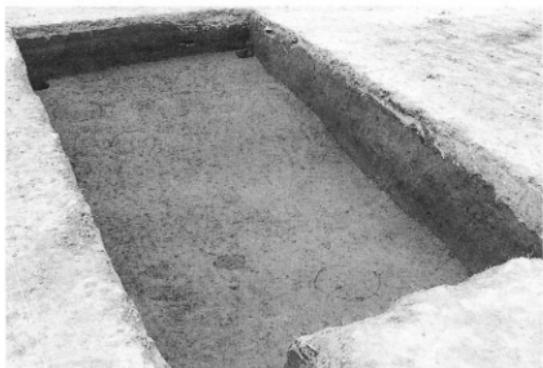
第49図 出土遺物

6.まとめ

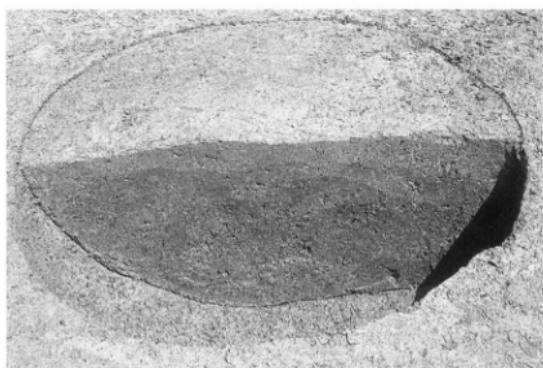
- ① 今回の調査区は遺跡範囲の最南端で、3次調査の東側に当たる。
- ② 調査の結果、東西方向に伸びる溝跡1条、土坑3基、ビット2個を確認した。この溝跡については元袋遺跡第3次調査で検出された中世から近世初めの屋敷跡に伴う堀の延長部であると考えられる。土坑・ビットについては時期不明である。

<参考・引用文献>

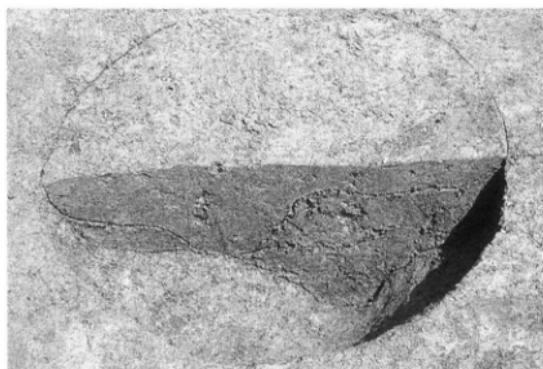
斎野裕彦・川名秀一（1994）「元袋遺跡第2次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第188集



1 造構検出状況（南西より）

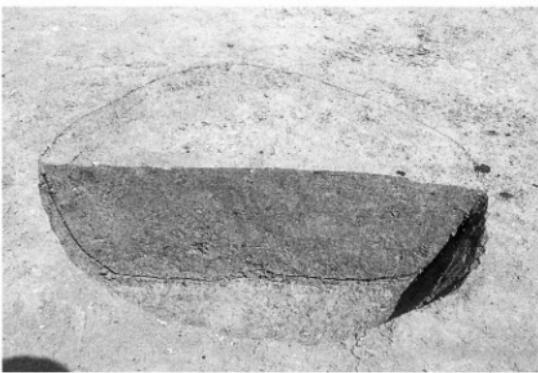


2 SK1断面（南より）



3 SK2断面（南より）

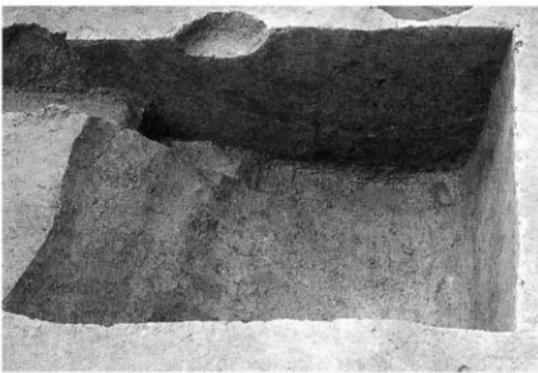
図版19 造構検出状況・土坑



1 SK3土坑断面（南より）

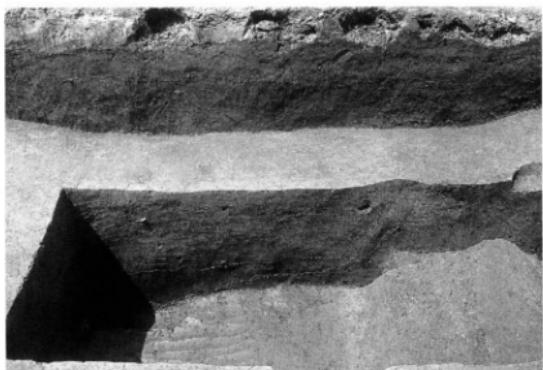


2 土坑、ピット完掘状況（南西より）



3 SD1a溝跡（東より）

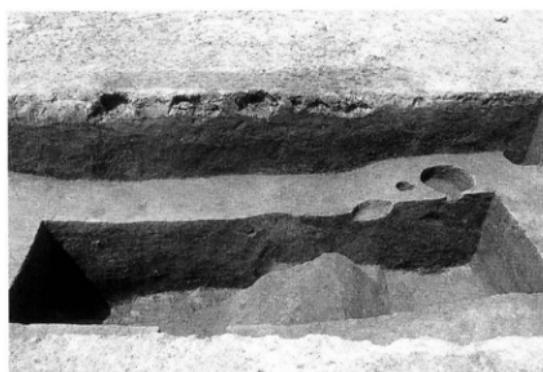
図版20 土坑・溝跡



1 SD1b溝跡（東より）

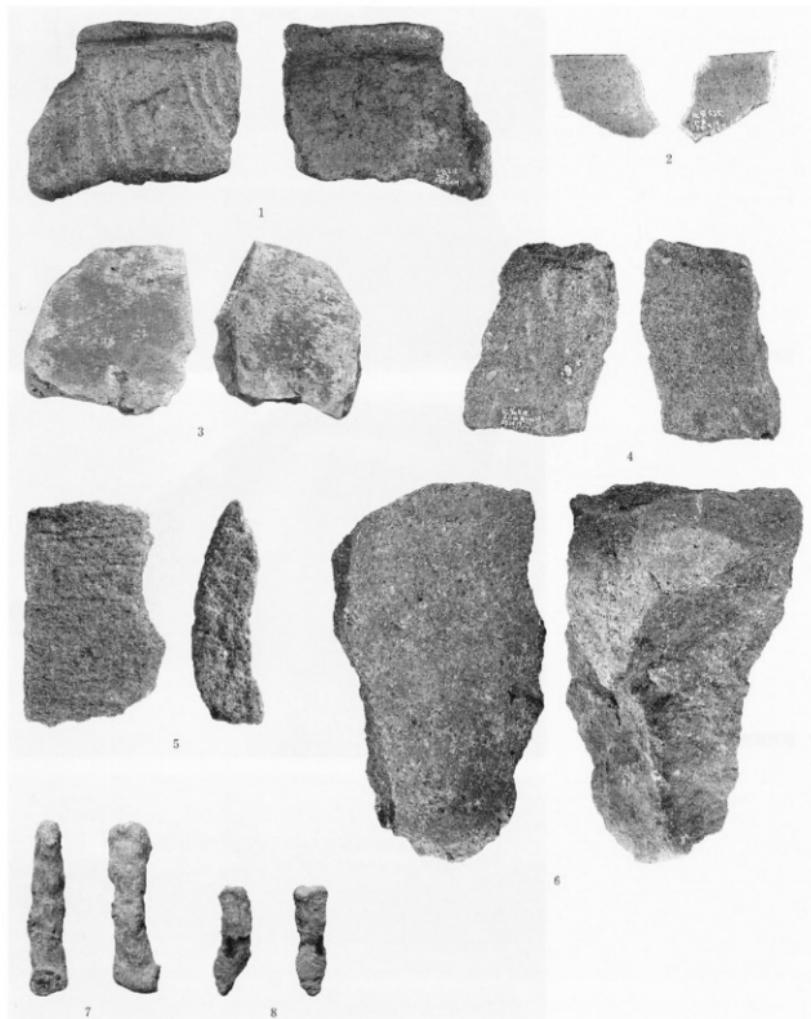


2 調査区完掘全景（南面より）



3 調査区西壁断面（東より）

図版21 溝跡・完掘全景・土層断面



1 横文土器 鉢	A - 1 SK 3 1層 (第49図1)	5 石製品 石臼	K - 3 SD 1 b 5層 (第49図5)
2 陶器 瓢	I - 1 P 2 1層 (第49図2)	6 翼石器 磨面のある櫂	K - 4 SD 1 b 5層 (第49図6)
3 石製品 破片	K - 1 SD 1 b (第49図3)	7 鉄製品	N - 1 (第49図7)
4 翼石器 磨面のある櫂	K - 2 SD 1 b (第49図4)	8 鉄製品	N - 2 (第49図8)

図版22 元袋遺跡第5次調査出土遺物

VIII 鴻ノ巣遺跡第10次発掘調査報告書

1. 調査要項

遺跡名	鴻ノ巣遺跡（宮城県遺跡番号01034）
調査地點	仙台市宮城野区岩切三所北123-2、124-9
調査期間	平成17年5月13日
調査対象面積	70m ²
調査面積	21m ²
調査原因	個人住宅建築
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担当職員	主査 工藤哲司 文化財教諭 浅野克樹 赤岡光騎

2. 調査に至る経過と調査方法

本調査は、平成17年4月27日付けで、地権者及川真弓氏より、深さ7mの柱状土壤改良を伴う住宅建築の発掘届が提出されたため行われた。

調査は、建物予定部分に東西7m×南北3mのトレンチを設定し、重機により盛土約100cm、Ⅰ層（旧耕作土）約30cmを掘り下げ、標高8.3mにあたるⅡ層上面で人力による遺構検出作業を行った。

溝跡・土坑・井戸跡などが検出されたが、検出面から約70cm掘ったところで湧水が見られたため、それ以上の掘り下げは行わなかった。



第50図 遺跡の位置と周辺の遺跡



第51図 調査地点の位置

番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	鴻ノ巣遺跡	墓	自然堤防	古墳・古代・中世
2	新宿田塗跡	混合地	自然堤防	古代
3	東光寺塗跡	城郭・守護	丘陵	中世
4	東光寺側斜面	板倒	丘陵	中世
5	石室前遺跡	混合地	丘陵	中世

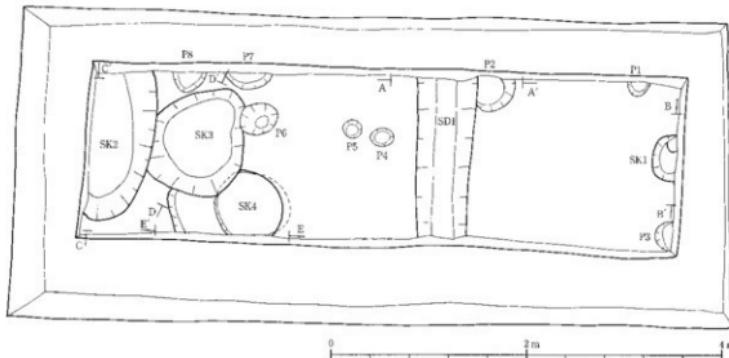
3. 遺跡の位置と環境

鴻ノ巣遺跡は、仙台市北東部のJR岩切駅の南東約0.5kmに位置し、仙台市北部を流れる七北田川右岸に形成されている標高8m前後の自然堤防に立地する。遺跡の北西約0.5kmには、標高100m～40mの富谷丘陵の東端が迫り、岩切城跡や東光寺遺跡が立地している。遺跡の南西約1.5kmには、標高70m～40mの七北田丘陵が迫り、燕沢遺跡が立地している。

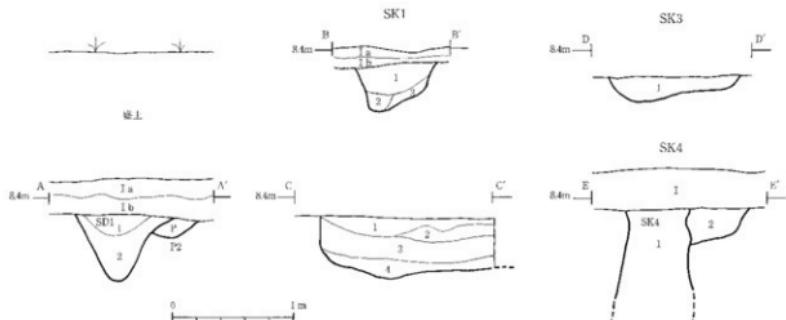
周辺の沖積地では、多賀市の山王遺跡で弥生時代中期以降の遺跡が発見されている。古墳時代前期になると、鴻ノ巣遺跡や今市遺跡でも遺物が発見されるようになる。古墳時代中期には鴻ノ巣遺跡に大規模な集落が形成され、第7次調査で、集落の一部が柵列とその外側を巡る溝に囲まれていることが確認されている。古墳時代後期から終末期になると、山王遺跡に集落が形成され、新田遺跡では祭祀に関係すると考えられる多数の土器がまとまって出土した遺構が発見されており、鴻ノ巣遺跡でも同期の土器が約60個まとめて出土している。奈良時代になると、遺跡の北東約3kmの低丘陵に多賀城が造営され、以後周辺地域は陸奥国の中核として栄えることとなる。奈良時代から平安時代にかけては、鴻ノ巣遺跡や今市遺跡にも集落が形成されるが、七北田川左岸の新田遺跡・山王遺跡・市川橋遺跡で計画的な土地地割と道路が整備され、都市的な空間が広がっていたことと比較すると遺構・遺物はまばらで閑散としている。中世になると遺跡の北西の1.5kmに陸奥国守護伊沢氏の居城岩切城が築かれ、陸奥国府周辺の所領を支配した。対岸の洞ノ口遺跡には城館が形成されている。また、岩切城の麓には留守氏の菩提寺として東光寺が建立され、靈場としての信仰を集め、磨崖仏や150基を越す板碑群がある。中世の文書には、岩切付近に「冠屋市場」と「河原宿五日市場」という2つの市場が存在したという記載があり、鴻ノ巣遺跡はこのどちらかにあたると考えられている。これまでの調査では、市の存在を証明するだけの遺構は発見されていないが、小規模ながら屋敷を囲むような溝跡や掘立柱建物跡、井戸跡など多数の遺構や多くの遺物が発見され、活発な歴史の舞台となっていたことを示している。



第52図 調査区配置図



第53図 遺構実測図



第54図 遺構断面図

SD1	上色	土質	備考	SK3	上色	土質	備考
1 10YR3-3 暗褐色	粘土質シルト	砂をわずかに含む		1 10YR3-3 暗褐色	シルト	炭化物を多量に含む 下部に暗褐色土ブロックを含む	
2 10YR3-2 黒褐色	シルト質粘土	複数の褐色土のブロックを含む 炭化物を含む					
SK1							
1 10YR3-4 暗褐色	シルト	褐色土のブロックをわずかに含む		1 10YR3-3 暗褐色	シルト	砂をわずかに含む	
2 10YR4-3 くろい黄褐色	粘土質シルト			2 10YR4-2 黒褐色	砂質シルト	表面に褐色土のブロックを含む 炭化物を含む	
3 10YR3-4 暗褐色	粘土質シルト	褐色土のブロックを多量に含む					
SK2							
1 10YR2-3 黑褐色	砂質シルト	炭化物をわずかに含む					
2 10YR3-3 暗褐色	粘土質シルト	褐色土のブロックを多量に含む					
3 10YR3-3 暗褐色	粘土質シルト	炭化物を多く含む					
4 10YR3-3 暗褐色	シルト質粘土	炭化物を細粒に含む					
基本層							
盛土	上色	土質	備考	P1	10YR3-4 暗褐色	シルト質粘土	褐色土のブロックを少量含む
			盛土および敷地	P2	10YR3-3 暗褐色	シルト	褐色土のブロック、炭化物を含む
I層	10YR3-2 黄褐色	砂質シルト	旧耕作土上部	P3	10YR3-3 暗褐色	シルト	褐色土の小ブロックを多量に含む
II層	10YR3-3 くろい黄褐色	砂質シルト	炭化物を含む。褐色土をまばらに含む	P4	10YR3-3 暗褐色	シルト	褐色土のブロックをわずかに含む
III層	10YR4-4 黄色	砂質シルト	I層とII層の間に分合して褐色土が分布している	P5	10YR3-4 暗褐色	シルト	I層に褐色土
				P6	10YR3-4 暗褐色	シルト	褐色土上、炭化物を多く含む
				P7	10YR3-3 暗褐色	シルト	褐色土・粘土質粘土を多量に含む
				P8	10YR3-4 暗褐色	シルト	褐色土を多量に含む

4. 基本層序

約100cmの盛土層があり、その下に約30cmの旧耕作土（I層）がある。上部Ia層は層厚約20cmの灰黄褐色の砂質シルト層で、近年の畑の耕作土であると考えられる。下部Ib層は層厚約10cmのくろい黄褐色の砂質シルト層で、炭化物、暗褐色土をまばらに含んでいる。II層は褐色の砂質シルト層で、遺構検出面である。I層とII層の境に部分的に暗褐色土が分布している。

5. 発見遺構と出土遺物

II層上面で溝跡1条、上坑4基、ピット8個を検出した。

1) 溝跡

SD1溝跡 調査区を南北方向に横切って検出された。幅は上端で約55cm、下端は約10cm、断面形はV字形で、検出面からの深さは約60cmである。堆積土は2層に分けられ、1層は人為的堆積と考えられる。遺物は出土していない。

2) 土坑

SK 1 土坑 調査区東壁際で検出された。平面形は直径約50cmの円形と考えられるが、東側は調査区外へのびる。断面形は不整なU字形で、深さ約25cmである。壁面は、北側は急に、南側はゆるやかに立ち上がる。堆積土は3層に分けられ、各層とも人為的堆積と考えられる。遺物は出土していない。

SK 2 土坑 調査区西壁に沿って検出され、西部・北部ともに調査区外へ続いている。平面形は梢円形と推定される。検出部は東西40cm、南北150cmである。断面形は不整な舟底形で、深さ約40cmである。壁はやや急に立ち上がる。堆積土は4層に分けられる。3層から中世陶器片が出土している。

SK 3 土坑 調査区西部で検出された。SK 2 土坑に切られ、SK 4 土坑を切っている。平面形は梢円形を呈し、長軸約100cm、短軸約80cmである。断面形は不整な舟底形で深さ約20cmである。堆積土は1層である。遺物は出土していない。

SK 4 土坑（井戸跡） 調査区西部、南壁に接して検出された。平面形は直径約100cmの円形を呈している。2段の掘り込みとなっており、西側は深さ約30cmに舟底形に下がり、東側は深さ70cm以上の円筒形に下がっている。深さ70cm掘り下げた面で湧水があったため調査を中止した。この土坑は、掘り込みが深いこと及び壁面が垂直に立ち上がっていることから井戸跡と考えられる。堆積土は2層に分けられる。1層中から中世陶器片が出土している。

3) ピット

計8個を検出した。平面形は円形を基調とし、大きさは直径20~40cm、検出面からの深さは20~40cmほどである。柱痕跡を検出できたものはない。遺物は出土していない。

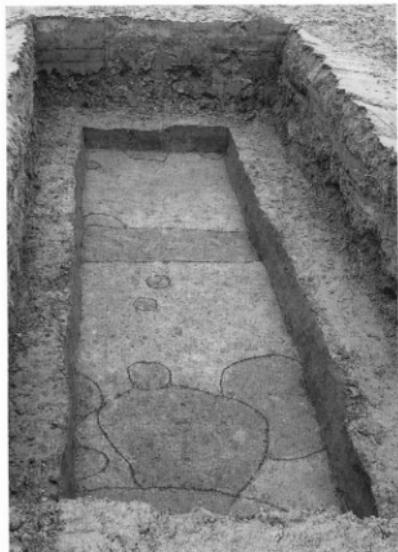
6.まとめ

- ① 本調査区は、鴻ノ巣遺跡の東部中央付近に位置する。
- ② 標高8.3mの基本層II層上面から溝跡1条、土坑4基、ピット8個が発見された。
- ③ 土坑のうち1基は井戸跡の可能性がある。SK 2・SK 4 土坑から中世陶器が出土しており、他の土坑や溝跡の堆積土及びピットの多くは、SK 2・SK 4 土坑の堆積土と類似していることから、造営の時期は中世を中心とするものと考えられる。

＜参考文献＞

工藤哲司 (2004)『鴻ノ巣遺跡 第7次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第280集

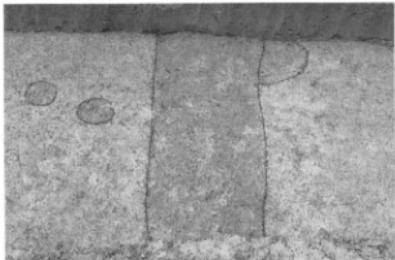
工藤哲司ほか (2005)『VI鴻ノ巣遺跡第8次発掘調査報告書』『山田本町遺跡ほか 発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第287集



1 遺構検出状況（西より）



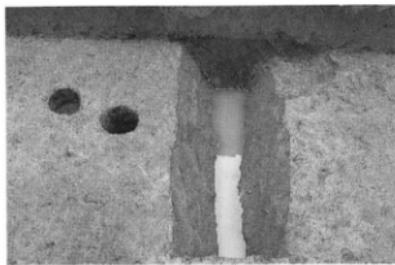
2 遺構検出状況西半（南より）



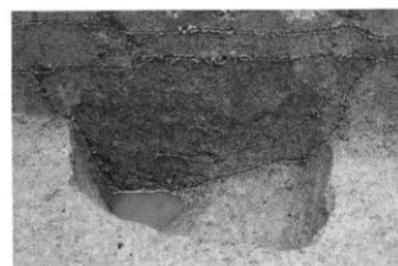
3 遺構検出状況中央（南より）



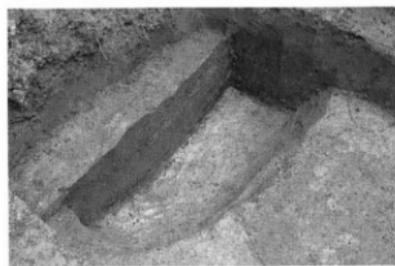
4 北壁西部 ピット完掘状況（南より）



5 SD1溝跡 完掘状況（南より）



6 SK1土坑 調査状況（西より）

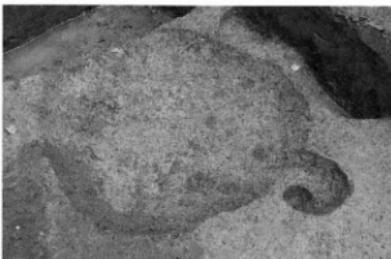


7 SK2土坑 調査状況（南東より）

図版23 遺構検出・調査状況



1 SK3土坑 土層断面（東より）



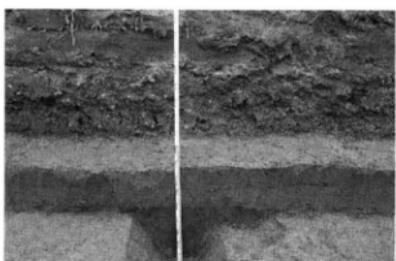
2 SK3土坑 完掘状況（南東より）



3 SK4土坑 完掘状況（北より）



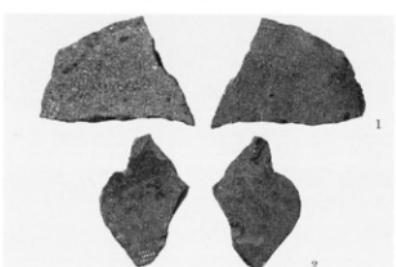
4 東部ピット 完掘状況（南より）



5 北壁土層断面（南より）



6 完掘状況（西より）



7 出土遺物

図版24 土層断面・遺構完掘状況

IX 北目城跡第4次発掘調査報告書

1 調査要項

遺跡名	遺跡（宮城県遺跡番号01029）
調査地點	仙台市太白区東郡山2丁目106-4・107-2
調査期間	平成17年6月7日～6月8日
調査対象面積	84m ²
調査面積	24m ²
調査原因	個人住宅建築
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担当職員	主査 工藤哲司 文化財教諭 赤岡光騎

2 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成16年4月16日付けで、地権者鈴木一浩氏より、钢管杭打ちを伴う基礎工法の住宅建築の発掘届が提出されたので、確認調査を実施し、そのうえで必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。確認調査は平成16年6月7日に着手し、遺構が検出されたので引き続き調査を実施し、6月8日に調査を終了した。

確認調査は建物予定地に3m×8mのトレーンチを設定して行った。遺構が検出されたが、敷地の制約のため、調査区の拡張は行なわず、当初設定したトレーンチのみを調査した。検出遺構のうち、井戸跡については確認面から約180cmまで下げたところでは底面には到らなかったが、安全のため調査を打ち切った。

3 遺跡の位置と環境

当該地は、仙台駅の南東約1.5kmに位置する。名取川と広瀬川に囲まれた郡山低地の東部にあたり、標高9m前後の自然堤防を中心に立地している。遺跡の西隣には、飛鳥時代から奈良時代にかけての宮衙跡として知られる郡山遺跡がある。

北目城跡は、平城形式の城館で、天正年中までは栗野氏の居城となっていた。関が原の戦いの際に伊達政宗が入城し、以来仙台城に移るまで居住したことが知られている。平成4・5年度に行われた都市計画道路建設に伴う調査の際には、「障子堀」を伴う17世紀前半の堀跡などの遺構のほか、その下層からは古代の遺構や弥生時代の水出跡、さらに下層から縄文時代後期後葉の堅穴住居跡も発見されている。遺物としては、陶器・磁器の他、漆器類、刀剣などが出土している。

4 基本層序

調査区内の基本層は、調査区壁面と井戸跡の掘削深度内の壁面観察をあわせ、以下の大別7層、細別9層に分けられた。

盛土層：礫・コンクリート片を含む。層厚は60cm前後である。

I a層：10YR3/4暗褐色粘土質シルト。層厚は30cm。炭化物をわずかに含む。近年の耕作土層上部。

I b層：10YR4/3にぶい黄褐色粘土質シルト。層厚は20cm。II層起源の砂を含む。畑耕作土層下部。

II 層：10YR5/4にぶい黄褐色シルト質砂。層厚は30～40cm。井戸跡・土坑の検出面。



番号	遺跡名	種別	周囲	立地	時代	番号	遺跡名	種別	周囲	立地	時代
1	北日坂路	城柵・水堀・堀落	自然堤防	幾文～中後・近世		12	王ノ塚古墳	墓葬・星丘	自然堤防	幾文～中後	
2	鷹山古墳	古墳・水堀・包合塁	自然堤防	幾文～中後・近世		13	北星塚古墳	散布塁	自然堤防	古代	
3	西竹内道路	施設・墓地・包合塁	自然堤防	幾文・美生・古代		14	長町浦木造跡	散布地	自然堤防	古墳	
4	長町浦木造跡	施設	自然堤防	強生・吉明・古代		15	大野村の堀跡	古墳・集落	自然堤防	幾文～中後	
5	宮尻古道	水堀・包合塁	便用堤防	耶石器～近世		16	星屋松古墳	墓葬・星丘	自然堤防	古代・中世	
6	長町浦木丁目跡	散布地	自然堤防			17	的場造跡	散布地	自然堤防	古代	
7	袋木古道	自然堤防	古墳			18	鍋ノ瀬古跡	散布地	自然堤防	古墳・古代	
8	元安造跡	施設・水堀	自然堤防	強生・古代～近世		19	矢来造跡	散布地	自然堤防	古墳・古代	
9	新田造跡	散布地	自然堤防	古代		20	久ノ上二造跡	水田	複層堤防	古墳・古代	
10	大野田造跡	施設・祭壇	自然堤防	幾文・美生～古代		21	久ノ上三造跡	集落	自然堤防	古墳・古代	
11	宿前造跡	施設	自然堤防	幾文・古代		22	久ノ上四造跡	散布地	自然堤防	古墳・古代	

第55図 遺跡の位置と周辺の遺跡

III a 層：10YR4/2灰黄褐色粘土。層厚は10cm。炭化物をわずかに含む。

III b 層：10YR2/3黒褐色粘土。層厚は3～5cm。

IV 層：10YR6/3にぶい黄橙色シルト質粘土。層厚は60～70cm。層上部はにぶい黄橙色土が主体となり、土層の下1/3に黒色土の薄層を縦状に含む。

V 層：黒色土と灰黄褐色土の互層。黒色土層中には植物遺体を含む。

VI 層：10YR4/1褐灰色粘土。層厚は30cm。

VII 層：25GY5/1オリーブ灰色砂質シルト。層厚は10cm以上。粘土分を含む。

5 発見遺構と出土遺物

表土及び擾乱層を除去した面は、調査区西部はⅡ層が残存していたが、中央部は深い擾乱を受けているために、遺構検出面はⅣ層となった。また東部はⅢa層が検出面となった。調査区西半部で土坑が4基検出された。SK 1・2・4・5土坑はⅡ層が検出面である。SK 3土坑は、Ⅳ層で検出されているが、前記のような状況から、他の遺構同様に本来の掘り込み面はⅡ層より上位であると考えられる。



第56図 調査地点の位置

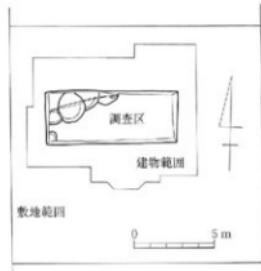
土 坑

SK 1 土坑（井戸跡） 調査区西部の北壁際で検出され、一部は北壁の外にのびる。SK 2・5 土坑を切る。平面形は円形で、東西軸長175cm・南北軸長184cmを測る。検出面から深さ180cmまで掘り下げたが底面に達しなかった。調査部分は円筒状に掘られている。調査部分の堆積土は4層に分けられる。上部堆積土には縞が含まれている。下部堆積層（4層）には壁面の崩落土がブロック状に含まれ、層の下ほどグラデイ化が進んでいる。遺物は、4層中から木製の箱型の容器と考えられるものが出土したが、腐食が進み、取り上げることはできなかった。

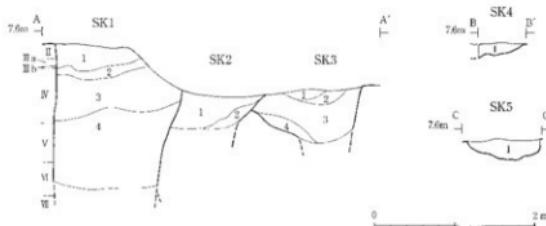
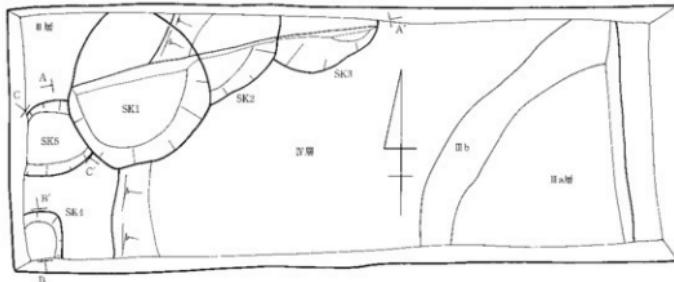
SK 2 土坑（井戸跡） SK 1 土坑の東側で検出された。SK 3 土坑を切り、SK 1 土坑に切られる。遺構の約半分が調査区の外側にのびるので正確

な規模は不明であるが、平面形は円形で、直径が140cm以上あるものと考えられる。断面の位置では、検出面からの深さが1m程であるが、SK 1 土坑の壁面での観察結果では、SK 1 土坑同様に180cm以上の深さがある。断面形は、深い逆台形を呈する。堆積土は調査範囲で2層に分けられた。2層ともブロック状の堆積土からなることから、井戸の上部は埋め戻されていると観察される。遺物は出土していない。

SK 3 土坑（井戸跡） SK 2 土坑の東側で検出された。SK 2 土坑に切られる。遺構の大半が調査区の外側にのびるので規模は不明であるが、平面形は円形を呈し、直径は130cm以上あると考えられる。断面の位置では、検出面からの深さが70cm程であるが、SK 1・2 土坑同様に深い遺構であると考えられる。堆積土は調査範囲で4層に分けられたが、各層ともブロック状の堆積土からなり、人為的に埋め戻されている遺構であると観察される。遺物は出土していない。



第57図 調査区配置図



SK1

層No.	土 色	上 性	備 考
1	J0YR6/2 黄褐色	砂	近赤色上・褐黃色下のブロック、礫を含む。
2	J0YR6/4 黄褐色	粘土	灰化土を含む。褐色上部を含む。
3	20YR5/3 14G-黄褐色	シルト質粘土	褐黃色土のブロック、大小の礫を含む。
4	H0YR5/2 黄褐色	粘土	褐黃色土を含む。小のブロック上の堆積。

SK3

層No.	土 色	上 性	備 考
1	I0YR4/4 黄色	砂質シルト	褐色上・褐黃色下のブロックを多く含む。
2	10YR5/6 黄褐色	砂	
3	10YR4/2 黄褐色	粘土	に近い褐黃色下のブロックを多量に含む。
4	10YR5/2 黄褐色	粘土	褐黃色土層を多量に含む。

SK2

層No.	土 色	上 性	備 考
1	H0YR5/2 黄褐色	粘土質	に近い褐黃色の大粒のブロックを多量に含む。
2	25GY5/1 オリーブ褐色	シルト質粘土	V字起屈の黒土をブロック状に多く含む。

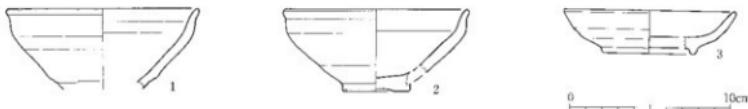
SK4

層No.	土 色	上 性	備 考
1	75YR2/1 黑色	シルト質粘土	褐黃色土を基盤に含む。砂化土・透水性を多く含む。

SK5

層No.	土 色	性	備 考
1	J0YR2/3 褐褐色	シルト質粘土	褐黃色土を基盤に含む。炭化物・透水性を多量に含む。

第58図 遺構実測図



SK1

層No.	出 土 品 名	地 点	分 類	鑑 定	特 殊	考 参	写 真 図
1	基木柱	遺構名	遺構周	出土No.	種別	石器・骨・貝・陶器・瓦・瓦器・鐵・銅器・寶	(済) (12.0)
1	1	SK-5 1号	周縁		鏡	武物・天日系鏡、直地: 濱江式鏡、年代: 16C後半?	
2	12	SK-5 1号	周縁		鏡	直地: 天日系鏡、内丸肩台・直地: 濱江式鏡、年代: 16C中頃	
3	13	SK-5 1号	周縁		鏡	直地: 丸頭・直地: 濱江式鏡、年代: 16C-中頃以降	

第59図 出土遺物実測図

SK 4 土坑 調査区の南西角で検出された。遺構は南と西方向にのびる。検出部の平面形は隅丸方形を呈する。検出部の大きさは、南北60cm・東西46cmを測る。深さは14cmで、断面形は舟底状を呈する。堆積土は黒色のシルト質粘土1層で、炭化物と焼土を多量に含んでいる。遺物は出土していない。

SK 5 土坑 調査区西壁中央で検出された。西側は調査区の外にのびる。東側はSK 1 上坑に切られている。平面形

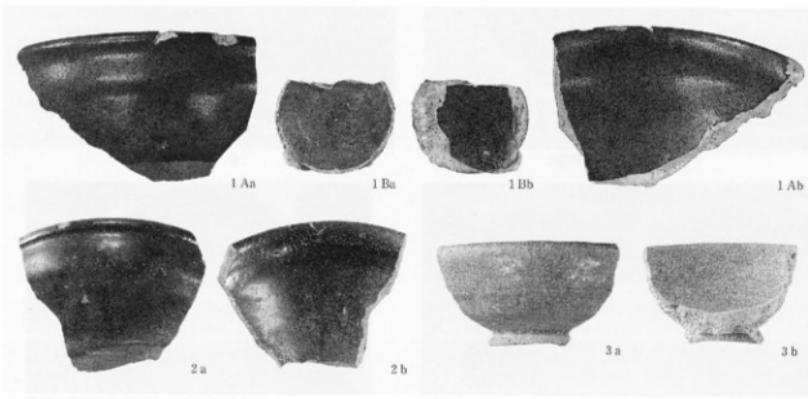
は円形ないし隅丸方形を呈する。大きさは、南北91cm・残存東西78cmを測る。深さは26cmで、断面形は不整な舟底状を呈する。堆積土は、SK 4と類似する黒色のシルト質粘土1層で、炭化物と焼土を多量に含む。遺物は陶器片3点(第59図1~3)が出土している。I-1は瀬戸美濃産の鉄釉の天目茶碗で16世紀後半頃のものと見られる。I-2は瀬戸美濃産の鉄釉内反り高台の天目茶碗で16世紀中頃のものと見られる。I-3は瀬戸美濃産の灰釉の丸皿で16世紀中頃以降のものと見られる。

6まとめ

- ① II層からIV層にかけて土坑が5基検出された。これらの遺構は、擾乱のため検出層位は異なるが、本来の検出面はII層と考えられる。
- ② 5基の土坑のうち、SK 1・2・3は、遺構の規模・形態・深さから、井戸跡と考えられるが、底面を検出することはできなかった。調査部分では井戸枠施設は検出されなかった。
- ③ 井戸は、近接した位置で東から西に順次掘り直されている。
- ④ SK 1 井戸の年代は、SK 5 土坑より新しく16世紀以降と考えられる。
- ⑤ SK 4・5 土坑は類似した堆積土の土坑で、SK 5 土坑から出土した陶器によって16世紀頃の年代を考えられる。
- ⑥ 本調査では、中世北目城と同期ころの土坑と井戸跡が発見されたが、この場所が城館の内部に位置し、城と直接関係のある遺構であるかどうかは、今後の調査成果にかかる課題である。

<参考文献>

- 仙台市教育委員会(1993)：「III-1-(6) 北目城跡」『年報15』仙台市文化財調査報告書第189集
 仙台市教育委員会(1994)：「2-I-(7) 北目城跡」『年報16』仙台市文化財調査報告書第204集
 仙台市教育委員会(1999)：「VI 北目城跡(第2次調査)」「陸奥国分尼寺跡ほか発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第238集



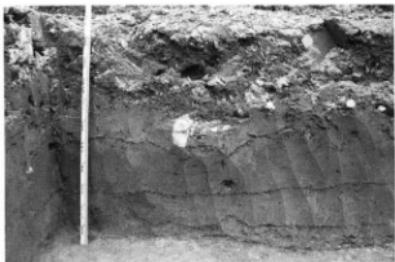
1 陶器 天目茶碗 I-2 (SK 5 第59図3)
 2 陶器 天目茶碗 I-1 (SK 5 第59図1)

3 陶器 深 I-3 (SK 5 第59図3)

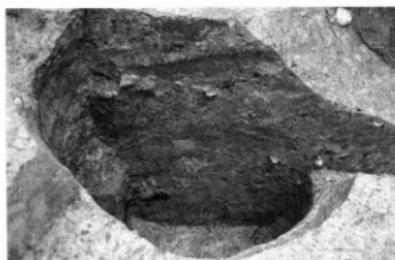
図版25 北目城跡第4次調査出土遺物



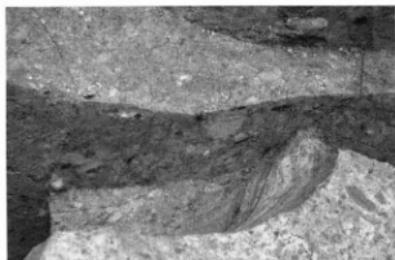
1 遺構検出状況



2 基本層上部



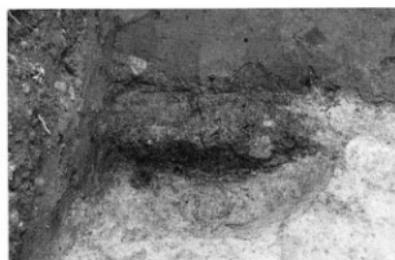
3 SK1土坑 (井戸跡)



4 SK2土坑 (井戸跡)



5 SK3土坑 (井戸跡)



6 SK4土坑



7 SK5土坑



8 完掘全景

図版26 北目城跡第4次調査

X 北目城跡第5次発掘調査報告書

1 調査要項

遺跡名	北目城跡（宮城県遺跡番号01029）
調査地点	仙台市太白区東郡山2-548-13
調査期間	平成17年10月12日～10月13日
調査対象面積	61m ²
調査面積	8 m ²
調査原因	個人住宅建築
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担当職員	主査 工藤哲司 文化財教諭 赤岡光綺

2 調査に至る経過と調査方法

本調査は、平成16年10月4日付けで、地権者山本秀一氏より、杭打ちを伴う基礎工法の住宅建築の発掘届が提出されたので、確認調査を実施し、そのうえで必要な場合は本開査を実施する旨を回答した。確認調査は、平成17年10月12日に着手した。建物予定地に6m×4mのトレーニングを設定して調査を行なったところ、駐車場の整地層及び盛土層が約100cmあったので、現地表面から約110cm下がった面でトレーニングを4m×2mに縮小し、旧耕作土の残りを除去して調査を実施した。整地層の可能性がある層（Ⅱ層）が部分的に残っていたが、遺構の検出作業はその以下のⅢ層面で行なった。Ⅲ層面で井戸跡とピットが検出されたので、確認遺構を引き続き調査した。調査区外にも遺構が延びている可能性があったが、敷地の制約があったので調査区の拡張は行なわず、当初設定したトレーニングのみを調査した。

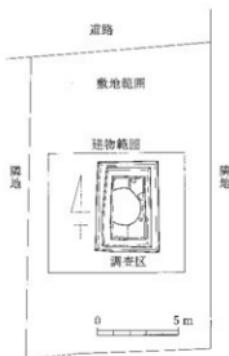
3 遺跡の位置と環境

北目城跡は仙台駅の南東約1.5kmの名取川と広瀬川に囲まれた郡山低地の東部にあたり、標高9m前後の自然堤防を中心に立地している。遺跡の西隣には、飛鳥時代から奈良時代にかけての官衙跡である郡山遺跡がある。

北目城跡は、平城形式の城館で、天正年中までは栗野氏の居城となっていた。関ヶ原の戦いの際に伊達政宗が入城し、以来仙台城に移るまで居住した。平成4・5年度に行われた調査の際には、「障子堀」を伴う17世紀前半の堀跡などの遺構が検出され、陶器・磁器の他、漆器類・刀剣などが出土している。

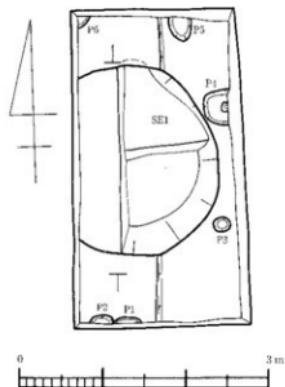
4 基本層序

山砂及び砂礫からなる盛土層が約100cmある。Ⅰ層は層厚30～40cmの暗褐色の粘土質シルト層で、近年の畑の耕作土である。Ⅰ層の下面は、天地返しによる南北方向の溝状の落ち込みが等間隔に存在する。その下のⅡ層は2層に分けられる。Ⅱa層は層厚15cmの褐色シルト質粘土層で、黄褐

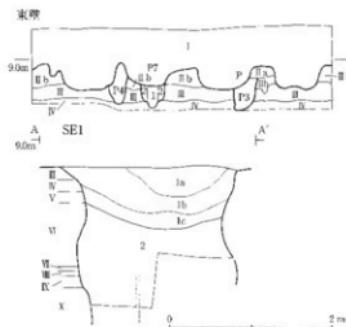


第60図 調査区配置図

色上粒を多量に含む。II b層は褐色のシルト質粘土層で、暗褐色上のブロックを多量に含む。II層は性地層の可能性がある。遺構を検出したIII層は、にぶい黄褐色の粘土層で、III層以下は自然堆積層が厚く堆積する。(第62図参照)



第61図 遺構平面図



第62図 調査区・遺構断面図

層No.	土色	土質	備考
I	褐色	山砂・砂及び特有	
1-a	10YR4/4 暗褐色	Ⅰa層シント	強硬な土
1-b	10YR4/4 褐褐色	Ⅰb層シント	黄褐色土粒を多く含む 穀米層?
1-c	10YR4/2 褐褐色	Ⅰc層シント	暗褐色土のブロックを大量に含む 葦地層?
2	10YR2/3 黒褐色	Ⅱ層シント	酸化鉄、マンゴン粒を含む Ⅲ層以下の柱根堆积
Ⅳ-a	10YR5/2 にぶい黄褐色	粘土	
Ⅳ-b	10YR2/3 黑褐色	粘土	
Ⅳ-c	2.5Y3/2 にぶい黄褐色	粘土	下部は淡黄色粘土に変化 分層可
Ⅳ-d	10YR4/2 黄褐色	粘土	
Ⅳ-e	2.5Y7/3 深褐色	粘土	
Ⅳ-f	10YR2/3 黑褐色	粘土	炭化物粒を含む
Ⅳ-g	10YR2/3 にぶい黄褐色	粘土	下部は細層に変化

5 発見遺構と出土遺物

III層において、井戸跡1基と柱穴を含むピット7個が検出された。

1) 井戸跡

SE1井戸跡 調査区中央で検出された。西側は一部調査区の外にのびる。平面形は円形で、南北軸は直径2.3mを測る。検出面から175cmまで下がったが底面には至らなかった。断面形は、概ね円筒形を呈するが、壁面の崩落による凹凸がある。堆積土は大別2層、細別4層に分けられる。1層は65~75cmあり、3層に細分される。自然堆積層と観察される。2層は1m以上ある人為堆積土と観察される黒褐色の土層で、にぶい黄褐色粘土、黄褐色粗砂、炭化物等を含む。また、骨片を起源とする白色の物質粒をまばらに含み、下部はグライ化している。

調査範囲では井戸臼は検出されなかったが、井戸のほぼ中央で、2層の途中から垂直に落ちる直径2.5cm程の空穴が検出された。この穴は、掘削した底面から、さらに160cmの深さがあることが確認された。調査した深さにこの穴の井戸の深さを加えると、井戸の深さは335cm以上あるものと考えられる。なお、この空穴については、所謂「息継ぎ穴」と考えられ、井戸を埋める際に、節を取り除いた竹材を据えて土を入れたものと理解される。

井戸跡からの出土遺物は、1層から中国産染付けの破片1点(図版27-1)と無釉陶器小片1点、2層から中国産染付けの破片1点(図版27-2)と鉄製品1点がある。中国産の染付けは1・2層のものとも16世紀頃のものと見られる。

2) ピット

調査区の断面で確認されたものを含めて7個のピットが検出された。

P 1 調査区の南壁にかかる。P 2を切る。検出部は直径25cmの半円形を呈する。検出面からの深さは14cmであるが、II層からの深さは30cm以上ある。堆積土は黄褐色土のブロックを含むにぶい黄褐色土である。検出部分で柱痕跡は検出されなかった。

P 2 調査区の南壁際で検出された。P 1に切られる。直径25cmの円形を呈する。検出面からの深さは18cmである。堆積土は黄褐色土を含むにぶい黄褐色土である。検出部分で柱痕跡は検出されなかった。

P 3 調査区の南東部の東壁にかかるて検出された。東壁面での掘り方の直径は約35cmで、柱痕跡の直径は13cmである。東壁面での深さは約10cmである。堆積土は黒褐色土のブロックを多量含むにぶい褐色土である。

P 4 調査区北部の東壁際で検出された。検出部は楕円形を呈し、検出部の東西残存長軸35cm、南北短軸約40cmを測る。直径12cmの柱痕跡が検出されている。東壁面での深さは約50cmある。堆積土は掘り方が褐色土のブロックを含むにぶい黄褐色土、柱痕跡が灰黄褐色土である。

P 5 調査区北壁際で検出された。検出部は楕円形を呈し、検出部の南北残存長軸30cmの、東西短軸約25cmを測る。堆積土は暗褐色土で灰黄褐色のブロックを含む。

P 6 調査区北西角で検出された。検出部は半径18cmの扇形を呈す。堆積土はにぶい黄褐色土で灰黄褐色のブロックを多量に含む。

P 7 調査区東壁際で断面だけが検出された。断面部の幅は約40cmで、幅13cmの柱痕跡も認められる。堆積土は掘り方が褐色土、柱痕跡がにぶい黄褐色土で、両層とも暗褐色のブロックを含む。

ピットからの出土遺物はない。

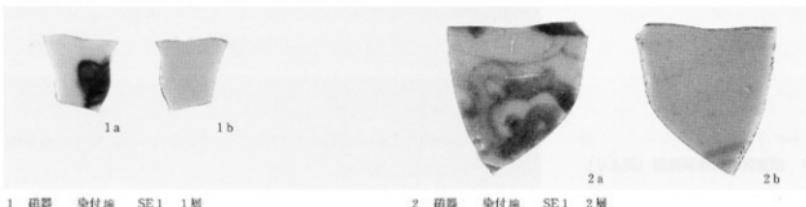
6まとめ

- ①本調査区は、北目城跡の東部中央の付近に位置する。
- ②基本層II層が掘り込み面と考えられる井戸跡1基とピット7個が検出された。
- ③井戸跡は、出土遺物から16世紀以降に埋められたと考えられるが、詳細な時期は不明である。
- ④ピットの中には柱痕跡の確認されるものが含まれているので、周辺に掘立柱建物跡が存在したと考えられるが、柱穴からの出土遺物がなく、遺構の詳細な時期は不明である。
- ⑤本調査区周辺には、中世ないし近世に属する可能性のある遺構が存在することが明らかになった。

<参考文献>

仙台市教育委員会（1993）：「III-1-(6) 北目城跡」『年報15』仙台市文化財調査報告書第189集

仙台市教育委員会（1994）：「2-I-(7) 北目城跡」『年報16』仙台市文化財調査報告書第204集



図版27 北目城跡第5次調査出土遺物



1 遺構検出状況（南より）



2 調査区東壁断面中央部（西より）



3 調査区東壁断面南部（西より）

図版28 遺構検出状況と基本層序

1 遺構完掘状況（北から）



2 SE 1 井戸跡（東から）



3 井戸跡検出の息継ぎ穴（北から）



図版29 完掘状況と井戸跡

XI 南小泉遺跡第44次発掘調査報告書

1 調査要項

遺跡名	南小泉遺跡（宮城県遺跡番号01021）
調査地点	仙台市若林区遠見塚1丁目22番
調査期間	平成17年3月1日～3月3日
調査対象面積	29m ²
調査面積	18m ²
調査原因	防火水槽建築（仙台市消防局警防部計防課）
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担当職員	主査 工藤哲司 文化財教諭 今野秀治

2 調査に至る経過と調査方法

本調査は、平成16年12月14日付けで、仙台市消防局より公園内に直径約6m・深さ5mの掘削を伴う防火水槽の建築の発掘通知が提出されたので、確認調査を実施し、そのうえで必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。確認調査は、平成17年3月1日に実施した。建築予定地に3m×5mのトレンチを設定して調査を行なったところ、調査区内から多数の遺構が検出されたため、引き続き本調査を実施した。敷地の制約があったが、調査区の東側を掘削予定範囲に沿うように円形に拡張して調査を行った。



番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	南小泉遺跡	集落	自然堤防	縄文～近世	9	砂押1遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代
2	遠見塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳（前期）	10	砂押II遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代
3	若林城跡	城館	自然堤防	近世	11	神垂瀧遺跡	官衙関係	自然堤防	古代
4	奥徳園道路	城館	自然堤防	古代・中世・近世	12	中瀬西遺跡	散布地	自然堤防	弥生・古墳・古代
5	保春院前遺跡	集落	自然堤防	古代・中世・近世	13	沖野城跡	城館	自然堤防	中世
6	法徳塚古墳	円墳	自然堤防	古墳（後期）	14	仙台城跡余里跡	余里遺跡	後背溝地	古代
7	死塚古墳	円墳？	自然堤防	古墳（後期？）	15	中森遺跡	位向地	後背溝地	不明
8	猿塚古墳	円墳？	自然堤防	古墳（後期？）	16	小在家南遺跡	集落・墓地	自然堤防	弥生～中世

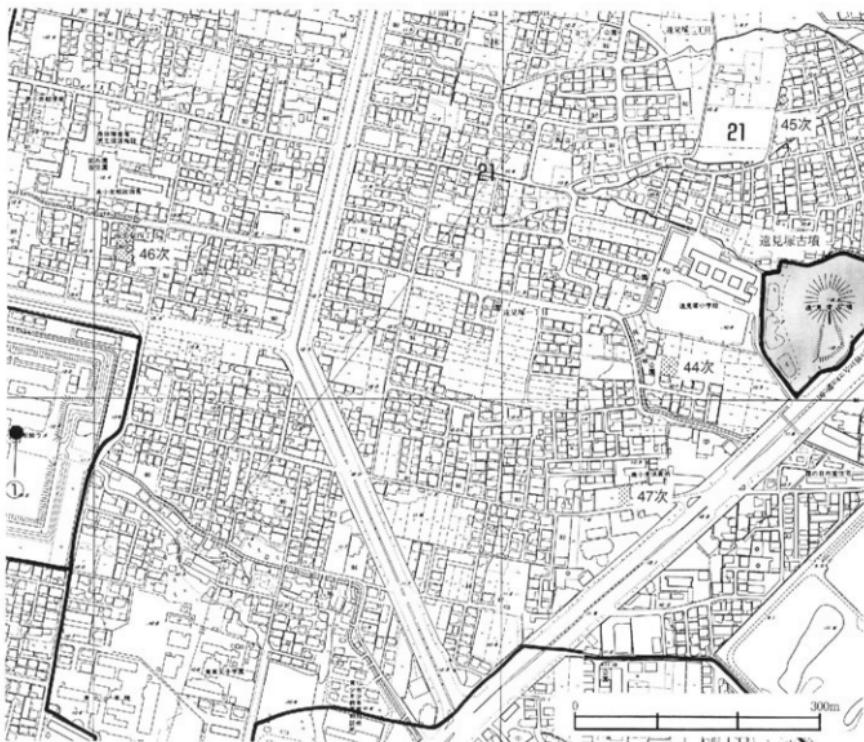
第63図 遺跡の位置と周辺の遺跡

3 遺跡の位置と環境

仙台市の東部は、北から七北田川・名取・広瀬川・阿武隈川の3河川が形成した「宮城野海岸平野」と呼ばれる沖積平野が広がり、河川の流域には扇状地・自然堤防・後背湿地・旧河道からなる複雑な地形を形成している。仙台湾と呼ばれる海岸部には3列の浜堤や潟湖性の低地が認められる。南小泉遺跡は、七北田川と名取・広瀬川に挟まれた沖積平野の発達した自然堤防上に立地している。標高は10m前後である。

南小泉遺跡は、仙台市内でも大きな遺跡のひとつで、東西約2km・南北約1kmの範囲に広がる。これまでの調査では、最古の時期としては縄文時代の遺物包含層が確認されている。その後は、弥生時代前期の土器や、弥生時代中期の土器植墓、古墳時代全期と奈良・平安時代の集落跡、中・近世の屋敷跡など各時代の遺構・遺物が発見されている。

周辺の遺跡は、東方約1kmの中在家南遺跡からは、弥生時代中期から古墳時代を中心とする木製品が多量に出土した河川跡や、古墳時代前期の方形周溝墓群などが発見されている。また南小泉遺跡内には、全長110mの前期の前方後円墳である遠見塚古墳がある。西に隣接する若林城跡の中では、埴輪を有する古墳が発見されている。北西側には後期の円墳である法領塚古墳などがある。奈良時代になると、遺跡の北西1kmには陸奥国分寺・国分尼



第64図 第44・45・46・47次調査区の位置

寺が建立される。近世には伊達政宗の晩年の居城として若林城が造営される。この地域は、縄文時代以来遺跡が形成され、特に古墳時代以降は陸奥国を中心とした地盤として栄えていたことがうかがわれる。

4 基本層序

盛 土 山砂による盛土層。層厚約5cm。公園造成の際の整地層。

- I 層 10YR3/3暗褐色のシルト層。層厚約20cm。公園造成前の畑の耕作土。
- II 層 10YR4/6褐色のシルト層。褐色土をわずかに含む。層厚約15cm。畑の耕作土。
- III 層 10YR5/6黄褐色の粘土層。褐色土をわずかに含む。地山。

5 発見遺構と出土遺物

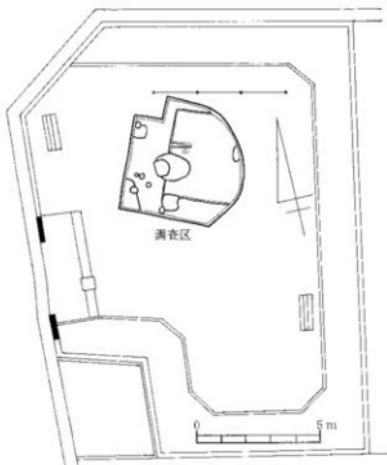
II層上面で、掘立柱建物跡1棟・竪穴住居跡1軒・土坑3基・ピット7個が検出された。

1) 掘立柱建物跡

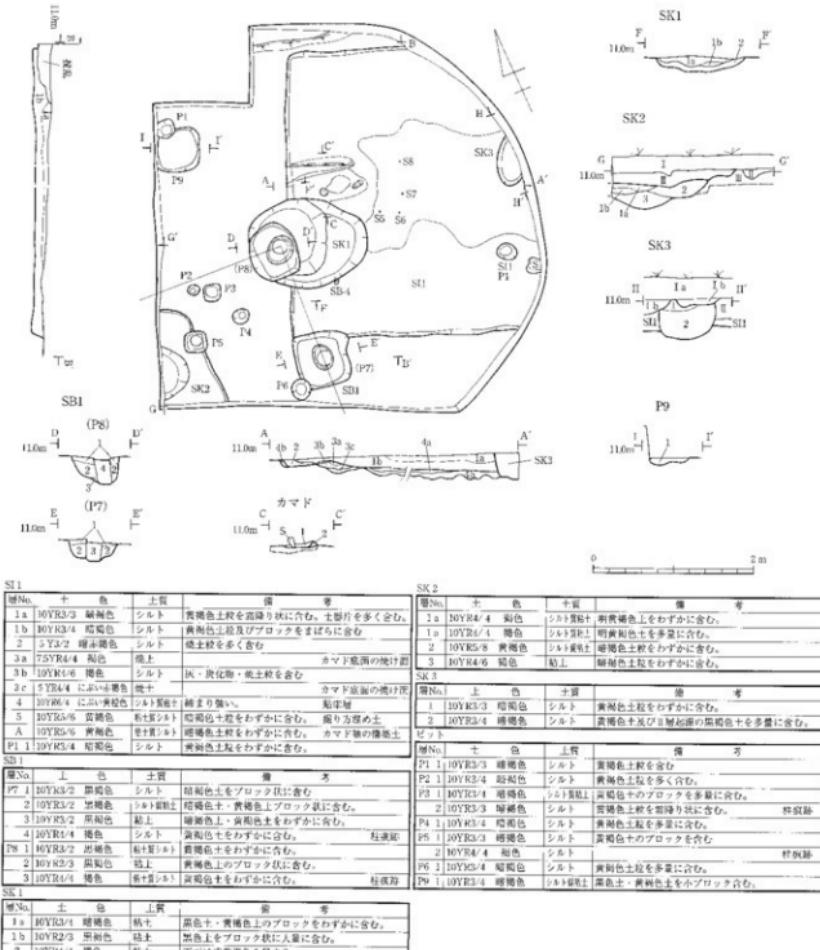
SB1 掘立柱建物跡 調査区の南西部で、柱穴が南北に並んで2基（P7・8）発見された。建物の西辺の北端部にあたると考えられる。SI1 竪穴住居跡を切るSK1 土坑を切っており、P7の南西角はP6に切られている。南北の柱間隔は柱痕跡の中央で計測して150cmである。東西の間隔は180cm以上である。柱穴掘り方は方形で、P7が東西65cm・南北68cm・深さ約20cm、P8が東西60cm・南北70cm・深さ20cmを測る。柱痕跡は直径18cm前後の円形である。柱痕跡の部分の柱穴底面は、3~5cm下がっている。堆積土は、掘り方が暗褐色土や黄褐色土のブロックを含む黒褐色の粘土質シルトないしシルト質粘土・粘土層で、柱痕跡が黄褐色土を含む褐色の粘土質シルトである。P7から土師器の小片20点・P8から土師器の小片21点が出土している。

2) 竪穴住居跡

SI1 竪穴住居跡 【位置・重複】 調査区東半で検出された。東部は調査区の外にのびる。西辺中央付近をSK1 土坑に切られる。また南辺の西端をSB1 掘立柱建物跡のP7に切られている。【平面形・規模・方向】 平面形は検出部の状況から方形ないし長方形を呈すると考えられる。大きさは、南北全長353cm・東西検出部長300cmを測る。【堆積土】 堆積土は、大別4層、細別8層に分けられた。遺構の深さは、検出面から床面までの残りの良いところで20cm前後である。1a層は暗褐色のシルトで黄褐色土粒を霜降り状に含み、住居跡の中央部の上部に分布する。1b層は、暗褐色のシルトで黄褐色土を粒状およびブロック状に含み、住居跡の全面の下部に分布する。2層は暗褐色のシルト層でカマドの奥壁部に分布する。3a層は住居廃絶時のカマド燃焼部底面の焼上層である。3b層は灰・炭化物・焼上粒を含むカマド内の堆積層である。3c層は初期のカマド燃焼部底面の焼土層である。4a層はカマドの前面から東壁に向って幅140cm前後の帯状に施設された貼り床層である。厚さは3cm前後で硬く縮まっている。4b層は掘り方の埋め土である。【床面・壁面】 床面はほぼ平坦である。壁面は、各辺とも残存部はほぼ直線的にのび

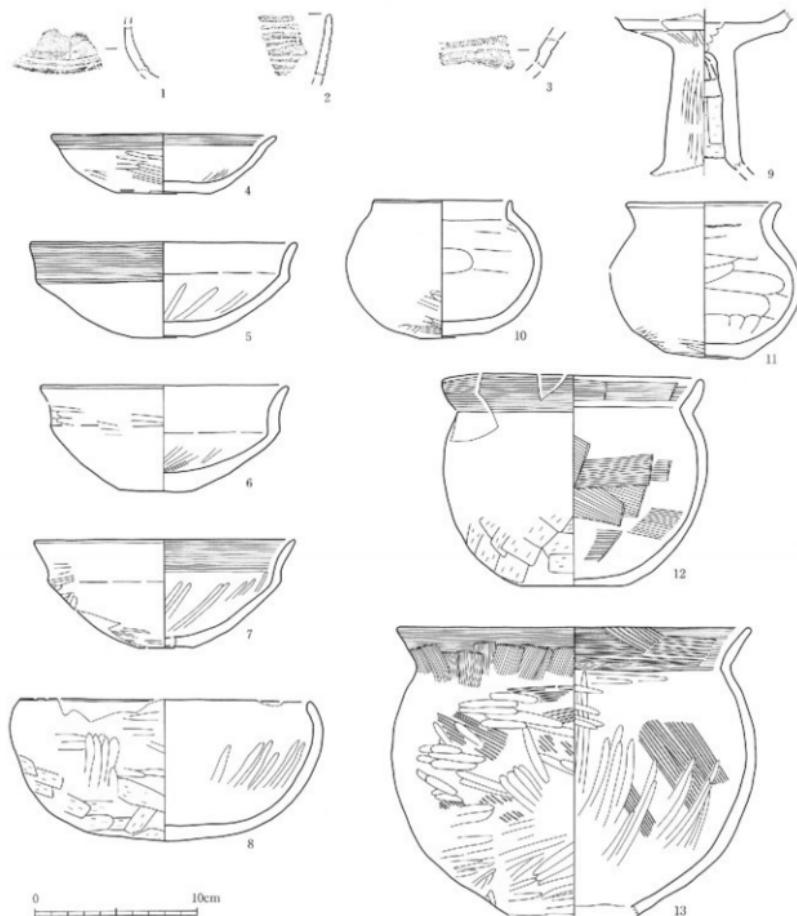


第65図 調査区配置図



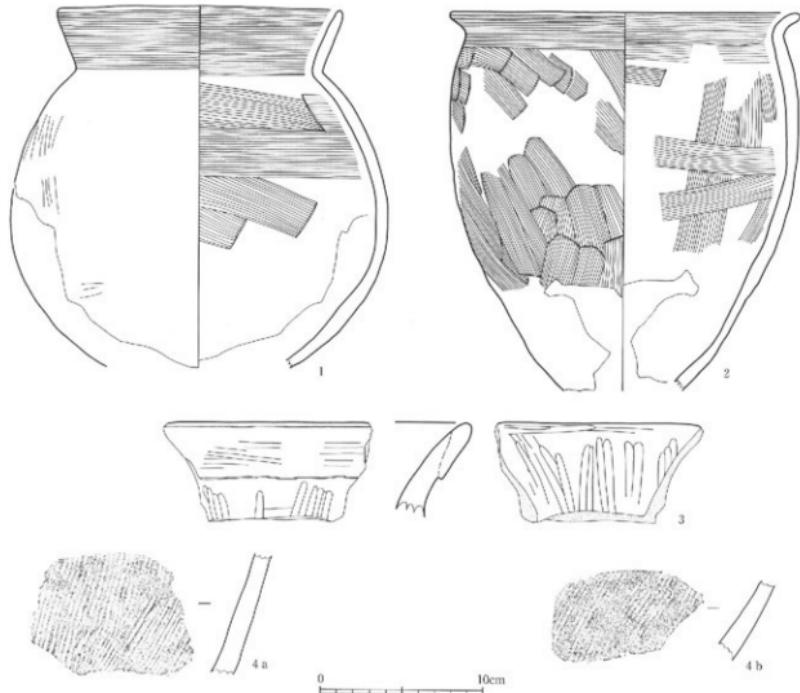
第66図 遺構実測図

る。立ち上がりは直角に近い。【柱穴・カマド・施設】柱穴は、床面では検出されなかった。カマドは西壁の中央に築かれている。カマド本体は、左袖はSK 1 土坑に切られているが、右袖は幅15cmで西壁面から長さ80cmほどのびることが確認された。右袖の南側が35cmの幅で焼けている。カマドの奥壁から50cmの所の焼上面の中央に支脚と考えられる棒状の立石が検出された。この石材の東側が強く焼けている。煙道は、住居の上面が削平を受けていたためか検出されていない。この他の施設としては、住居の東南部で直径20cm・深さ28cmのピットが1個検出されている。【掘り方】掘り方の深さは3~10cmで、掘り方の底面には大小の凹凸がある。掘り方埋め上(4b層)は、



図号 番号	登録 番号	出 上 地 点	分 類	法 量			特 徴 ・ 備 考	写真図版
				種別	分類	参考 基準		
1 B-3	SI-1	1層	弥生土器 底	47	(13.6)	5.6	外曲：平行沈痕	
2 B-1	SI-1	1層	弥生土器 底	59	16.2	3.9	外曲：波型文	
3 B-2	SK-2	弥生土器 底？	弥生土器 底	66	(15.6)	(4.8)	外曲：波型文	
4 C-5	SI-1	1層	赤コロナ土器型 杯	67	(16.0)	(3.5)	外曲：口縁へくち文、波型文、内底：口縁波痕、底部へくち文	
5 C-3	SI-1	床面	赤コロナ土器型 杯	88	17.8	外曲：口縁へくち文、波型文、底部へくち文		33-1
6 C-2	SI-1	床面	赤コロナ土器型 杯	86	18.8	4.0	外曲：口縁へくち文、波型文、底部へくち文	33-2
7 C-2	SI-1	床面	赤コロナ土器型 杯	97	(9.5)	4.7	外曲：口縁へくち文、波型文、底部へくち文	33-3
8 C-4	SI-1	床面	赤コロナ土器型 杯	132	(16.0)	6.5	外曲：口縁へくち文、波型文、底部へくち文	33-4
9 C-12	SI-1	1層	赤コロナ土器型 杯	182	21.6	外曲：口縁へくち文、波型文、底部へくち文	33-5	
10 C-6	SI-1	床面	赤コロナ土器型 杯	102	17.8	外曲：口縁へくち文、波型文、底部へくち文	33-6	
11 C-7	SI-1	床面	赤コロナ土器型 杯	9.7	10.2	外曲：口縁へくち文、波型文、底部へくち文	33-7	
12 C-8	SI-1	床面	赤コロナ土器型 杯	132	(16.0)	6.5	外曲：口縁へくち文、波型文、底部へくち文	33-8
13 C-9	SI-1	床面	赤コロナ土器型 杯	132	(16.0)	6.5	外曲：口縁へくち文、波型文、底部へくち文	33-9

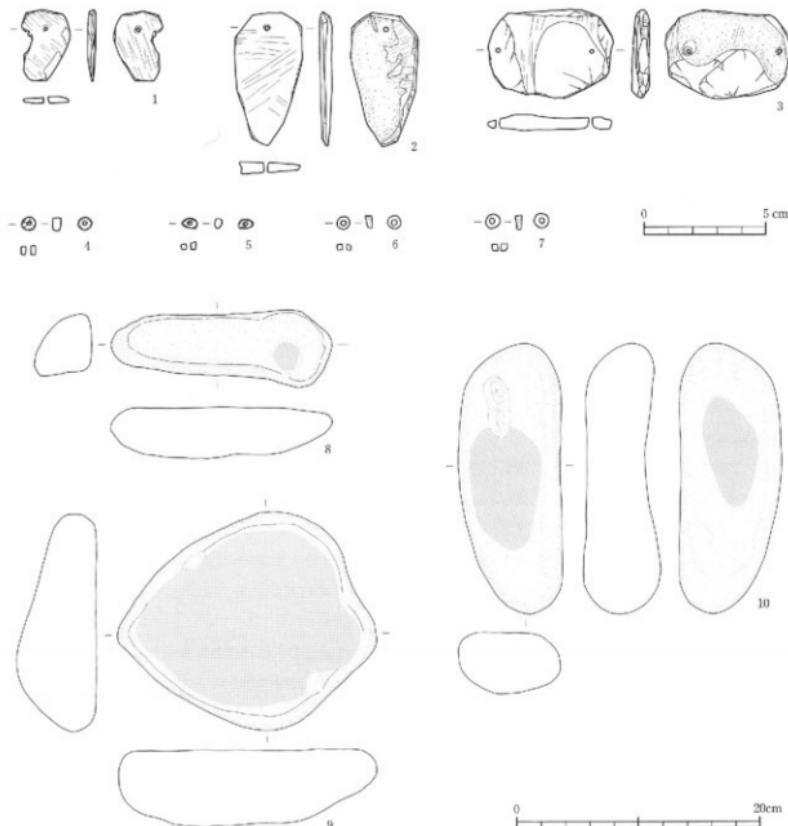
第67図 弥生土器・土師器 1



第68図 出土土師器 2 · 須憲器

基本層Ⅲ層を起源とする明黄褐色土のブロック状の粘土質シルト層で、暗褐色土をわずかに含んでいる。【遺物出土状況】床面からの遺物は、土師器がカマド右袖から住居跡北西角にかけての西壁際からまとめて出土している。ここから出土した土師器は、完形もしくは完形に近い壺・壺・壺などが10個体である。また、カマド前面の床面から4点の白玉と、南西角付近の床面から有孔円板1点と刻形1点の石製模造品（K-6・8～12）が出土している。【出土遺物】カマド右袖側の床面からまとめて出土した土師器には、杯4点（第67図5～8）、鉢2点（第67図10・11）、壺4点（第67図12・13第68図1・2）がある。壺は口縁部の幅が比較的広く、強く外反し底部が平底化したもの3点（C-1～3）と、やや大型で半球形の体部に内弯する口縁がつくもの（C-4）がある。鉢には球形の体部に短く直立する口縁がつくもの（C-6）と球形の体部に外反する口縁のつくもの（C-7）がある。壺は体部が球形のもの（C-8～10）と長胴のもの（C-11）がある。

また、住居の掘り方の埋め土中からは折り返し口縁の大型壺の口縁部片（C-13）が、堆積土1層中からは土師



図号 番号	登録 番号	出 土 地 点	分 類	後 量	(測定・測材・測地・分類)	行 徴・目 名	写真版
1 K-7	S-1	1層	石製模造品	胡蝶 2.9 2.0 0.1 2.0			
2 K-8	S-1	床面	石製模造品	胡蝶 3.5 2.8 0.5 9.0			34-6
3 K-6	S-1	床面	石製模造品	円板 3.6 5.1 0.7 16.0			36-7
4 K-9	S-1	床面	石製模造品	日字 0.6 0.6 0.4			36-8
5 K-30	S-1	床面	石製模造品	日玉 0.4 0.7 0.4			36-9
6 K-11	S-1	床面	石製模造品	日玉 0.5 0.6 0.3			36-10
7 K-12	S-1	床面	石製模造品	日玉 0.6 0.6 0.3			36-11
8 K-4	S-1	床面	搬石粉	搬石 18.1 6.3 4.5 720			36-5
9 K-5	S-1	搬石粉	搬石粉	搬石 21.2 17.0 6.5 3225			36-4
10 K-3	S-1	カマダ	搬石粉	搬石 12.3 8.3 6.2 1880			

第69図 石製模造品・石器

器坏（C-5）と高杯脚部（C-12）のほか、須恵器の壺の体部破片（E-1）も出土している。

土器・石製模造品以外には、床面から磨り面のある甕3点（第69図8～9）と堆積土1層中から湯の倉産と見られる黒曜石製の剥片2点（図版34-12・13）が出土している。

3) 土坑

SK1 土坑 調査区中央で検出された。SI 1 竪穴住居跡を切り、SB 1 挖立柱建物跡に切られる。平面形は梢円形を呈し、東西長軸145cm・南北短軸110cmを測る。断面形は舟底形で、深さは20cmほどである。西半が数cm低くなっている。堆積土は2層に分けられ、上部が暗褐色ないし黒褐色の粘土層で、下部は褐色の粘土層である。両層から土師器の破片が多数出土している。破片にロクロを使用したものは認められない。

SK2 土坑 調査区南西角で検出された。P 5 に切られる。検出部で南北127cm・東西77cmを測る。断面形は舟底形で、検出面からの深さは30cmほどで中央部が円形に一段深く掘られている。堆積土は大別3層に分けられ、1層が褐色粘土、2層が黄褐色シルト質粘土、3層が褐色粘土層である。堆積土中から土師器片18点がと弥生上器片3点が出土している。

SK3 土坑 調査区東辺中央で検出された。東部は調査区の外にのびる。掘り込み面はII層面である。平面形は検出部で梢円形を呈し、南北検出長軸60cm・東西検出短軸28cmを測る。断面形はU字形で、2層上面からの深さは50cmである。堆積土は2層に分けられ、1層が暗褐色シルト層、2層が黄褐色土色と黒褐色上のブロックを多量に含むシルト層である。堆積土中から土師器片11点が出土している。

4) ピット

P 1 平面形は直径23cmの円形で、深さ15cm。堆積土は黄褐色土粒を含む暗褐色シルト。

P 2 平面形は直径14cmの円形で、深さ7cm。堆積土は黄褐色土粒を多く含む暗褐色シルト。

P 3 平面形は1辺21cmの方形で、深さ13cm。堆積土は黄褐色土のブロックを含む暗褐色シルト。

P 4 平面形は直径20cmの円形で、深さ14cm。堆積土は黄褐色土粒を多量に含む暗褐色シルト。

P 5 平面形は1辺21cmの方形で、深さ44cm。直径12cmの円形の柱痕跡検出。堆積土は掘り方が黄褐色土のブロックを含む暗褐色シルト。柱痕跡は褐色シルト。

P 6 平面形は直径24cmの円形で、深さ38cm。堆積土は黄褐色土粒を多量に含む暗褐色シルト。

P 7 平面形は1辺55cmの方形で、深さ8cm。堆積土は黒褐色土と黄褐色土の小ブロックを含む暗褐色シルト。

6まとめ

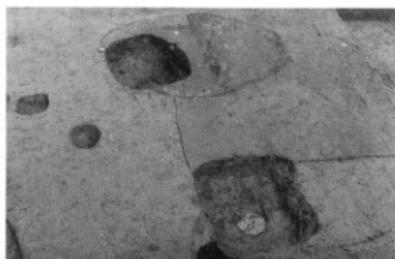
- ①竪穴住居跡は、カマドが敷設されていること、石製模造品が出土していること、堆積土中に須恵器が含まれること、口縁部の幅が広く外反する坏が含まれること、内面黒色処理された坏が含まれないことを勘案すると、仙台市鴻ノ巣遺跡第7次発掘調査報告書におけるⅢ期とⅣ期の中間期とした時に相当し、年代は5世紀後半と考えられる。
- ②掘立柱建物跡は、竪穴住居跡と比べると黑色系の土壤が堆積していることから、住居の埋没後さらに黑色系の土壤が堆積してから掘り込まれたものと考えられる。時期を決定する資料は、出土していないが、掘り方と柱痕跡の規模から考えて奈良または平安時代のものと推定される。
- ③土坑は、SK 1 土坑は重複関係から5世紀後半以降古代の間、SK 2 土坑は時期不明、SK 3 土坑はII層上面から掘り込まれていることから比較的新しい時期の遺構と考えられる。
- ④上記のとおり、本調査においては、周辺での調査状況と同様に多数の遺構が広がっており、5世紀後半の住居跡や古代の掘立柱建物跡などが検出された。

<参考文献>

仙台市教育委員会（2004）：「鴻ノ巣遺跡第7次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第280集



1 遺構検出状況（南東から）



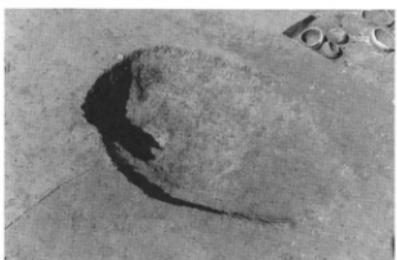
2 SB 1 挖立柱建物跡（南から）



3 SB 1 ピット 7 断面（南東から）



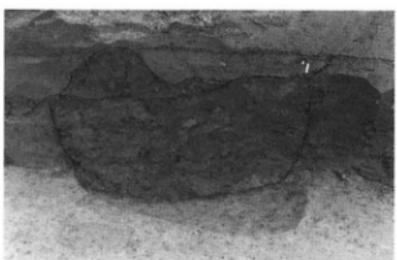
4 SB 1 ピット 8 断面（南から）



5 SK 1 土坑（南から）



6 SK 2 土坑（東から）



7 SK 3 土坑（西から）

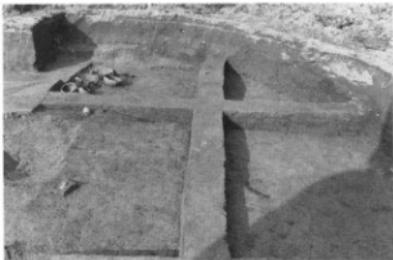


8 ピット 9（南から）

図版30 遺構検出状況・掘立柱跡建物跡・土坑他



1 SI 1 穹穴住居跡南北ベルト（西から）



2 SI 1 穹穴住居跡東西ベルト（南から）



3 住居跡床面検出状況（南から）

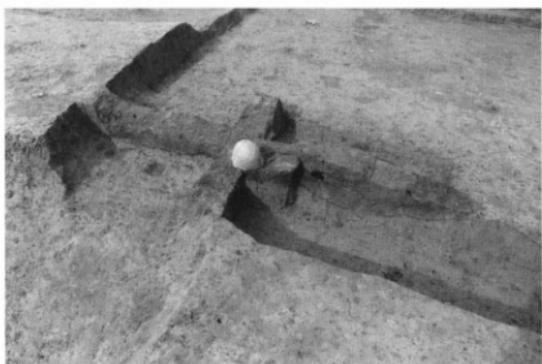


4 カマド右袖付近の土器出土状況（東から）



5 床面からの石製模造品出土状況

図版31 SI 1 穹穴住居跡 1



1 カマド部土層断面（南から）

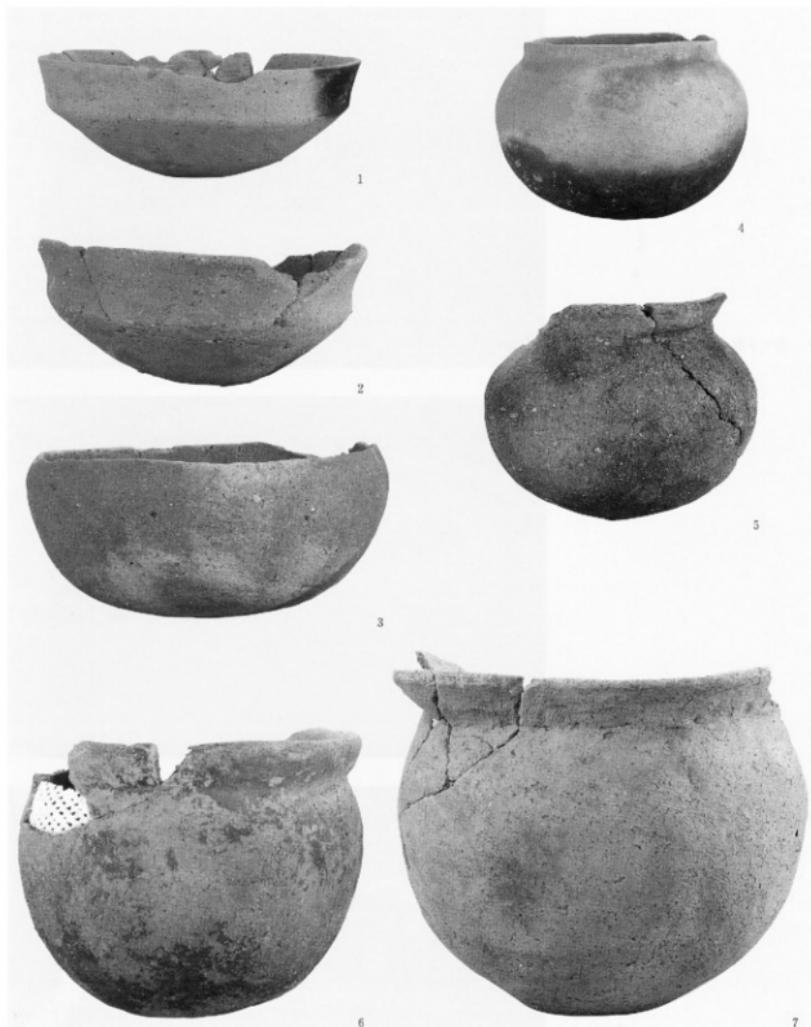


2 貼床・掘り方土層断面（南から）



3 調査区完掘全景（東から）

図版32 SI 1 竪穴住居跡 2・完掘全景



1 土師器 环 C-3 SI1床 (第67圖5)

2 土師器 环 C-2 SI1床 (第67圖6)

3 土師器 环 C-4 SI1床 (第67圖8)

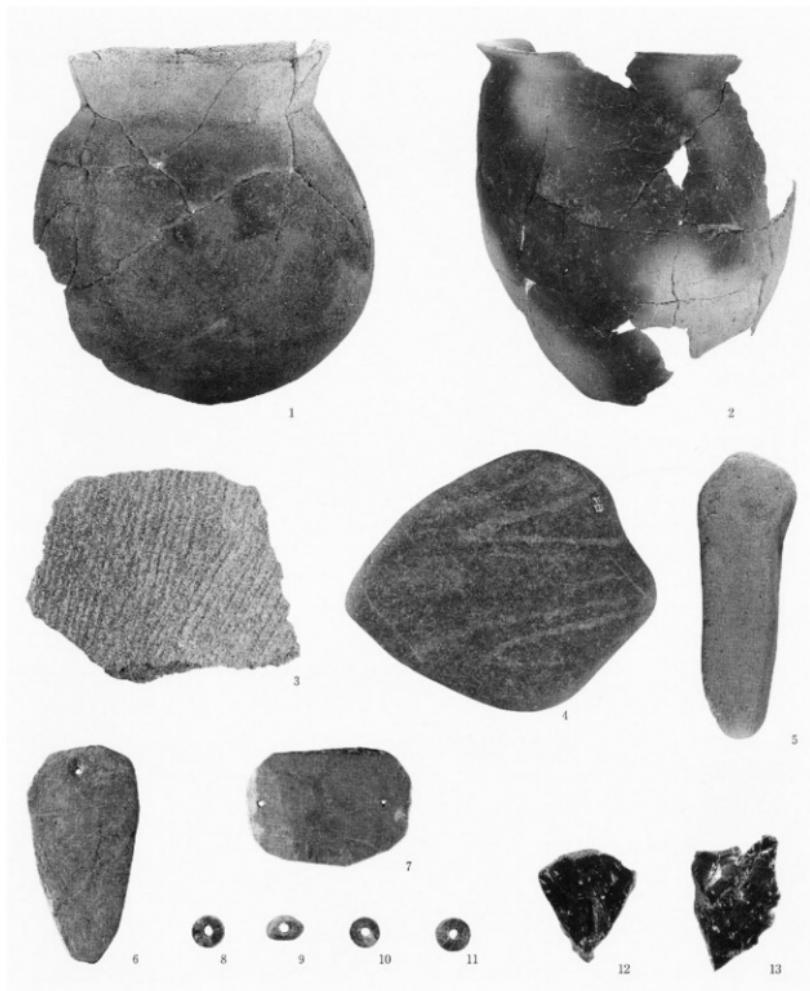
4 土師器 鉢 C-6 SI1床 (第67圖10)

5 土師器 鉢 C-7 SI1床 (第67圖11)

6 土師器 罐 C-8 SI1床 (第67圖12)

7 土師器 罐 C-9 SI1床 (第67圖13)

图版33 南小泉第44次調查出土遺物 1



1 士師器 瓢 C-10 SI1床(第68回1)
 2 士師器 瓢 C-11 SI1床(第68回2)
 3 爐底器 瓢 E-1 SI1床(第68回3)
 4 石製品 磨石 K-5 SI1床(第68回4)
 5 石製品 磨石 K-3 SI1床(第68回8)
 6 石製模造品 刀形 K-8 SI1床(第68回2)
 7 石製模造品 円盤 K-6 SI1床(第68回3)

8 石製模造品 白玉 K-9 SI1床(第68回4)
 9 石製模造品 白玉 K-10 SI1床(第68回5)
 10 石製模造品 白玉 K-11 SI1床(第68回6)
 11 石製模造品 白玉 K-12 SI1床(第68回7)
 12 黑瑪瑙 滴片 K-1 SI1床
 13 黑瑪瑙 滴片 K-2 SI1床

圖版34 南小泉第44次調查出土遺物 2

XII 南小泉遺跡第45次発掘調査報告書

1 調査要項

遺跡名	南小泉遺跡（宮城県遺跡番号01021）
調査地点	仙台市若林区遠見塚2丁目291-10・11番
調査期間	平成17年6月16日～6月17日
調査対象面積	76m ²
調査面積	32m ²
調査原因	個人住宅建築
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担当職員	主査 工藤哲司 文化財教諭 赤岡光騎

2 調査に至る経過と調査方法

本調査は、平成17年5月23日付けで、石森克明氏より長さ3mの杭打ちを伴う住宅建築の発掘届が提出されたので、確認調査を実施し、そのうえで必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。確認調査は、平成17年6月16Hに実施した。建築予定地に3m×7.5mのトレンチを設定して調査を行なったところ、調査区西半部から遺構と一緒に遺物が検出された。一括遺物を含む土層は南側にのびる可能性があるため、調査区の南西部を幅2.5m・長さ4mの範囲で拡張し、引き続き本調査を実施した。

3 遺跡の位置と環境

南小泉遺跡第44次調査で記述したとおり、当該地は仙台市の東部は、標高10m前後の沖積平野の自然堤防に立地している。縄文時代以降遺跡が形成され、古墳時代から奈良・平安時代にかけて集落跡や中・近世の屋敷跡など各時代の遺構・遺物が発見されている。周辺には古墳や集落・寺院などがあり、古くから栄えていた地域である。

4 基本層序

- 盛土 山砂の盛土層。層厚は20cm前後。
- I層 10YR3/4暗褐色の粘土質シルト層。層厚約30cm。畑の耕作土。
- II層 10YR4/4褐色の砂質シルト層。地山。下層に移行するにしたがって砂層に変化。

5 発見遺構と出土遺物

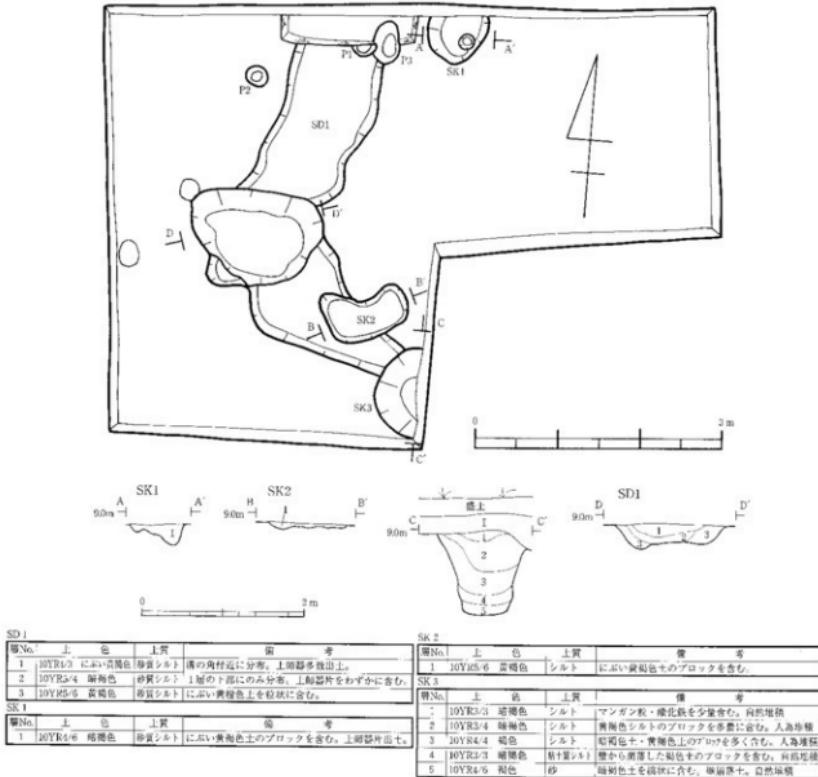
II層上面で、溝跡1条・土坑3基・ピット3個が検出された。



第70図 調査区と遺構配置

1) 溝跡

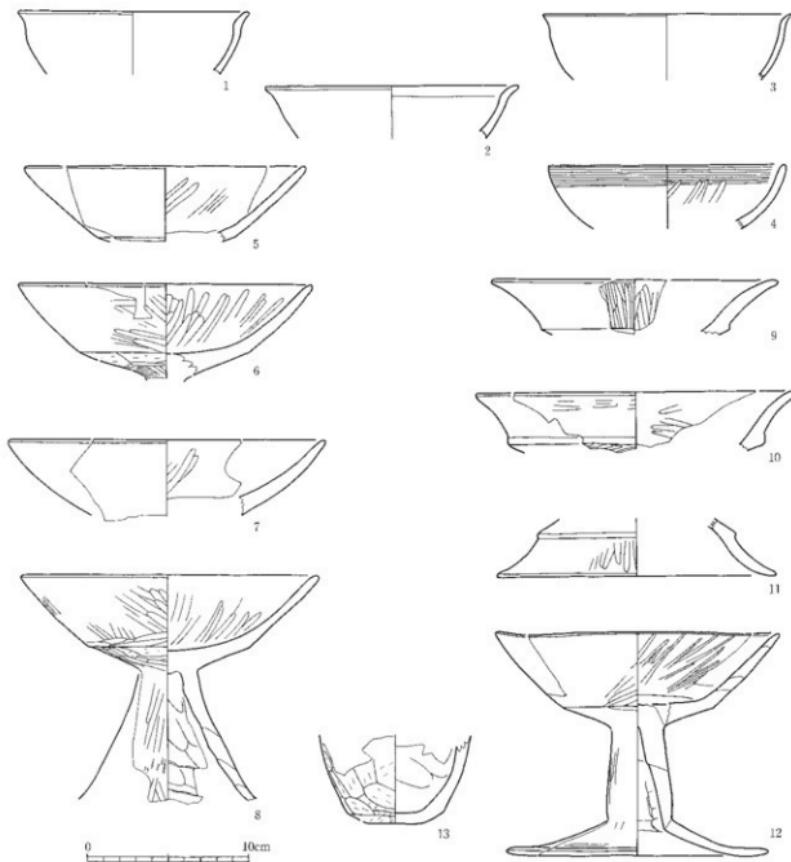
SD1溝跡 調査区の西部でL字状に折れて南北方向



第71図 遺構実測図

から東西方向に検出された。SK 2・3 上坑、P 1・3 に切られている。幅は上端で110cm、底面で90cm前後であるが、東西方向の部分の東端はこれより狭くなっている。深さは、8 cm前後であるが、角の部分が東西約160cm・南北約120cmの範囲が不整な円形に一段下がっており、検出面から30cmほどの深さがある。断面形は浅いU字形を呈する。堆積土は、角の部分で3層に分けられた。1層が10YR4/3のにぶい黄褐色の砂質シルトで、溝の角の部分にのみ分布し、土壠中からロクロ使用以前の土師器が多数出土した。2層は10YR5/4のにぶい黄褐色の砂質シルトで、1層の下部に分布する。土師器片をわずかに含む。3層は10YR5/6の黄褐色の砂質シルトで、にぶい黄褐色土を粒状に含む。角部以外の溝跡には3層が堆積する。角部分の不整円形の落ち込みについては、溝跡により新しい時期の遺構の可能性もある。

1層出土の土師器は、壺4点（第72図1～4）と高杯8点（第72図5～12）、壺または鉢1点（第72図13）の13点を実測した。壺は半球形の体部に短く外反する口縁が付き内面の体部と口縁部の境が軽く屈曲するもの（C-2・10・11）と体部から口縁部まで丸味をもって立ち上がるものの（C-12）がある。高杯は、杯部の外表面が底部と体部の境に軽い角が付いて体部から口縁にかけて内弯気味に立ち上がるもの（C-1・3～6）と外側の口縁部と



箇号	登録番号	出 土 場 所	地 点	取 材 No.	分 類	型 式	法 算	特 徴 ・ 備 考	写真回数
1	C-11	玉木層	遺構名 通称層	SD-1	1層	11	赤ロクロ土器盤 环	(3.0) (14.2)	内外面：摩滅
2	C-2	SD-1	1層	2	赤ロクロ土器盤 环		(3.4) (15.6)	内外面：素面	
3	C-10	SD-1	1層	11	赤ロクロ土器盤 环		(4.0) (15.4)	内外面：摩滅	
4	C-12	SD-1	1層	11	赤ロクロ土器盤 环		(4.0) (14.9)	外面：白羅ヨコナギ 内面：口縁ヨコナギ、側面ヘラミガキ	
5	C-6	SD-1	1層	6	赤ロクロ土器盤 环		(4.7) 17.2	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	
6	C-3	SD-1	1層	13-8-11	赤ロクロ土器盤 环		(5.7) 18.2	外面：ヘラミガキ、ヘラタグリのちヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	
7	C-6	SD-1	1層	7	赤ロクロ土器盤 环		(4.7) 19.5	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	
8	C-1	SD-1	1層	1	赤ロクロ土器盤 短柄		14.0 18.2	外面：不規ハラミガキ、ヘラタグリのちヘラミガキ、脚部ハマメのちヘラミガキ 内面：口縁ハラミガキ、脚部ハ	
9	C-8	SD-1	1層	9	赤ロクロ土器盤 短柄		(3.4) 17.6	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	
10	C-7	SD-1	1層	6	赤ロクロ土器盤 短柄		(3.7) 19.7	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	
11	C-9	SD-1	1層	11	赤ロクロ土器盤 短柄		(3.6) (17.6)	外面：ヘラミガキ 内面：不明	
12	C-4	SD-1	1層	4-5	赤ロクロ土器盤 深杯		13.9 (17.6) (16.0)	外面：井跡ハラミガキ、ヘラタグリのちヘラミガキ、脚部ハマメのちヘラミガキ 内面：井跡ヘラミガキ、脚部ハ	
13	C-13	SD-1	1層	11	赤ロクロ土器盤 帽または鉢		(4.5) 32	外面：ヘラタグリ 内面：ナデ	

第72図 出土遺物

体部の境に段がついて体部から口縁部にかけて軽く外反するもの（C-7・8）がある。C-9はC-7・8に比べて内面調整が荒いので脚部として復元したが、前者と似た形態を呈しているので、杯部の可能性もある。

2) 土坑

SK1 土坑 調査区中央の北壁付近で検出され、調査区の北側にのびる。重複はない。平面形は円形ないし梢円形を呈し、東西長軸72cm・南北検出部軸長62cmを測る。断面形は不整な舟底形で東側が深くなっている。深さは25cmほどである。堆積土は褐色の砂質シルト1層である。遺物は土師器の細片が1点出土しているだけである。

SK2 土坑 拡張部の東部で検出された。SD1溝跡を切る。三日月形に湾曲した土坑で、長軸110cm・短軸56cmを測る。深さは3~8cmと浅く底面には凹凸がある。堆積土は黄褐色のシルト1層で、にぶい黄褐色上のブロックを含む。出土遺物はない。

SK3 土坑 拡張部の東壁で検出され、東部は調査区の外にのびる。SD1溝跡を切る。検出部の状況から平面形は形を呈するものと考えられる。検出部の南北径は110cmを測る。断面形は逆台形で、深さは106cmである。堆積土は5層に分けられ、上部3層は人為的堆積土層、下部2層は自然堆積土層と観察される。出土遺物はない。

3) ピット

P1 平面形は直径14cmの円形で、深さ6cm。堆積土はにぶい黄褐色土のブロックを含む暗褐色砂質シルト。

P2 平面形は長軸52cm・短軸32cmの梢円形で深さ30cm。堆積土はにぶい黄褐色土を含む暗褐色砂質シルト。

P3 平面形は直径22cmの円形で、深さ14cm。堆積土は暗褐色土のブロックを含む褐色粘土質シルト。

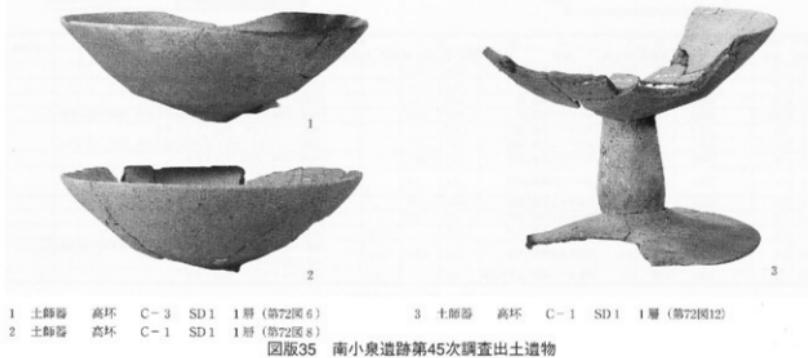
6まとめ

①今回の調査地点は、耕作等による搅乱が浅く、溝跡1条と土坑3基・ピット3個の遺構が検出された。

②SD1溝跡の1層から出土した土師器は、その形態的特長から仙台市鴻ノ巣遺跡第7次発掘調査報告書の出土土器の分類ではⅡ期前後に相当し、南小泉遺跡第26次調査SI5堅穴住居跡とほぼ同期の5世紀後半ころと考えられる。他の土坑やピットの年代は、時期を推定できる遺物がなく、所属時期は不明である。

<参考文献>

仙台市教育委員会（2004）：「鴻ノ巣遺跡第7次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第280集





1 遺構検出状況（西から）



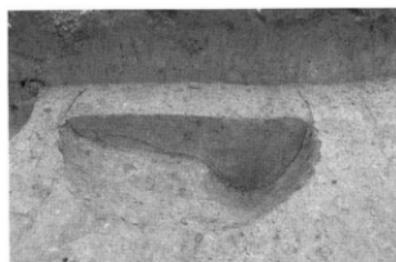
2 SD 1 溝跡遺物出土状況 1（東から）



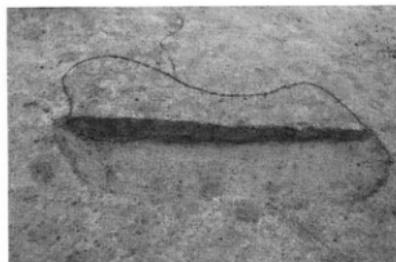
3 SD 1 溝跡遺物出土状況 2（南西から）



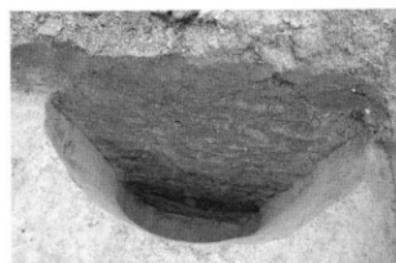
4 SD 1 溝跡堆積土断面



5 SK 1 土坑（南から）



6 SK 2 土坑（南東から）



7 SK 3 土坑（西から）



8 遺構完掘状況（西から）

図版36 南小泉遺跡第45次調査の状況

XIII 南小泉遺跡第46次発掘調査報告書

1. 調査要項

遺 跡 名 南小泉遺跡（宮城県遺跡番号01021）
調 査 地 点 仙台市若林区南小泉4丁目50-1 他1筆
調 査 期 間 平成17年11月28日～11月29日
調査対象面積 70m²
調 査 面 積 36m²
調 査 原 因 宅地造成に伴うガス・上下水道等施設設置工事
調 査 主 体 仙台市教育委員会
調 査 担 当 仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員 主査 工藤哲司 文化財教諭 赤岡光騎

2. 調査に至る経過と調査方法

本調査は、平成17年11月7日付で地権者ミハル・エステートマネージメント有限会社代表取締役 飯塚淑美氏より、宅地造成に伴うガス・上下水道等施設設置工事の発掘届が提出されたため行われた。

調査は、管路敷設予定地のうち、北側のコンクリート片等の入った擾乱が及んでいる部分を除いて、東西1.5m×南北24.5mのトレンチを設定し、重機により盛土及びI～II層（深さ約60cm）を除去し、III層上面を人力で精査した。

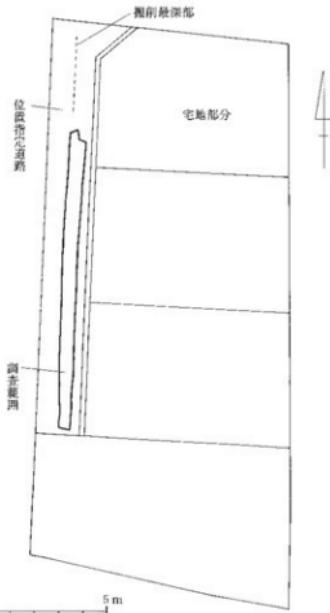
溝跡が検出されたため、調査区西半の下水管埋設による削平の可能性のある部分（幅約60cm）を掘り下げて調査を行った。

3. 遺跡の位置と環境

遺跡の環境については、第44次発掘調査報告書を参照されたい。今回の調査地点は、遺跡の南西部にあたり、標高は12.3mである。

4. 基本層序

約20cmの盛土層の下に大別3層・細別4層を確認した。I層は近年の畑耕作土で、上部約25cmのIa層と下部約25cmのIb層に分けられる。Ia層は褐色の粘土質シルト層である。Ib層は褐色のシルト質粘土層で、炭化物、土器片、黄褐色土ブロック、にぶい黄褐色土ブロックを含んでいる。II層は層厚約5cmの褐色のシルト



第73図 調査区配置図

質粘土層で、酸化鉄集積層である。もとは基本層Ⅲ層であると考えられる。Ⅲ層は黄褐色のシルト質粘土層で、地山である。

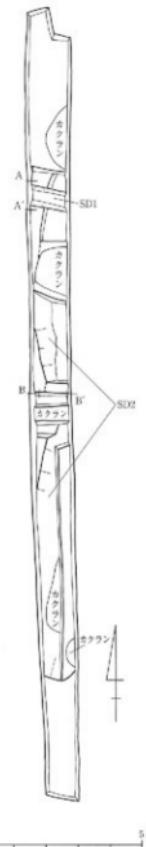
5. 発見遺構と出土遺物

検出された遺構は、溝跡2条である。

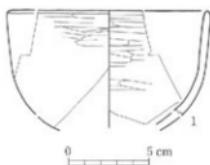
1) 溝跡

SD1溝跡 調査区北側に、調査区を東西方向に横切って検出された。SD2を切りっている。検出部の幅は上端で約50cm、断面形は浅いU字形で、深さは約20cmである。堆積土は2層に分けられる。1層から国分寺下層式と見られる非クロロ土師器坏（C-1）のほか、非クロロ土師器片1点、須恵器片2点が出土している。

SD2溝跡 調査区南側から縦に、中心軸はやや北東寄りに傾いて検出された。東側は調査区外に延びている。検出部の上面幅は断面実測位置で約75cm・底面幅は約25cmほどである。壁はゆるやかに立ち上がっており、本来の幅は少なくとも1m以上あると推定される。堆積土は5層に分けられ、粗砂、炭化物、土器片、焼土を含んでいる。調査区南端から約7mの地点で壁が立ち上がっていることから、溝跡は東方向に折れて調査区外に延びていると推定される。遺物は堆積土3層を中心として、坏7個体分、高坏1個体分、鉢3個体分、瓶1個体分のそれぞれ非クロロ土師器片のほか、鉄製品（刃子）1点が出土している。他に、岡化できない非クロロ土師器片が大小合わせて40点以上、須恵器片が3点出土している。C-2は、内外面が摩滅しており調整は不明である。浅身で底部が平底気味の坏である。C-3は体部外面の中央部に沈線を有する坏で、内面に対応する段等はみられない。丸味をもつ体部から、そのまま内弯気味に立ち上がり、沈線を境として上下に傾きの変化はない。調整は、内外面ともにヘラミガキである。C-4は、平底風の丸底の坏で、底部から丸味を持って立ち上がり、口縁部がわずかに外反している。外面は、口縁部～体部上半がヨコナデ、体部下半がナデ、底部に近い部分がヘラケズリで、内面はヘラナデのちヘラミガキ・黒色処理である。C-10は、体部外面の中央部に段を有する丸底風の平底の坏で、段の上は内



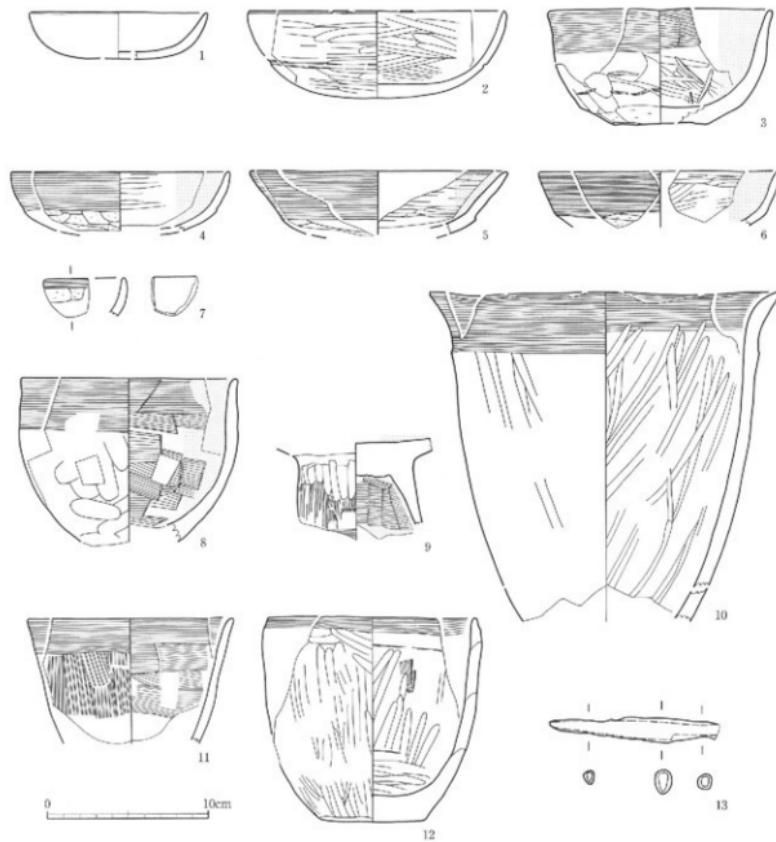
第74図 遺構平面図



0 5 cm

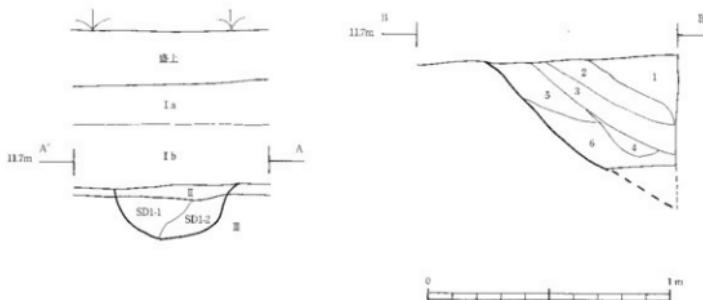
番号	発見 年	当 主	地 点	分 類	規 格	状 態	特 徴	考 考	写真図版
1	C-1	SD1	SD1	土器片	長方形	(6.5) (12.6)	厚	内面 ヘラミガキ	-

第75図 SD1溝跡出土遺物



図中 登録 番号	出土 場所	分 類	性 質	母 國	個 考	写真標板	
					(開口、志村、束縛、時期、分類)		
1	C-2	SD-2	土器部	环	(2.9) (11.0)	内外面 塵滅	
2	C-3	SD-2	土器部	环	5.5 (16.0)	内外面 ハラミガキ 口縁部と外縁の間に沈澱	39-1
3	C-4	SD-2	土器部	环	7.2 (13.9)	5.9 外縁:ヨコナギ、チヂ・ハラケズリ 内縁:ハラケズリのハラケズリ 深色焼	39-2
4	C-10	SD-2	土器部	环	(3.7) 13.5	外縁:ヨコナギ・ハラケズリ 内面:ヘラミガキ 花色焼	39-3
5	C-11	SD-2	土器部	环	(3.0) (14.8)	外縁:ヨコナギ・ナゲ 内面:ヘラミガキ 黒色焼	39-6
6	C-12	SD-2	土器部	环	(3.4) (15.0)	外縁:ヨコナギ、ハラケズリ 内面:ヘラミガキ、深色焼	39-4
7	C-13	SD-2	土器部	环	(2.4)	外縁:ヨコナギ・ハラケズリ 内面:ナゲ? 国家未定?	39-5
8	C-6	SD-2	土器部	环	(10.2) (13.4)	外縁:ヨコナギ・ハラケズリ・ナゲ 内面:ヘラナギ 深色燒	39-12
9	C-5	SD-2	土器部	高环	(6.3)	外縁:ハナギのちヘラナギ? ヨコナギ 内面:ヘラナギ 黑色燒	
10	C-8	SD-2	土器部	底	(20.5) 21.6	外縁:ナゲ 内面:ヨコナギ、ヘラミガキ	39-7
11	C-9	SD-2	土器部	底	(7.8) (12.7)	外縁:ヨコナギ、ハラケズリ 内面:ヨコナギ、ヘラナギ	39-8
12	C-7	SD-2	土器部	株	12.7 12.9	6.5 外縁:ヨコナギ・ハラケズリ 内面:ヨコナギ、ヘラミガキ	39-9
13	N-1	SD-2	鉢底部	丸子	(10.6) 1.6 11		39-11

第76図 SD2溝跡出土遺物実測図



基本層

層名	土色	土質	備考
Ia	IOYRa/4 棕褐色	板状至細緻作上部	山砂及び礫混じりの褐色土
Ib	IOYRa/4 棕褐色	シルト質粘土	炭化物、土器片、實褐色ブロック、に赤い葉緑色 上ブロックを含む
II	7.5YR8/6 黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄鉱種層 もとは基本層Ⅲ
III	10YR8/6 黄褐色	シルト質粘土	地山

SD 1

層名	土色	土質	備考
1	10YR8/4 暗褐色	シルト質粘土	シルト質粘土をわずかに含む。炭化物をわずかに含む
2	10YR8/2 黒褐色	シルト質粘土	褐色土を暗褐色に含む
SD 2			
1	10YR8/4 に赤い葉緑色	シルト質粘土	シルト質粘土をわずかに含む。炭化物をわずかに含む
2	10YR8/4 棕褐色	シルト質粘土	粗砂を多く含む。炭化物を含む
3	10YR8/2 棕黃褐色	シルト質粘土	成土・灰を多量に含む。しまなみし。土器片を多量に含む
4	7.5YR8/3 緑褐色	シルト質粘土	燒土を多く含む。
5	10YR8/6 棕褐色	シルト質粘土	粗砂を多く含む。炭化物、土器片を含む
6	7.5YR8/4 棕褐色	シルト質粘土	炭化物が多量に含む。上器片を含む

第77図 遺構断面図

夷氣味に立ち上がる。内面に対応する段等は見られない。調整は、段の上がヨコナデ、下がヘラケズリで、内面はヘラミガキ・黒色処理である。C-11は、体部外表面の中央部に段を有する丸底風の平底の坏で、底部から丸味を持って立ち上がり、段の上はほぼ直線的に外傾して立ち上がる。調整は、段の上がヨコナデ、下がナデ、内面はヘラミガキ・黒色処理である。C-12は、丸底風の平底の坏で、体部から内夷氣味に立ち上がっている。調整は、外面の口縁部はヨコナデ、体部～底部はヘラケズリで、内面はヘラミガキ・黒色処理である。C-13は、体部から内夷氣味に丸味を持って立ち上がる坏である。調整は、外面の口縁部はヨコナデ、体部はヘラケズリで、内面はナデと考えられる。小片ではあるが、他の坏とは調整が異なっており、関東系土師器である可能性も考えられる。C-5は、高坏の脚部である。中空で、ほぼ円筒形に立ち上がっている。調整は、外面がハケメのちヘラミガキ、底部に近い部分はヨコナデで、内面はヘラナデ・黒色処理である。C-6は、体部下半は丸味を持って立ち上がり、中央部からは直線的に内夷氣味に外傾し、口縁部はわずかに外反している鉢である。調整は、外面の口縁部～体部上部はヨコナデ、体部中央部～下半はヘラナデ・ナデで、内面はヘラナデ・黒色処理である。C-7は、底部から丸味を持って立ち上がり、中央部からは直線的にやや外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに内反している。調整は、外面の口縁部はヨコナデ、体部はヘラミガキ、内面は上半の一部にヘラナデが残るが全体にヘラミガキである。C-9は体部からほぼ直線的に外傾して立ち上がり、口縁部がわずかに外反している鉢である。調整は、口縁部が内外面ともにヨコナデ、体部外表面がハケメ、内面がヘラナデである。C-8は、体部が長く伸びる長胴形の瓶で、口縁部は小さく外反している。調整は、口縁部が内外面ともにヨコナデ、体部外表面はナデ、内面はヘラミガキである。他に、残存長10.6cmを測る刃子が1点出土している。これらの出土品は、その多くに仙台市中田南遺跡出土品の分類（太田：1994）による第Ⅲ群土器に類例が見られる。Ⅲ群土器は、「土師器編年」の栗説式の後半から圓分寺下層式の前半にかけての段階にあたる、年代としては7世紀末～8世紀前半（古墳時代末期～奈良時代前半）に相当する」

(太田：同)と考えられている。本調査区から出土した土師器の時期についても同様に、7世紀末～8世紀前半と位置づけておきたい。遺構の年代についても、他の時代の遺物が出土しておらず、ほぼ同じ形式の土師器が相当数まとめて出土していることから、遺物の年代にあたる7世紀末～8世紀前半に相当すると考えられる。

6.まとめ

- ①本調査区は、南小泉遺跡の西南部に位置する。
- ②現地表下約60cmの基本層Ⅲ層上面から溝跡2条（SD1・SD2）が発見された。
- ③SD1溝跡は、切り合いからSD2よりは新しいが、堆積土からの出土遺物が数点あるのみで、詳細な時期は不明である。
- ④SD2溝跡は、まとまった出土遺物から、古墳時代末期～奈良時代前半のものと推定される。

<参考・引用文献>

- 佐藤 洋（1987）『六反田遺跡Ⅲ』 仙台市文化財調査報告書第102集
 渡部 紀（1988）『下ノ内浦遺跡』 仙台市文化財調査報告書第115集
 中富 洋（1991）『山口遺跡 第9次・10次発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第151集
 太田昭夫（1994）『仙台市 中田南遺跡』 仙台市文化財調査報告書第182集
 小川淳一 高橋綾子（2000）『工ノ堀遺跡』 仙台市文化財調査報告書第249集
 佐藤敏幸・益子剛・苔原優子（2001）『赤井遺跡Ⅰ』 矢本町文化財調査報告書第14集
 村田晃一ほか（2005）『東北古代土器集成－古墳後期～奈良・集落編－』 東北古代土器研究会 宮城・福島文部
 工藤哲司ほか（2005）「IX 南小泉遺跡第41次発掘調査報告書」「山田本町遺跡ほか 発掘調査報告書」 仙台市文化財調査報告書第287集



1 SD 1 溝跡・完掘状況（北より）



2 SD 1 溝跡断面（東より）



3 SD 2 溝跡検出状況（南東より）

図版37 調査状況 1



4 SD 2 溝跡土器出土状況（東より）

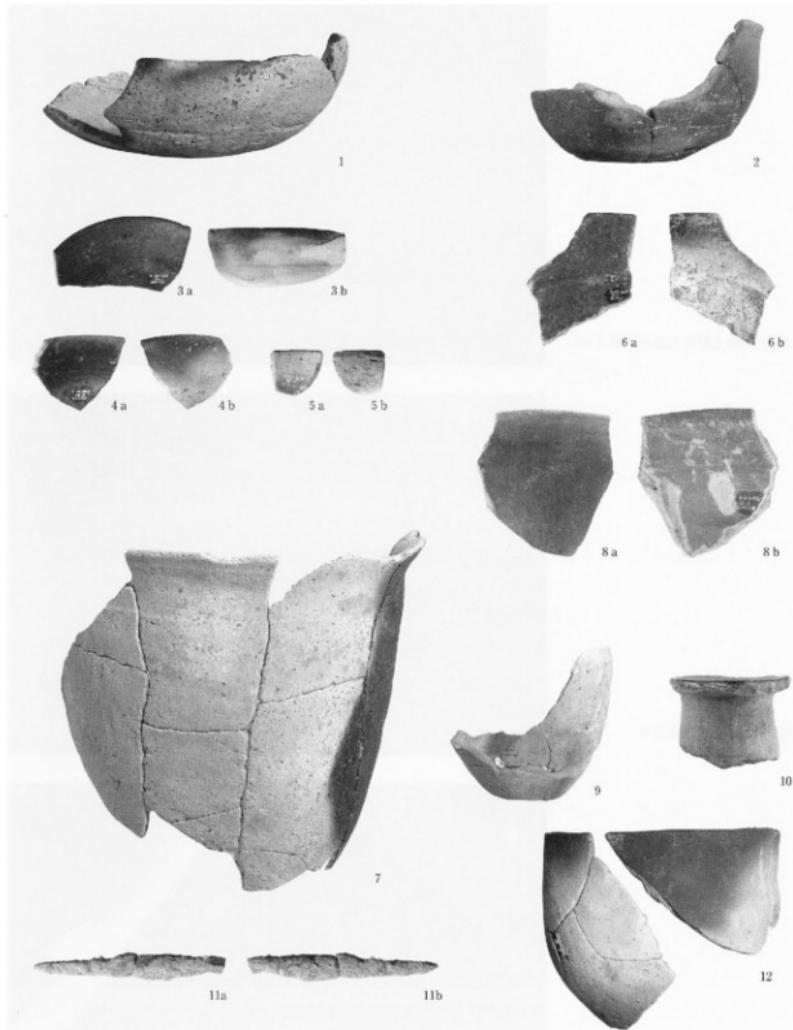


5 SD 2 溝跡断面（南より）



6 実掘全景（南より）

図版38 調査状況 2



1 土師器 壕 C-3 SD 2 (第76圖2)
 2 土師器 壕 C-4 SD 2 (第76圖3)
 3 土師器 壕 C-10 SD 2 (第76圖4)
 4 土師器 壕 C-12 SD 2 (第76圖6)
 5 土師器 壟 C-13 SD 2 (第76圖7)
 6 土師器 壟 C-11 SD 2 (第76圖5)

7 土師器 盆 C-8 SD 2 (第76圖10)
 8 土加器 鍤 C-9 SD 2 (第76圖11)
 9 土師器 鍤 C-7 SD 2 (第76圖12)
 10 上師器 高壘 C-5 SD 2 (第76圖9)
 11 武製品 刀子 N-1 SD 2 (第76圖13)
 12 土師器 鍤 C-6 SD 2 (第76圖8)

圖版39 南小泉遺跡第46次調查出土遺物

XIV 南小泉遺跡第47次発掘調査報告書

1 調査要項

遺跡名	南小泉遺跡（宮城県遺跡番号01021）
調査地点	仙台市若林区遠見塚1丁目37-1
調査期間	平成17年12月13日～12月15日
調査対象面積	64m ²
調査面積	32m ²
調査原因	個人住宅建築
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担当職員	主査 工藤哲司 文化財教諭 赤岡光騎

2 調査に至る経過と調査方法

本調査は、平成17年12月2日付で、地権者阿部順二氏より、柱状土壤改良の基礎工法による住宅建築に伴う発掘届が提出されたので、確認調査を実施し、そのうえで必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。確認調査は、平成17年12月13日に実施した。建物予定地に3m×8mのトレンチを設定して調査を行なったところ、掘立柱建物跡と竪穴住居跡または土坑が検出されたので、一部調査区を拡張し、引き続き本調査を実施した。

3 遺跡の位置と環境

遺跡の位置と環境は、第XI章南小泉遺跡第44次発掘調査報告の記載のとおりである。今回の調査地点は、南小泉遺跡の中央南部にあたり、周辺では古墳時代や古代の竪穴住居跡、中世の屋敷跡等の遺構が検出されている。

4 基本層序

現表土Ⅰ層は厚さ約100cmあり、3層に細分される。Ⅰa層は厚さ約20cmの暗褐色の粘土質シルト層で、現在の畑耕作土である。Ⅰb層は厚さ約40cmの明黄褐色の山砂による盛土層で、褐色粘土のブロックを含む。Ⅰc層は厚さ約40cmの暗褐色の粘土質シルトで、盛土以前の耕作土層である。Ⅱ層は明黄褐色のシルト層で、砂を多く含む。層厚は50cm前後である。Ⅲ層は明黄褐色の砂層である。Ⅱ層上面で遺構が検出されている。

5 発見遺構と出土遺物

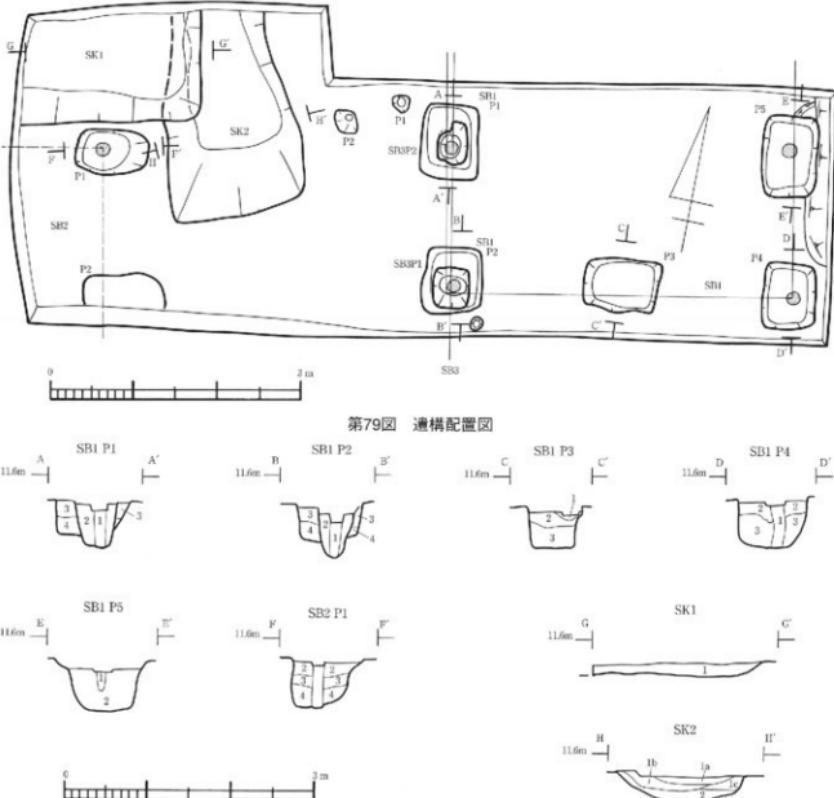
Ⅱ層で、掘立柱建物跡3棟、土坑2基、ピット3個が検出された。

1) 掘立柱建物跡

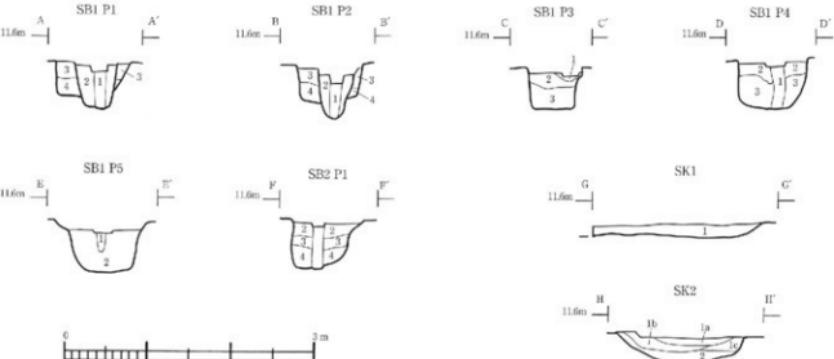
SB1 掘立柱建物跡 【位置・重複】調査区東部で5個の柱穴が検出された。建物の北部は調査区の北側にのび



第78図 調査区配置図



第79図 遷構配置図



SB1 - P 1 (SB3 - P 1と重複)

編No.	上色	土質	備考
1	HOYR2/4 緑褐色	シルト質土	SB3 - P 1柱面厚
2	HOYR2/4 緑褐色	泥(質土)	SB3 - P 1柱面厚 褐色土粒をわずかに含む
3	HOYR2/4 褐色	泥(質土)	SB1 - P 1 壁面方 細粒土・黄褐色土を含む
4	HOYR2/6 黄褐色	シルト	SB1 - P 1 壁面方 細粒土を多く含む

SB1 - P 2 (SB3 - P 2と重複)

編No.	上色	土質	備考
1	HOYR2/4 緑褐色	シルト質土	SB3 - P 2柱底厚 下部に黄褐色土のブロックを含む
2	HOYR2/4 緑褐色	泥(質土)	SB3 - P 2 壁面方 褐色土粒を多く含む
3	HOYR2/4 緑褐色	シルト質土	SB1 - P 2 壁面方 褐色土粒を部分的に含む
4	HOYR2/6 黄褐色	泥(質土)	SB1 - P 2 壁面方 褐色土粒を多く含む

SB1 - P 3

編No.	上色	土質	備考
1	HOYR2/4 緑褐色	シルト質土	褐褐色土のブロックを含む
2	HOYR2/6 黄褐色	シルト質土	褐褐色土のブロックを含む
3	HOYR2/6 黄褐色	泥(質土)	褐褐色土のブロックを含む。下部に砂を含む

SB1 - P 4

編No.	上色	土質	備考
1	HOYR2/4 緑褐色	シルト質土	下部4: 褐褐色土のブロックを含む
2	HOYR2/4 明褐色	シルト質土	褐色土粒をわずかに含む
3	HOYR2/6 黄褐色	泥(質土)	褐褐色土のブロックを含む。土器片を含む

SB1 - P 5

編No.	上色	土質	備考
1	HOYR2/4 緑褐色	シルト質土	黄褐色土をわずかに含む
2	HOYR2/4 緑褐色	泥(質土)	泥(質土) 褐褐色土のブロックを多量に含む

SB2 - P 1

編No.	上色	土質	備考
1	HOYR3/4 緑褐色	シルト質土	柱底部に黄褐色土を含む
2	HOYR3/4 緑褐色	シルト質土	壁面方 漢化物・土器片を含む
3	HOYR3/4 緑褐色	シルト質土	壁面方 褐色土のブロックを多量に含む
4	HOYR3/4 褐褐色	シルト質土	褐色土のブロックを含む

SK1

編No.	上色	土質	備考
1	HOYR2/4 緑褐色	シルト質土	黄褐色土のブロックを下部に含む

SK2

編No.	上色	土質	備考
1.a	HOYR3/4 緑褐色	粘土質土	褐色土粒を壁面方に含む
1.b	HOYR3/4 緑褐色	粘土質土	にぼい黄褐色土をわずかに含む
1.c	HOYR4/4 明褐色	粘土質土	壁面方
2	HOYR5/6 黄褐色	シルト	にぼい黄褐色土・新褐色土を含む。土器片を含む。

第80図 遷構断面図

ている。SB 3 挖立柱建物跡に西列を切られている。【規模・配置・方向】検出部の規模は、東西2間約420cm、南北2間以上で、検出部の柱間寸法は東列約180cm、西列は180cm前後と推定される。方向はN-11°-Wである。【柱穴・柱痕跡】柱穴は隅丸長方形を基調とし、長軸が80-100cm・短軸が61-71cmを測る。検出面からの深さは44-63cmである。柱穴の方向は、東西両列は南北方向に長軸を置き、南列の中央は長軸を東西方向に配置する。柱痕跡は底面で確認されたものを含めて3個検出されている。柱痕跡は円形で、直径は15-18cmを測る。【堆積土】掘り方の堆積土は、Ⅱ層起源の明黄褐色土を基調としているが、P 2・P 4柱穴の上部には黄褐色土粒をわずかに含む暗褐色のシルト質粘土が厚く堆積している。このことから、掘立柱建物の建築当時の地表面に暗褐色土層が存在したことが推定される。【出土遺物】堆積土中から土師器片・須恵器片・鉄滓片が少量出土している。土師器の中にはロクロ使用のものが含まれている。

SB 2 挖立柱建物跡 【位置・重複】調査区西部で2個の柱穴が検出された。2個のうち調査区南西の1個は、プランを確認しただけである。検出部分では他の遺構と重複はない。建物は調査区の南西側にのびていると考えられる。【規模・配置・方向】検出部の規模は、東西1間以上、南北1間以上である。P 2を調査していないので柱間寸法は不明であるが、柱穴の大きさと距離から180cm前後と推定される。方向はN-11°-W前後と推定される。【柱穴・柱痕跡】柱穴は隅丸長方形を基調とする。P 1で長軸が83cm・短軸が52cmを測る。検出面からの深さは60cmである。柱痕跡は直径13cmの円形で、柱穴の底面は2cmほど窪んでいる。【堆積土】掘り方の堆積土は、明黄褐色土のブロックを含む暗褐色土を基調としている。【出土遺物】遺物は、掘り方堆積土中から土師器片・須恵器片が少數出土している。

SB 3 挖立柱建物跡 【位置・重複】調査区中央部でSB 1 挖立柱建物跡の西側柱列の柱穴を切る2個の柱穴が検出された。当初SB 1 挖立柱建物跡の建て替えと考えられたが、SB 1 の西側柱列以外の3個の柱穴では新しい時期の柱穴が検出されなかったので別の建物と判断した。【規模・配置・方向】検出部は、南北1間分で、南北両方にのびているものと考えられる。検出部の柱間寸法は170cmである。方向はN-10°-W前後と推定される。【柱穴・柱痕跡】柱穴は隅丸方形を基調とする。P 1が東西46cm・南北48cmを測る。P 2が東西約45cm前後・南北49cmを測る。検出面からの深さは57-66cmで、SB 1 挖立柱建物跡の柱穴より10-20cm深く掘られている。柱痕跡は直径13cmの円形である。【堆積土】掘り方の堆積土は、暗褐色土を基調としている。【出土遺物】遺物は、掘り方から土師器片・須恵器片が数点出土している。

2) 土坑

SK 1 土坑 調査区北西角で検出された。西及び北方向にのびる。SK 2 土坑を切る。平面形は検出部で方形ないし長方形を呈し、検出部の東西軸長212cm・南北軸長132cmを測る。断面形は浅いU字形を呈し、深さは16cmほどである。堆積土は暗褐色のシルト質粘土1層である。遺物は土師器の細片が出土している。

SK 2 土坑 調査区の西部で検出された。北側は調査区外にのびる。SK 1 土坑に西辺の一部を切られる。平面形は長方形を呈し、溝状にのびる。検出部の南北長軸251cm・東西幅162cmを測る。断面形は浅い舟底形を呈し、深さは30cmほどである。堆積土は大別2層・細別4層に分けられる。遺物は2層から土師器片が出土している。

6 まとめ

- ①本調査区は、南小泉遺跡の中央南部に位置する。
- ②掘立柱建物跡3棟と土坑2基などの遺構が検出された。掘立柱建物跡は、時期を決定できる資料はないが、SB 1 挖立柱建物跡の掘り方からのロクロ使用の土師器片が出土していることから、平安時代の遺構と考えられる。他の建物跡も柱穴の形状等から平安時代に属するものと推定される。



1 遺構検出状況（西から）

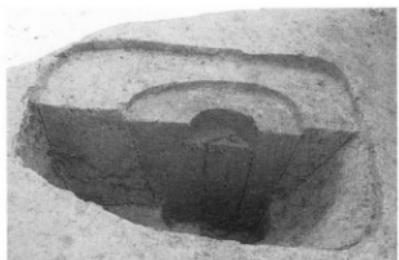


2 北壁東部上層断面（南から）

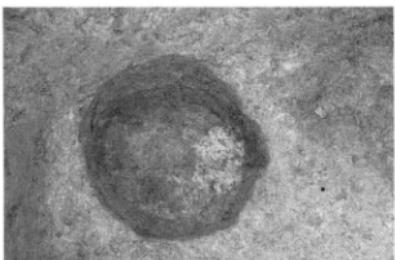


3 SB 1 据立柱建物跡検出状況
(北西から)

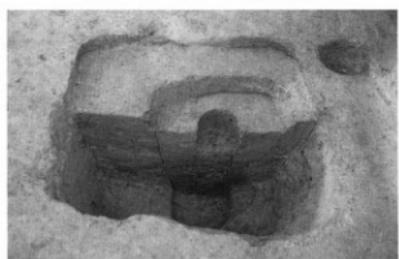
図版40 遺構検出状況



1 SB1-P1・SB3-P2断面（西から）



2 SB1-P1・SB3-P2底面（東から）



3 SB1-P2・SB3-P1断面（西から）



4 SB1-P3断面（西から）



5 SB1-P4断面（西から）



6 SB1-P5断面（西から）

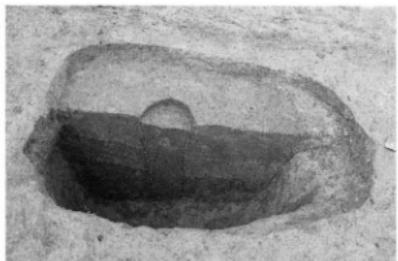


7 SB1-P5底面検出柱痕跡（西から）



8 SB1-3掘立柱建物跡（南東から）

図版41 SB1-3掘立柱建物跡



1 SB 2 - P 1 断面（南から）



2 SB 2 - P 2 検出状況（北西から）



3 SK 1 土坑（南東から）



4 SK 2 土坑（南から）



5 完掘全景（西より）

図版42 SB 2 堀立柱建物跡土坑全景

XV 袋前遺跡第2次発掘調査報告書

1 調査要項

遺跡名	袋前遺跡（宮城県遺跡番号01439）
調査地点	仙台市太白区大野田字袋前23の一部
調査期間	平成17年9月26日
調査対象面積	61m ²
調査面積	10m ²
調査原因	柱状土壤改良を伴う個人住宅建築
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担当職員	主査 工藤哲司 文化財教諭 赤岡光騎

2 調査に至る経過と調査方法

本調査は、平成16年9月5日付けで、相澤武雄氏より、深さ4mの柱状土壤改良を伴う個人住宅建築の発掘届が提出されたので、確認調査を実施し、そのうえで必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。確認調査は、平成17年9月26日に実施した。建築予定地に東西7.5m・南北4mのトレンチを設定して調査を行なったところ、盛土と表土層が合わせて1.5mの深さがあったので、実質の調査区は東西5m・南北2mの範囲となつた。IV層上面で遺構が検出されたため、引き続き本調査を実施した。

なお、袋前遺跡の調査次数については、平成10年度から継続して行われている富沢駅周辺地区画整理事業に伴う一連の発掘調査を第1次調査とし、本調査を第2次調査とした。

3 遺跡の位置と環境

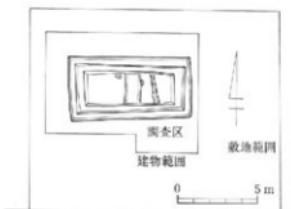
袋前遺跡は、仙台市の南部の郡山低地と呼ばれる地域にあり、南を名取川・北西から南東を広瀬川・北東から南西を大年寺丘陵に囲まれている。遺跡の近くは名取川の支流の一つである笊川が流れ、この河川が複雑な微地形を形成している。特に大野田周辺の自然堤防は、古い時代に形成され、縄文時代以来多くの遺跡が密に存在している。調査区付近の標高は10m前後である。

富沢遺跡では、地表から約5m下層から旧石器時代の焚き火跡や石器製作に関係する生活跡と森林が発見されている。縄文時代は、早期には下ノ内遺跡で竪穴住居跡・落とし穴、中期には六反田遺跡・下ノ内遺跡で竪穴住居跡、後期には六反田遺跡で竪穴住居跡、大野田遺跡で環状配石遺構、下ノ内浦遺跡で配石墓が発見され、この辺りの自然堤防上では縄文時代早期以来、活発な人間活動が行われたことが窺われる。弥生時代には自然堤防上の下ノ内遺跡や下ノ内浦遺跡では後期の竪穴遺構や土塙墓・壺棺が、後背湿地の富沢遺跡では中期から後期の水田跡が重層的に発見されている。古墳時代は、各遺跡に前期から後期の竪穴住居跡が散在しており、大野田古墳群では中期末から後期の前方後円墳や円墳があるほか、石棺墓・木棺墓なども発見されている。奈良・平安時代には、各遺跡で竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出されている。また、袋前遺跡・大野田古墳群・六反田遺跡に跨って溝で開まれた方形区画の中に大型の柱穴の建物群が存在することが明らかになってきた（平成16年度宮城県遺跡調査成果発表要旨・宮城県考古学会）。中世には王ノ塙遺跡に堀に囲まれた大規模な屋敷が形成され、多数の掘立柱建物跡のほか井戸跡・塙墓・火葬墓・土塙墓などがあり、近くには道路遺構も発見されている。

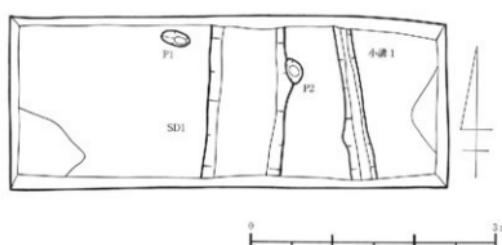


番号	遺跡名	種別	立地	時代と主要遺構
1	波前遺跡	集落	自然堤防	古墳：堅穴住居跡、古代：掘立柱建物跡・烟跡
2	山口遺跡	集落・水田跡	自然堤防・後背湿地	縄文：早期土坑・中期後方造土跡・弥生後水田跡、古代：堅穴住居跡、中世：掘立柱建物跡・井戸跡
3	富沢遺跡	集落・水田跡	後背湿地	旧石器：焼き火跡・縄文：早期落し穴・弥生～近世水田跡、中世：稻敷跡、近世：窓跡
4	下ノ内浦遺跡	集落・畠跡	自然堤防	縄文：早期堅穴住居跡・落し穴・後期配石造構（窓跡）、弥生：後期堅穴造構・土坑墓・壺形・近世：掘立柱建物跡
5	下ノ内浦遺跡	集落	自然堤防	縄文：中期堅穴住居跡、弥生：後期土坑・古墳：堅穴住居跡、古代：堅穴住居跡
6	袋東遺跡	散布地	自然堤防	縄文：中期堅穴住居跡
7	大友田遺跡	集落・墳墓	自然堤防	縄文：中期・後期堅穴住居跡、古代：堅穴住居跡
8	大野田古墳群	集落・古墳・煙跡	自然堤防	縄文：後期混合層・古墳：中～後期前方後円墳・円墳、古代：掘立柱建物跡・堅穴住居跡・烟跡、中世：ピット列
9	元袋遺跡	集落	自然堤防	弥生：水田跡・古代：堅穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・古墳：堅穴住居跡、中世：壺形
10	大野田遺跡	集落	自然堤防・後背湿地	縄文：後期堅穴造構・掘立柱建物跡・土坑・古墳：堅穴住居跡・烟跡
11	王ノ瀬遺跡	集落・屋敷・道路	自然堤防・後背湿地	縄文：後期堅穴造構・堅造土器・土坑・古代：壺形・中世：星敷跡（掘立柱建物跡・塙墓・火葬窓・土壁墓・井戸）
12	北尾敷遺跡	散布地	自然堤防	縄文：後期堅穴造構・堅造土器・土坑・古代：壺形・中世：星敷跡（掘立柱建物跡・塙墓・火葬窓・土壁墓・井戸）

第81図 調査区の位置と周辺の遺跡 (1/5000)



第82図 調査区配置図



第83図 遺構平面図

4 基本層序

盛 土 山砂・碎石・残土による盛土層。層厚約140cm。

I a 層 7.5YR3/2オリーブ黒色の粘土層。層厚約20cm。酸化鉄を斑状に含む。旧水田耕作土層。

I b 層 2.5YR4/3オリーブ褐色の粘土層。層厚5～10cm。I a 層水田の床土の酸化鉄集積層。

II a 層 10YR3/3暗褐色のシルト質粘土層。層厚約5cm。

II a 層 10YR4/3にぶい黄褐色のシルト質粘土層。層厚約5cm。酸化鉄を多量に含む。

III 層 10YR4/2灰黃褐色のシルト質粘土層。層厚5~10cm。マンガン粒をまばらに含む。

IV 層 10YR4/3にぶい黄褐色のシルト質粘土層。層厚約10cm。マンガン粒をわずかに含む。褐色土粒を含む。

V 層 10YR4/4褐色のシルト質粘土層。この層は数十cmあり細分も可能であるが、基本的には無遺物層で、遺構も検出されていない。

調査区の西半部は、I a 層からV層の上部に及ぶ擾乱を受け、遺構は残存していなかった。

5 発見遺構と出土遺物

IV層上面で、溝跡1条と小溝状遺構1条・ピット2個が検出された。

1) 溝跡

SD 1 溝跡 調査区の中央を南北に横断する。上面幅90~95cm・底面幅65~70cm・深さは35cm前後で断面形はU字形を呈するが、上部は広がっている。堆積土は3層に分けられる。1層は褐色土のブロックを多く含む暗褐色のシルト質粘土、2層は暗褐色のシルト質粘土、3層は崖面からの崩落土を含む暗褐色土ないしにぶい黄褐色土である。遺物は鉄滓が1点出土しているだけである。

2) 小溝状遺構

SD 1 溝跡の東側で1条が検出された。上面で幅20~30cm・底面幅6~12cm・深さは20cm前後で断面形は舟底形を呈する。方向は、SD 1 溝跡よりも北側が西に振れている。堆積土は上下2層に分けられる。1層は暗褐色のシルト質粘土で、2層は褐色土のブロックを含む黒褐色のシルト質粘土である。出土遺物はない。

この遺構は、周辺で検出されている小溝状遺構群と規模・堆積状況が類似していることから畑に関係する遺構と考えられる。

6まとめ

①今回の調査地点では、IV層上面で、溝跡1条と小溝状遺構1条などの遺構が検出された。

②SD 1 溝跡は、袋前遺跡周辺で検出されている方形区画溝とその内部で検出されている建物の方向とほぼ一致している。

③IV層で検出された遺構については、出土した遺物によって年代を特定できないが、富沢駅周辺地区調査事業にともなう周辺での調査で、古墳時代から平安時代の遺構が多数検出されていることから、この年代の遺構と判断される。



第84図 調査区・遺構断面図



1 遺構検出状況（東から）



2 基本層序と遺構断面（南から）



3 完掘全景（南西から）

図版43 袋前遺跡の調査状況

XVI 富沢遺跡第135次発掘調査報告書

1. 調査要項

遺跡名	富沢遺跡（宮城県遺跡登録番号01369）
所在地	仙台市太白区鹿野三丁目22-1他
調査原因	共同住宅建築工事
調査対象面積	2198.5m ²
調査面積	368m ² （実調査面積246m ² ）
調査期間	平成17年7月11日～11月8日
	1区：9月29日～11月8日
	2区：7月11日～8月24日
	3区：8月22日～10月6日
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育生涯学習部文化財課
担当職員	主査 佐藤甲一 文化財教諭 三塚博之 浅野克樹

2. 調査に至る経緯と調査方法

平成17年4月14日付けで、有限会社秋保温泉タクシー代表取締役千葉昌幸氏より共同住宅建設に伴う協議書が提出された。協議により、まず遺跡にかかる部分の確認調査を実施し、造構が広がることが明らかになった場合は隣接地の試掘調査を行うこととし、その結果必要な部分の本調査を行うこととした。

調査地点は、富沢遺跡の中央付近の北縁部に位置しており、遺跡の拡大も予想された。5月17日～18日に建物予定部分の3ヶ所にトレチを設定して調査を実施し、水田耕作土と見られる土層を検出した。遺跡隣接地の3区でも水田耕作土と見られる上層を検出したことから、6月27日にさらに北側で試掘調査を実施し、遺跡が北に広がっていることを確認した。

これを受けて平成17年7月11日より建物予定部分に3ヶ所の調査区を設定し調査を行った。調査区の名称は、南から「1区・2区・3区」とし、工事との関係で2区・3区・1区の順番で調査を実施した。調査区の面積はそれぞれ1区：東西8m×南北11m=88m²、2区：東西14m×南北8m=112m²、3区：東西14m×南北12m=168m²である。重機により盛土層を約120cm掘り下げた後、安全面を考慮して調査区を1mずつ縮小したため、実際の調査は1区54m²、2区72m²、3区120m²の範囲で実施した。調査は1層の除去から開始し、本調査区の南西約50mで行われた第79次調査区、第79次調査区の南で行われた第93次調査区、南東約300mで行われた第104次調査区等の調査結果をもとに水田跡の検出を崩ごとに実施した。

測量は、水田跡平面図は1/50平板測量、個別造構は1/20実測、断面図は1/20実測とした。

写真記録は35mmカメラでモノクロームとカラースライドで撮影した。実測は必要に応じて随時行った。

3. 遺跡の位置と環境

富沢遺跡は仙台市の南東部に位置し、仙台市太白区長町南・富沢・泉崎等に所在する。遺跡は名取川と広瀬川によって挟まれた沖積地（郡山低地）の西側にあり、北西を丘陵、他を自然堤防によって囲まれた後背湿地を中心にして立地している。遺跡の範囲は東西2km・南北1kmに及び、登録面積は約90haである。この一帯は30年前までは

主に水田として利用されていたが、現在は土地区画整理事業により盛土がなされており、大部分は住宅地になっている。盛土以前の旧地形は北西から南東方向に緩やかに傾斜していた。現在の標高は9~16mである。

高速鉄道（仙台市営地下鉄）の建設に伴う試掘及び調査で水田跡の存在が確認され、昭和58年（1983）に「富沢水田遺跡」として登録された。その後居住城等の発見によって昭和62年（1987）に「富沢遺跡」と改称されている。平成2年には北東部において遺跡範囲の拡大が行われている。

これまで100次を超す発掘調査が行われており、弥生時代から近世・現代までの水田跡が重層して検出されている。数地点では弥生時代の水田跡のさらに下層から縄文時代の遺構や遺物が発見されている。また、昭和62年（1987）～63年（1988）に実施された第30次調査においては、縄文時代の造構面の下層から後期旧石器時代の森林跡と焚火跡等の生活跡が発見され、国内外の注目を集め。現在、第30次調査地点には「地底の森ミュージアム（正式名称は仙台市富沢遺跡保存館）」が建築され、遺跡の保存と活用を行っている。その後の調査でも、第30次調査区周辺の数地点において旧石器時代の樹木群が検出されており、森林跡が富沢遺跡の北部を中心に広範に広がることがわかっている。

なお、富沢遺跡と山口遺跡の地形・地質および歴史的環境に関しては、富沢遺跡第15次調査報告書（斎野他：1987）、富沢遺跡第30次調査報告書（太田他：1991）に詳しい記載があるので、それらを参照されたい。



番号	遺跡名	種別	立地	時代	特徴	遺跡名	種別	立地	時代
1	富沢遺跡	盆地地	水田跡	新石器、縄文、弥生、古墳、古代		17	下ノ内浦遺跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代、中世
2	芦ノ口遺跡	柴落跡	丘陵	縄文、弥生、古代		18	波堤道路	散布地	自然堤防
3	上手内浦八幡山遺跡	柴落跡	丘陵斜面	古墳		19	下ノ内浦遺跡	集落跡	自然堤防
4	三神平遺跡	柴落跡	丘陵	縄文、古代		20	伊古田遺跡	集落跡	自然堤防
5	上手内浦八幡山遺跡	柴落跡	丘陵斜面	古墳		21	六反田遺跡	集落跡	自然堤防
6	土手内浦跡	柴跡	丘陵南斜面	古墳、古代		22	雲前遺跡	集落跡	自然堤防
7	西台遺跡	窓跡	丘陵麓	古代		23	大野田古墳群	円墳	自然堤防
8	原遺跡	散布地	丘陵麓	古代		24	春日社古墳	円墳	古墳
9	裏町東遺跡	散布地	丘陵麓	弥生、古代		25	伊古田B遺跡	散布地	自然堤防
10	宮沢上ノ台遺跡	散布地	自然堤防	古代		26	元袋遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防
11	宮沢清水道遺跡	散布地	丘陵麓	縄文、古代		27	大野田遺跡	祭祀、集落跡	自然堤防
12	堀ノ内遺跡	散布地	自然堤防	古代		28	丁ノ堀遺跡	集落跡、星形跡	自然堤防
13	鐵治屋敷八幡跡	集落跡	自然堤防	古墳、古代		29	長町駅東遺跡	集落跡	自然堤防
14	雪沢遺跡	城跡跡	自然堤防	中世		30	西台遺跡	混合地、墓塚跡	自然堤防
15	泉崎通遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代		31	郡山遺跡	礎跡、礎石、柱跡	自然堤防
16	山口遺跡	集落跡	自然堤防	小字		32	東城城跡	礎跡、礎石、柱跡	自然堤防
						33	美東遺跡	散布地	自然堤防

第85図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/25000)



第86図 開発範囲と調査地点の位置

 $Y = 3,400m$ $Y = 3,450m$

国道286号線

 $X = - 196,800m$ $X = - 196,800m$

3区試掘トレンド



開発対象範囲

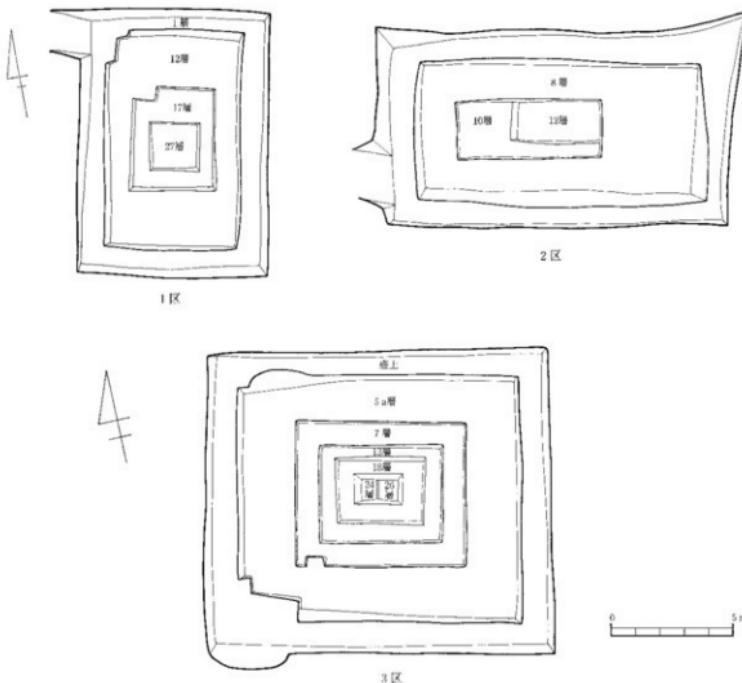


3トレンド

富沢通路
旧遺跡範囲 $Y = 3,400m$ $Y = 3,450m$

0 10 20 30m

第87図 開発範囲と調査区配置図



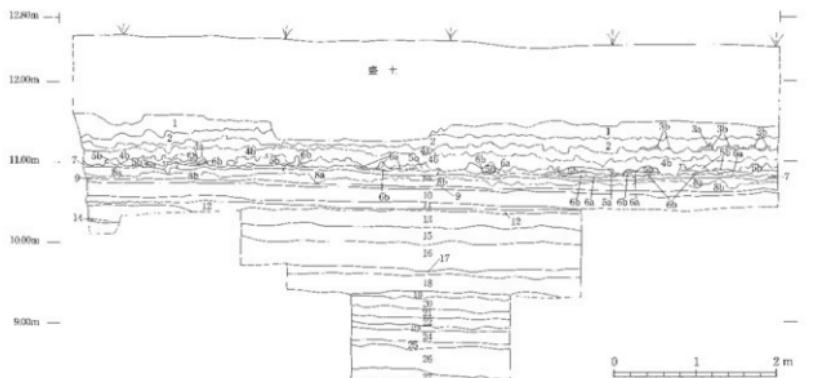
第88図 調査区実測図

4. 基本層序

土地区画整理事業の際の盛土が100~120cmあり、その下に旧表土の水田耕作土（I層）がある。調査区で確認した基本層は1区大別27層・細別32層、2区大別12層・細別15層、3区大別26層・細別30層である。2区と3区の基本層序はほぼ対応している。1区は9層まではほぼ対応しているが、10層以下についてはかなり異なるものとなっている。対応すると見られる層で比較すると、1区は2・3区に比べ標高が50~100cm低くなっていることから、地形の違いが堆積状況や土地利用等に影響を与えていると考えられる。

1) 1区

- 1 層 灰オリーブ色粘土。層厚は0~30cm。土地区画整理前の現代の水田耕作土である。
- 2 層 オリーブ黒色粘土。層厚は5~18cm。下面にゆるやかな乱れが見られる。近世以降の水田耕作土の可能性がある。
- 3 a 層 灰色粘土。2層水田跡の耕作に伴う掘削によって削平が著しく、調査区の南側でのみ確認した。自然堆積層で層厚は0~3cmである。



層位	土色	土質	備考	層位	土色	土質	備考
1層	7SY4/2 黒オリーブ色	粘土	下面に酸化鉄の帯が見られる。田畠耕作土。	12層	SY4/2 黒オリーブ色	泥炭	全体に植物遺体を含む。
2層	SY3/1 オリーブ黒色	粘土	下層の土を巻き込んでいる。近代の水田耕作土。	13層	10Y3/2 黒色	泥炭	全体に植物遺体を多量に含む。
3a層	10Y1/1 黒色	粘土	測定区の街路でのみ見られる。	14層	2SY4/2 黒オリーブ色	泥炭	測定区北側溝の側壁でのみ確認。
3b層	10Y1/1 黒色	粘土		15層	SY5/2 黒	泥炭	全体に植物遺体を多量に含む。
4a層	2SY3/1 黒褐色	粘土	下層に亂れが見られる。 灰白色火山灰のブロックを多量に含む。 平安時代の水田耕作土。	16層	10Y1/1 黒色	泥炭	全体に植物遺体を多量に含む。
4b層	2SY2/1 黑	粘土	下層の土を巻き込んでいる。 灰白色火山灰のブロックを少量含む。 平安時代の水田耕作土。	17層	2SY4/2 黒灰褐色	泥炭	全体に植物遺体を多量に含む。
5a層	SY4/2 黒オリーブ色	粘土	上の層の形態で堆積状況は似て無い。	18層	10Y1/1 黒色	泥炭	全体に植物遺体を多量に含む。
5b層	10Y1/1 黑色	粘土	全体に植物遺体を含む。本山耕作土。	19層	SY4/2 黒オリーブ色	泥炭	全体に植物遺体を含む。
6a層	SY3/1 オリーブ黒色	粘土	全体に植物遺体を含む。水田耕作土。	20層	2SY2/1 黒色	泥炭	全体に植物遺体を含む。
6b層	SY3/2 黒オリーブ色	粘土	測定区の東側でかすかに確認した。	21層	SY4/2 黒オリーブ色	泥炭	全体に植物遺体を含む。
7層	SY2/1 黒色	粘土	全体に植物遺体を含む。	22層	SY3/1 黑褐色	泥炭	全体に植物遺体を含む。
8a層	2SY4/1 黒褐色	粘土	全体に植物遺体を含む。水田耕作土。	23層	5Y3/2 オリーブ黒色	泥炭	全体に植物遺体を含む。
8b層	2SY3/1 黑褐色	粘土	全体に植物遺体を多量に含む。	24層	2SY4/2 黒灰褐色	泥炭	全体に植物遺体を含む。
9層	10Y3/3 黒褐色	粘土	全体に植物遺体を多量に含む。	25層	10Y2/1 黒色	泥炭	全体に植物遺体を含む。
10層	10Y1/1 黑	粘土	全体に植物遺体を含む。	26層	2SY2/1 黑	泥炭	全体に植物遺体を含む。
11層	2SY4/1 黑褐色	粘土	全体に植物遺体を含む。乱れ砂を含む。 平安時代の水田耕作土。	27層	SY5/2 黒オリーブ色	粘土	2SY6/2 黑褐色粘土とV層

第89図 1区東壁断面図

3 b 層 黒色粘土。2層による搅拌が著しい。自然堆積層で層厚は0~4cmである。

4 a 層 黒褐色粘土。層厚は2~20cm。灰白色火山灰のブロックを含み、下面に乱れが見られる。平安時代の水田耕作土である。

4 b 層 黒色粘土。層厚は0~25cm。1区でのみ確認した。下層の土を巻き込んでおり、灰白色火山灰降下以前の水田耕作土と考えられる。

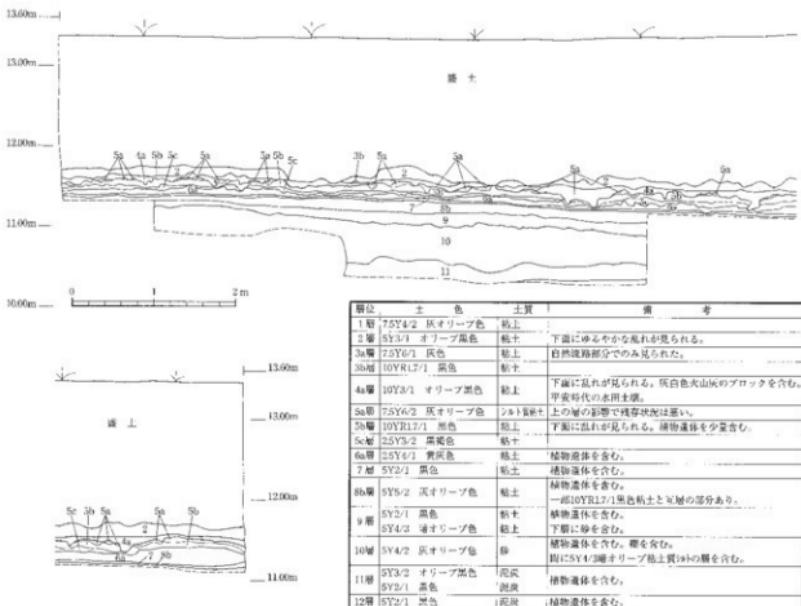
5 a 層 灰オリーブ色粘土。1区では削平が著しくほとんど確認することはできなかった。自然堆積層で層厚は0~5cmである。

5 b 層 黒色粘土。層厚は0~15cm。植物遺体を含み、下面に乱れが見られる。水田耕作土。なお、5b層の母材層と見られる5c層は1区では確認できなかったが、これが後の掘削によるものか、堆積の違いによるものかは不明である。

- 6 a 層 オリーブ黒色粘土。層厚は0～8cm。植物遺体を含む。水田耕作土。
- 6 b 層 灰オリーブ色粘土と黒色粘土の互層。6 a層の削平が著しく、調査区の東壁でかすかに確認したのみである。自然堆積土で層厚は0～5cmである。
- 7 層 黒色粘土。植物遺体を含む。自然堆積土で層厚は0～7cmである。
- 8 a 層 黄灰色粘土。層厚は2～16cm。植物遺体を含む。弥生時代の水田耕作土の可能性がある。石器が1点出土している。
- 8 b 層 黄褐色粘土と黒色粘土の互層。植物遺体を含む。自然堆積土で層厚は2～16cmである。石器が2点出土している。
- 9 層 黑褐色粘土と黒色粘土の互層。層厚は2～5cm。植物遺体を含む。
- 10 層 黄褐色粘土と黒色粘土の互層。層厚は15～20cm。植物遺体を含む。
- 11 層 黄灰色粘土。層厚は4～11cm。植物遺体を含む。一部砂を含む。弥生時代の水田耕作土。
- 12 層 灰オリーブ色泥炭と黒色泥炭の互層。層厚は3～11cm。植物遺体を含む。
- 13 層 黑褐色泥炭と暗灰黄色泥炭の互層。層厚は13～20cm。植物遺体を含む。
- 14 層 灰オリーブ色砂。層厚0～4cm。調査区北東の剝離でのみ確認した。確認調査では1区の東隣の2トレチで確認した（層厚10cm前後）が、西隣の1トレチでは確認していない。2区・3区の10層に対応する層と考えられる。
- 15 層 暗灰黄色泥炭と暗褐色泥炭の互層。層厚15～25cm。植物遺体を含む。
- 16 層 黒色泥炭。層厚28～35cm。植物遺体を含む。
- 17 層 暗灰黄色泥炭と暗褐色泥炭の互層。層厚5～12cm。植物遺体を含む。
- 18 層 黒色泥炭。層厚18～26cm。植物遺体を含む。
- 19 層 灰オリーブ色泥炭と黒褐色泥炭の互層。層厚5～10cm。植物遺体を含む。
- 20 層 黒色泥炭。層厚9～20cm。植物遺体を含む。
- 21 層 灰オリーブ色泥炭と黒褐色泥炭の互層。層厚9～14cm。植物遺体を含む。
- 22 層 黒色泥炭。層厚8～12cm。植物遺体を含む。
- 23 層 オリーブ黒色泥炭。層厚4～8cm。植物遺体を含む。
- 24 層 暗灰黄色泥炭と黒褐色泥炭の互層。層厚11～16cm。植物遺体を含む。
- 25 層 黒色泥炭。層厚5～10cm。植物遺体を含む。
- 26 層 黒色泥炭と黒褐色泥炭の互層。層厚24～38cm。植物遺体を含む。
- 27 層 灰オリーブ色粘土。層厚15cm以上。一部に砂を含む。

2) 2区

- 1 層 灰オリーブ色粘土。土地区画整理前の現代の水田耕作土である。2区では後の削平を受け、ほとんど確認することができなかった。
- 2 層 オリーブ黒色粘土。層厚は0～15cm。下面にゆるやかな乱れが見られる。近世以降の水田耕作土の可能性がある。
- 3 a 層 灰色粘土。層厚は0～8cm。自然流路部分の堆積土。
- 3 b 層 黑色粘土。層厚は0～4cm。調査区の南半でのみ確認。
- 4 a 層 オリーブ黒色粘土。層厚は2～20cm。灰白色火山灰のブロックを含み、下面に乱れが見られる。平安時代の水田耕作土である。

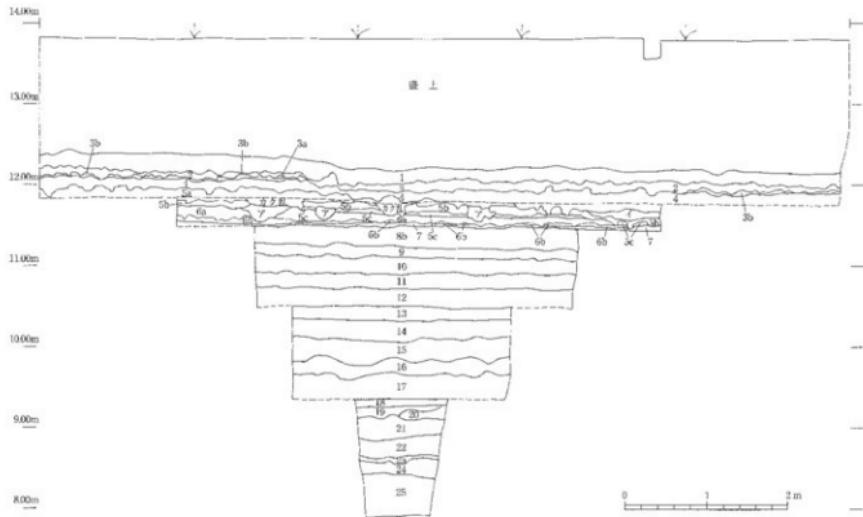


第90図 2区北壁断面図

- 5 a層 灰オリーブ色シルト質粘土。層厚は0~5cm。上層の削平を受け残存状況は悪い。
- 5 b層 黒色粘土。層厚は0~15cm。下面に乱れが見られる。植物遺体を少量含む。水田耕作土。
- 5 c層 黒褐色粘土 層厚は0~10cm。2・3区で確認した。5b水田層の母材層と考えられる。
- 6 a層 黄褐色粘土。層厚は0~8cm。植物遺体を含む。水田耕作土。
- 7 層 黒色粘土。層厚は0~7cm。植物遺体を含む。
- 8 b層 灰オリーブ色粘土。層厚は2~16cm。植物遺体を含む。
- 9 層 黒色粘土と暗オリーブ色粘土の互層。層厚は4~20cm。植物遺体を含む。層下部に砂を含む。
- 10 層 暗オリーブ色砂。層厚は35~60cm。植物遺体を含む。2区では、調査区の西側で厚く礫が堆積している部分が見られた。
- 11 層 オリーブ黒色泥炭と黒色泥炭の互層。層厚は25cm以上。植物遺体を含む。
- 12 層 黒色泥炭。層厚は6cm以上。植物遺体を含む。

3) 3区

- 1 層 オリーブ黒色砂質シルト。層厚は10~23cm。土地区画整理前の現代の水田耕作土である。
- 2 層 オリーブ黒色粘土。層厚は3~16cm。下面にゆるやかな乱れが見られる。近世以降の水田耕作土の可能性がある。



層位	土色	土壤	備考	層位	土色	土壤	備考	
1層	オリーブ黒色	鉄質シルト	下面に瓦片。酸化鉄の層が見られる。	12層	10YR5/2 黒褐色	粘土	植物遺体を含む。	
	ト	粘土	雨水田耕作土		13層	SY5/2 灰オーラー色	泥炭	
2層	SY3/1 オリーブ墨色	粘土	下面に瓦片が見られる。		SY2/2 オリーブ墨色	泥炭	植物遺体を多量に含む。	
3a層	10Y6/1 黒色	粘土	自然泥流部分のみ見られた。	14層	SY3/3 オリーブ墨色	泥炭	植物遺体を多量に含む。	
3b層	10YR1.7/1 黒色	粘土		15層	10YR2/2 黑褐色	粘土	植物遺体を含む。	
4a層	SY3/1 オリーブ黒色	粘土	火山灰のブロックを含む。下層の土を巻き込んだ。	16層	SY4/2 灰オーラー色	粘土	植物遺体を含む。	
5a層	SY5/2 灰オーラー色	粘土	一部砂の層を含む。	17層	7.5GY6/1 褐灰色	粘土	植物遺体を含む。	
5b層	10YR1.7/1 黒色	粘土			7.5GY4/1 灰色	砂	全面がグライ化。	
5c層	10Y4/1 黑褐色	粘土	下面に瓦片が見られる。植物遺体を少量含む。	18層	7.5GY4/1 灰色	砂	一部にSY3/1黒褐色 砂の層を含む。	
6a層	SY4/1 黒色	粘土	植物遺体を含む。下層の土を巻き上げている。	19層	7.5GY6/1 褐灰色	粘土	植物遺体を含む。	
6b層	SY5/2 灰オーラー色	粘土		20層	GY5/1 オリーブ灰白	砂	植物遺体を含む。	
7層	SY2/1 黒色	粘土	植物遺体を少量含む。	21層	10Y6/1 褐灰色	粘土	植物遺体を含む。一部に砂を含む。	
8b層	SY4/2 灰オーラー色	粘土	植物遺体を多量に含む。	22層	10YR5/1 褐灰色	粘土	植物遺体を含む。一部に砂を含む。	
9層	GY2/1 黒色	粘土		23層	10Y5/1 黑色	粘土	植物遺体を含む。	
10a層	10YR2/1 黑褐色	粘土	植物遺体を多量に含む。	24層	2.5GY3/1 黑褐色	粘土	植物遺体を含む。	
10b層	SY4/3 灰オーラー色	砂質	植物遺体を多量に含む。	25層	[GY6/1] オリーブ墨色	粘土	2SY4/1 黑褐色 粘土を含む。	
11層	SY4/2 灰オーラー色	泥炭	植物遺体を多量に含む。	26層	10YR2/1 黑褐色	砂	植物遺体を含む。	
	SY2/1 黒色				10YR2/1 黑褐色	砂	植物遺体を含む。	
					10Y5/3 にかい黒褐色	砂		
					10Y4/1 黑色	砂		
							シルト質粘土	

第91図 3区東壁断面図

3 a層 灰色粘土。層厚は0~5cm。調査区南半でのみ確認した。

3 b層 黒色粘土。層厚は0~6cm。

4 a層 オリーブ黒色粘土。層厚は5~25cm。灰白色火山灰のブロックを含み、下層の土を巻き込んでいる。平安時代の水田耕作土。

5 a層 灰オーラー色粘土と黒色粘土の互層。層厚は0~20cm。調査区南半部では上の層の削平を受け残存状況は良くないが、北半部では厚く堆積している。

- 5 b層 黒色粘土。層厚は2~20cm。下面に乱れが見られる。植物遺体を少量含む。水田耕作上。
- 5 c層 黒褐色粘土。層厚は0~5cm。2・3区で確認した。5b層の母材層と考えられる。
- 6 a層 灰色粘土。層厚は0~16cm。植物遺体を含み、下の層の土を巻き上げている。水田耕作土。
- 6 b層 灰オリーブ色粘土と黒色粘土の互層。層厚は0~10cm。
- 7 層 黒色粘土。層厚は2~8cm。植物遺体を少量含む。
- 8 b層 灰オリーブ色粘土と黒色粘土の互層。層厚は20~30cm。植物遺体を含む。
- 9 層 黒褐色粘土と黒色粘土の互層。層厚は10~20cm。植物遺体を含む。
- 10 層 灰オリーブ色粗砂と暗オリーブ色砂の互層。層厚は18~23cm。植物遺体を含む。
- 11 層 灰オリーブ色泥炭と黒色泥炭の互層。層厚は15~20cm。植物遺体を含む。
- 12 層 黑褐色泥炭と黒色泥炭の互層。層厚は20~25cm。植物遺体を含む。
- 13 層 灰オリーブ色泥炭とオリーブ黒色泥炭の互層。層厚は10~14cm。植物遺体を含む。
- 14 層 オリーブ黒色泥炭。層厚20~26cm。植物遺体を含む。
- 15 層 黑褐色泥炭。層厚20~31cm。植物遺体を含む。
- 16 層 灰オリーブ色粘土。層厚10~24cm。植物遺体を含む。この層より下の層はグライ化。
- 17 層 緑灰色粘土。層厚29~35cm。植物遺体を含み、グライ化している。一部黄灰色砂の層を含む。
- 18 層 灰色砂。グライ化している。自然堆積層で層厚5~10cmである。
- 19 層 緑灰色粘土。層厚0~14cm。植物遺体を含む。グライ化。
- 20 層 オリーブ灰色砂。層厚0~18cm。植物遺体を含む。グライ化。
- 21 層 緑灰色粘土。層厚20~30cm。植物遺体を含む。グライ化。一部砂を含み、しまりが強い。
- 22 層 緑灰色粘土。層厚20~25cm。植物遺体を含む。グライ化。一部砂を含み、非常に硬質でしまりが強い。
- 23 層 灰色粘土。層厚4~10cm。植物遺体を含む。グライ化。
- 24 層 黑褐色粘土。層厚12~24cm。植物遺体を含む。黄灰色粘土を含む。第30次調査において旧石器時代の遺構・遺物が発見された地層の延長に相当すると考えられる。
- 25 層 オリーブ黒色粘土。層厚46~54cm。植物遺体を含む。グライ化。
- 26 層 緑灰色粘土。層厚5cm以上。植物遺体を含む。

5. 発見遺構と出土遺物

1) 1区

① 2層水田跡（中世以降）

2層水田跡は水田面の上部を1層水田による削平を受けているため、畦畔は検出されなかった。また畦畔痕跡も検出されなかった。2層は均質な土壤で、底面の凹凸は著しい。遺物は土師器片4点・磨り面の見られる礫片1点が出上している。

② 4 a層水田跡（平安時代）

4a層水田跡は層中に灰白色火山灰（10世紀前葉降下）の小ブロックを含んでいることから、平安時代の灰白色火山灰降下以降の水田跡と考えられる。水田面の上部を2層水田跡によって削平を受けているため、畦畔は検出されなかった。また畦畔痕跡も検出できなかった。4a層は均質な土壤で、底面の凹凸は著しい。遺物は土師器片が4点・須恵器片が6点・木片が1点出上している。

③ 4 b層水田跡

4b層水田跡は1区でのみ確認した。水田面の上部を4a層水田跡によって削平を受けているため、畦畔は検出され

なかった。また畦畔痕跡も検出できなかった。4b層は均一な土壤であるが、5a層・5b層起源の土壤をブロック状に含む部分がある。底面の凹凸は著しい。遺物は木製品が1点、木片が1点出土しており、図化できたものは楔状の木製品L-2（第92図5）が1点である。

③ 5 a 層出土遺物

基本層5a層は灰オリーブ色の粘土からなる自然堆積層であるが、4b層水田跡によって削平を受けているため、残存状況は極めて悪い。層中から木片5点が出土している。

④ 5 b 層水田跡

5b層水田跡は4b層水田跡による削平が著しく、残存状況は悪い。畦畔及び畦畔痕跡は検出できなかった。5b層は均一な土壤で、底面の凹凸は著しい。遺物は土師器片が3点出土している。

⑤ 6 a 層水田跡

6a層水田跡は5b層水田跡による削平が著しく、残存状況は極めて悪い。畦畔及び畦畔痕跡は検出できなかった。遺物は出土していない。

⑦ 8 a 層水田跡（弥生時代中期後葉）

8a層水田跡は1区でのみ確認した。周辺調査区との対応から弥生時代中期後葉の水田跡と考えられる。畦畔及び畦畔痕跡は検出できなかった。8a層は均質な土壤で、底面の凹凸は著しい。石器K-1（第92図1）が出土している。

⑧ 8 b 層出土遺物

基本層8b層は黄褐色粘土と黒褐色粘土の互層からなる自然堆積層であるが、層中から石器K-2・3（第92図2・3）が出土している。この2点と8a層で出土した石器K-1は同一石材と見られる。なお、8b層の下の9層は粘土質の自然堆積層であり1~3区で確認しているが、1区のみ標高が50cm程度低い。

⑨ 11層水田跡（弥生時代中期中葉）

11層水田跡は1区でのみ確認した。畦畔及び畦畔痕跡は検出されなかった。11層は均質な土壤で、底面には緩やかな乱れが見られる。遺物は出土していないが、周辺調査区との対応から弥生時代中期中葉の水田跡と考えられる。

⑩ 27層

12層以下の地層は、泥炭質の土層を主とする自然堆積層が約2m続いている。27層に至って粘土質の比較的安定した土壤となる。周辺調査区では、本調査の27層に対応する地層から縄文時代早期後半から前期初頭の遺構・遺物が出土しているので、今回の調査でも27層の調査を実施したが、遺構・遺物を確認することはできなかった。

⑪ その他の出土遺物

出土した層は不明であるが、調査区の備溝を掘削した際に1~4b層中より朱漆痕のある木製の容器の蓋L-1（第92図4）が出土している。

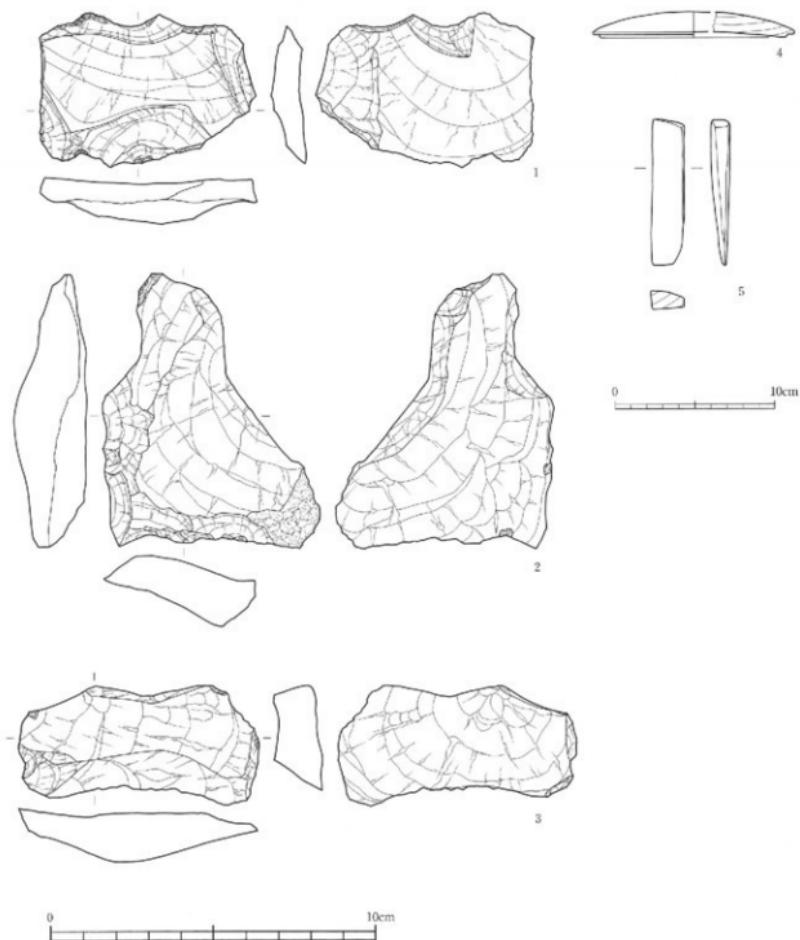
2) 2区

① 2層水田跡（中世以降）

2層水田跡は水田面の上部を盛土及び1層水田によって削平を受けているため、畦畔は検出されなかった。また畦畔痕跡も検出できなかった。2層は均質な土壤で、底面には緩やかな乱れが見られる。遺物は土師器片1点・磁器片5点・鉄製品2点が出土している。

② 3 a 層出土遺物

基本層3a層は灰色の粘土からなる自然堆積層であり、1・3区でも確認している。1・3区では2層水田跡による削平が著しかったが、2区では3b層上面を北西から南東に向けて流れる自然流路の堆積土であることを確認する



第92図 1区出土遺物

件号 番号	登録 番号	地 点	分 類	法 則	特 徴・備 考	写真版		
						基材・表面・裏・側面・刃・鋒・頭部・足部		
1 K-1	S-a層		剥片石器	4.8	6.7	0.9	31.5	浅灰岩 45-1
2 K-2	S-b層		剥片石器	8.5	6.7	1.6	80.5	浅灰岩 45-2
3 K-3	S-b層		剥片石器	3.7	7.3	1.6	29.5	浅灰岩 45-3
4 L-1	標清中		木製品	1.6	12.6	1.2		未標示 45-6
5 L-2	4号		木製品	9.1	20	1.2		柳木 45-6

ことができた。遺物は土師器片4点・須恵器片1点・陶器片2点・木片2点が出土している。図化できたものは備前の灰釉塊I-1(第93図1)である。

④ 4a層水田跡 (平安時代)

4a層水田跡は層中に灰白色火山灰(10世紀前葉降下)の小ブロックを含んでいることから、平安時代灰白色火山灰以降の水田跡と考えられる。水田面の上部を2層水田跡によって削平を受けている部分が多いため、畦畔は検出されなかった。また畦畔痕跡も検出できなかった。4a層は均質な土壤で、底面の凹凸は著しい。遺物は土師器片が8点出土している。

④ 5b層水田跡

5b層水田跡は水田面の上部を4a層水田跡によって削平を受けている部分が多いため、畦畔は検出されなかった。また畦畔痕跡も検出できなかった。5b層は均質な土壤で、底面には緩やかな乱れが見られる。遺物は須恵器片が1点出土している。

⑤ 5c層出土遺物

基本層5c層は黒褐色の粘土からなる自然堆積層であり、5b層水田跡の母材層であると見られる。5b層水田跡の削平が著しく、残存状況は良くない。層中から土師器片が1点出土している。

⑥ 6a層水田跡

6a層水田跡は水田面の上部を5b層水田跡によって削平を受けているため、畦畔は検出されなかった。また畦畔痕跡も検出できなかった。6a層は均質な土壤で、底面には緩やかな乱れが見られる。遺物は出土していない。なお、1区と3区では6a層の母材層と見られる6b層が確認できたが、2区では確認することができなかった。

⑦ 7層出土遺物

基本層7層は黒色の粘土からなる自然堆積層である。層の上面から土器片が1点出土しているが、摩滅が著しく調整痕跡の観察できるものではない。



調査 番号	遺跡 番号	出 上 地 名	分 類	法 則	量	特 徴	考 察	写 真 (調査・古材・面積・時期・分類)	写真回数
1 1-1	3a層	粘土層	埋蔵	器種 目	1件	表面・輪 形	直徑・高 度	51 古器手の火薬 筒	44-2

第93図 2区出土遺物

3) 3区

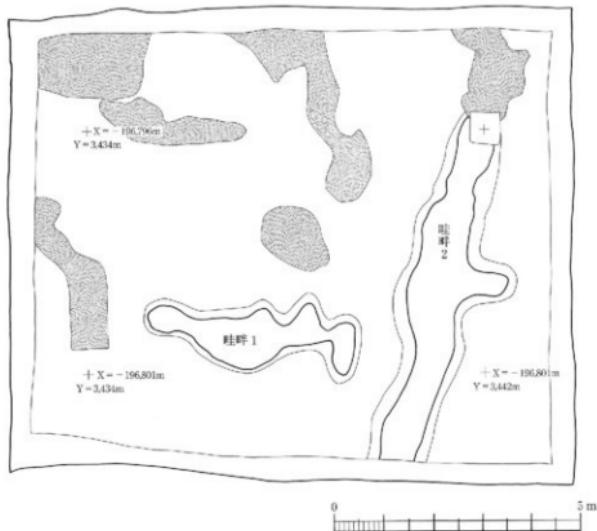
① 1層水田跡

1層は上地区画整理前の現代の水田耕作土である。1層は均質な土壤で、底面の凹凸は著しい。後の擾乱が著しく、様々な時代の遺物が出土している。図化できたものは備前の灰釉塊I-2(第96図2)が1点である。

② 2層水田跡 (中世以降)

2層水田跡では畦畔2条を検出した。調査区南側で検出した東西方向の畦畔1は後の削平を受けているが、およそその方向はE-9° - Sである。調査区東側で検出した南北方向の畦畔2は、方向はN-14° - E、幅は上面で60~90cmである。なお、東壁の断面観察では調査区の北部は南部に比べて高くなっていたが、調査区北半は広い範囲にわたって擾乱を受けており、高まりとして検出することはできなかった。2層は均質な土壤で、底面の凹凸は著しい。

遺物は畦畔2の除去中に土師器片2点、水田部分の除去中に土師器片9点・須恵器片5点・磁器1点・陶器片1点が出土している。

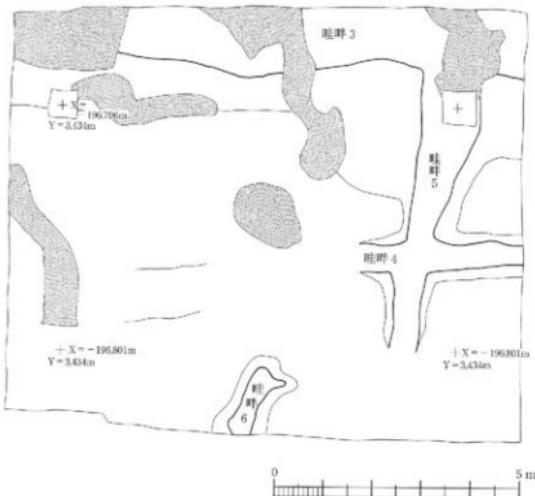


第94図 3区2層検出構

③ 4a層水田跡（平安時代）

4a層水田跡は層中に灰白色火山灰（10世紀前葉降下）の小プロックを含んでいることから、平安時代の灰白色火山灰降下以降の水田跡と考えられる。4a層水田跡では畦畔4条を検出した。東西方向の畦畔3・4、南北方向の畦畔5・6である。調査区北端で検出した畦畔3は北半が調査区外に延びているため全体の大きさは不明であるが、幅は上面で1.5m以上、方向は真東西である。その大きさから宮沢地区で復元されている真北を基準とした条里型土地割（太田・平間：1991）の東西区画畦畔の可能性も考えられるが、推定位置よりも南にあるため、今後の調査による検討が必要である。調査区中央やや南を東西に延びる畦畔4は、方向はE-5°-N、平均の幅は上面で50cmである。層上面ではっきり検出したのは畦畔5と交わる東側のみで、西側は痕跡のみであったが、下層の調査で擬似畦畔Bが検出され、東西方向に延びることが確認できた。調査区東側を南北に延びる畦畔5は、方向はN-10°-Eで、南側に比べ北側の幅が広くなっている。下層の調査で擬似畦畔Bを検出しており、北半と南半では方向が微妙に異なっていることから、水田が2時期存在していた可能性も考えられる。調査区南端中央を南北に延びる畦畔6は、方向はN-12°-E、平均の幅は上面で50cmである。下層の調査で擬似畦畔Bを検出しており、畦畔4とは直行する形で繋がっていることを確認している。4a層は均質な土壤であるが、5a層・5b層起源の土壤をプロック状に含む部分がある。底面の凹凸は著しい。

遺物は畦畔3の除去中に土師器片5点・須恵器片1点、水田部分の除去中に土師器片8点・須恵器片1点が出土している。この内、図化できたものは水田部分から出土した、内面黒色処理された回転糸切痕の見られる土師器の壺D-1（第96図1）が1点である。



第95図 3区 4a層検出遺構

④ 5 a層出土遺物

基本層5a層は灰オリーブ色粘土と黒色粘土の互層からなる自然堆積層である。この層の上面で4a層が形成した疑似畦畔Bを確認している。遺物は畦畔3の下から高坏の脚部と見られる土師器片1点、畦畔5の下から須恵器片が1点出土している。

⑤ 5 b層水田跡

5b層水田跡は水田面の上部を4a層水田跡によって削平を受けている部分が多いため、畦畔は検出されなかった。また畦畔痕跡も検出できなかった。5b層は均質な土壤で、底面には緩やかな乱れが見られる。遺物は出土していない。

⑥ 6 a層水田跡

6a層水田跡は水田面の上部を5b層水田跡によって削平を受けているため、畦畔は検出されなかった。また畦畔痕跡も検出できなかった。6a層は均質な土壤で、底面には緩やかな乱れが見られる。遺物は石器K-5（第96図5）が1点出土している。

⑦ 16層

11層以下の地層は、泥炭質の土層を主とする自然堆積層が約1m続き、16層に至って粘土質の比較的安定した土壤となる。周辺調査区では、本調査の16層に対応する地層から縄文時代早期後半から前期初頭の遺構・遺物が出土しているので、今回の調査でも16層の調査を実施したが、遺構・遺物を確認することはできなかった。1区の27層に対応すると考えられる。

⑧ 17層出土遺物

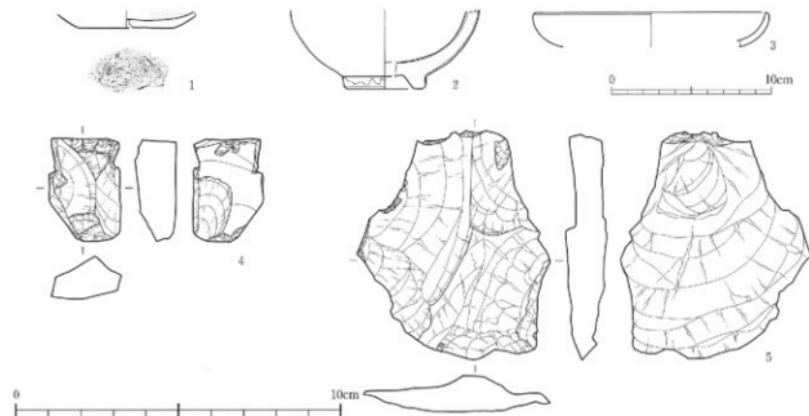
基本層17層は緑灰色の粘土からなる自然堆積層である。層の上面で石器K-4（第96図4）が1点出土している。

⑨24層

24層はしまりの強い粘土層で、全体的に黒褐色の腐植土が分布している。表面の全面にわたって亀甲状のひび割れが観察される。第30次調査において旧石器時代の遺構・遺物が発見された地層の延長に相当すると考えられる。遺物は出土していない。

⑩その他の出土遺物

2層～6a層の上面で、北西から南東に流れる自然流路跡と見られる落ち込みを数条検出している。3区は調査区の北部を中心に広い範囲に渡って擾乱されており、時期等について確認することはできなかった。5b層上面の調査中に調査区東側の自然流路跡から陶器片2点が出土している。この内、図化できたものは唐津の灰釉皿I-3（第96図3）である。



区分	発見	地 点	分類	測定	特徴	寸法		写真回数
						高さ	幅	
1	D-1 4a層	遺傳岩 収上No.	種別	器種	計高・長口径・輪郭直径・年次推定・変	(1.1)	6.0	例番：ロクリ洞窟 花崗岩軋点切り 内面：ヘラゴル 黒色透光
2	1-2 4層	陶器	端		(4.9)	4.8	共右輪系灰釉 直腹 17C	64-3
3	1-3 5b層 自然流路	陶器	底	(2.1) (14.0)	底脚 唐津 17C 前半			64-4
4	K-4 17層	陶器石器		3.1 2.2 1.2	11.5 灰化磁器？			65-4
5	K-5 6a層	剥片石器		7.0 5.9 1.2	30.5 前縫合			65-5

第96図 3区出土遺物

6.まとめ

- ① 今回の調査は遺跡の北端部、第79次調査の北東側で実施した。遺跡の範囲がさらに北に広がっていることを確認した。
- ② 1区では調査を実施した深さ約4.2mの地層は大別27層、細別32層に分けられた。現代の水田耕作土層である1層を除き、2層・4a層・4b層・5b層・6a層・8a層・11層が水田耕作土層と考えられる。
- ③ 2区では調査を実施した深さ約3.0mの地層は大別12層、細別15層に分けられた。2層・4a層・5b層・6a層が水田耕作土層と考えられる。

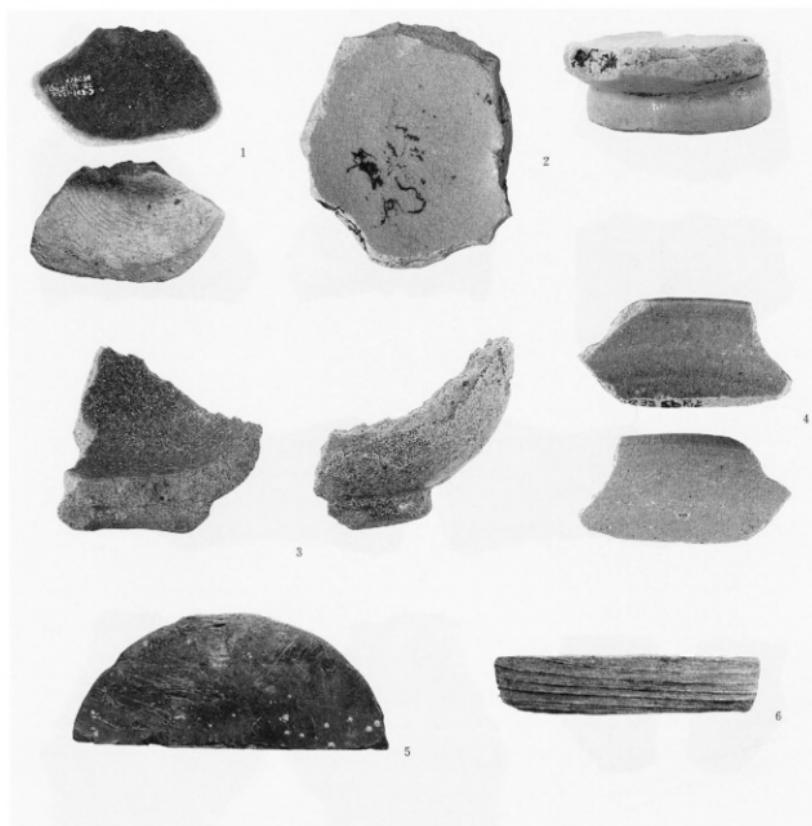
- ④ 3区では調査を実施した深さ約6.0mの地層は大別26層、細別30層に分けられた。現代の水田耕作土層である1層を除き、2層・4a層・5b層・6a層が水田耕作土層と考えられる。
- ⑤ 出土遺物及び第93次調査・第104次調査との比較から、水田の年代は2層が中世以降、4a層が平安時代、4b層・5b層・6a層が平安時代から古墳時代、8a層が弥生時代中期後葉、11層が弥生時代中期中葉に所属するものと考えられる。
- ⑥ 3区では2層、4a層で柱跡を確認した。4a層の柱跡3は規模が大きいため、条里型土地割の東西区画柱跡の可能性も考えられるが、推定位置よりも南にあるため、今後の調査による検討が必要である。
- ⑦ 3区では富沢遺跡第30次調査で石器や灰跡が発見された旧石器時代後期の森林跡と同期の植物遺体包含層を確認した。
- ⑧ 今回の調査地点の基本層序と、第104次調査の基本層序は下表のように対応するものと判断した。

第135次調査			第104次調査		
1区	2区	3区	層	時 代	備 考
1	1	1	1	後代の水田	
2	2	2	2	中一近世の水田	
3a	3a	3a			
3b	3b	3b			
4a	4a	4a	4	水田耕作上層 真白色火山灰のブロックを含む	
4b			3	白色火山灰層	
5a	5a	5a	4b		
5b	5b	5b	5		
6c	6c	6c			
6a	6a	6a	6	水田耕作土層	
6b	6b	6b	7a	弥生中期後葉の水田	
7	7	7	7b		
8a			8		
8b	8b	8b	9		
9	9	9	10		
11			11	水田耕作土層	
12			11a	弥生中期中葉の水田	
13			11b,c		
14	10	10	12		砂礫層
	11	11	13,14,15		
15~26	12	12	16,17		
	13		18,19		
	14~15		20~24		
27	16,17		24		25a
	18				純文早熙遺物包含層
	19				純文早熙遺物包含層
	20				25b
	21				26a
	22				26b
			27		
			28		
			29		
			30	旧石器時代	

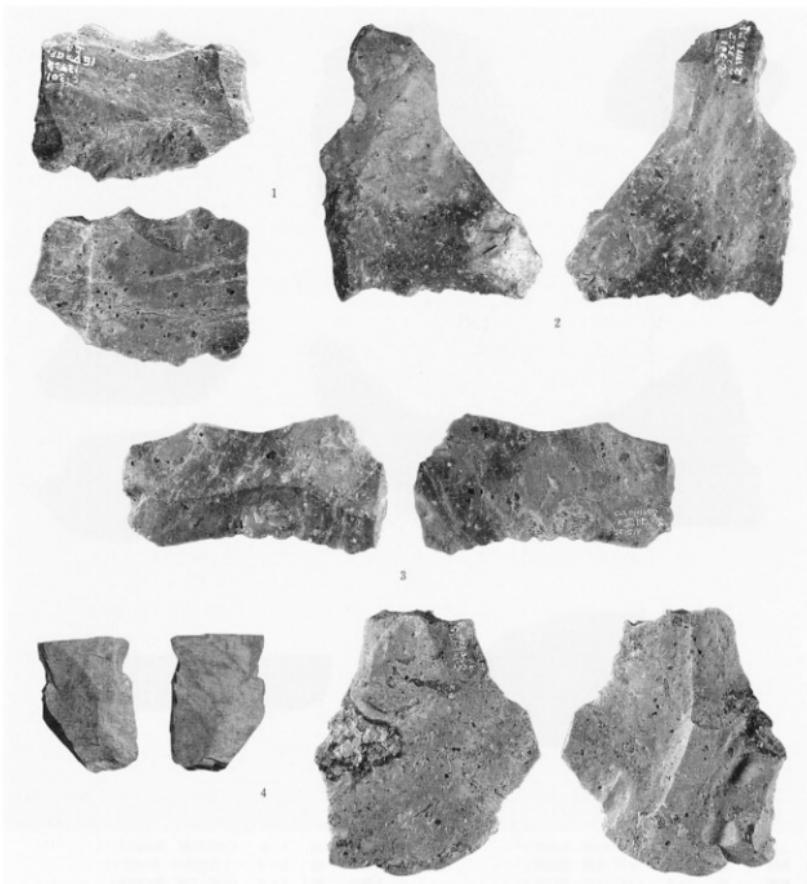
表 富沢遺跡第135次調査と第104次調査の土層対応表

＜参考文献＞

- 阿子島功（1991）：「東北地方 10C頃の降下火山灰について」『中川久夫教授退官記念地質学論文集』
- 太田昭夫・斎野裕彦（1992）：「富沢遺跡－第30次発掘調査報告書第II分冊－」仙台市文化財調査報告書第160集 仙台市教育委員会
- 太田昭夫（1992）：「第8節 富沢遺跡第79次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡(4)』仙台市文化財調査報告書第163集 仙台市教育委員会
- 太田昭夫（1996）：「第9章 富沢遺跡第93次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡(9)』仙台市文化財調査報告書第208集 仙台市教育委員会
- 丁藤哲司（1999）：「富沢遺跡第104次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第235集 仙台市教育委員会



図版44 富沢道路第135次調査出土遺物 1



1 石器 刨片 K-1 (1区8a層 第92図1)
 2 石器 刨片 K-2 (1区8b層 第92図2)
 3 石器 刨片 K-3 (1区8b層 第92図3)

4 石器 刨片 K-4 (3区17層 第96図4)
 5 石器 刨片 K-5 (3区6a層 第96図5)



1 1区全景（南西より）



2 1区全景（南より）



3 1区19~27層全景（南より）

図版46 1区全景



1 1区作業風景（南東より）



2 2区全景（南より）



3 2区作業風景（西より）

図版47 1区作業風景・2区全景



1 3区全景（南東より）

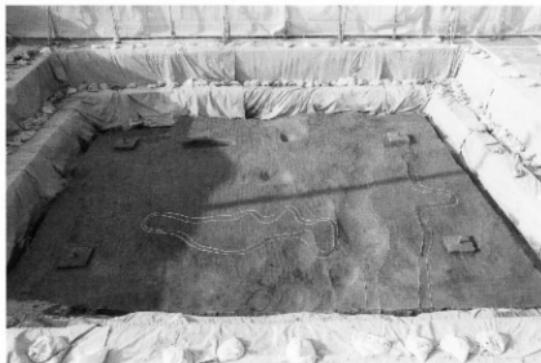


2 3区全景（南より）



3 3区13～26層（南より）

図版48 3区全景



1 3区2層水田跡（南より）



2 3区4a層水田跡（南より）



3 3区4a層の擬似畦畔B（南より）

図版49 3区検出遺構

7. 仙台市富沢遺跡第135次調査におけるプラント・オパール分析

株式会社 古環境研究所

1)はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとで微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネを中心とするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山：2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山：1984）。

ここでは、富沢遺跡第135次調査における稻作の可能性を検討することを目的に、プラント・オパール分析を行った。

2) 試料

調査地点は、1区、2区、3区の3地点である。分析試料は、1区では南壁において上位より2層、4a層、4b層、5b層、6a層、8a層、10層、11層より採取された8点、2区では北壁において上位より2層、4a層、5a層、5b層、5c層、6層より採取された6点、3区では東壁において上位より1層、2層、4a層、5a層、5b層、5c層、6a層より採取された7点の計21点である。

3) 分析方法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原：1976）をもとに、次の手順で行った。

- ①試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）
- ②試料約1gに直径約40μmのガラスピースを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- ③電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理
- ④超音波水中照射（300W・42kHz・10分間）による分散
- ⑤沈底法による20μm以下の微粒子除去
- ⑥封入剤（オイキット）中に分散してプレバラート作成
- ⑦検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピース個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレバラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数（試料1gあたりのガラスピース個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピースの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10-5g）を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節、チマキザサ節）は0.75、ミヤコザサ節は0.3である。

4) 結果

分析試料から検出されたプラント・オパールは、イネ、ヨシ属、ススキ属型、シバ属、タケビ科（メダケ節型、

ネササ節型、クマザサ属型、ミヤコザサ節型、その他) および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1、図1～3に示した。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。

以下に各地点におけるプラント・オバールの検出状況を記す。

① 1区

イネは2層～8a層で検出されている。このうち、2層、4a層、4b層では高い密度である。ヨシ属、スキ属型、メダケ節型、ネササ節型、クマザサ属型およびミヤコザサ節型はすべての層で検出されている。ヨシ属はいずれも高い密度である。スキ属型も4a層と11層以外では高い密度である。他はやや低い密度である。

② 2区

イネは2層～6層のすべてで検出されている。このうち、2層では非常に高い密度であり、4a層、5b層、5c層でも高い密度である。ヨシ属、スキ属型、メダケ節型、ネササ節型、クマザサ属型およびミヤコザサ節型はここでもすべての層で検出されている。これらのうち、ヨシ属は4層を除く各層で高い密度である。スキ属型は2層と5c層で高い密度である。ミヤコザサ節型は4層、5a層、6a層で比較的高い密度である。シバ属は2層のみで検出されているがここでも低い密度である。

③ 3区

イネは1層、2層、4a層、5b層、5c層および6a層で検出されている。1層では非常に高い密度であり、4層、5b層、6a層でも高い密度である。ヨシ属、スキ属型、メダケ節型、ネササ節型、クマザサ属型およびミヤコザサ節型は1区、2区同様ここでもすべての層で検出されている。ヨシ属は5b層と5c層で高い密度である。スキ属型は1層、2層、4a層、5a層、5b層で高い密度である。クマザサ属型は5a層、5b層、5c層で、ミヤコザサ節型は5a層と5c層でそれぞれ比較的高い密度である。1層でシバ属が認められたが低い密度である。

5) 考察

① 1区

本地点では、2層、4a層、4b層でイネのプラント・オバールが高い密度で検出されている。プラント・オバール密度は4,900～5,400個/gであり、稲作跡の可能性を判断する際の基準値とされている3,000個/gを大きく超過している。こうしたことから、これらの層についてでは稲作跡である可能性が高いと考えられる。5b層ではプラント・オバール密度は2,400個/gとやや低い。直上の4b層が水田耕作土である可能性が高いことから、当該層においても稲作が行われていた可能性が考えられるものの、上層等から後代のプラント・オバールが混入した危険性も否定できない。6a層と8a層についてはプラント・オバール密度が低いことから、稲作跡である可能性を積極的に否定することはできない。

イネ以外の分類群の検出状況をみると、各層ともヨシ属が高い密度であり、下位の11層から5b層にかけては、優占している。こうしたことから、当該調査区では11層から6a層の時期にかけては湿地の状態であり、4b層あるいは5b層の時期にそこを開いて水田が造成されたと推定される。5b層の時期以降も周辺は湿地あるいはそれに近い状況であったと思われる。

② 2区

2区では、2層、4a層、5b層および5c層でイネのプラント・オバールが高い密度で検出されている。このうち、2層については10,000個/g近くの検出量であるが、これは比較的最近の水田耕作に起因するものと思われる。4a層、5b層、5c層では5,000個/g前後の高密度であることから、これらの層については稲作跡である可能性が高いと判断される。5a層と6a層ではプラント・オバール密度がそれぞれ1,200個/g、600個/gと低いことから、稲作が行われていた可能性を積極的に否定することはできない。

本地点でも4a層を除いてヨシ属が概ね高い密度であり、6a層から5a層にかけての調査地周辺は湿地もしくはそれに近い環境であったと推定される。なお、2層と5c層ではススキ属型が、4a層、5a層、6a層ではミヤコザサ節型が比較的多く認められる。このことから、2層と5c層ではススキ属が4a層、5a層、6a層ではミヤコザサ節が近傍に生育していたと推定される。

③ 3区

3区では、1層、2層、4a層、5b層、5c層、6a層でイネが検出されている。このうち、1層と2層については比較的最近の水田耕作によるものであろう。4a層、5b層および6a層では、プラント・オパール密度が3,600～5,400個/gであり、稻作跡の判断基準値の3,000個/gを超過している。また、いずれも直上層よりも高い密度でありピークとなっている。こうしたことから、4a層、5b層、6a層の各層は水田耕作土であった可能性が高いと考えられる。5c層についてはプラント・オパール密度が1,800個/gと低いことから、上層もしくは他所からの混入の可能性も否定できない。

イネ以外では、ヨシ属が5b層と5c層でススキ属型が1層～5b層で、クマザサ属型が5a層、5b層、5c層で、ミヤコザサ節型が5a層と5c層で高い密度である。このことから、5c層と5b層の時期の調査地周辺は湿地の状態であり、5c層ではクマザサ属やミヤコザサ節が、5b層ではススキ属やクマザサ属が周辺に生育していたと推定される。また、5a層ではススキ属、クマザサ属およびミヤコザサ節が、4a層～1層にかけてはススキ属が周辺に生育していたと推定される。

6)まとめ

富沢遺跡第135次調査においてプラント・オパール分析を行い、稻作の可能性について検討した。その結果、1区では下位より4b層と4a層で、2区では5c層、5b層、4a層で、3区では6a層、5b層、4a層でそれぞれ稻作が行われていた可能性が高いと判断された。

<文献>

- 杉山真二（1987）タケア科植物の機動細胞珪酸体、富士竹類植物園報告、第31号、p.70-83.
- 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）、考古学と植物学、同成社、p.189-213.
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－、考古学と自然科学、9、p.15-29.
- 藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－、考古学と自然科学、17、p.73-85.

表1 仙台市宮沢遺跡第135次調査のプラント・オハール分析結果

検出密度(単位: ×100個/g)

分類群(和名・学名)＼置き	1区						2区						3区								
	2	4a	4b	5a	6a	8a	10	11	2	4	5a	5c	6	1	2	4	5a	5c	6b	7c	
イネ科 Gramineae (Grasses)																					
イネ <i>Oryza sativa</i>	.54	.51	.49	.24	.18	.6			.97	.54	.12	.48	.6	.72	.24	.36	.18	.54			
ヨシ属 <i>Phragmites</i>	.36	.24	.24	.61	.48	.36	.42	.60	.21	.12	.24	.30	.48	.24	.18	.6	.6	.54	.42	.18	
ススキ属型 <i>Miscanthus</i> type	.24	.12	.24	.24	.30	.24	.36	.12	.42	.18	.24	.42	.18	.36	.36	.48	.48	.24	.24		
シバ属 <i>Zoysia</i>	6																				
タケ亞科 Bambusoideae (Bamboo)																					
メダケ節型 <i>Pleioblastus</i> sect. Nipponocalamus	6	.12	.12	.12	.12	.12	.18	.24	.18	.6	.6	.6	.6	.12	.12	.12	.12	.12	.12	.6	
メダケ節型 <i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nerassa</i>	.18	.30	.24	.18	.24	.18	.36	.30	.18	.18	.18	.18	.24	.30	.36	.48	.42	.39	.24	.36	
クマザサ属型 <i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>)	.30	.36	.36	.61	.42	.54	.42	.72	.85	.72	.54	.42	.42	.72	.54	.66	.60	.120	.120	.90	
ミヤコザサ節型 その他 <i>Others</i>	.24	.18	.18	.30	.24	.30	.24	.30	.24	.24	.18	.18	.12	.18	.12	.48	.36	.102	.60	.84	.51
木分類等 Unknown	.344	.245	.315	.176	.206	.193	.168	.156	.193	.144	.126	.160	.95	.227	.245	.187	.114	.144	.192	.180	.204
プラント・オハール総数	572	467	538	467	452	420	438	586	468	372	378	515	491	545	427	366	480	564	510	504	
おもな分類群の性定生産量(単位: kg/m ² ·cm) : 調査の性比重全1.0と仮定して算出																					
イネ ヨシ属 ススキ属型	1.60	1.58	1.43	0.71	0.53	0.18				2.84	1.59	0.35	1.41	1.41	0.18	2.11	0.71	1.06	1.06	0.53	1.68
メダケ節型 ネリサ節型	2.29	1.51	1.53	2.82	2.65	2.28	2.65	3.28	1.52	0.76	1.52	1.89	3.02	1.51	1.13	1.14	0.38	3.41	2.65	1.13	
<i>Pleioblastus</i> sect. Nipponocalamus	0.30	0.15	0.30	0.30	0.37	0.30	0.15	0.15	0.52	0.22	0.22	0.30	0.62	0.22	0.45	0.45	0.60	0.59	0.59	0.39	0.39
クマザサ属型 ミヤコザサ節型 その他 <i>Others</i>	0.17	0.14	0.14	0.14	0.14	0.21	0.28	0.21	0.07	0.07	0.07	0.07	0.07	0.07	0.14	0.14	0.14	0.07	0.14	0.07	0.07
ミヤコザサ節型 <i>Sasa</i> sect. <i>Crasinodi</i> type	0.69	0.14	0.12	0.69	0.12	0.23	0.17	0.14	0.09	0.09	0.09	0.11	0.14	0.17	0.17	0.23	0.29	0.14	0.12	0.17	
ミヤコザサ節型 <i>Sasa</i> sect. <i>Crasinodi</i> type	0.23	0.27	0.27	0.45	0.32	0.41	0.32	0.54	0.63	0.54	0.41	0.31	0.54	0.40	0.50	0.45	0.90	0.90	0.67		

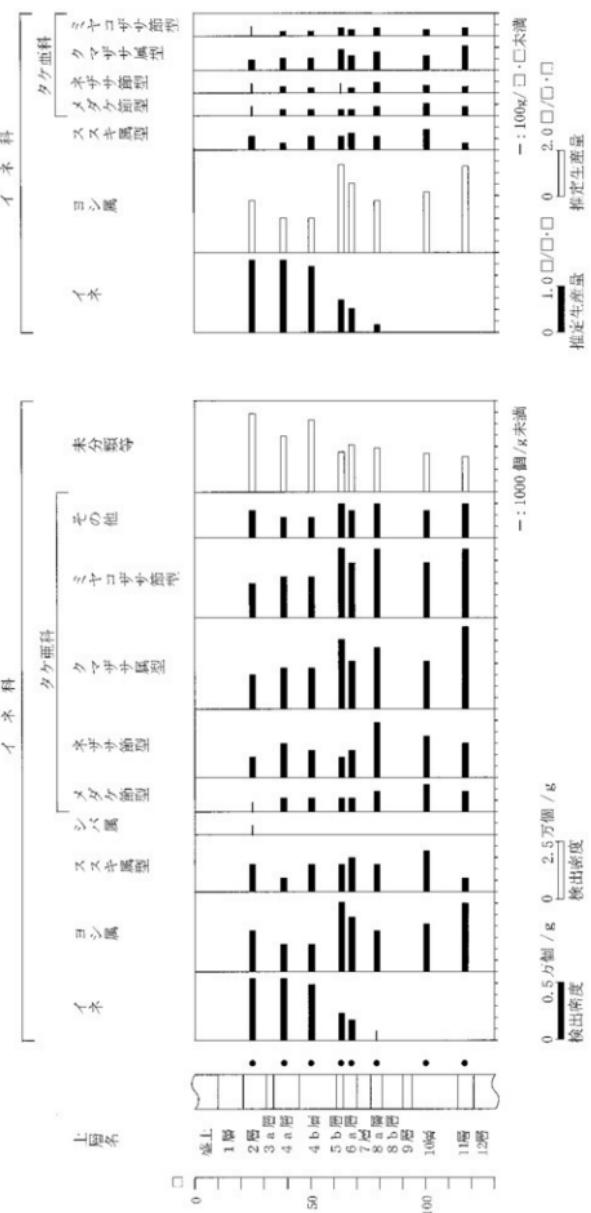


図1 富沢地溝第135次調査1区におけるプラント・オバール分析結果

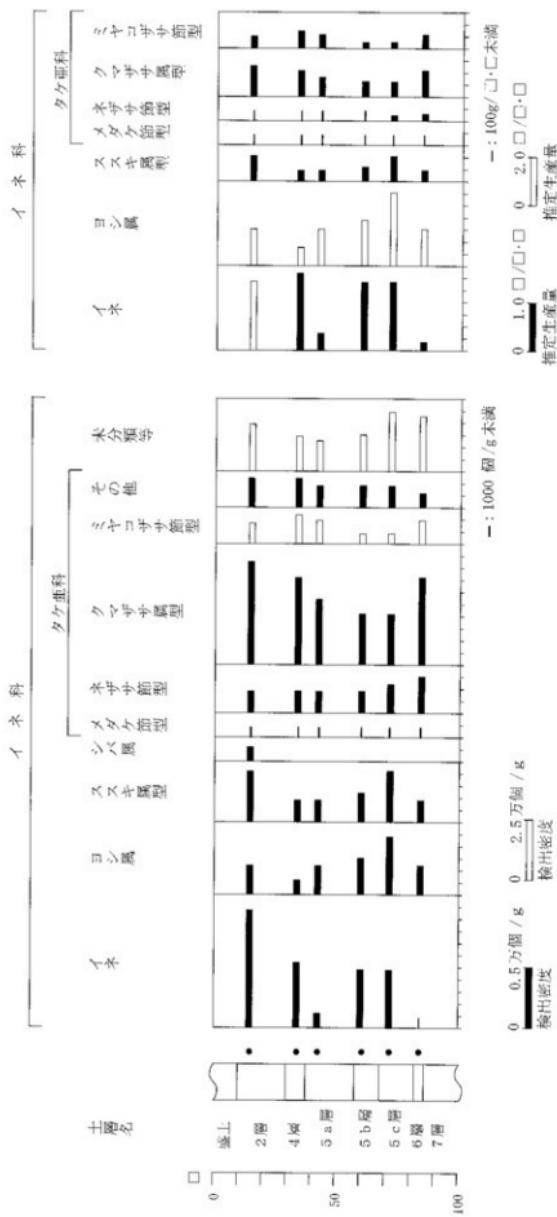


図2 富沢漁場第135次調査2区におけるプラント・オバール分析結果

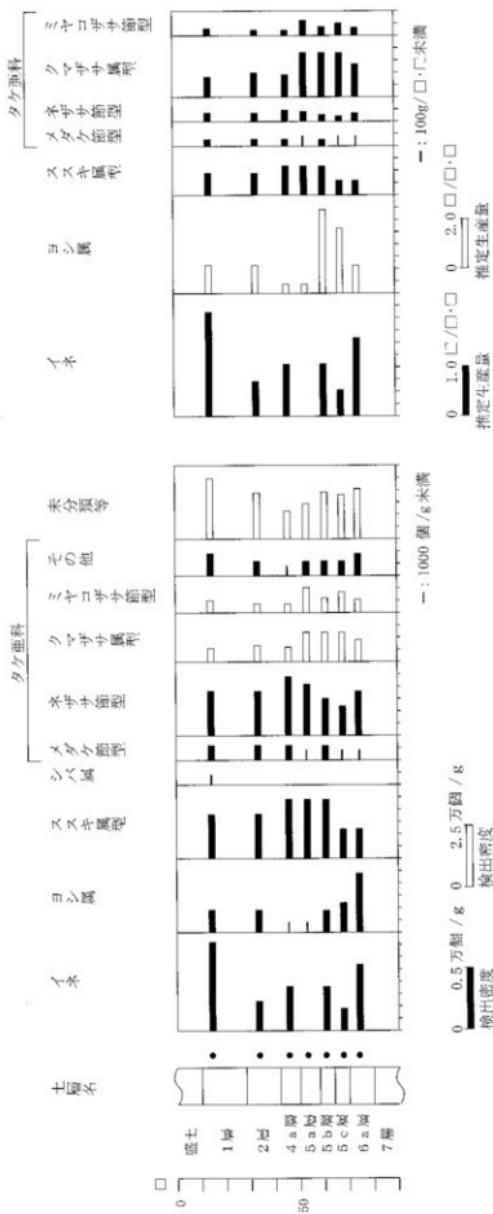
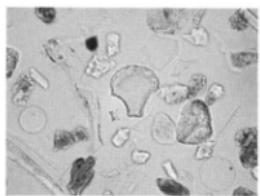
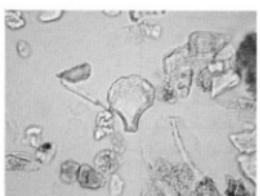


図3 富沢遺跡第135次調査3区におけるプラント・オバール分析結果



イネ



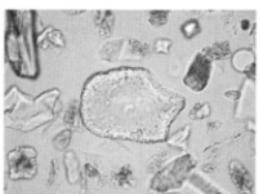
イネ



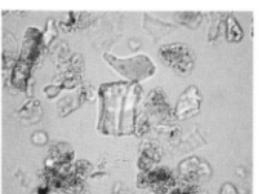
イネ



ヨシ属



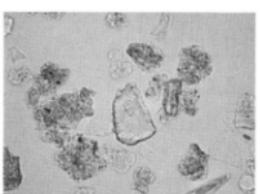
ヨシ属



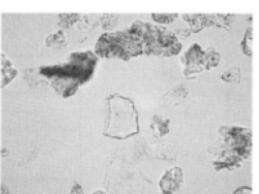
メダケ節型



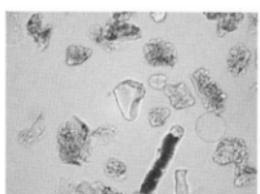
ネザサ節型



クマザサ属



ミヤコザサ節型



ススキ属



ススキ属



シバ属

— 50 μ m

プラント・オパールの顕微鏡写真

XVII 富沢遺跡第136次発掘調査報告書

1 調査要項

遺跡名	富沢遺跡（宮城県遺跡番号01369）
調査地点	仙台市太白区長町南1丁目201-3
調査期間	平成17年8月1日～8月12日
調査対象面積	264m ²
調査面積	29m ²
調査原因	店舗付共同住宅建築
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担当職員	主査 工藤哲司 文化財教諭 赤岡光騎

2 調査に至る経過と調査方法

本調査は、平成17年4月25日付けで、栗谷川元氏より、杭打ちを伴う基礎工法の店舗付共同住宅の建築についての「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」が提出されたので、建築予定範囲の発掘調査を実施する旨を回答した。発掘調査は、平成17年8月1日から8月12日までの予定で実施した。当該地は盛土が厚いので、現地表面で東西12m×南北8mの範囲を法面に傾斜をつけて盛土層を除去した後、旧水田面に東西7.6m×南北3.8mの範囲の調査区を設定して調査を行なった。

今回の調査は、現地表面からの深さ約3.2m、土地区画整理事業以前の旧水田面からの深さ約1.4mの弥生時代中期の水田層までで実施した。当該地周辺では過去の調査において、旧水田面からの深さ2～3mで縄文時代、4～5mで旧石器時代の遺構・遺物が発見されている場所もある。しかし、本調査区は面積が狭く、下層の調査を行った場合、調査の安全を確保することが困難であると判断されたので、弥生時代中期の水田層より下層の調査は行わなかった。

3 遺跡の位置と環境

本調査区は、富沢遺跡の東部中央付近に当たる。周辺では多数の調査が行われており、水田層についてみると、弥生時代中期以前・弥生時代中期中葉・弥生時代中期後葉・弥生時代後期・古墳時代中期・奈良～平安時代・平安時代・中世・近世などの各時期の水田跡が連続的に検出されている。

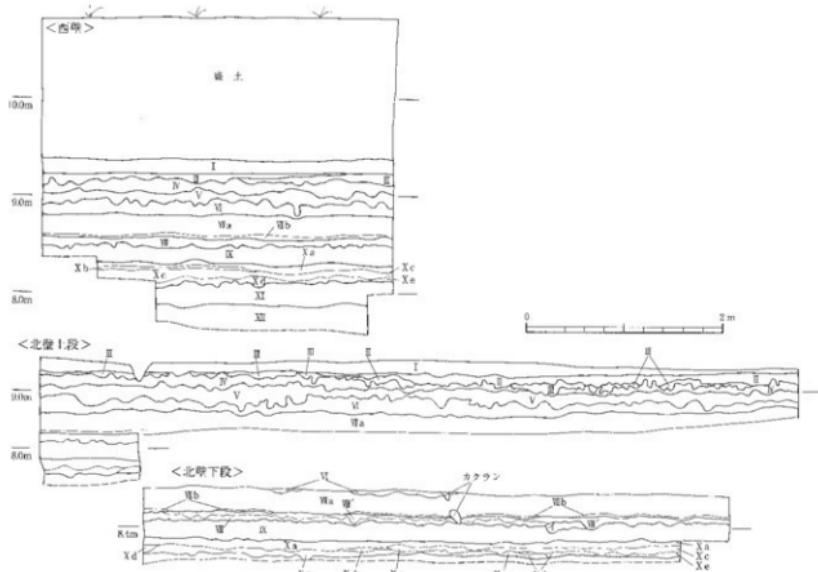
遺跡の立地と歴史的環境は、富沢遺跡第135次調査の報告に記載されているとおりである。

4 基本層序

本調査区は約150cmの盛土層がある。旧表土（旧水田層）のⅠ層から水田に関係する最下層までは約140cmの深さがあり、この間の土層は大別11層・細別17層に分けられた。
Ⅰ層 N3/0暗灰色粘土。層厚約20cm。砂を含み、層下部に酸化鉄が集積する。区画整理以前の水田耕作土層。



第97図 調査区配置図



第98図 調査区断面図

- II 層 N4/0灰色粘土。層厚15~0 cm。I層の耕作による削平を受けて残存しない部分もある。II層起源の黒色土をわずかに含む。層下面に凹凸がある。近世の瓦片出土。水田耕作土。
- III 層 N1.5/0黒色粘土。層厚10~0 cm。II層及びI層の耕作のために残存しない部分がある。IV層起源の灰オリーブ色の粘土のブロックを含む。層下面の凹凸が著しい。水田耕作土。
- IV 層 7.5YR4/2灰オリーブ色粘土。粘性が強い。層厚は15~5 cm。上面はIII層水田の耕作による擾乱を受けている。層下部に灰白色火山灰のブロックをまばらに含んでいる。層下面是凹凸が著しい。水田耕作土。
- V 層 5Y3/1オリーブ黒色粘土。粘性強い。層厚は20~5 cm。層下部に灰オリーブ粘土のブロックを部分的に含む。層下面是凹凸が顕著である。水田耕作土。
- VI 層 2.5GY2/1黒色粘土。層厚は20~10 cm。暗灰黄色粘土及び黒色粘土のブロックを縞状に含む。本来は暗灰黄色粘土及び黒色粘土が互層状に堆積していたものが、乱れを生じたものと観察される。層の乱れの要因としては、上層（V層）の水田耕作の影響が考えられる。層底面は平坦である。自然堆積。
- VII a 層 2.5Y5/2暗灰黄色粘土と2.5Y2/1黒色泥炭質粘土の互層。層厚は約20 cm。自然堆積。
- VII b 層 2.5Y6/1黄灰色粘土。層厚は約3~2 cm。自然堆積。
- VII' 層 5Y3/2オリーブ黒色粘土。層厚は10~3 cm。植物遺体をわずかに含む。調査区の北西から南東にかけて検出された畠畔より北東側に分布。水田耕作土。
- VIII 層 10YR4/1褐色粘土。層厚は10~5 cm。植物遺体をわずかに含む。層下面に凹凸あり。水田耕作土。
- IX 層 10YR1.7/1黒色粘土質泥炭と10YR4/2灰褐色粘土の互層。層厚は20 cm前後。層下面是緩やかな起伏がある。自然堆積。

- X a 層 10YR4/1褐色灰色粘土。層厚は10~5cm。植物遺体を含む。水田耕作土。
- X b 層 10YR5/2灰黃褐色粘土。層厚は3~2cm。層上部に黒色泥炭質粘土が薄く分布。自然堆積。
- X c 層 2.5Y4/1黄灰色粘土。層厚は約15~5cm。植物遺体をわずかに含む。浅黄色粘土粒を南西部の土層中にはばらに含む。水田耕作土。
- X d 層 2.5Y4/2暗灰色粘土。層厚は約10~5cm。黒褐色の泥炭をわずかに含み、層全体が不均質な土壤である。調査区の北西から南東にかけて検出された畦畔より南西側を中心に分布する。層下面に凹凸あり。X c 層水田跡の下部耕作土。
- X e 層 5 Y4/2灰オリーブ色粘土。層厚は10~2cm。植物遺体を含む。X c 層水田の母材。自然堆積。
- XI 層 2.5Y2/1黒色泥炭質粘土と7.5Y4/2灰オリーブ色泥炭質粘土の互層。層下部ほど灰オリーブ色泥炭質粘土が厚く堆積。層厚は20cm前後。自然堆積。
- (XII層) 10YR1.7/1黒色粘土。灰オリーブ粘土をわずかに縞状に含む。植物遺体を含む。

5 発見遺構と出土遺物

1) II層水田跡の遺構と遺物

II層は、水田土壤であると観察されたが、上面がI層水田による削平を受けているため水田に関わる畦畔等の遺構は検出されなかった。残存するI層の検出面で土坑が1基検出されている。

SK1 土坑 調査区中央の北壁際で検出された。平面形は円形を呈し、東西軸長119cm・南北検出部軸長100cmを測る。深さは38cmで、断面形は舟底形を呈する。堆積土は2層に分けられる。出土遺物はない。

II層から出土した遺物としては、瓦片が3点(F-1・G-1他)、土師質土器片1点(I-1)、志野丸皿小片1点(I-2)、肥前産染付け碗小片1点(J-1)などが出土している(図版57)。F-1は丸瓦の正縁付近の破片で、胎土が灰色で表面が黒色を呈す。出土遺物からII層水田の時期は近世以降と考えられる。

2) III層水田跡の遺構と遺物

III層も土層の状況から水田土壤と観察されたが、II層・I層水田の連続耕作により畦畔は残存していない。ただし、調査区中央のⅣ層上面において、南北方向に平行する2条のIII層の落ち込みが確認された。2条の落ち込みのうち、西側は幅70~90cmで、調査区北壁から南に2mのところまでのびている。東側は幅90~110cmで、調査区を横断している。両落ち込みの間隔は内側で90~100cmである。この落ち込みについて、畦畔を構築する際に、畦畔の両側を掘削し、その土を盛土としたために生じた水田耕作土層底面の凹地と理解される。したがって、2条の間にIII層水田跡の畦畔が存在したと推定される。

III層は、全般的に削平を受けているために、残る土層も薄く、出土遺物もない。

3) IV層水田跡の遺構と遺物

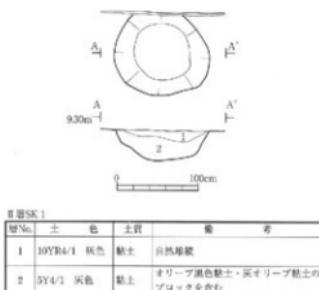
IV層も均質な土壤で、土層の底面に凹凸が認められることから水田土壤と観察された。III層以降の連続耕作のため、上面に畦畔は残存していないかった。IV層の除去作業中に、V層に近い層下部で、10cm前後の幅で帯状に分布する酸化鉄の集積が検出された。酸化鉄の帯は一定の間隔で平行して集積している。その間隔は、幅の広い南北方向の部分と、幅が狭く東西方向にのびる部分があり、全体として逆「ト」字状を呈している。幅広の部分は、北側で幅165cm前後、南側で幅120cmほどである。狭い部分は幅40cm前後で、西部がわずかに南側に寄っている。この酸化鉄の分布範囲は、IV層水田跡に伴う畦畔を反映するものと考えられる。

IV層の下部には、「灰白色火山灰」のブロックがまばらに認められることから、IV層が水田として開発されたのは10世紀前半以降に位置づけられる。出土遺物はない。

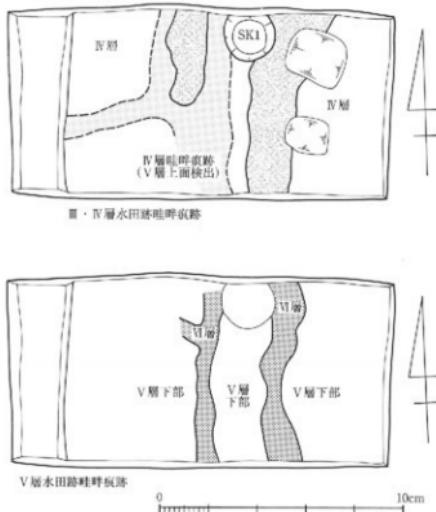
4) V層水田跡の構造と遺物

V層は、稀にVI層起源の暗灰黄色粘土と黒色粘土のブロックを含むが、比較的均質な土壤で、土層の底面に凹凸が認められることから水田土壤と観察された。IV層の耕作による削平のため上面で畦畔は検出されなかった。V層では、調査区中央の層下面付近で、VI層の高まりが2列に平行して検出された。それぞれの幅は西側で25~40cm・東側で25~70cmである。西側の北寄りには逆「ト」字状に西方に幅30cm前後でのびる突出部がある。東西の高まりの間隔は90~120cmである。2条のV層の高まりに挟まれた部分と、高まりの両側とでV層の深さに大差は認められない。

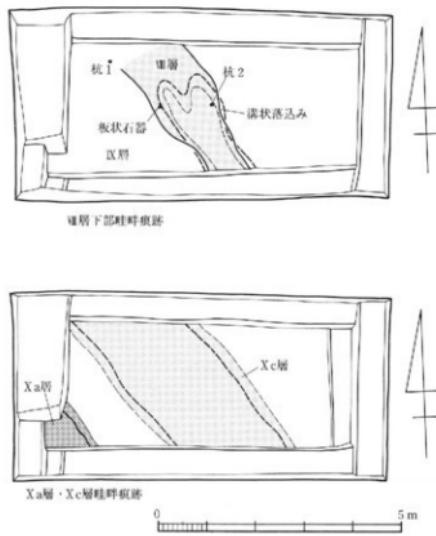
V層下面で検出されたVI層の高まりは、V層水田跡の畦畔を反映するもので、南北畦畔は、西列の西側から東列の東側までの2m前後の幅があったと推定される。畦畔の中央でV層が窪んだ状況で検出された要因としては、この部分に畦畔を構築するために盛上がなされた結果の土圧及び人の移動等の加重などの可能性が考えられる。



第100図 II層SK1土坑



第99図 III・IV・V層水田跡、畦畔痕跡



第101図 VII・Xa・Xc層水田跡畦畔痕跡

V層中からの出土遺物はない。

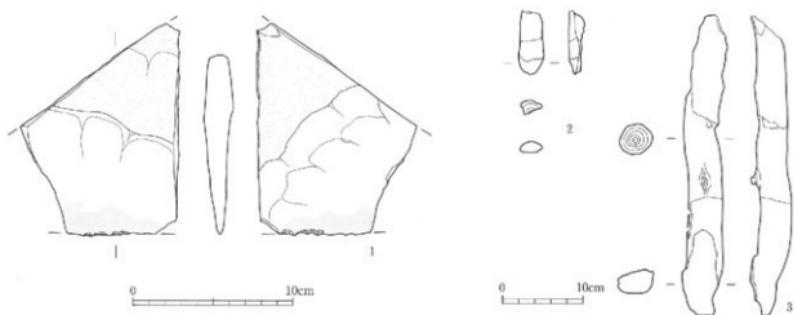
5) VII層水田跡の遺構と遺物

VII層については、周辺部の調査状況から水田跡の可能性の高い土層であったので、VII層の直上に層厚2~3cmで分布するVIIb層上面で遺構の検出作業を行ったが、畦畔は検出できなかった。VIIb層を除去した際に、調査区南壁中央から北壁西端部にかけて、他の部分に比べてVII層がやや高いレベルから検出されたが、その範囲については不明瞭であり、VII層上面で畦畔を確認することはできなかった。VII層を掘り下げる過程で、第101図のとおり調査区南壁中央から北壁西端部に通るように、VII層がIX層に落ち込むような状態で土層の変化が検出された。この土層は、南側で幅70cm・北側で幅120cmを測る。この位置の南壁を精査した結果、VII層が2cm前後高くなっていることが確認されたことから、この土層の変化については、畦畔を反映するものと判断される。

VII層を除去し、IX層上面を検出した段階で、畦畔痕跡の南半と重複する位置で、溝状の落ち込みが確認された。落ち込みは、幅が80~110cmで、IX層上面からの深さは15cm前後である。横断面形は舟底形である。堆積土はVII層と同様である。

VII層の上面では、杭が2本検出されている。杭1は畦畔痕跡の南西側側面の北西端に位置する。長さ7.9cm・直径約3.5cmの芯持ちの半丸材で、全面が焼けている。先端がVII層中に収まる短い材であり、付近には炭化材の小片の散布が認められたことから、杭ではない可能性もある。杭2は畦畔痕跡の北西側側面の中央付近に位置する。畦畔の中心側から水田側に向って傾いている。杭の先端はX層の上部に達している。杭は、長さ37.2cm・直径4.9cmの芯持ちの丸材で、先端に加工は認められない。

遺物としては板状石器が1点ある。畦畔上のVII層上面からVII層中に刃部を斜め上に向けて刺さった状態で出土した。大きさは、現状の最大長14.4cm・器幅10.9cm・最大厚さ1.8cmを測る。刃部の幅は5.7cm残り、両面には肉眼でも明瞭な光沢（コーン・グロス）が確認できる。



区分 番号	登録 番号	出 土 地 点	分 類	規 格	性 質	特 徴 ・ 備 考		写真枚数							
						高 度	名 称	遺 物 種 別	形 状	長 さ	幅 き	厚 さ	重 量	(断面・芯材・深さ・時期・分類)	
1 K-4		堆积中			石器		板状石器			14.4	10.9	1.8	230g	刃部に2次加工有り 下削縁片面に丸穴開き 宮山岩	57-1
2 L-1		堆积中	杭1	木製品	杭					(7.9)	3.2	1.9			
2 L-2		堆积	杭2	木製品	杭					37.2	4.9	3.9		芯持ち丸杭	57-7

第102図 出土遺物

6) X層水田跡の遺構と遺物

X層は、Xa層～Xe層の5層に細分されるが、水田面と考えられるのは、Xa層とXc層の2面である。

Xa層水田跡 X層については周辺部の調査で水田遺構が検出されている土層と対応すると観察された。IV層下部から徐々に掘り下げ、Xa層上面までの検出作業を行ったが、畦畔は検出されなかった。

Xa層は、調査区の全面に分布する。Xa層を除去する過程で、調査区南西角において北西から南東方向にのびるXb層とした自然堆積層と観察される灰黄褐色粘土の薄層が検出された。またその下層のXc層もわずかに高くなっていることが確認された。この状況から、調査区西南角のXb層とXc層の高まりは、Xa層水田跡に伴う大型畦畔の痕跡の可能性があると判断された。畦畔部分の幅は検出範囲で約70cm・高さ3cm程度である。

Xc層水田跡 Xc層は、調査区南西部では層厚が10～5cmほどあるが、調査区北西角から調査区南壁中央を結ぶラインから東側は北壁側に部分的に分布するだけである。調査区東部でXc層の分布が部分的である要因としては、Xa層水田の耕作の際に、Xc層が削平を受けたためと理解される。Xc層の残りの良い調査区南西部でも、Xa層を除去する過程で、Xc層に伴う畦畔は検出されなかった。

Xa層及びXc層を除去する過程で、調査区北西角から調査区南壁中央にかけて北西から南東方向にのびるXe層の高まりが検出された。Xe層はXa・Xc層を明るくした灰オーリーブ色の自然堆積層である。幅は上面で180cm前後ある。この高まりについては、Xc層水田に伴う畦畔痕跡（擬似畦畔B）と理解される。規模的に観ると「大畦畔」と呼ばれる水田を大きく区画する畦畔と考えられる。Xc層の耕作深度は、この畦畔を境として東西で異なる。東側は比較的浅く、Xe層上面からの比高差で3cm前後であり、Xe層がなお残存している。これに対し、西側は掘削深度が深く、Xe層上面からの比高差が10cm前後であり、Xe層は残っておらずXI層の上部まで削除されている。

Xa層及びXc層の下層にはXe層をブロック状に含むXd層が部分的に分布している。この層については、人为的な攪拌を受けていることから、水田耕作に関係する土層と考えられるが、Xd層自体が独立した水田層を構成するものではなく、主にXc層の耕作上の下部を形成する土層で、起耕されながらも恒常的な耕作土層とならなかった部分と考えられる。Xa層・Xc層からの出土遺物はない。

6まとめ

- ①本調査区は、富沢遺跡の東部の中央付近に位置する。
- ②基本層のII・III・IV・V・Ⅵ・Xa・Xc層の7層で、水田耕作土層ないし水田跡が検出された。
- ③III・IV・V層水田跡は連続的に形成された水田跡で、ほぼ南北方向を向く比較的幅の広い畦畔が、ほぼ同位置で検出された。前段階の畦畔が意識され、踏襲されていたことが考えられる。
- ④Ⅵ・Xa・Xc層水田跡では、北西から南東方向にのびる畦畔が検出された。各畦畔とも大型の畦畔である。
- ⑤出土遺物としては、II層から近世の瓦と陶器・磁器が、Ⅵ層から板状石器が出土した。
- ⑥板状石器は、富沢遺跡では弥生時代の土層中から出土することが多く、中在家南遺跡や高田B遺跡などでも弥生時代の遺構や土層から出土しているので、弥生時代に属する遺物と考えられる。したがって、Ⅵ層水田は弥生時代に位置づけられる。
- ⑦各水田層の所属時期については、周辺部の調査結果との層序・土壤の特徴・出土遺物等の比較から、主に第28次調査等を参考にして、次表のように整理される。
- ⑧Xc層で検出された大畦畔の方向は、北西から南東方向にのびている。この方向は、第103図のように、富沢遺跡の北西部で20～30mの間隔で検出されている弥生時代中期の畦畔と一致し、仙台市の地下鉄建設に際して行われた第5次調査の7c層で検出された「畦畔2」の延長線上に位置すると推定される。

<表：第136次調査と周辺調査区の土層対応と年代>

※アミは水田層

136次 (土層の状況)	(土色)	(土質)	12次	28次	49次 No 4	132次	所属年代 (28次調査基準)
I 水田耕作土	暗灰色	粘土	1	1	1	I	現代
II 水田耕作土	灰色	粘土	2	2	2	II	近世以降～現代以前
III 畦畔痕跡	黒色	粘土	3	3	3a	III	近世
IV 畦畔痕跡	灰オリーブ色	粘土	4	4	4a	IV	平安時代 (灰白色山灰下以降)
V 畦畔痕跡	オリーブ黒色	粘土	5?	5	5a	V	平安時代 (灰白色山灰下以前)
VI 互層状	黒色	粘土	6a	6	6a	VIa	
VIa 互層	暗灰黄色	粘土 泥炭質粘土	6b	7. 8a. 8b	7. 8a. 8b	VIb	
VIb (互層の一部)	灰色	粘土				V	
VIc 畦畔痕跡	褐灰色	粘土	7	9a	9a	VIc	弥生時代中期後葉 (十三塚式期)
VID 互層	灰黄褐色 黒色	粘土 泥炭質灰	8	9b. 10a	9b. 10a	VID	
Xa 畦畔痕跡	褐灰色	粘土		10b?			弥生時代中期中葉～後葉 (樹形圓式期～十三塚式期)
Xb 自然堆積	灰黄褐色	粘土	9	10d?	10d?	Xb	弥生時代中期中葉～後葉 (樹形圓式期～十三塚式期)
Xc 畦畔痕跡	黄灰色	粘土		11a?	11?		弥生時代中期中葉 (樹形圓式期)
Xd 耕作土下部	暗灰黄色	粘土					
Xe 自然堆積	灰オリーブ色	粘土			12b?		
I X 互層	灰オリーブ色 黒色	泥炭質粘土 泥炭質粘土	12	13	13		



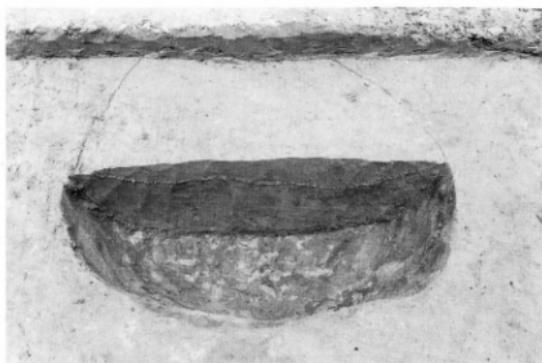
第103図 富沢遺跡北東部の樹形圓式期の水田跡

<参考文献>

- 仙台市教育委員会（1998）：「富沢遺跡・泉崎遺跡－仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書I－」仙台市文化財調査報告書第126集
- 仙台市教育委員会（1984）：「[1]富沢水田遺跡」「仙台平野の遺跡群Ⅲ」仙台市文化財調査報告書第65集
- 仙台市教育委員会（1990）：「富沢遺跡第49次」「富沢遺跡第49次・東光寺遺跡第3次・青葉山A遺跡」仙台市文化財調査報告書第142集
- 仙台市教育委員会（2004）：「富沢遺跡第104次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第235集
- 仙台市教育委員会（2005）：「X 富沢遺跡第132次発掘調査報告書」「山田本町遺跡他」仙台市文化財調査報告書第287集



1 基本層序（西壁断面）

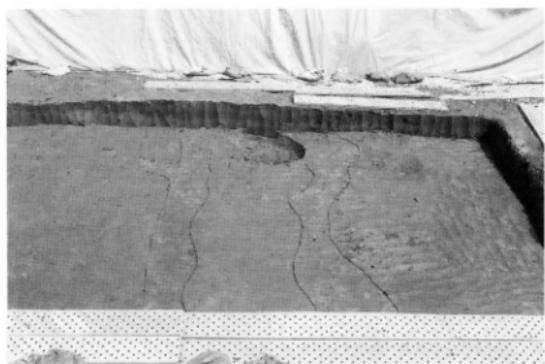


2 II層検出SK1土坑（南から）



3 IV層上面検出状況（西から）

図版50 基本層とII～IV層の状況



図版51 III~VI層の状況



1 VII層下部検出状況（西から）



2 VII層上面検出状況（西から）

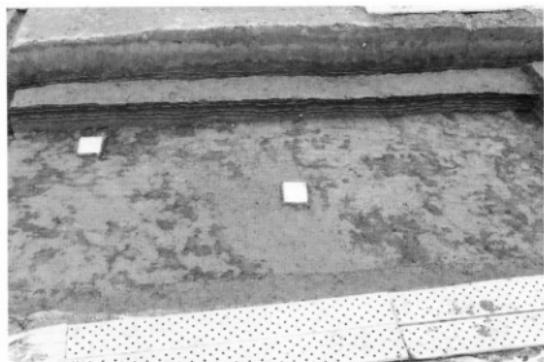


3 VII層中の板状石器出土状況
(北東から)

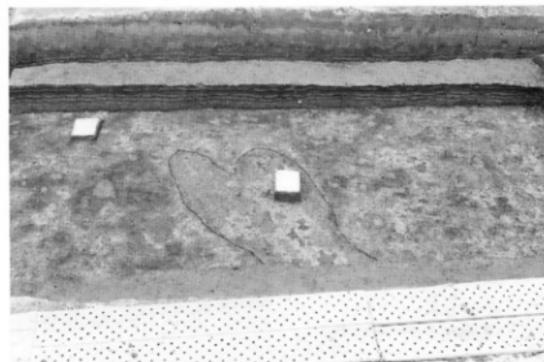
図版52 VII～VII層上部調査状況



1 VII層水田跡畦畔痕跡（南から）

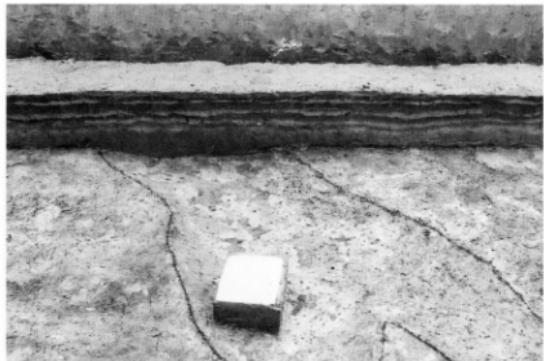


2 VII層下部からIX層上面検出状況
(南から)

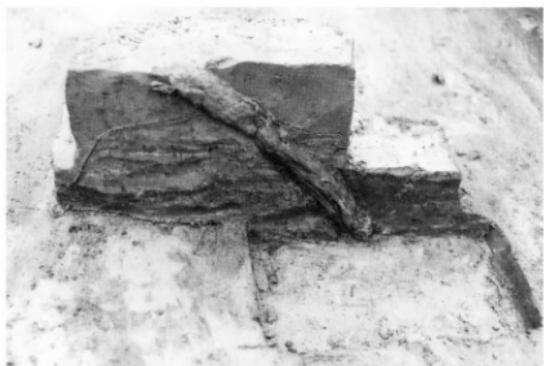


3 VII層畦畔下部の落ち込み（南から）

図版53 VII層水田跡調査状況



1 VII層畦畔下の落ち込み断面
(北から)

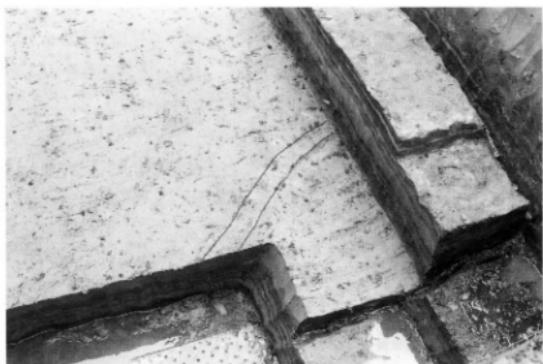


2 VII層検出土坑No. 2 (西から)

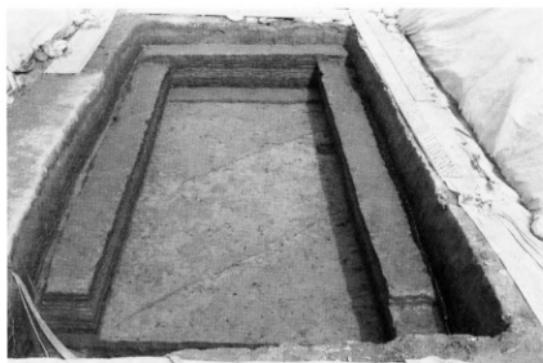


3 Xa層水田跡畦畔痕跡検出状況
(西から)

図版54 VII～X層水田跡調査状況



1 Xa層水田跡畦畔痕跡（北西から）



2 Xc層水田跡畦畔痕跡検出状況
(西から)

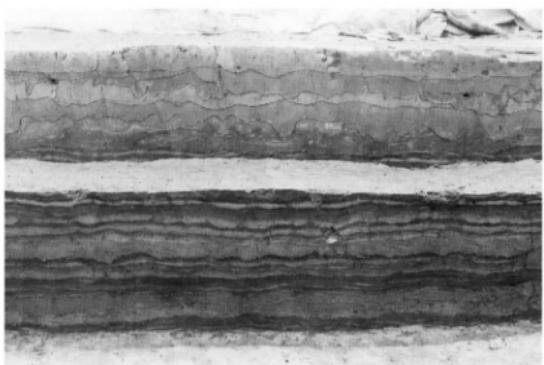


3 Xc層水田跡畦畔痕跡（西から）

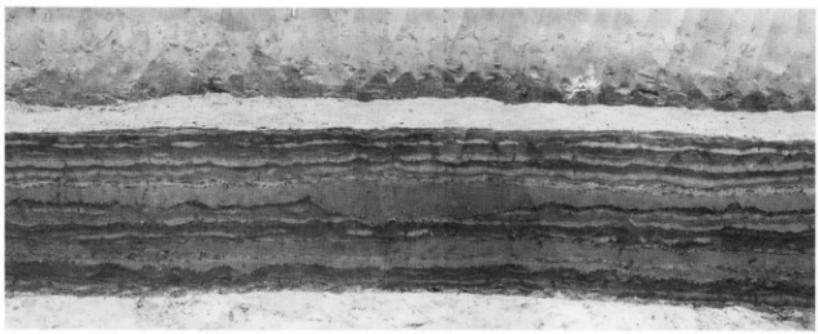
図版55 X層水田跡の調査状況



1 Xc層水田跡畦畔痕跡（南から）

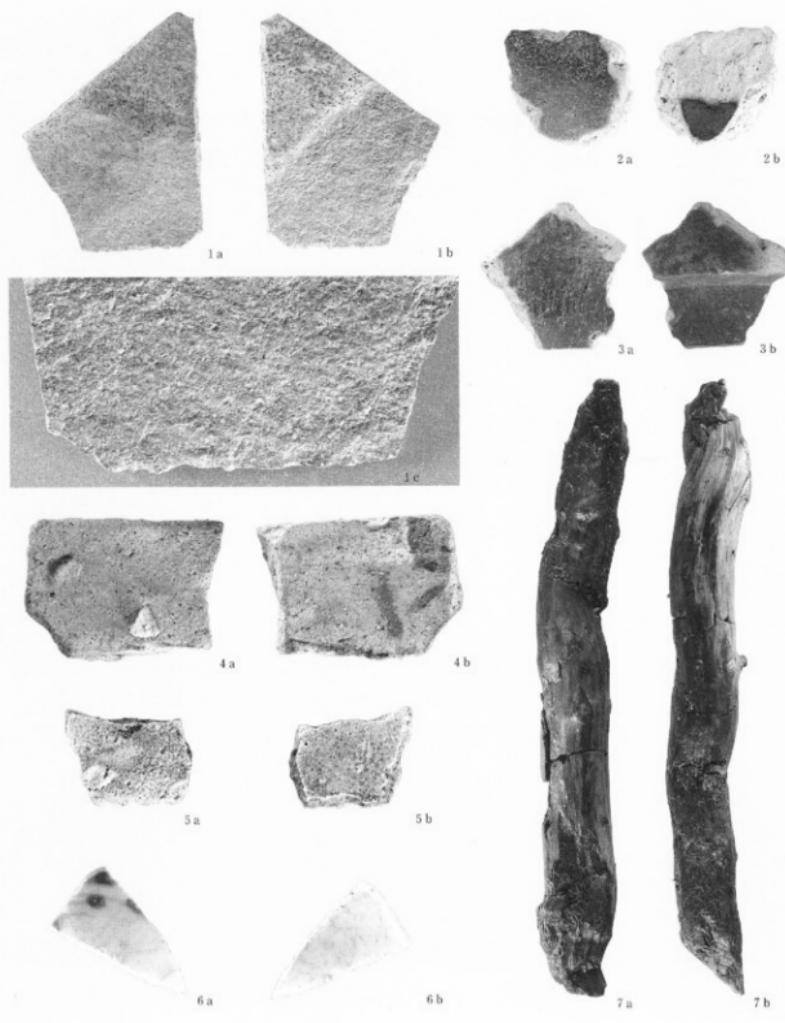


2 北壁中央上層断面（南から）



3 南壁上層断面

図版56 X層水田と上層断面



1 石器	板状石器	K-1 (Ⅷ層 第102図1)	5 陶器	且	I-1 (Ⅱ層)
2 瓦	平瓦	G-1 (Ⅸ層)	6 陶器	ぬ	J-1 (Ⅱ層)
3 丸瓦	丸瓦	F-1 (Ⅹ層)	7 木	丸柱	L-2 (Ⅹ層 第102図2)
4 土師質土器	甕?	I-1 (Ⅺ層)			

XVIII 西上野原遺跡発掘調査報告書

1 調査要項

遺跡名	西上野原遺跡（宮城県遺跡番号19027）
調査地点	仙台市泉区福岡字大前通10-1・81、字下野沢1-1
調査期間	平成17年7月20日
調査対象面積	100m ²
調査面積	34m ²
調査原因	送水ポンプ場建築及び送水管管理設工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担当職員	主査 工藤哲司 文化財教諭 赤岡光騎

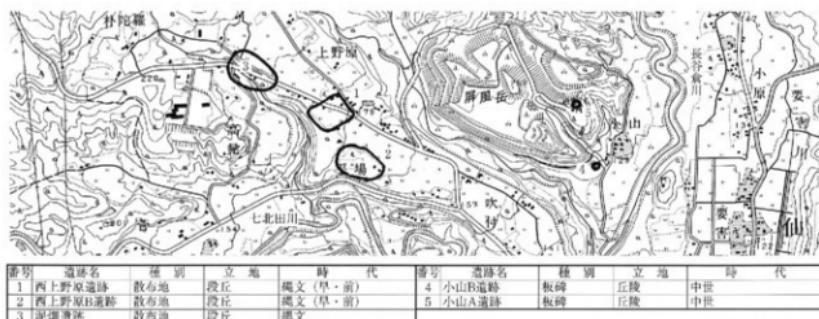
2 調査に至る経過と調査方法

本調査は、平成17年4月28日付けで、仙台市水道事業管理者 佐藤孝一氏から埋蔵文化財の発掘通知が提出されたので、確認調査を実施し、そのうえで必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。確認調査は、平成17年7月20日に実施した。ポンプ場建築予定地は3m×9mのトレンチを設定して調査を行なったが、遺構・遺物は検出されなかった。送水管管理設工事（進入路）予定地には、2.5m×3.5mのトレンチを設定して調査を行なったところ、土坑が1基検出されたため、この遺構について調査を実施した。

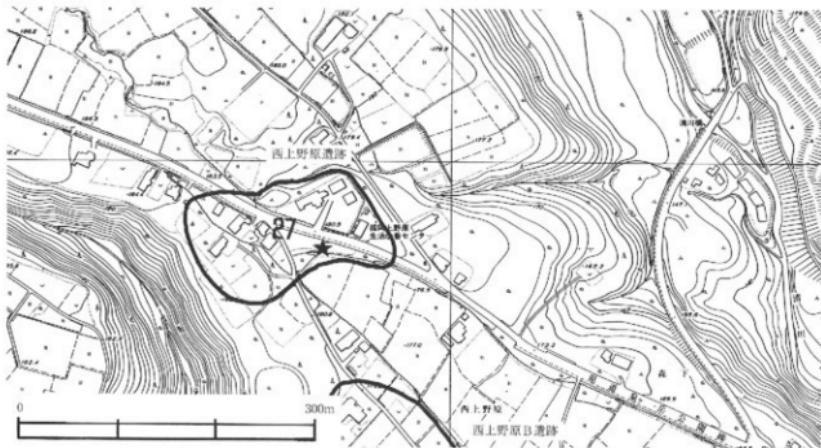
3 遺跡の位置と環境

西上野原遺跡は、仙台市西北部の丘陵地帯に位置する。付近は、標高1175mの泉ヶ岳を源とする七北田川・清川・長谷倉川などの河川が形成した河岸段丘面が平坦な谷状を成している。河岸段丘面は、北西から南東方向に緩やかに傾斜して下がっている。標高は180m前後である。

丘陵部とあって、周辺には遺跡も少ない。近くには、西上野原B遺跡・泥畑遺跡などの縄文時代の遺物散布地と、鷲倉神社周辺に中世の板碑群があるだけである。



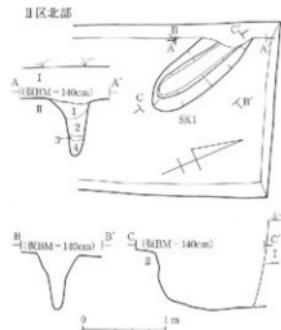
第104図 遺跡の位置と周辺の遺跡



第105図 調査地点の位置



第106図 調査区と遺構配置



No.	色	土質	案考
1	10YR2.3	暗褐色 シット質粘土 黄褐色土のブロックを少混合。	
2	10YR3.2	褐色色 シット質粘土 田畠十畝からの落ち込みと被覆される。	
3	10YR6.6	明黄色土 粘土 明黄色土	
4	10YR3.4	褐色 シット質粘土 明黄色土層を落葉堆積中に含む。	

第107図 SK1坑土実測図

4 基本層序

ポンプ場建築予定地（I 区）は、I 層（表土層）がにぶい黄褐色（10YR4/3）のシルト質粘土層で、層厚は約 20cm である。水田耕作土層である。II 層は明黄色（10YR6/6）の粘土層で、大小の礫をまばらに含んでいる。この付近の地山層を形成している。

送水管理設工事予定地（II 区）は、I 層（表土層）が、暗褐色（10YR3/3）のシルト層で、層厚は 40cm 前後で

ある。畠の耕作土層で、礫を少量含む。Ⅱ層は明黄褐色（10YR6/8）の粘土層で、大小の礫を多く含んでいる。この付近の地山層を形成している。

5 発見遺構と出土遺物

送水管設工事予定地（Ⅱ区）のⅡ層上面で土坑が1基検出された。

1) 土坑

SK1 土坑 Ⅱ区北東角で検出された。一部は調査区の外にのびる。平面形は長い楕円形を呈する。検出部で長軸147cm・短軸53cmを測る。深さは70cmで、横断面形は漏斗状に下半部が狭くなっている。底面幅は約10cmである。縦断面形は袋状に下半部が広がっており、上部がわずかに迫り出している。堆積土は4層に分けられるが、崖崩落土や旧表土からの流入土からなる自然堆積土層と観察される。この遺構については、その形状から「落とし穴」と考えられる。

2) 出土遺物

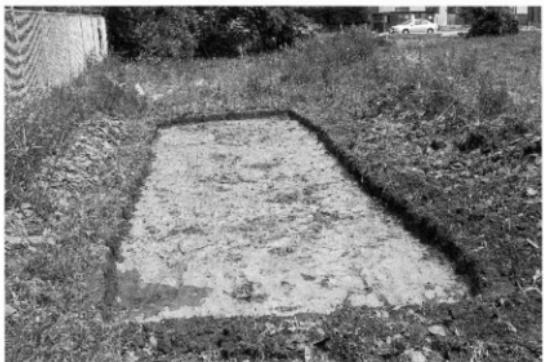
今回の調査では、表土層及び遺構堆積土からの出土遺物はなかった。

6まとめ

- ①今回、西上野原遺跡での初めての発掘調査が行われた。
- ②遺物は出土しなかったが、「落とし穴」と考えられる土坑が1基検出された。
- ③落とし穴の年代は、出土遺物が無いために不明であるが、市内で同様の形態の遺構が検出されている川添東遺跡・宮沢遺跡・山田本町遺跡などの例から、縄文時代の遺構と推定される。

<参考文献>

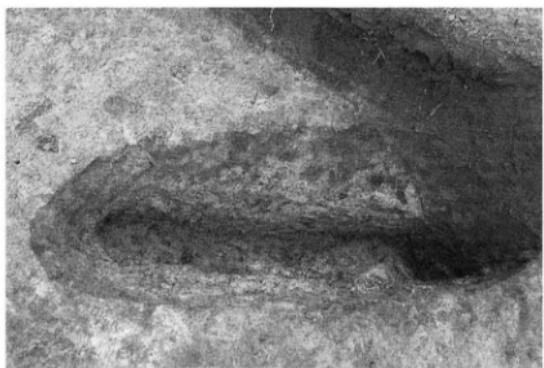
- 仙台市教育委員会（1988）：『宮沢遺跡 第24次調査 富沢中学校地区発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第113集
- 仙台市教育委員会（1997）：『第4部 川添東遺跡』『相ノ原・大貝中・川添東遺跡』仙台市文化財調査報告書第217集
- 仙台市教育委員会（2005）：『I 山田上ノ台塚・山田本町遺跡発掘調査報告書』『山田本町遺跡他』仙台市文化財調査報告書第287集



1 I区の状況



2 II区全景



3 SK1 土坑

図版58 西上野原遺跡調査状況

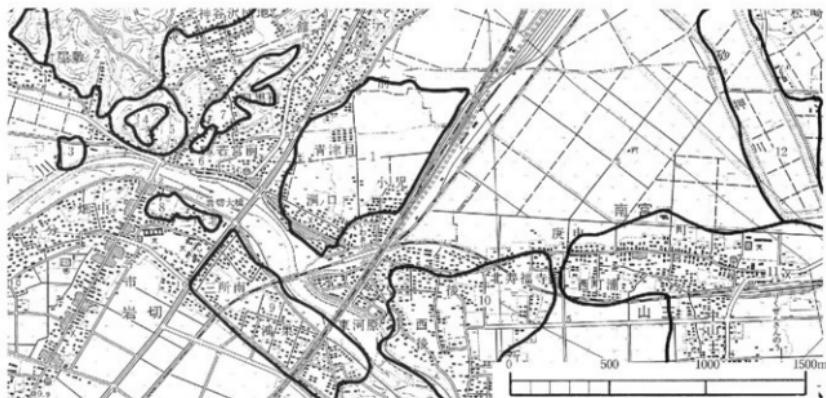
XIX 洞ノ口遺跡第12次発掘調査報告書

1. 調査要項

遺跡名	洞ノ口遺跡（宮城県遺跡番号01372）
調査地点	仙台市宮城野区岩切字洞ノ口164-2、164-4
調査期間	平成17年6月13日～6月17日
調査対象面積	77m ²
調査面積	26m ²
調査原因	個人住宅建築
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担当職員	文化財教諭 浅野克樹 三塚博之

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成17年3月1日付けで、地権者である千葉洋子氏より木造2階建て個人住宅建築のため協議書が提出されたことにより実施した。建物建築予定部分に東西7.5m・南北3.5mの調査区を設定し、重機により盛土部分からⅡ層まで掘り下げ、Ⅲ層上面（標高約7.8m）で人力による遺構検出作業を行った。Ⅲ層上面の調査終了後、Ⅳ層上面で遺構検出作業を行ったが、湧水が激しく調査が困難であったため、西半の遺構調査のみを行った。湧水はほぼⅣ層上面まで湧き、調査区西半に比べ東半の方が湧水による影響を受けた。調査区南壁で確認すると、Ⅱ層が東に向かって低くなっている、堆積の違いが影響しているものと考えられる。

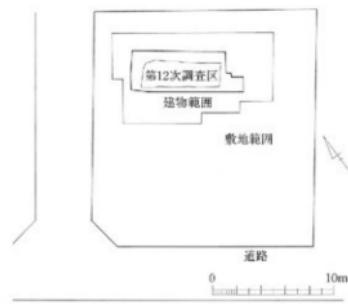


番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	洞ノ口遺跡	城廬	自然堤防	古墳・古代～近世	7	羽黒前遺跡	散布地	丘陵	中世・近世
2	岩切城跡	城廬	丘陵	中世	8	今山遺跡	集落	自然堤防	古代・中世・近世
3	新宿御遺跡	散布地	自然堤防	古代	9	鴻ノ巣遺跡	集落	自然堤防	古墳・古代・中世
4	東光寺・板神跡	板碑	丘陵	中世	10	新田遺跡	集落	自然堤防	古墳・古代・中世
5	東光寺遺跡	城廬	丘陵	中世	11	山王遺跡	集落	自然堤防	弥生・古墳・古代
6	若宮前遺跡	散布地	丘陵	縄文・古代～近世	12	市川橋遺跡	官衙・閘道	自然堤防地	縄文～中世

第108図 遺跡の位置と周辺の遺跡



第109図 調査地点の位置



第110図 調査区配置図

3. 遺跡の位置と環境

洞ノ口遺跡は、仙台市北東部の利府町・多賀城市と接する地区でJR岩切駅と県道仙台松島線（利府街道）の間にあたり七北田川北岸の自然堤防とその北側の後背湿地に立地する。本遺跡周辺には、数多くの遺跡が分布しており、そのほとんどは七北田川両岸の丘陵面と自然堤防上に集中している。国指定史跡岩切城跡、東光寺遺跡、鴻ノ巣遺跡などの中世の遺跡や、東方には陸奥国府であった多賀城がある。そのほか、岩切から多賀城にかけては新田遺跡、山王遺跡、市川橋遺跡などの古代から中世にかけての遺跡が分布している。

本遺跡は、土地区画整理に先立って、平成4年より調査が開始され、これまでの調査で、中世の堀、土塁、土坑、溝、城館成立前の建物跡、井戸、堅穴遺構、溝などが発見されている。中世の遺構は城館成立前と後の2時期に大別される。前者は13～15世紀前半頃の屋敷跡と考えられ、後者は土塁を伴う城館として改変されたもので、15世紀後半～16世紀後半の年代が推測されている。これらの遺構の他にも平安から江戸時代の水田跡や近世墓なども発見されている。

4. 基本層序

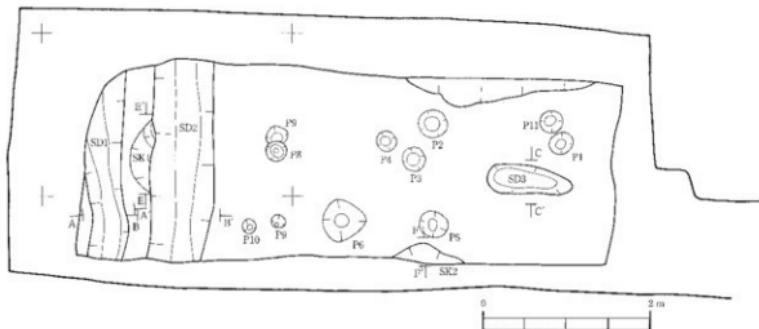
- | | |
|----------------|---------------------------------------|
| I層：褐色砂質シルト | にぶい黄褐色粘土質シルトのブロックを含む。下面にゆるやかな乱れが見られる。 |
| II層：暗褐色シルト質粘土 | 全体に褐色土の小ブロックを含む。南壁でのみ確認している。東半で厚くなる。 |
| IIIa層：褐色粘土 | 上面に暗褐色土の小ブロックを含む。 |
| IIIb層：にぶい黄褐色粘土 | 黄褐色粘土のブロックを含む。酸化鉄粒を少量含む。 |
| IIIc層：黒褐色粘土 | 全体に炭化物粒・焼土粒を少量含む。下面にゆるやかな乱れが見られる。 |
| IV層：にぶい黄褐色砂 | 全体に酸化鉄粒を多量に含む。 |

5. III層発見遺構と出土遺物

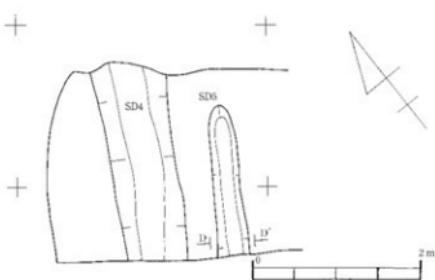
III層上面では溝跡3条、土坑3基、ビット11個を確認した。

1) 溝跡

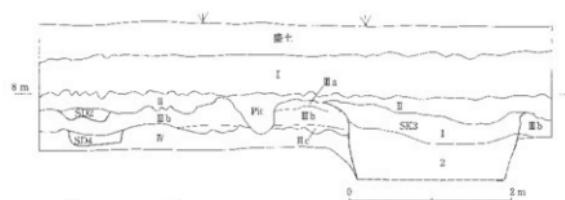
SD1溝跡 調査区西端で確認した。検出部の全長は2.1mで、南北方向に延びている。幅は上面40cm・底面20cmである。深さは16cmで、断面形はゆるやかなU字形を呈する。堆積土は黒褐色粘土の1層である。遺物は出土していない。



第111図 II層遺構配置図

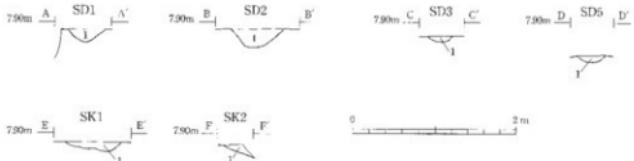


第112図 IV層遺構配置図



層位	土色	土質	備考
I	10YR4/4 褐色	砂質シルト	に赤い黄褐色粘土質シルトのブロックを含む 下面にゆるやかな瓦れが見られる
II	10YR3/3 灰褐色	シルト質粘土	全般に褐色粘土の小ブロックを含む 南壁でのみ確認 東半で厚くなる
IIa	10YR4/6 褐色	粘土	上部に褐色シルト・粘土の小ブロックを含む
IIb	10YR4/3 に赤い黄褐色	粘土	黄褐色粘土のブロックを含む 塗化鉄粉を含む
IIc	10YR3/1 黒褐色	粘土	全体に炭化物鉄・塗土粒を少量含む 下面にゆるやかな瓦れが見られる
IV	10YR4/4 に赤い黄褐色	砂	全体に塗化鉄粉を多量に含む

第113図 北・南壁土層断面図



SD1					SK1				
層No.	土 色	土質	備 考		層No.	土 色	土質	備 考	
1	10YR3/2 黒褐色	粘土 軟土	に赤い黄褐色シルトの小ブロックを含む 炭化物粒、堆上粘土を含む		1	10YR3/1 黑褐色	粘土	塊状粘土を少量含む	
SD 2					SK 2				
層No.	土 色	土質	備 考		層No.	土 色	土質	備 考	
1	10YR3/2 黑褐色	粘土	に赤い黄褐色シルトの小ブロックを含む 炭化物粒、塊状粘土を含む		1	10YR3/2 黑褐色	粘土	塊状粘土の小ブロックを含む 炭化物粒を含む	
SD 3					SK 3				
層No.	土 色	土質	備 考		層No.	土 色	土質	備 考	
1	10YR3/2 黑褐色	粘土	塊状粘土の小ブロックを含む 炭化物粒を含む		1	10YR3/2 黑褐色	シート粘土 砂層	下層の中ブロックを含む	
					2	10YR3/2 黑褐色	シート粘土 砂層	下層の中ブロックを含む 下層グライ化	
SD 4					SD 5				
層No.	土 色	土質	備 考		層No.	土 色	土質	備 考	
1	10YR4/2 黄褐色	粘土	下層の大ブロックを含む 全層に塊状粘土を含む		P1	10YR3/2 黑褐色	粘土	塊状粘土の小ブロック、炭化物粒、塊状粘合土	
					P2	10YR3/2 黑褐色	粘土	塊状粘土の小ブロック、炭化物粒を含む	
					P3	10YR3/2 黑褐色	粘土	塊状粘土の小ブロック、炭化物粒を含む	
					P4	10YR3/1 黄褐色	シルト	塊状粘土の小ブロック、炭化物粒を含む	
					P5	10YR3/2 黑褐色	粘土	塊状粘土の小ブロック、炭化物粒を含む	
					P6	10YR3/2 黑褐色	粘土	塊状粘土の小ブロック、炭化物粒を含む	
					P7	10YR3/2 黑褐色	粘土	に赤い黄褐色シルトの小ブロック、塊状粘合土	
					P8	10YR3/2 黑褐色	粘土	塊状シルトの小ブロックを含む	
					P9	10YR3/2 黑褐色	粘土	塊状粘土の小ブロック、炭化物粒を含む	
					P10	10YR3/2 黑褐色	粘土	塊状粘土の小ブロック、炭化物粒を含む	
					P11	10YR3/2 黑褐色	粘土	塊状粘土の小ブロック、炭化物粒を含む	

第114図 遺構断面図

SD 2溝跡 調査区西側で確認した。検出部の全長は2.3mで、南北方向に延びている。幅は上面80cm・底面23cmである。深さは20cmで、断面形はゆるやかなU字形を呈する。堆積土は黒褐色粘土で1層である。磁器片6点、土師器片1点が出土している。

SD 3溝跡 調査区東側で確認した。検出部の全長は1mで、南北方向に延びている。幅は上面33cm・底面20cmである。深さは7cmで、断面形はゆるやかなU字形を呈する。堆積土は黒褐色粘土で1層である。遺物は出土していない。

2) 土坑

SK 1土坑 調査区西側で確認した。検出部で長さ90cm・幅25cm、深さ20cmを測る。大半をSD 2溝跡に切られていて不明であるが、平面形は円形を呈するものと思われる。断面形はゆるやかなU字形を呈する。堆積土は、黒褐色粘土で1層である。遺物は出土していない。

SK 2土坑 調査区南端中央で確認した。検出部で長さ90cm・幅25cm、深さ20cmを測る。遺構の大半が調査区外に延びているため、平面形は不明である。堆積土は、黒褐色粘土で1層である。遺物は出土していない。

SK 3土坑 調査区北東部で南北部を確認した。遺構の北半が調査区外に延びているため不明であるが、平面形は方形もしくは長方形を呈すると思われる。検出部で長さ220cm、深さは1m以上ある。堆積土は2層あり、1層は黒褐色シルト質粘土で基本層Ⅳ層の中ブロックを含む。2層は黒褐色シルト質粘土で下層はグライ化しており、基本層Ⅳ層の大ブロックを大量に含む。人為的に埋め戻したものと見られる。遺物は土師器片2点、磁器片1点が出士している。

3) ピット

ピットは11個検出した。堆積土はすべて1層で、P4以外はすべて黒褐色粘土である。P4のみ褐色シルトである。また、P7、8以外のすべてのピットの堆積土に炭化物粒が見られた。遺物は出土していない。

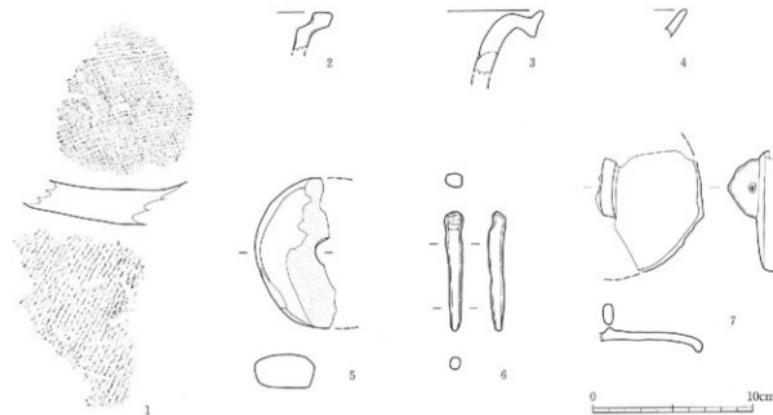
6. IV層発見遺構と出土遺物

IV層上面では西半で溝跡2条を確認した。

1) 溝跡

SD4溝跡 調査区西端で確認した。検出部の全長は2.5mで、南北方向に延びている。幅は上面80cm・底面40cmである。深さは50cmで、断面形は逆台形を呈する。堆積土は、灰黄褐色粘土で1層である。土師器片が1点出土している。

SD5溝跡 調査区西側で確認した。検出部の全長は1.9mで、南北方向に延びている。幅は上面35cm・底面7cmである。深さは8cmで、断面形はゆるやかなU字形を呈する。下面に掘削具痕が見られる。SD5溝跡の東側にも同様の溝状のプランが数条見られ、小溝状遺構の可能性を考慮し精査したが、湧水が激しく確認することはできなかった。堆積土は、黒褐色粘土で1層である。遺物は出土していない。



層中 番号	発現 番号	出上場所	分類	径				特徴・指考	写真回数
				径	厚	口径	底		
1	G-1	Ⅱ層	石器	手丸			22	内面：布目模 口面：網印模	59-1
2	T-1	Ⅱ層	陶器	盤（深皿）				火燒 古墳式 14C中頃	59-2
3	I-2	SD2 1層	陶器	盤				受口底口縁 寸法：13.8×9.2	59-3
4	I-3	SK3 2層	土師質土器	皿				内面：ロクロ模外側：ロクロ模	59-4
5	K-1	Ⅱ層	石製品	有孔円盤	9.4	3.7	21		研磨石片
6	N-1	Ⅱ層	金属製品	釘	7.4	1.0	0.8		59-6
7	N-2	Ⅱ層	金属製品	釘	3.0	(11.5)		つまみ輪	59-7

第115図 出土遺物

7.まとめ

①今回の調査区は、洞ノ口遺跡の南側中央付近に位置する。当該地の西15mの地点では、平成13年にも確認調査が行われ古代・中世・戦国時代のものと思われる遺構が確認されている。

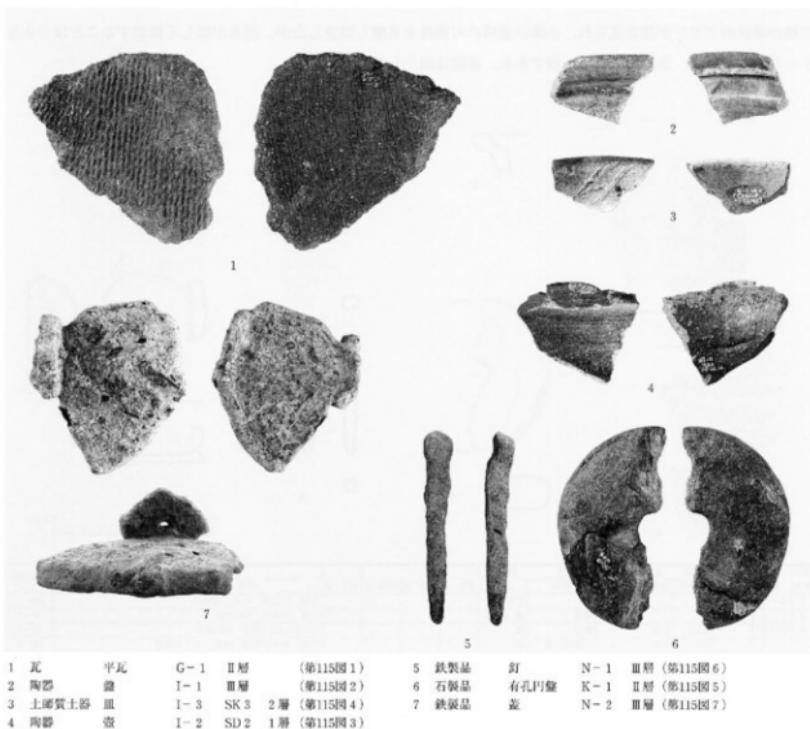
②今調査の結果、Ⅲ層上面で溝跡3条・土坑3基・ピット11個、Ⅳ層上面で溝跡2条を確認した。出土遺物や以前の近隣での調査結果と比較すると、中世の遺構と考えられる。

<参考・引用文献>

篠原信彦・佐藤洋・主浜光朗・吉田和正・村上秀樹（2001）「洞ノ口遺跡第3次発掘調査報告書」 仙台市文化財調査報告書第253集

吉岡・平間（2001）「洞ノ口遺跡第6次発掘調査報告書」 仙台市文化財調査報告書第253集

吉岡恭平・吉田和正（2002）「洞ノ口遺跡第8次発掘調査報告書」 仙台市文化財調査報告書第261集



図版59 洞ノ口遺跡第12次調査出土遺物

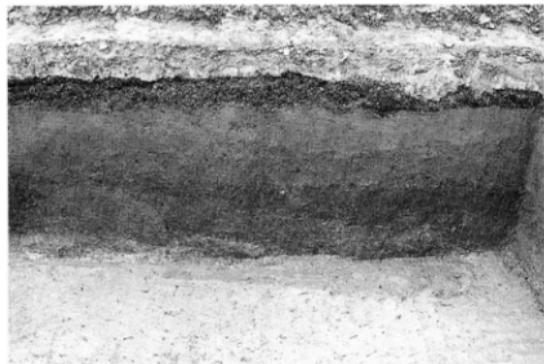
1 遺構検出状況（東より）



2 ピット群完掘状況（南西より）



3 北壁東部断面（南より）



図版60 遺構検出状況・ピット群・Ⅲ層全景



1 SD4溝跡完掘状況（南より）



2 北壁西部断面（南より）



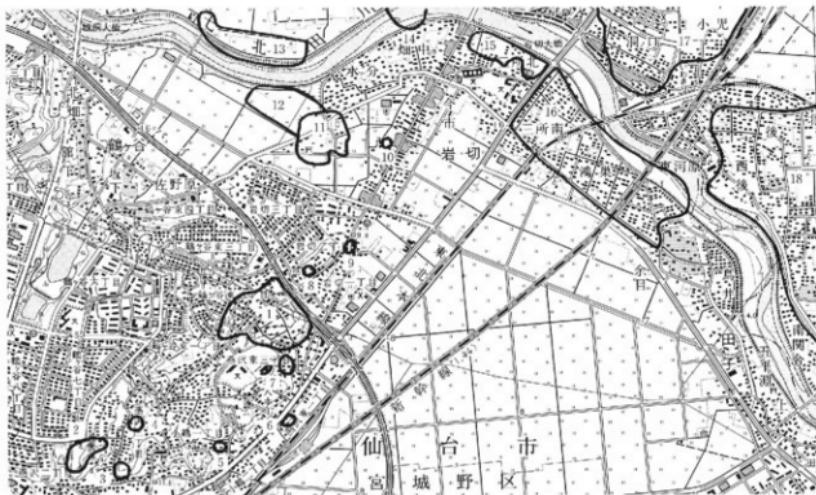
3 Ⅲ層完掘状況（西より）

図版61 検出遺構・北壁断面

XX 燕沢遺跡第12次発掘調査報告書

1 調査要項

遺跡名	燕沢遺跡（宮城県遺跡番号01001）
調査地点	仙台市宮城野区燕沢3丁目528-1
調査期間	平成17年2月22日
調査対象面積	422m ²
調査面積	36m ²
調査原因	宅地造成（私道敷設）
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担当職員	主査 工藤哲司 文化財教諭 今野秀治

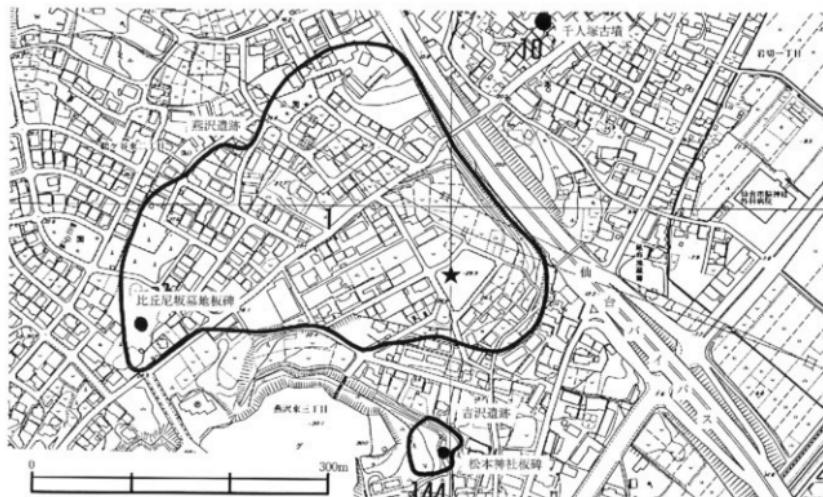


番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	燕沢遺跡	集落・寺院	段丘	鶴文・弥生～古代
2	善光寺横穴群	横穴墓	段丘斜面	古墳・古代
3	善光寺東横穴群	横穴墓	段丘斜面	古墳・古代
4	比丘尼塚古墳	古墳	段丘	古墳
5	五郎兵衛古墳	古墳	段丘斜面	古墳
6	羅漢古墳	古墳	段丘斜面	古墳
7	吉沢遺跡	祭祀地	段丘斜面	古代
8	千人塚古墳	古墳	古墳	古墳
9	山崎回遊跡	散在地	段丘斜面	鶴文
10	耕田寺板碑群	板碑	自然堤防	中世
11	稀有船形石	船形	自然堤防	中世
12	岩切切中遺跡	集落・包含地	自然堤防	鶴文・弥生～近世
13	大正町遺跡	散在地	自然堤防	古代
14	新宿山遺跡	散在地	自然堤防	古代
15	今吉遺跡	集落・包含地	自然堤防	古墳・古代～近世
16	鴻ノ島遺跡	集落・包含地	自然堤防	古墳・古代～近世
17	洞ノ口遺跡	滅多・集落・水田	自然堤防	古墳・古代～近世
18	新田遺跡	滅多・集落・水田	自然堤防	弥生・古墳～近世

第116図 遺跡の位置と周辺の遺跡

2 調査に至る経過と調査方法

本調査は、平成17年1月20日付けで、地権者大本博文氏より、宅地造成工事に伴う「埋蔵文化財の取扱いについ



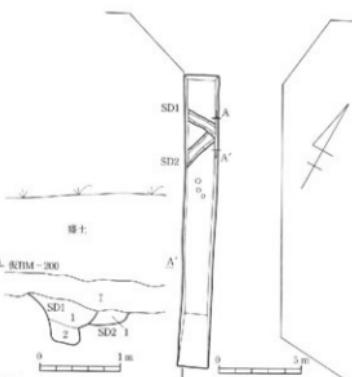
第117図 調査地点の位置

て「協議」が提出された。計画は、2172m²の敷地に422m²の私道敷設し、道路中に最深で1.7mの深さに下水管を埋設するものであった。当該地は、北から南側に向って下がる傾斜地に既に1~4mの盛土が行われていることから、現地表から約1.7mより深い面で遺構が検出される可能性のある範囲の下水管設置予定部分の調査を実施する旨の回答をした。

調査は、平成17年2月22日に実施した。下水管設置予定部分に幅2mのトレンチを設定し、盛土の深い北側から調査を行ない、南側に15mまで掘り進んだところで地山の検出面が地表2mを超えたので、掘削をやめ、遺構の検出作業を行った。遺構は、調査区の北側で溝跡が2条検出された。溝の調査後、調査記録を作成した。

3 遺跡の位置と環境

燕沢遺跡は、仙台市東北部のJR東仙台駅の北東約2kmに位置する。仙台市の地形は、西部は奥羽山脈から派生する丘陵と段丘地帯からなり、東部は「宮城野海岸平野」と呼ばれる沖積地から成っている。丘陵から流下する河川は、市内では北から七北田川・広瀬川・名取川となって太平洋に注いでいる。丘陵の東部は、七北田川の北側は富谷丘陵、



第118図 遺構実測図

SD 1			
層No.	土色	土質	備考
1	10YR3/2 黒褐色	シート状粘土	炭化した礫片を多量に含む。瓦片・土加藤片が多く含む。
2	10YR4/2 黒褐色	粘土	直径2~5cmの汎化礫を含む。
SD 2			
層No.	土色	土質	備考
1	10YR2/2 黒褐色	粘土	炭化した礫片を多量に含む。瓦片・土加藤片を僅かに含む。



第119図 燕沢遺跡東部遺構配置図

七北田川と広瀬川の間が七北田丘陵、広瀬川と名取川の間が青葉山丘陵と呼ばれている。さらに七北田丘陵の東端は、台原・小田原丘陵と呼ばれる。燕沢遺跡は、台原・小田原丘陵の最東端の段丘上に位置し、遠くに七北田川や多賀城跡を望むことができる。遺跡の標高は20~30mで、周辺の沖積平野よりも15~20m高い。

遺跡周辺は、遺跡内から縄文時代早期から前期にかけての土器片が出土しているが、縄文時代から弥生時代にかけては不明な点が多い。古墳時代になると、燕沢遺跡で前期の堅穴住居跡が発見されているほか、七北田川沿いの鴻ノ巣遺跡に中期の溝と構に囲まれた大きな集落が形成されている。また、千人塚古墳・五郎兵古墳・案内古墳・善光寺横穴墓群などの古墳も造営されるほか、大進寺窓跡では、5世紀中頃に須恵器が焼成されている。奈良時代になると対岸の丘陵には多賀城が造営され、宮城野原に陸奥国分寺・尼寺が建立される。この時期、台原・小田原丘陵には瓦や須恵器焼成のため多数の窯が造られている。平安時代には、周辺に多くの集落が形成される。中世には、岩切城や洞ノ口遺跡に城館が築かれ、その近くには、中世東光寺を中心として板碑群や石窟仏群からなる宗教遺跡群が形成される。さらに城下・門前には水運の七北田川と陸路の奥大道が交差する今市橋周辺には「冠屋市場」・「河原宿五日市場」の二つの市が存在した記録がある。

燕沢遺跡はこれまでの調査で、5時期の変遷が考えられている。

1期=縄文時代：遺構は未発見であるが、早期・前期の縄文土器と共に伴うと考えられる石器が出土している。

2期=弥生時代：土坑や方形圓式の土器・石庖丁・石器が出土している。

3期=古墳時代：前期の堅穴住居跡が4軒確認されている。

4期=奈良時代：遺構は検出されていないが、多賀城創建以前から創建期頃の瓦が出土した。

5期=平安時代：2期に細分される。

5a期-10世紀前半以前：主に堅穴住居跡で構成されている。

5b期-10世紀前半以降：掘立柱建物跡で構成され、遺跡南東部では「僧坊」と推定される建物が検出され、その周辺の建物群とともに寺院の伽藍を形成していたと考えられる。この寺院に関係する「讀院口」と書かれた須恵器環をはじめとする多数の墨書き器、「右？婦合？」の漆紙文書、多くの瓦などの遺物が出土している。

4 基本層序

基本層序は、3層に分けられる。

盛土層：北部の薄い部分で90cmあり、南側ほど徐々に厚くなっている。

I 層：10YR3/3暗褐色のシルト質粘土。風化した粒状の礫を多量に含む。層厚約15cm。盛土以前の近年の畠耕作土である。

II 層：10YR2/3黒褐色のシルト質粘土。風化した礫の小片・炭化物を含む。層厚15cm前後。旧表土層。調査区の北端部のみに分布する。

III 層：10YR5/3にぶい黄褐色の砂疊。風化した礫層で、礫間を砂が埋めている。表面には酸化鉄が集積している。地山層。

5 発見遺構と出土遺物

調査区北部のⅢ層で溝跡2条とピット3個が検出された。

1) 溝跡

SD1溝跡：調査区を東西に横切る。SD2溝跡を切る。上面幅70cm前後・底面幅35cm前後で、深さは20~50cm

で東側が深くなっている。断面形は逆台形を呈する。堆積土は2層に分けられ、上半部は黒褐色のシルト質粘土層で風化した礫片や土器片を多く含む。下半部は灰黄褐色の粘土層で、風化した礫を含む。溝の位置は、遺跡の南東部で寺院を構成する遺構群のうち、現在発見されている南端の遺構（SA 6柱列）から9~10m南側に平行して存在している。遺物は、平瓦片8点・丸瓦片1点・土師器片4点が出土している。平瓦は、凸面が錐叩き・凹面が布目のあるものである。土師器片の中には、ロクロを使用し、内面黒色処理された壺の破片が2点含まれる。

SD 2溝跡：南北に伸びて検出された。SD 1溝跡に切られ、これと直行している。上面幅60~70cm・底面幅30cm前後で、深さは15cm前後である。断面形は逆台形を呈する。堆積土は1層で、黒褐色の粘土層で風化した礫を多量に含む。遺物は平瓦片2点・丸瓦片1点・土師器片1点が出土している。

2) ピット

調査区の中央付近で3個検出された。平面形は円形を基調とし、直径25~30cm・深さ5~10cmを測る。堆積土は基本層I層に類似するので、新しい掘り込みと考えられる。

3) その他の出土遺物

表土中から平瓦片3点が出土している。平瓦のうち1点の凹面には模骨痕の可能性がある凹凸が観察される。

6まとめ

- ①本調査区は、遺跡の南東部で寺院跡と推定される遺構群の南側の傾斜面に位置する。
- ②SD 1溝跡は、出土した瓦と土師器片から平安時代の遺構と考えられる。
- ③SD 1溝跡は、その位置と方向からこれまでの調査で検出されている僧坊に比定される建物の北側で平行方向に検出されている溝跡とともに、寺院を区画する施設の可能性が考えられる。
- ④調査区内のSD 1溝跡より南側の斜面は、これまでに検出されている遺構の配置から、寺院跡の正面中央付近に相当するが、古代の遺構は検出されなかった。

<参考文献>

- 仙台市教育委員会（1982）：「燕沢遺跡発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第39集
 仙台市教育委員会（1984）：「燕沢遺跡」仙台市文化財調査報告書第62集
 仙台市教育委員会（1988）：「燕沢遺跡」仙台市文化財調査報告書第116集
 仙台市教育委員会（1991）：「燕沢遺跡第4・5・6次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第154集
 仙台市教育委員会（1994）：「仙台平野の遺跡群XⅢ」仙台市文化財調査報告書第179集
 仙台市教育委員会（1995）：「仙台平野の遺跡群XⅣ」仙台市文化財調査報告書第195集
 仙台市教育委員会（1996）：「仙台平野の遺跡群XⅤ」仙台市文化財調査報告書第211集
 仙台市教育委員会（1997）：「仙台平野の遺跡群XⅥ」仙台市文化財調査報告書第216集
 仙台市教育委員会（1998）：「仙台平野の遺跡群XⅦ」仙台市文化財調査報告書第228集



1 調査区全景（南から）



2 SD 1・2 溝跡（南から）



3 SD 1・2 溝跡断面（西から）

図版62 燕沢遺跡の調査状況

報告書抄録

ふりがな	まえだたてあとほか						
書名	前田館跡他						
圖書名	発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第301集						
編著者名	工藤哲司 三塚博之 浅野克樹 門田有希 赤岡光騎						
編集機関	仙台市教育委員会						
所在地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区国分町3丁目7-1 電話 022-214-8894						
発行年月日	平成18年3月31日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
前田館跡	仙台市太白区中田6丁目55の一部	04100 0121	38°11'18"	140°53'16"	2005・05・24 2005・06・06	50m ²	宅地造成
中田ふみのくに跡 (第3次)	仙台市太白区中田7丁目226-17、225-10、230-6-7	04100 01272	38°11'10"	140°53'30"	2005・06・22 2005・06・30	21m ²	個人住宅 建築
中田北遺跡	仙台市太白区中田7丁目20	04100 01271	38°11'19"	140°53'29"	2005・04・11 2005・04・13	102m ²	共同住宅 建築(2棟)
みやこのじょう跡 南城跡	仙台市宮城野区銀杏町508-2	04100 01226	38°15'43"	140°54'50"	2005・04・25	21m ²	個人住宅 建築
人野田古墳群 (第10次)	仙台市太白区大野田字百番-14番の各一部	04100 01361	38°12'48"	140°52'27"	2005・04・27 2005・04・28	21m ²	個人住宅 建築
大野田古墳群 (第11次)	仙台市太白区人野田字千刈山84-85、86-9番一部	04100 01361	38°12'53"	140°52'21"	2005・06・01 2005・06・23	47m ²	個人住宅 建築
元袋遺跡 (第5次)	仙台市太白区大野川字元袋19	04100 01179	38°12'55"	140°52'52"	2005・04・18 2005・04・28	32m ²	店舗付 個人住宅建築
湯の木果遺跡 (第10次)	仙台市宮城野区岩切三所北123-2、124-9	04100 01034	38°18'04"	140°56'54"	2005・05・13	21m ²	個人住宅 建築
北日城跡(第4次)	仙台市太白区東郡山2丁目106-4・107-2	04100 01029	38°13'3"	140°54'17"	2005・06・07 2005・06・08	24m ²	個人住宅 建築
北日城跡(第5次)	仙台市太白区東郡山2-548-13	04100 01029	38°13'6"	140°54'10"	2005・10・12 2005・10・13	8m ²	個人住宅 建築
南北小泉遺跡 (第44次)	仙台市若林区遠見塚1丁目22番	04100 01021	38°14'5"	140°54'56"	2005・03・01 2005・03・03	18m ²	防火水槽 建築
南北小泉遺跡 (第45次)	仙台市若林区遠見塚2丁目291-10-11番	04100 01021	38°14'2"	140°55'22"	2005・06・16 2005・06・17	32m ²	個人住宅 建築
南北小泉遺跡 (第46次)	仙台市若林区南北小泉4丁目50-1他1筆	04100 01021	38°13'9"	140°54'28"	2005・11・28 2005・11・29	36m ²	宅地造成
南北小泉遺跡 (第47次)	仙台市若林区遠見塚1丁目37-1	04100 01021	38°13'13"	140°54'59"	2005・12・13 2005・12・15	32m ²	個人住宅 建築
袋前遺跡 (第2次)	仙台市太白区大野田字袋前23の一部	04100 01439	38°12'51"	140°52'49"	2005・9・26	10m ²	個人住宅 建築
富沢遺跡 (第135次)	仙台市太白区鹿野3丁目22-1他	04100 01369	38°13'25"	140°52'30"	2005・07・11 2005・11・08	246m ²	共同住宅 建築
富沢遺跡 (第136次)	仙台市太白区長町南1丁目201-3	04100 01369	38°13'16"	140°52'56"	2005・08・01 2005・08・12	29m ²	店舗付共同 住宅建築
西上野原遺跡	仙台市太白区福岡大野通8-1 福岡大野中町1-1	04100 19027	38°12'10"	140°52'11"	2005・07・20	34m ²	淡水ボンブ 堤防木造修理設 工事
洞ノ口遺跡 (第12次)	仙台市宮城野区岩切字洞ノ口164-2-164-4	04100 01372	38°17'59"	140°57'22"	2005・06・13 2005・06・17	26m ²	個人住宅 建築
燕沢遺跡 (第12次)	仙台市宮城野区燕沢3丁目528-1	04100 01001	38°17'25"	140°55'58"	2005・02・22	36m ²	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
前田館跡 城館跡	城館跡	中世	溝跡・土坑	陶器・磁器・木製品・石製品等	
中田南遺跡 第3次	集落跡・屋敷跡	縄文～中世	竪穴住居跡・溝跡・土坑	土師器・須恵器・陶器・磁器・石製品等	
中田北遺跡	散布地	古代	竪穴住居跡・溝跡・土坑・ピット	土師器・須恵器・砥石	
南目城跡 城館跡	城館跡	中世	溝跡・土坑・ピット		
大野田古墳群 円墳 第10次	円墳	古墳	小溝状遺構・ピット		
大野田古墳群 円墳 第11次	円墳	古墳	土坑・小溝・ピット	土師器	
元袋遺跡 第5次	集落跡・水田跡	弥生～近世	溝跡・土坑・ピット	縄文土器・土師器・陶器・石製品	
鴻ノ巣遺跡 第10次	集落跡・屋敷跡	弥生～中世	溝跡・土坑・ピット	中世陶器	
北目城跡 城館跡・集落跡・水田跡 第4次	城館跡・集落跡・水田跡	縄文～中・近世	土坑・井戸跡	陶器	
北目城跡 城館跡・集落跡・水田跡 第5次	城館跡・集落跡・水田跡	縄文～中・近世	井戸跡・ピット	陶器・鉄製品	
南小泉遺跡 第44次	集落跡・屋敷跡	弥生～中・近世	掘立柱建物跡・竪穴住居跡・土坑など	弥生土器・土師器・石製模造品等	
南小泉遺跡 第45次	集落跡・屋敷跡	弥生～中・近世	溝跡・土坑・ピット	土師器	
南小泉遺跡 第46次	集落跡・屋敷跡	弥生～中・近世	溝跡	土師器・須恵器・鉄製品	
南小泉遺跡 第47次	集落跡・屋敷跡	弥生～中・近世	掘立柱建物跡・土坑・ピット	土師器・須恵器・鉄滓	
袋前遺跡 第2次	集落跡	縄文・古代	溝跡・小溝状遺構・ピット	鉄滓	
富沢遺跡 第135次	水田跡・包含地	後期旧石器～中・近世	水出跡・珪畔	石器・土師器・磁器・陶器等	
富沢遺跡 第136次	水田跡・包含地	後期旧石器～中・近世	水田跡・珪畔	瓦・陶器・磁器・石器	
西上野原遺跡	散布地	後期旧石器～中・近世	土坑		
洞ノ口遺跡 第12次	水田跡・集落跡・屋敷跡	古墳～中・近世	溝跡・土坑・ピット	土師器・磁器	
燕沢遺跡 第12次	散布地・集落跡・寺院跡	縄文～古代	溝跡・ピット	平瓦・丸瓦・土師器	

仙台市文化財調査報告書第301集

前田館跡他

発掘調査報告書

2006年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町三丁目7-1

文化財課 022(214)8894

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市青葉区立町24-24

TEL 022(263)1166

